

熊本城調査研究センター一年報 3

平成 28 年度

2017

熊本市熊本城調査研究センター

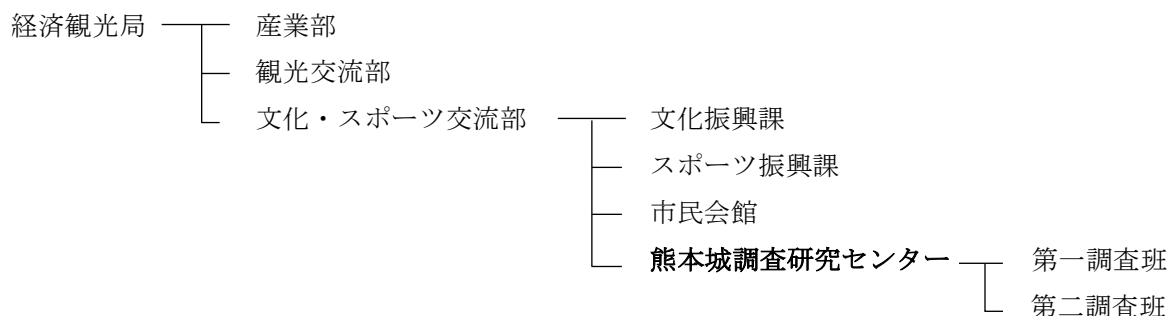
目次

I. 組織	1
II. 平成 28 年度の事業	2
1. 概要	2
2. 確認調査・工事立会・地質調査	9
3. 史料調査	63
4. 委員会運営	63
5. 啓発（刊行図書・論文・報道・講演等）	66
6. 寄贈資料	79
7. 寄贈図書	80
III. 補遺報告 熊本城飯田丸出土の石造物	83
IV. 資料紹介 熊本城出土の近代陶磁器一括資料 —新出資料の紹介—	113

本書は、熊本市経済観光局文化スポーツ交流部熊本城調査研究センターが平成 28 年度に実施した業務の概要を記したものである。

I. 組織（平成 28 年度）

1. 熊本城調査研究センターの組織



2. 熊本城調査研究センターの構成

平成 28 年度

所長（非常勤）	渡辺勝彦（日本建築史）
副所長	網田龍生（考古）
文化財保護主幹	鶴嶋俊彦（近世城郭）
文化財保護主幹	美濃口雅朗（考古）
第一調査班 主査	金田一精（考古）
文化財保護参事	山下宗親（考古）
主任技師	東園健児（土木）
文化財保護主事	嘉村哲也（考古）
文化財保護主事	木下泰葉（文献）
嘱託職員	村田理恵（考古）
嘱託職員	竹田知美（考古）
第二調査班 主査	城戸秀一（建築）
主任主事	益田知子（事務）
主任技師	田代純一（建築）
嘱託職員	小多信幸（事務・文献）
	計 15 名

3. 熊本城調査研究センター施設概要

平成 28 年

4 月 15 日まで	古京町別館（熊本市中央区古京町 1-1）、三の丸資料室（中央区古京町 1-1）
4 月 16 日～	三の丸資料室（中央区古京町 1-1）
4 月 18 日～	市民会館楽屋（中央区桜町 1-3）、三の丸資料室（中央区古京町 1-1）
7 月 2 日～	辛島町テナントビル（桜ビル 4 階）、三の丸資料室（中央区古京町 1-1）
7 月 23 日～	辛島町テナントビル（桜ビル 4 階）、旧国税局分室 2 階（中央区千葉城町 3-36）

II. 平成 28 年度の事業

1. 概要

(1) 熊本城調査研究事業

a. 熊本城跡発掘調査報告書作成

事業概要

平成 25・27 年度にかけて実施した熊本博物館増改築工事に伴う発掘調査資料を整理し、報告書を刊行。

成果

『熊本城跡発掘調査報告書 4 ー熊本博物館増改築工事に伴う三の丸地区の発掘調査ー』(平成 29 年 3 月)

b. 史跡内の現状変更に伴う確認調査・立会調査

	調査日	調査地点	担当者	文化財保護法			
				現状変更	第 93 条	第 94 条	(解体工事)
1	4 月 11 日	民間駐車場整備	山下	○			
2	5 月 25 日	百間石垣石材撤去	美濃口	○			
3	6 月 2 日	法華坂水道水漏水	山下	○			
4	6 月 6 日	崩落斜面緊急掘削	山下	○			
5	7 月 1 日	平櫓排水路	嘉村	○			
6	7 月 4 日	熊本県立美術館北側配水管漏水改修	美濃口	○			
7	8 月 5 日	藤崎台県営野球場石垣改修	美濃口	○			
8	8 月 17 日	熊本合同庁舎ポーリング調査	山下			○	
9	8 月 31 日	熊本市役所古京町別館	美濃口	○			
10	9 月 1 日	藤崎台県営野球場 3 塁スタンド裏	美濃口	○			
11	9 月 5 日	熊本県立美術館電気管改修	美濃口	○			
12	9 月 23 日	民間駐車場塀撤去	美濃口	○			
13	9 月 26 日	二の丸広場漏水	嘉村	○			
14	9 月 27 日	法華坂水道	山下	○			
15	9 月 27 日	三の丸第 2 駐車場配電設備	美濃口	○			
16	9 月 27 日	熊本博物館ハンドホール検出	美濃口	○			
17	10 月 17 日	慶宅坂北側斜面	山下	○			
18	10 月 24 日	二の丸広場陥没補修	嘉村	○			
19	11 月 16 日	二の丸広場水道	山下	○			
20	11 月 11 日	熊本城稻荷神社ポーリング	山下	○			
21	11 月 30 日	花畑公園水道管埋設	美濃口			○	
22	12 月 2 日	熊本家庭裁判所境界ブロック壁設置	山下			○	
23	12 月 12 日	旧熊本国税局石垣崩落部分	美濃口	○		○	
24	1 月 27 日	熊本県立第一高校石垣ネット養生	嘉村	○			
25	1 月 7 日	熊本家庭裁判所存在状況確認	美濃口			○	
26	2 月 6 日	熊本市役所古京町別館解体	美濃口				○
27	2 月 24 日	日本たばこ産業 (JT) 解体	美濃口		○		
28	3 月 1 日	熊本博物館室外機設置	美濃口	○			
29	3 月 10 日	熊本家庭裁判所平板載荷試験用掘削	山下			○	
30	3 月 14 日	熊本合同庁舎跡地ガス管	山下			○	
31	3 月 21 日	民間駐車場内下水道直接復旧	山下	○			
32	3 月 28 日	旧熊本国税局石垣背後の法面削平	美濃口	○		○	
33	3 月 22 日	藤崎台県営野球場配管	美濃口			○	
34	3 月 27 日	熊本博物館トラックヤード	美濃口	○			

平成 28 年度は 34 件の工事立会を行なった。このうち現状変更に伴うものが 25 件、文化財保護法第 93 条に伴うものが 1 件、第 94 条に伴うものが 9 件、解体工事に伴うものが 1 件である。



(2) 熊本城資料収集・デジタル化事業

事業概要

過去に熊本城跡内で行なわれた石垣保存修理、建造物の保存修理、復元、その他整備についての資料を収集し、整理する。また、熊本城調査研究の基礎資料として、情報発信のデータバンクとして活用を図るため、収集資料のデジタル化を進めた。

(3) 文献等資料調査

事業概要

熊本城・城下町に関する総合的な調査研究と報告書作成の基礎作業として、古文書・絵図・古写真等の史資料の所在を確認し、収集・目録化を進めた。平成 28 年度は、永青文庫（熊本大学附属図書館寄託）、宮内公文書館、熊本県立図書館、東京国立博物館、東京大学史料編纂所、防衛研究所の史資料を調査した。



(4) 委員会等運営

事業概要

特別史跡熊本城跡の保存と活用について総合的に検討するため、特別史跡熊本城跡保存活用委員会を開いている。

平成28年度は、親委員会である保存活用委員会を1回、専門部会である計画策定部会を2回、史跡・建築部会を3回、活用部会を1回、絵図・文献部会を1回開催した。



(5) 啓発事業

a. ホームページ公開

事業概要

熊本城調査研究センターの事業成果等を情報発信するために、熊本市のホームページを活用し、当センターの概要、委員会の議事等、刊行物、講演会・研修会報告等を公開している。

更新履歴

- 7月22日 講演会・研修会情報の更新、研究センターニュースの更新、保存活用委員会議事録（要旨）の更新
- 11月25日 保存活用委員会議事録（要旨）を更新
- 2月6日 講演会・研修会情報の更新、研究センターニュースの更新、刊行物の更新、定期講座「熊本城学」の更新
- 3月13日 定期講座「熊本城学」の更新

(6) 熊本地震対応

a. 熊本地震の発生

平成28年4月14日21時26分、地震発生。市役所や熊本城のある熊本市中央区では震度5強と報じられた。さらに16日1時25分、これまで以上の長く大きな揺れに襲われた。熊本市中央区では震度6強、後に「本震」と位置づけられ、石垣・建物ともに被害が拡大した。

b. 被害調査

余震が続く中、地震翌朝から建物外観と石垣の被害調査に着手した。まず現況写真を撮りながら目視で被害概要を把握し、その後、石垣は平成24年度に作成していた石垣台帳を基に、測量を行いながら詳細調査を実施した。建物は、専門家等の指導も受けながら段階的に調査を進めた。

なお被害状況報告書は平成29年度に作成する予定。

【熊本城の地震被災状況】



①大天守・小天守

(大天守の瓦崩落、大天守・小天守台石垣の一部崩壊) (続櫓倒壊、壁漆喰・床など破損)



②宇土櫓



③飯田丸五階櫓

(外壁ひび割れ、下部石垣崩落によるたわみ)



④飯田丸五階櫓 竹の丸より

角石のみで櫓を支えている



⑤長堀

東側80m 倒壊



⑥頼当御門周辺

通路両面の石垣崩落



⑦東十八間櫓

石垣崩壊による櫓倒壊



⑧北十八間櫓

石垣崩壊による櫓倒壊



⑨西大手櫓門

東側櫓台石垣崩落による傾き



⑩二の丸御門

通路両面の石垣崩落



⑪百間石垣

3ヶ所で崩落、石材が市道を塞ぐ(8月1日開通)



⑫宮内橋周辺

ほぼ全長にわたる崩落(8月1日開通)



⑬戌亥櫓

下部石垣崩壊によるたわみ、櫓台石垣より東側全長崩落 堀東側の石垣全長崩落



⑭備前堀



⑮数奇屋丸

無数の地割れを確認、前面石垣崩落

表 熊本城の被害一覧

石垣	要修復 517 面・23,600 m ² (崩落 50 箇所・229 面・8,200 m ²)
地盤	陥没・地割れ 70 箇所・12,345 m ²
重要文化財建造物	13 棟 (倒壊 2 棟、一部倒壊 3 棟)
復元建造物	20 棟 (倒壊 5 棟)
便益・管理施設	26 棟 (倒壊なし)

●石垣の被害

熊本城の石垣は、973 面・約 79,000 m²に及ぶ。そのうち築石が崩落したのは 229 面・約 8,200 m²で全体の約 1 割、緩みや膨らみのため積み直しを要するのは 517 面・約 23,600 m²で全体の約 3 割の面積に及んだ。

●建物の被害

重要文化財建造物 13 棟のうち、東十八間櫓、北十八間櫓は全壊し、他 11 棟も一部倒壊・破損を受け修復を要する。宇土櫓は、五階櫓は破損で済んだが、続櫓は倒壊した。

復元建造物の 20 棟も全て被災した。うち塀の多くは倒壊し、飯田丸五階櫓、戌亥櫓、数寄屋丸二階御広間など 7 棟は石垣が部分崩落しているために倒壊のおそれがある。天守閣は昭和 35 年竣工の鉄筋コンクリート造建造物のため建物の損傷は比較的軽度で済んだが、大天守最上階では瓦の落下、柱の損傷があった。本丸御殿も建物の損傷は軽度で、石垣の沈下により壁や床が一部破損した程度で済んだ。

いずれの建物もその基礎となる石垣や地盤の修復・補強を行うなど、安全性確保が不可欠となる。

●その他の被害

石垣・建物の他に、地盤の被害として石垣の上面の沈下、陥没、地盤の亀裂が約 70 箇所・12,345 m²に及んでいる。また熊本城は都市公園でもあるが、便益施設、管理施設 26 棟及び道路、埋設管等にも被害が生じた。



c. 報道公開と情報発信

最初に4月17日に被害概要を発表した後は個別に対応していたが、早朝から深夜まで取材に追われることもあり、安全に留意しながら5月11日に危険区域内を報道機関に公開した。その後は、定期的に報道公開を行い、工事などの進捗に応じて適宜報道発表を行った。

また市役所14階や城彩苑湧々座、城内のフェンスなどにて、被害状況や工事概要の説明などを写真パネルで掲示するとともに、講演・講座、原稿執筆、石垣や瓦の展示なども百件以上を実施し、マスメディアへも積極的に協力・出演するなどして、可能な限り情報発信に努めた。

d. 緊急工事

5月後半からは、道路や民地に崩落した石材の回収、建物の倒壊防止、地盤亀裂箇所の雨水対策、工事車両の通路確保を主眼として、緊急工事に着手した。

- 民間の敷地や道路に崩落した石垣の回収。
- 飯田丸五階櫓など建物の倒壊防止作業。
- 地盤亀裂への雨水対策のため白色シートでの養生工事。
- 天守の早期復旧のため、工事車両道路の確保。

以上4点を中心に優先箇所を選択しながら、工事を実施した。

【頼当御門の石材回収工事と安全対策】



①崩落状況の記録（写真測量）



②崩落石材の番号付け



③崩落石材の測量（光波などのデジタル測量）



④崩落石材の回収（1石ごと玉掛けして吊り上げ）



⑤石材置き場に仮置き



⑥石垣回収作業完了



⑦保護シート（不織布）の設置



⑧モルタル吹付け



⑨防護ネットによる安全対策

【熊本城内の緊急工事写真】



本丸広場の雨水対策シート養生



南大手門櫓門の倒壊防止工事



ワイヤーで倒壊防止(右から) 田子櫓・七間櫓



天守閣復旧へのスロープ設置

なお本格的な復旧工事は 29 年度の基本計画策定後となるが、天守の復旧は優先して準備を進めた。

b. 講演会、定期講座等

事業概要

熊本城への理解をより深めるため、各種講演会や定期講座などに出演し、熊本城や城下町等について講演を行なった。平成28年度は後掲の件数の通り。



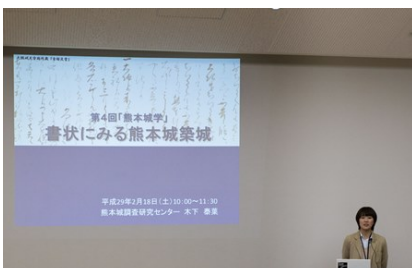
11月19日 所長 渡辺 勝彦



12月17日 文化財保護主幹 鶴嶋 俊彦



1月21日 文化財保護主幹 美濃口 雅朗



2月18日 文化財保護主事 木下 泰葉



13月18日 主査 金田 一精

2. 確認調査・工事立会・地質調査

(1) 民間駐車場整備に伴う確認調査

原因：駐車場整備に伴う工事（「岡本有料駐車場」での建物解体と設備新設工事）

期日：平成 28 年 4 月 11 日～4 月 29 日

面積：1.75 m²

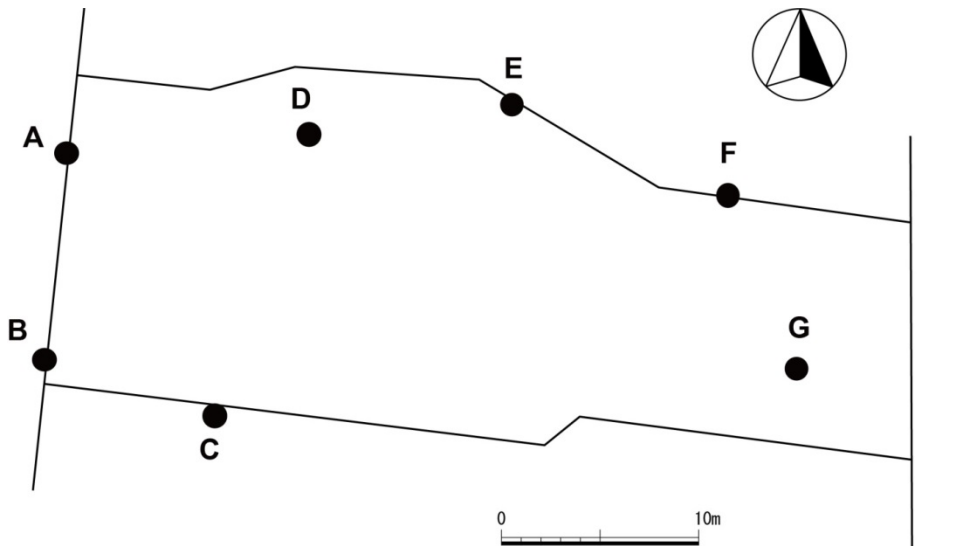
方法：掘削範囲が狭小であったので、工事立会で対応した。

成果：工事期間中 7 箇所の土層観察を実施した。土層堆積状況は、以下の通りである。

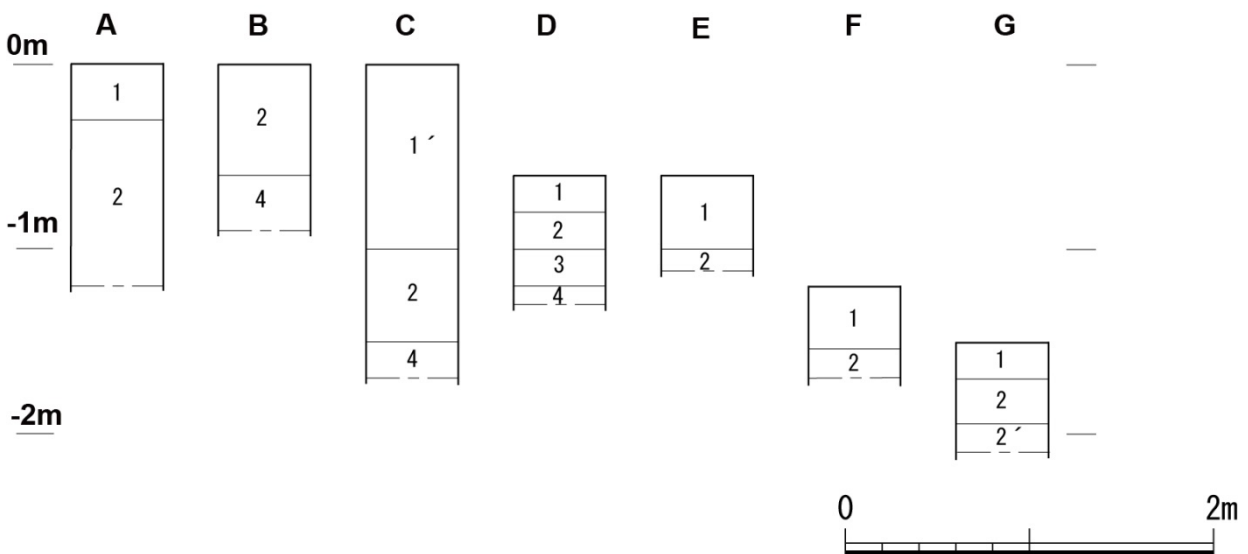
1 層：現代表土層。1´層：間知石積み石垣。2 層：旧表土層、小石、ガラス等含む。2´層：コンクリート基礎。3 層：黄灰色（2.5Y4/1）砂質感有り、凝灰岩の二次堆積土層。4 層：暗灰黄色（2.5Y4/2）しまりやや有り、凝灰岩粒を含む。二次堆積土層。遺構・遺物とも確認されていない。

確認した掘削土層は、全て現代の土層堆積であった。

したがって、今回の工事に関しては全て現代に堆積した土層内で収まることが確認された。



(1) 調査地点と土層確認地点



(1) 土層柱状図



(1) 調査地点全景



(1) A地点土層断面



(1) C地点土層断面



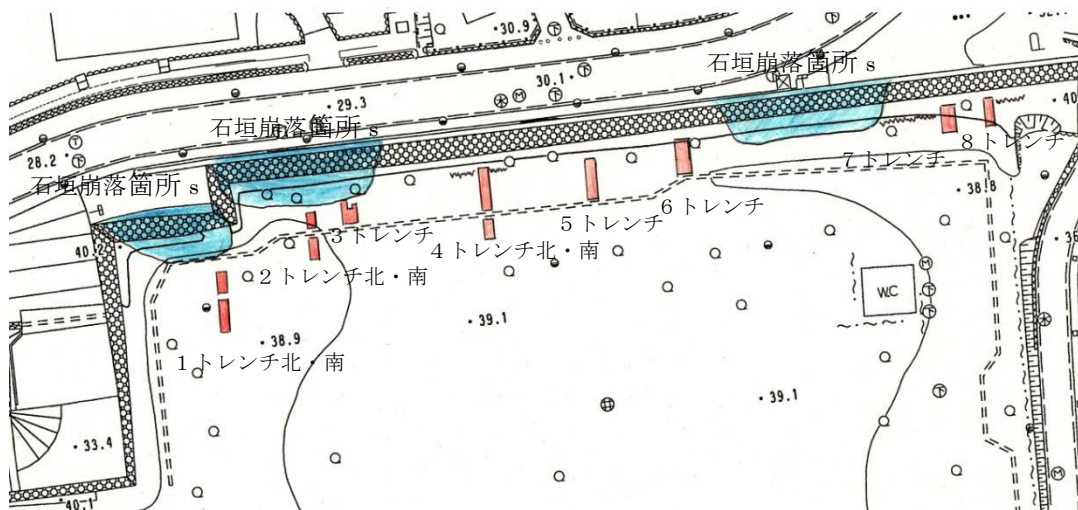
(1) D地点土層断面

(2) 百間石垣石材回収作業に伴う確認調査

原因：平成28年熊本地震により石垣に多数の被害がでた。百間石垣も3箇所で石垣が崩落し、市道を塞いだ。市道の復旧のための百間石垣回収工事に先立ち、百間石垣背面の遺構の有無、裏込めの範囲などを確認した。

期日：平成28年5月25日～6月17日

面積：約35.2㎡



(2) 催し広場確認調査トレンチ配置図

方法: 百間石垣の背面、催し広場で8トレンチ、計11箇所を調査した。1トレンチは電線、2トレンチ、3トレンチでは水路を跨ぐため、北と南に分けている。

成果: 百間石垣は、明治22年の金峰山地震の際に複数箇所崩落し、その後陸軍によって復旧されている。また、平成18年度に解体修理を行なっている。近代の軍による大規模な造成により、石垣の裏込めより南側では築城時の造成土まで掘削されており、近世の遺構は確認できなかった。近代の遺構としては、2、3トレンチにおいて現地表面下40cm~50cmで軍の施設と考えられるコンクリート製の建物基礎、3、4、5トレンチでは現地表面下50cm安山岩製で底にはセメントが使用された水路などを確認した。

近代以降の掘削面の下には築城時の造成土を確認した。造成土は火砕流二次堆積土が主体である。1トレンチ南において、一部のみ造成土の掘削を行なったところ、地山と考えられるローム層を確認した。1トレンチ北で今回の地震で発生した地割れを断面観察したところ、現地表面下からの深さ約140cmで、近世の造成土に達し、地割れの内側では弛みを確認した。また、4トレンチでは近世の石垣裏込めより内側で、近代の積み直しの裏込めを確認し、その線上に地割れが重なることが分かった。



(2) 1トレンチ北
崩落箇所を望む



(2) 1トレンチ北
西壁土層断面 地割れ検出



(2) 1トレンチ南
西壁土層断面 近世の造成土



(2) 3トレンチ
近代コンクリート基礎検出



(2) 4トレンチ北
西壁土層断面 裏込め検出



(2) 5トレンチ
近代水路検出作業 東から

(3) 法華坂水道水漏水による緊急工事立会

原因: 熊本地震に伴う水道管の破損

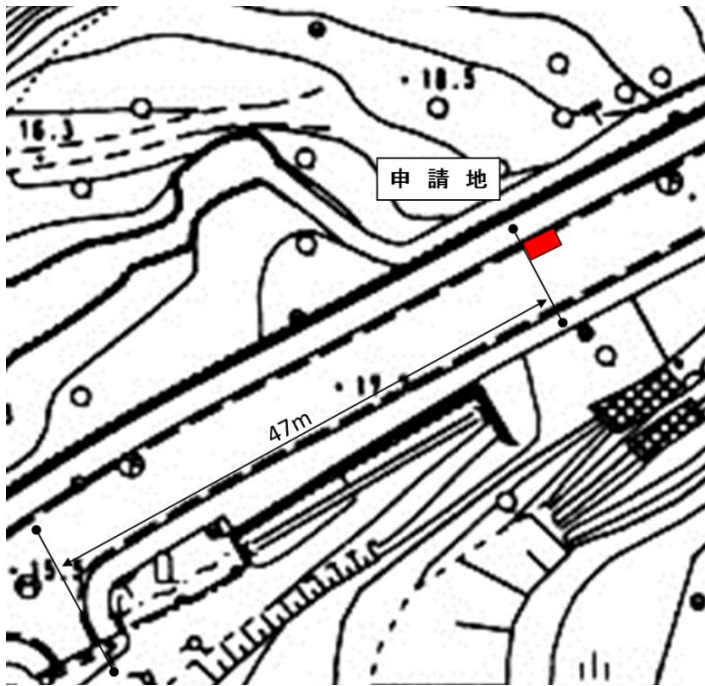
期日: 平成28年6月2日

面積: 2.16 m²

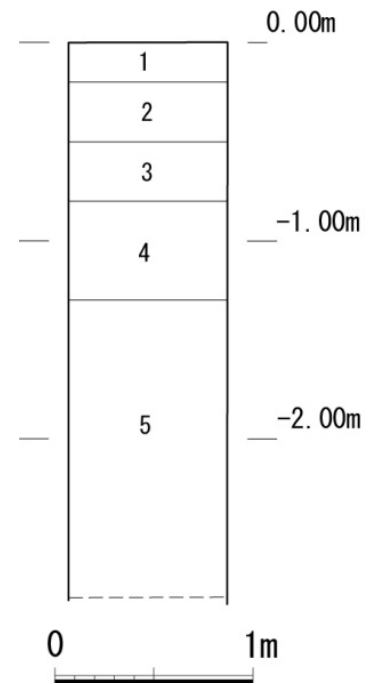
方法: 掘削範囲が狭小であったので、工事立会で対応した。

成果: 今回車道の中でも歩道に近い部分を掘削しての作業であった。現地表面下約280cmの掘削であった。土層を確認した結果、全て現代に堆積した土層を確認した。土層の内容は以下の通りである。

1層: 表土層 アスファルト、碎石層。2層: 碎石層。3層・4層: 客土層。5層: 客土層、瓦・ガラス片等を含む。



(3) 調査地点



(3) 土層柱状図



(3) 調査風景



(3) 土層断面

(4) 崩落斜面緊急掘削工事立会

原因：熊本地震に伴う崩落斜面整形（国立病院機構熊本医療センター南面）

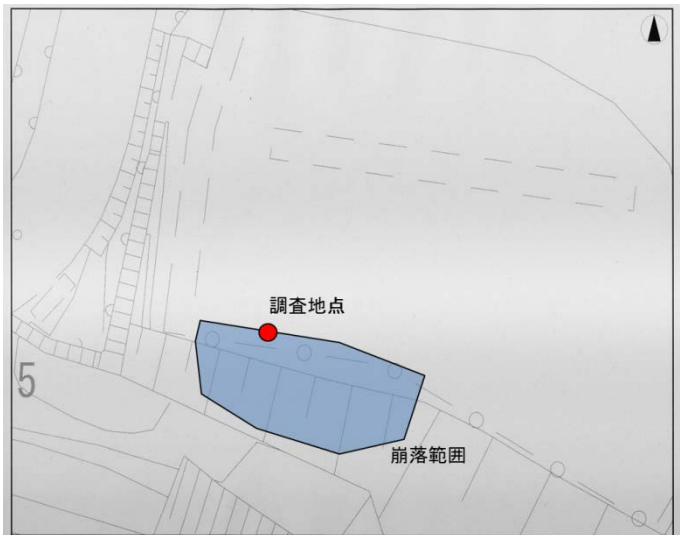
期日：平成28年6月6日～6月9日

面積：2㎡

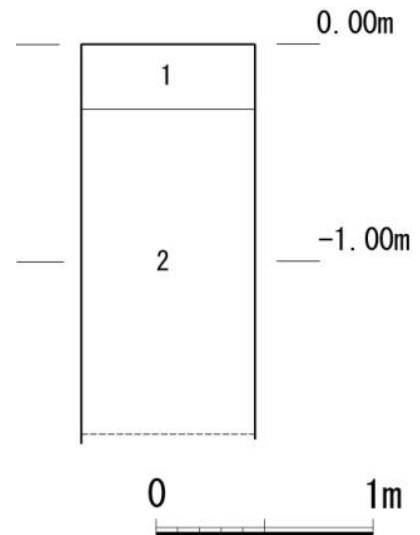
方法：法面整形前に土層確認を行った。

成果：法面整形で掘削される部分は、全て現代に堆積している土層を確認した。したがって文化財への影響は無いものと判断される。土層の堆積は以下の通りである。

1層：表土層、アスファルト、碎石層。2層：客土層、盛土層、現代瓦片等が出土。



(4) 調査地点



(4) 土層柱状図



(4) 調査地点



(4) 土層断面

(5) 平槽排水路工事に伴う確認調査

原因：埋没している石垣の排水路復旧

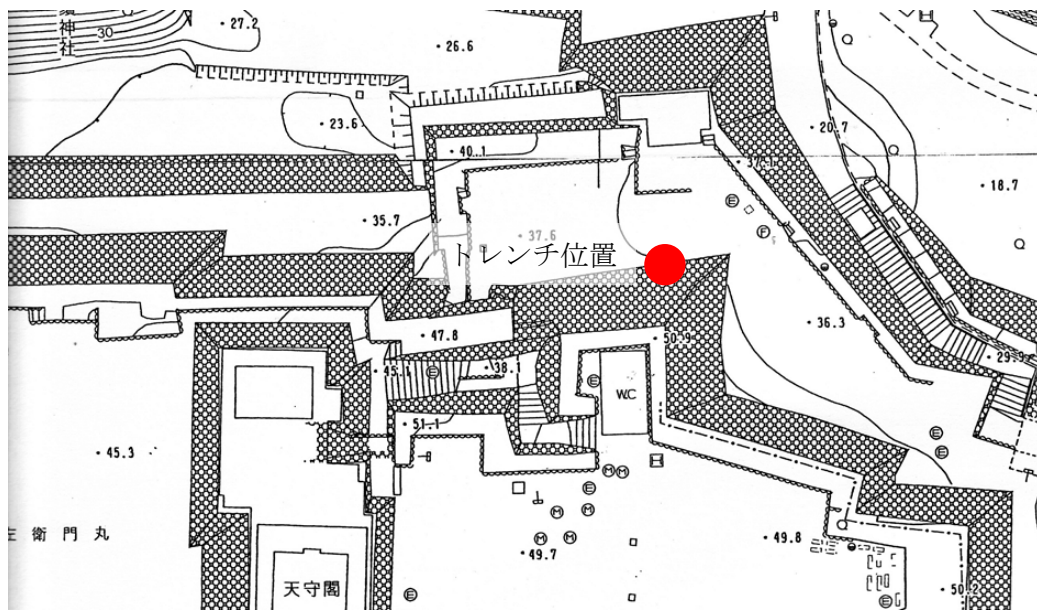
期日：平成 28 年 7 月 1 日～7 月 18 日

面積：約 2.45 m²

方法：敷地内に調査トレンチを 1 箇所設定し調査を行ない、排水路を確認した。その後確認した排水路を利用するために埋土を除去した。掘削面積は計 2.45 m²である。掘削後は断面・平面の記録写真及び図面作成し記録をとった。記録作成後、人力にて発生土(土嚢に入れたもの)を使用して半分程埋め戻しを行なった。排水路部分には波板を敷き、排水による遺構面の侵食を防止している。

成果：調査の結果、地表面下約 40cm より排水路を確認した。出土遺物より、近現代に埋め戻されたと考えられる。排水路は、深さ約 40cm、幅約 50cm で、排水路を構成する石組は安山岩を使用しているが、蓋石のみ凝灰岩である。

基底面は石塁の外側のみ砂漆喰で固められており、石塁内部は土が剥き出しになっている。出口より 20cm 程度は石敷きである。



(5) トレンチ位置図



(5) トレンチ 掘削前 西から



(5) 水路検出状況 西から



(5) 掘削完了 西から



(5) 養生完了 東から

(6) 熊本県立美術館北側配水管漏水改修工事に伴う確認調査

原因：熊本県立美術館北側配水管漏水改修工事

期日：平成 28 年 7 月 4 日

面積：約 55 m²

方法：今回の工事は、配水管埋設時の埋土を再掘削するものであり、さらには、地下室を伴う既存建物に近接して沿うものであること（建築時に掘削されている）、掘削予定幅 2m・面積約 100 m²と狭小であることを勘案し、工事立会をもって対処した。掘削後の埋め戻しは発生土に改良剤を混合し、これを使用する予定である。なお調査主体は熊本県文化課であり、本センターは、これに立ち合ったものである。

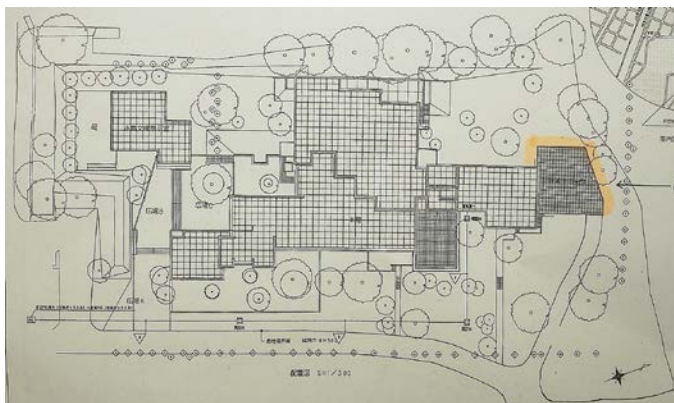
成果：掘削は主にバックホーにて行ない、漏水箇所確認のため配水管・雨水枒外側面を露出した。現地表面下約 140cm において配水管（塩ビ管）が認められ、さらに配水管の脇を 10～30cm 掘り下げるものであった。掘削した土は全て山砂、すなわち配管埋設時の埋土であった。

なお、北側壁面において配水管埋設時の掘削壁が露出し、土層が確認された箇所があった。今回工事の東端、長さ約 4 m である。この箇所の土層断面についてはポイント 1 において作図している。土層注記を以下に記す。

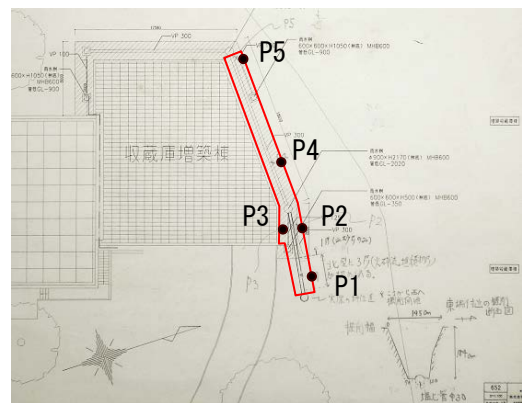
- 1 層 山砂層：表層に充圧された砕石を認める箇所がある。
- 2 層 褐色土 (10YR4/4)：現代の整地土。砕石多く混入、他、コンクリート片・ビニール片（エスロンテープ）を認める。ポイント 1 のみ（掘削北側壁）で確認している。
- 3 層 灰褐色土 (7.5YR6/2)～にぶい褐色土 (7.5YR5/4)：火砕流土を基本質とする二次堆積層。上位は、小礫を認めるものの比較的混入物が少ない。下位は、ローム粒、暗褐色土 (10YR3/3)・褐色土 (10YR4/4) ブロックを多量に混入し、上位に比べて間隙性が高い。コンクリート片（粒度が粗く小礫混入）を認める。近代以降の整地土。ポイント 1 のみ（掘削北側壁）で確認している。

遺構は検出されなかった。遺物は、江戸時代の瓦片・陶磁器片、土師器小皿片、煉瓦片、安山岩石材が出土した。瓦は数点あり、このなかには丸内に「少」字の刻印が認められるものがある。陶磁器片は 17 世紀第 2・3 四半の肥前産播鉢である。土師器小皿片は底部糸切り離し品で、詳細時期は不明である。煉瓦片は赤褐色の焼成で削り整形が明瞭な、恐らくは在産品とみられる。安山岩石材片は 3 点あり、幅 6 cm の小規模な矢穴が認められるもの、略正方形に整形したものである。規模等から石垣の石材ではないと判断され、その他の構造物を構成するものと考えられる。これら石材については回収せず、付近の樹木根方にまとめている。

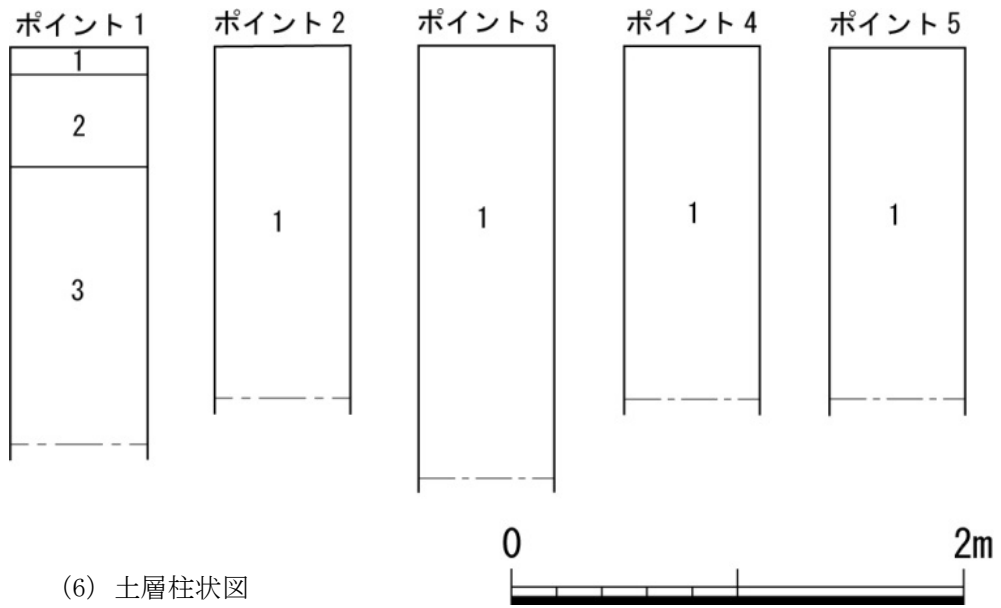
以上、本工事は、史跡に影響を与えるものではないことを確認した。



(6) 確認調査位置図



(6) 土層観察地点



(6) 土層柱状図



(6) 調査区 県立美術館



(6) 掘削風景 東から



(6) ポイント1



(6) ポイント2



(6) ポイント3



(6) ポイント4



(6) 安山岩石材 1



(6) 安山岩石材 1



(6) 安山岩石材 1 (矢穴)

(7) 藤崎台県営野球場石垣改修工事立会

原因：藤崎台県営野球場のレフト側外壁（石垣）の破損・膨張に伴う改修工事

期日：平成 28 年 8 月 5 日・8 月 22 日

方法：今回の工事は、昭和 35 年に建設した球場外壁の孕んだ間知石積み石垣を解体し、積み直すものである。球場外壁は現代の建造物であること、土盛りを行なったものであること、今回工事は石垣のみ（間知石積みと裏栗のみ）を扱うものであることを勘案し、工事立会をもって対処した。なお、調査主体は熊本県文化課であり、本センターは、これに立ち合せていただいたものである。

成果：石垣解体後、土が露出した外壁の土層観察を行ない、4 箇所において土層柱状図を作成した。球場外壁（レフト側外野スタンド）の高さは地表から 4.3m であり、その下位（地表 0～100 cm）において分層し、これより上を 1 層、下を 2 層とした。1・2 層ともに、火砕流土を基質とする二次堆積層である。1 層は、礫等を多く含む球場建設時の盛土層である。2 層は 1 層よりも間隙性が低く、混入物も少ない。板ガラス片が出土しており、近代以降の造成土と考えられる。遺構は検出されなかった。なお、1 層中より江戸時代の石垣の構成材と考えられる石が数点出土しており、6 点については抽出して付近にまとめている。

土層注記を以下に記す。

1 層 火砕流土を基質とする二次堆積層。安山岩・凝灰岩礫を混入する。昭和 35 年球場建設時の盛土。

2 層 火砕流土を基質とする二次堆積層。観察箇所によって土質が異なる。

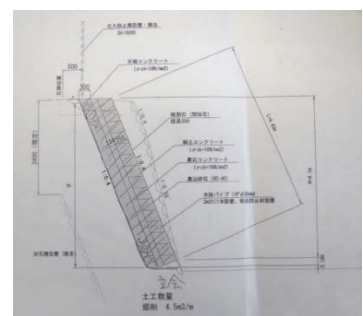
2-1：明黄褐色粘質土（10YR6/8）・にぶい橙色粘質土（2.5YR6/3）の混合。

2-2：にぶい黄橙色粘質土（10YR7/3～6/3）。炭化物小ブロック混入。

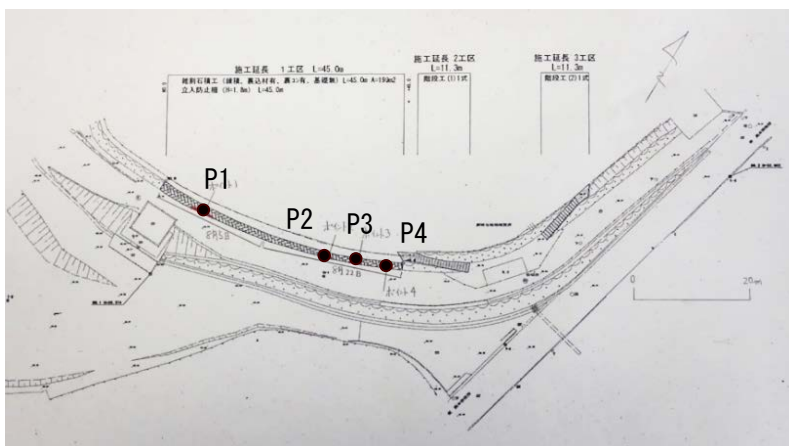
2-3：にぶい橙色粘質土（10YR7/3～6/3）・にぶい黄橙色粘質土（10YR7/3～6/3）の混合。橙色ブロック（7.5YR6/8）＝ローム土層下位のブロック混入。炭化物小ブロック混入。

2-4：にぶい橙色粘質土（10YR7/3～6/3）・にぶい黄橙色粘質土（10YR7/3～6/3）混合。凝灰岩粒混入。

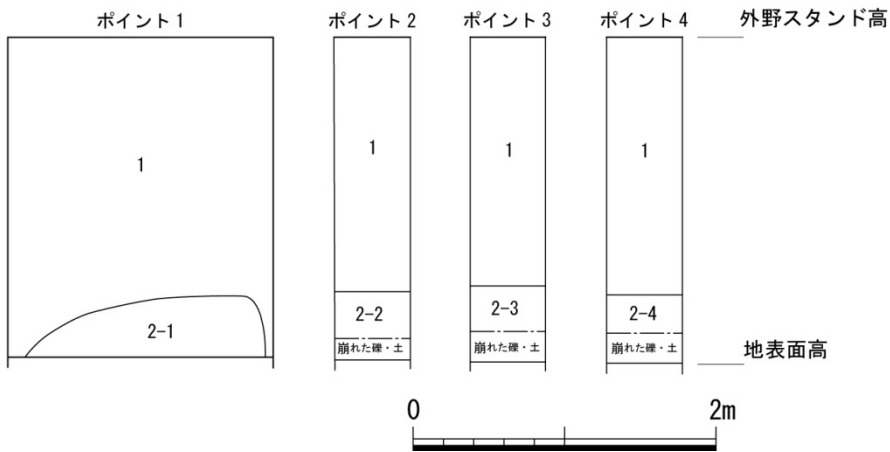
以上、本工事は、埋蔵文化財に影響を与えるものではないことを確認した。



(7) 遺跡範囲と今回申請地（縮尺任意） (7) 今回申請地点（縮尺任意） (7) 施工断面図



(7) 土層観察地点



(7) 土層柱状図



(7) 8月5日工事立会



(7) 8月5日
ポイント1



(7) 8月5日ポイント1



(7) 8月22日工事立会



(7) 8月22日
ポイント2



(7) 8月22日
ポイント3



(7) 8月22日
ポイント4



(7) 8月22日ポイント4



(7) 1層出土 江戸時代の石材置き場

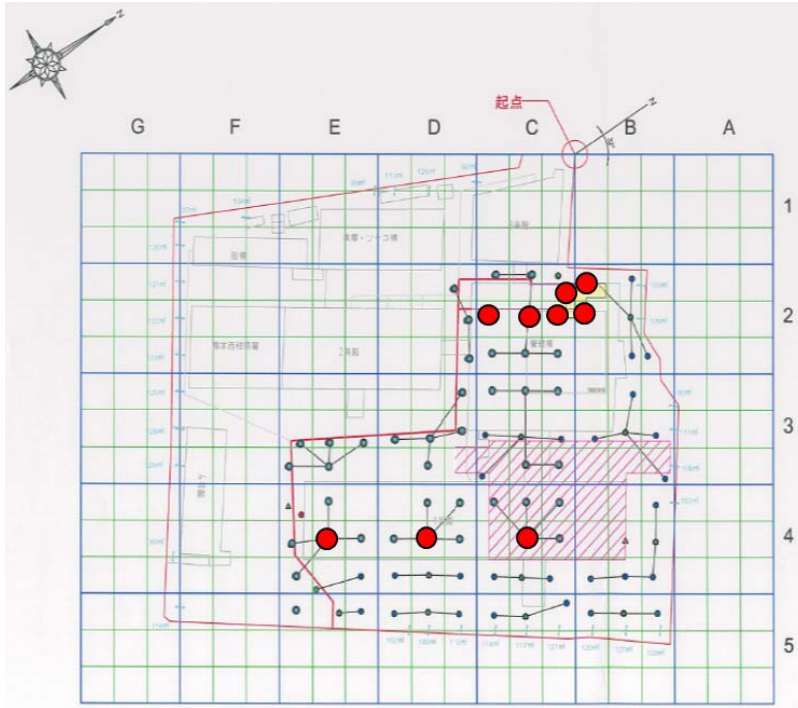
(8) 熊本合同庁舎ボーリング調査に伴う立会

原因：熊本合同庁舎敷地内土壌汚染調査に伴うボーリング調査

期日：平成 28 年 8 月 17 日・18 日

方法：旧庁舎敷地内の土壌汚染調査を行うため 9 箇所のボーリング調査を実施している。

成果：対象地に約 9 箇所のボーリング調査を実施している。最大深度は約 2m まで掘削している。しかし、掘削面積は一箇所当たり直径 10 cm と非常に小さい面積である。以上の結果、工事着手による埋蔵文化財への影響は、極めて限定的かつ低いものと判断される。



(8) 調査地点図 (赤丸：ボーリング地点)



(8) 調査風景



(8) ボーリングコア

(9) 熊本市役所古京町別館工事立会

原因：熊本市役所古京町別館解体の事前調査・解体工事設計のための工事

期日：平成 28 年 8 月 31 日

方法：熊本地震被害により、昭和 27 年建設の古京町別館は解体する予定である。解体工事の設計に際しては、事前に建物の基礎構造を確認する必要があり、今回、これに伴い掘削を行なうこととなった。掘削箇所は、建物に沿っており、かつ部分的であることから工事立会をもって対処することとした。

成果：掘削箇所は 2 箇所である (ポイント 1・2)。ポイント 1 は木造部分、ポイント 2 は鉄筋コンクリート造り部分で、そのためポイント 2 は基礎が深かった。基礎構造確認のための掘削終了後、土層観察を行なった。結果、今回の掘削は、近代以降の造成土内に収まるものであることを確認した。遺構は確認されなかった。遺物は古京町別館に付設する陶製土管を確認したのみである。

土層注記を以下に記す。

ポイント 1

1 層：現表土。表層はコンクリート敷き。コンクリート塊混じりの砂利層。

2 層：現代の整地層 火砕流土 (にぶい黄橙色 10YR6/4) を基質とする二次堆積層。砂利を多く含む。

ポイント 2

1 層：現表土。碎石・コンクリート塊を多く含む。

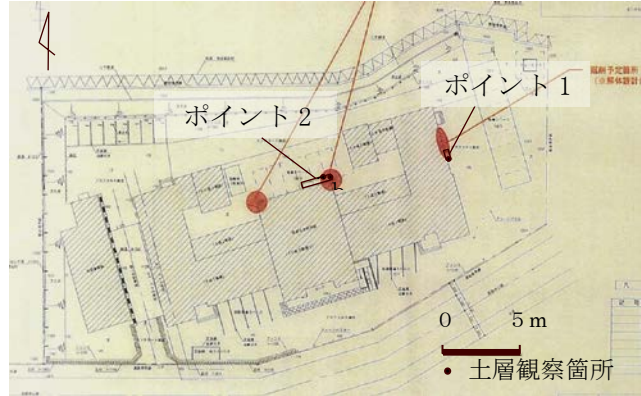
2層：近代以降の造成土と考えられる。火砕流土を基質とする二次堆積層であり、周辺調査の成果より、近代以降の造成土の可能性が高い。火砕流土（にぶい黄橙色 10YR6/3）を基質とし、同じく火砕流土（明赤褐色 2.5YR5/6・明褐色 7.5YR5/6）ブロック、砂質土（暗褐色 10YR3/3）ブロックを含む。

3層：2層のバリエーション。暗褐色粘質土（10YR3/4）ブロックを基質とする。2層ブロックを多く含む。焼土・炭化物粒を含む。

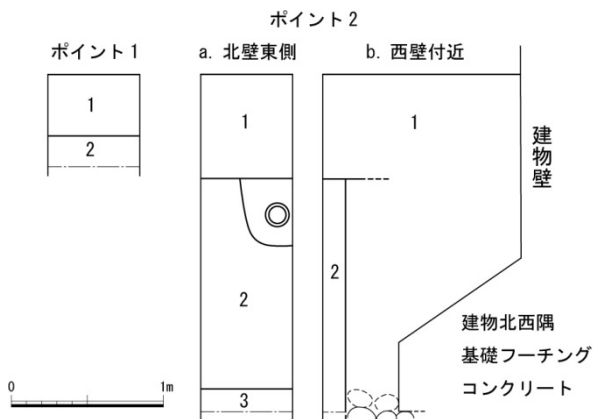
以上、本工事は、埋蔵文化財に影響を与えるものではないことを確認した。



(9) 遺跡範囲と今回申請地



(9) 今回工事地



(9) 土層断面図



(9) ポイント1



(9) ポイント1



(9) ポイント2



(9) ポイント2

のケーブルが熊本地震により破損したと考えられる箇所があり、その現状を確認・露出することである。

1 点目の掘削地点は、事前にレーダー探査を行なって位置を想定し、その箇所を掘削するものである（ポイント 1）。2 点目の掘削地点は、マンホールを開け、ケーブルの位置を確認したうえで掘削箇所を決めるものであり、かつ建物に接する箇所（建物基礎掘削の範囲内）である（ポイント 2）。以上から、工事立会をもって対処することとした。

なお調査主体は熊本県文化課であり、本センターは、これに立ち合ったものである。

成果：ポイント 1 はマンホール想定箇所を掘削した。結果、マンホールは無く、電灯の基礎が確認された。約 30 cm 角の範囲を掘下げ、地表面下 22 cm においてコンクリート基礎の上面があり、これに巻かれた、内部に配線が通った径 13 cm の鉄管（電柱竿）が確認されたものである。ポイント 2 は約 40×60 cm の範囲を掘削し、ケーブルのカバーが破損していることを確認した。ともに、現代の土層を掘削したものである。遺物は出土しなかった。

以上、今回工事に伴う掘削は史跡に影響を与えるものではないことを確認した。なお、ポイント 1 についてはマンホールの位置を確認できなかった。原因者（県立美術館・工事業者）と現地協議を行ない、今後、改めてレーダー探査を行ない、再度、マンホール位置の想定をすることとしたが、マンホールが無い可能性も高い。

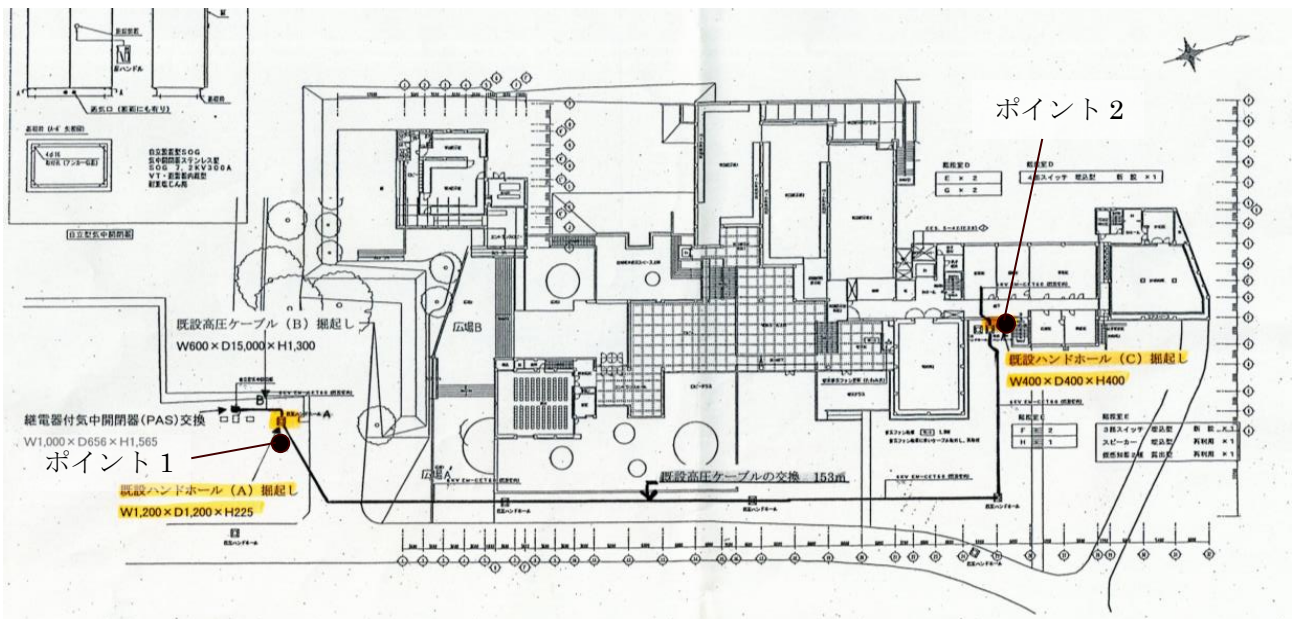
土層

ポイント 1 1 層：暗褐色土層（10YR3/4）

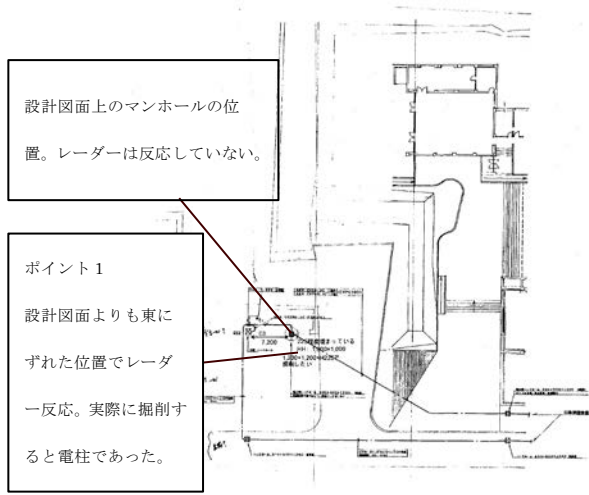
火砕流堆積土粒・小ブロックを多量に含む。板ガラス片を含む。

ポイント 2 1 層：山砂層。

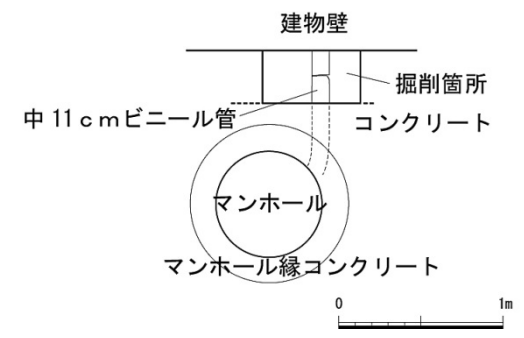
※9 月 12 日に美術館より電話連絡：改めてレーダー探査を行なったところ、マンホールは確認できず。これ以上の掘削は行わないとのこと。



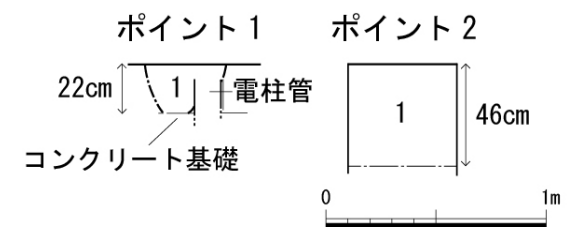
(11) 工事箇所位置図



(11) 工事箇所（ポイント1）位置図



(11) ポイント2 平面図



(11) 土層断面図



(11) ポイント1 掘削風景



(11) ポイント1 土層断面



(11) ポイント2
掘削前ケーブル位置確認



(11) ポイント2 掘削風景



(11) ポイント2
ケーブル破損状況



(11) ポイント2 土層断面

(12) 民間駐車場塀撤去工事立会

原因：熊本地震によって倒れた駐車場内の石積み塀の改修工事

期日：平成28年9月23・24日

方法：「お城前有料駐車場」において、熊本地震によって倒れた駐車場内の石積み塀の改修工事が予定された。今回工事による掘削は、既存の塀撤去に伴って、石塀の最下段の石列が地中に埋まっており、これを撤去する際に掘削を行なうというものである。

上記のような工事内容のため、掘削範囲は、既存の塀を設置した際の攪乱内に収まる可能性が高いと判断された。このため、工事立会をもって対処することとした。

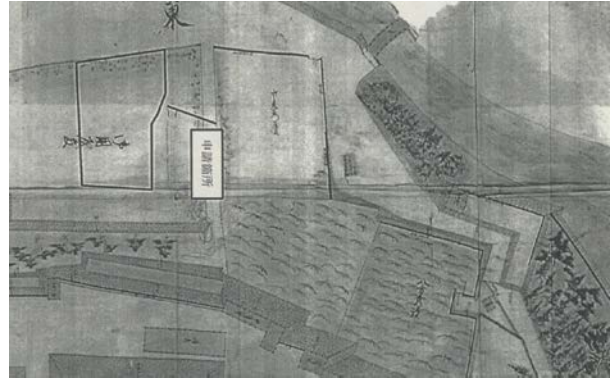
成果：塀の撤去後、土層観察を行ない、3箇所において土層柱状図を作成した（ポイント1～3）。

今回工事による掘削は、既存の石塀を設置した際の、現代の層中に収まるものであることを確認した。
土層

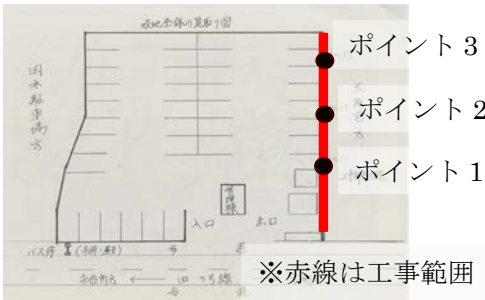
- ポイント1・2 1層：暗褐色土層（10YR3/3） 砕石を多く含む。
- ポイント2 1層：黒褐色土層（10YR2/3） 砕石を含む。



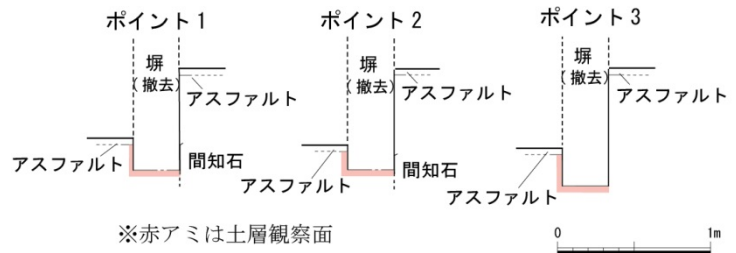
(12) 調査位置図



(12) 調査位置（絵図）



(12) 工事箇所・土層観察ポイント



(12) 土層柱状図



(12) 工事風景（東から）



(12) 工事風景（西から）



(12) ポイント 1



(12) ポイント 2



(12) ポイント 3



(12) ポイント 3 (アップ)

(13) 二の丸広場漏水工事立会

原因：熊本地震後に1日30トンほど漏水が起こっている。それに伴って、漏水対策工事(バルブの新設)をするための掘削を行なうこととなった。

期日：平成28年9月26・27日

面積：約0.3㎡

方法：掘削箇所は、既存の水道設備が埋設されており、さらには掘削面積が狭小であることから、工事立会をもって対処することとした。掘削箇所は1箇所、平面75×45cm、深さ44cmの規模であった。

成果：土層観察の結果、全て現代の山砂層に収まることが確認された。

以上、今回工事は、埋蔵文化財に影響を与えないものであることを確認した。



(13) 掘削作業状況



(13) 土層断面 北から

(14) 法華坂水道工事立会

原因：法華坂既存水道管の新規交換工事

期日：平成 28 年 9 月 26 日～11 月 25 日

方法：既存管の交換であったので、工事立会とした。

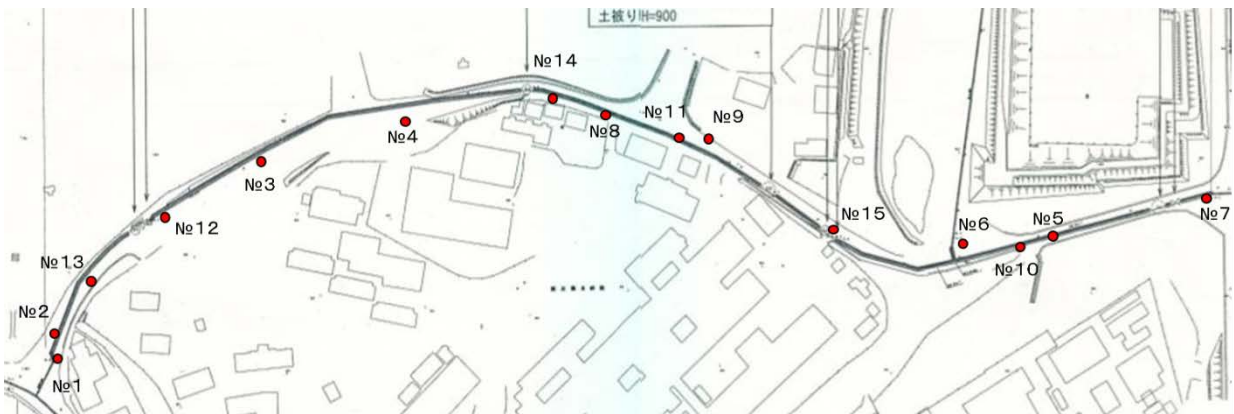
成果：既存水道管確認のため、事前に 14 箇所 (No.1～No.14) の掘削を先行して行った。さらに確認作業が行われなかった、二の丸駐車場入口から未申櫓正面までの区間については、水道管敷設に伴い工事立会を実施した (No.15)。調査の結果、法華坂頂上部分のNo.8 のトレンチにおいて、東西方向の溝を確認した。溝立ち上がりの一部であり、大半は道路部分に埋没している。この溝は位置や方位などから隈本城北側の掘り切りの一部と想定される。他の 14 箇所のトレンチについては、全て地山の火砕流堆積物や、現代に堆積した山砂層を確認している。土層の堆積状況は以下の通りである。

1 層：表土層、アスファルト・コンクリート・砂層。 2 層：山砂層。

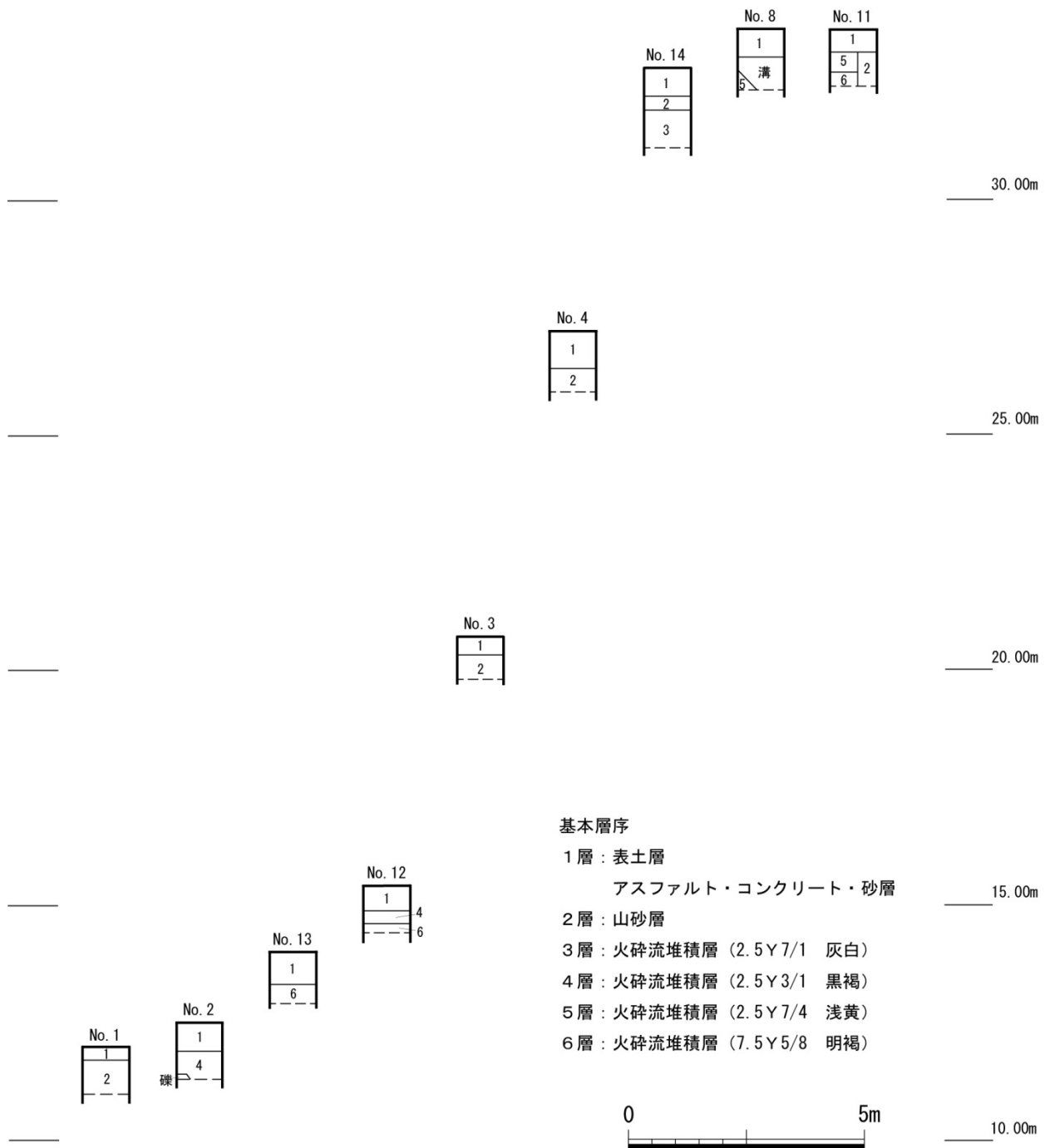
3 層：火砕流堆積層 (2.5Y7/1 灰白)。 4 層：火砕流堆積層 (2.5Y3/1 黒褐)。

5 層：火砕流堆積層 (2.5Y7/4 浅黄)。 6 層：火砕流堆積層 (7.5Y5/8 明褐) である。

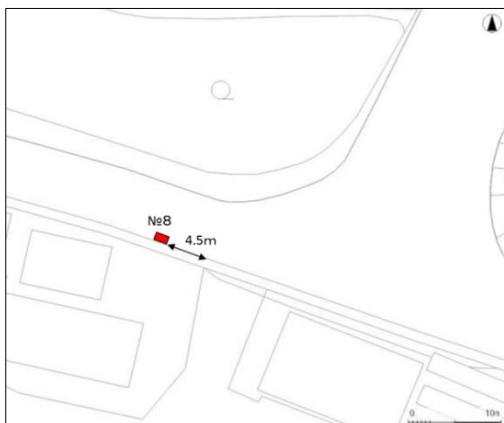
上の結果、隈本城の掘り切りの一部と想定される溝を確認することができた。水道工事については、この溝の埋土部分に存在する既存の水道掘削部分を掘削している。したがって、史跡への影響は無いものと判断される。



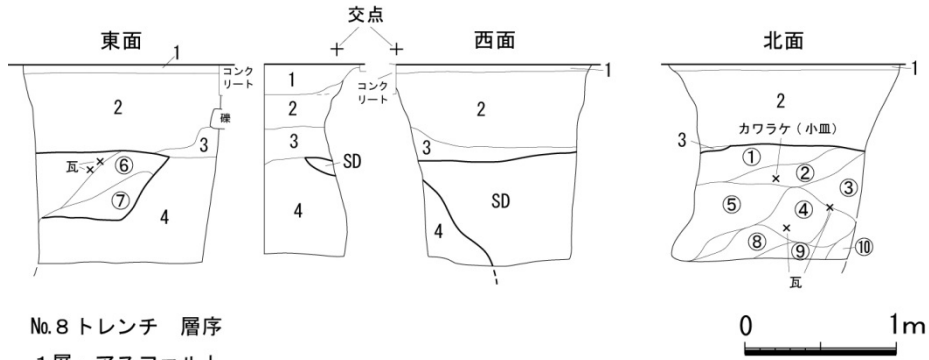
(14) 調査地点図



(14) 土層柱状図 その1

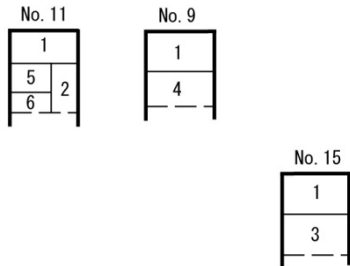


(14) No.8 地点 調査地点

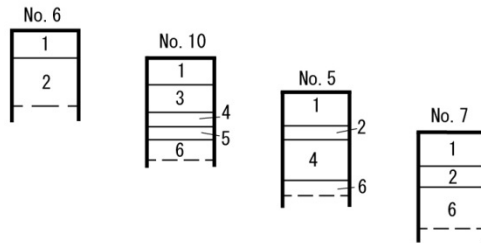


- No. 8 トレンチ 層序
- 1層：アスファルト
 - 2層：碎石層
 - 3層：客土層
 - 4層：火砕流堆積層
 - ①から⑩層：溝埋土層

(14) No. 8 地点土層断面図



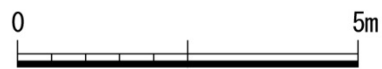
30.00m



25.00m

基本層序

- 1層：表土層
アスファルト・コンクリート・砂層
- 2層：山砂層
- 3層：火砕流堆積層 (2.5 Y7/1 灰白)
- 4層：火砕流堆積層 (2.5 Y3/1 黒褐)
- 5層：火砕流堆積層 (2.5 Y7/4 浅黄)
- 6層：火砕流堆積層 (7.5 Y5/8 明褐)



20.00m

(14) 土層柱状図その2



(14) No.1 トレンチ



(14) No.1 トレンチ土層断面



(14) No.3 トレンチ



(14) No.3 トレンチ土層断面



(14) No.8 トレンチ西壁断面



(14) No.8 トレンチ東壁断面



(14) No.5 トレンチ



(14) No.5 トレンチ土層断面

(15) 三の丸第2駐車場配電設備工事立会

原因：三の丸第2駐車場内の配電設備工事

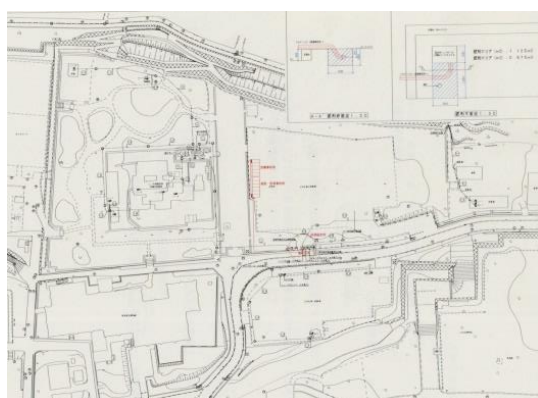
期日：平成28年9月27日

方法：三の丸第2駐車場において、熊本地震後に再開される博物館リニューアル工事の工事事務所プレハブが設置され、それに伴って、配電設備を埋設するための掘削を行なうこととなった。

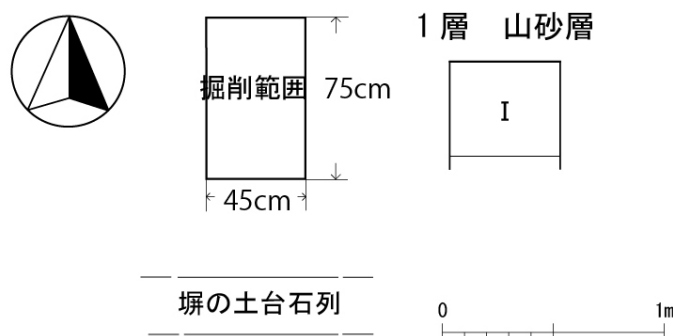
掘削箇所は、周囲に既存の電気設備が埋設されており、さらには掘削面積が狭小であることから、工事立会をもって対処することとした。

成果：掘削箇所は1箇所、平面75×45cm、深さ44cmの規模であった。土層観察の結果、全て現代の山砂層に収まることが確認された。

以上、今回工事は、埋蔵文化財に影響を与えないものであることを確認した。



(15) 掘削箇所位置図



(15) 土層柱状図



(15) 掘削箇所



(15) 掘削全景



(15) 土層断面

(16) 熊本博物館ハンドホール検出立会

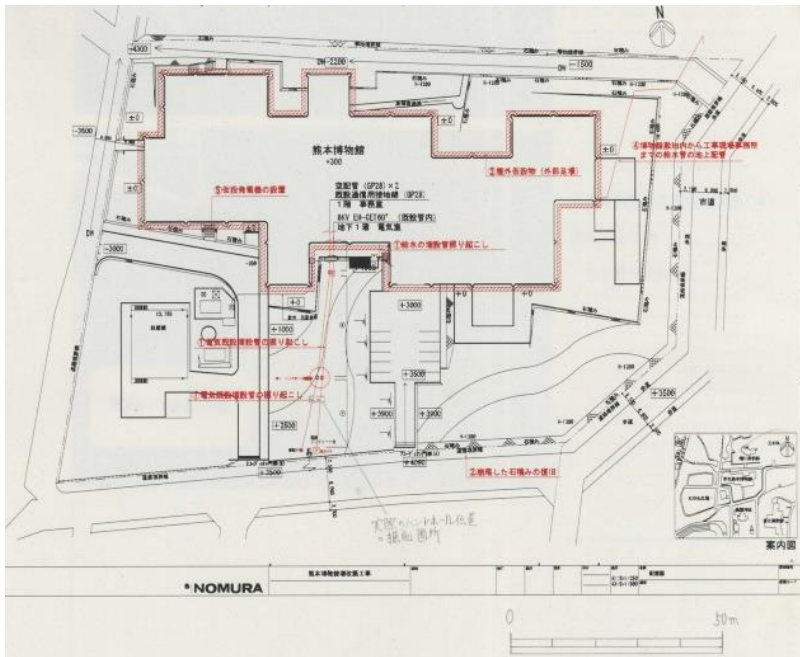
原因：熊本博物館敷地内のハンドホール検出に伴う掘削工事

期日：平成28年9月27日

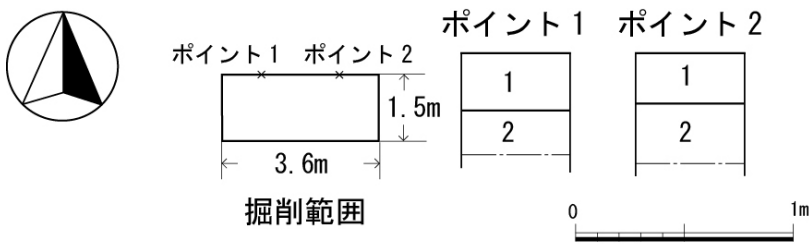
方法：熊本博物館リニューアル工事に伴って、地下ケーブル2本（高圧ケーブルと電話ケーブル）の現況確認をする必要が生じ、そのため、現地地表下50cmに存在するとされるハンドホール（地中管路埋設工事においてケーブルの挿入、撤去を行うための中継用として使用される地中箱）の上面を検出することとなった。事前に、熊本博物館が提示した位置を参考に位置探査を行ない、結果、ハンドホールの位置を表示する標柱を確認した。

上記のように、今回の掘削は、現代に設置した既存施設の位置を確認するものであり、また、その位置も限定できることから、工事立会をもって対処することとした。

成果：掘削箇所は1箇所、平面3.6×1.5m、深さ50cmの規模であり、これによって、ハンドホール2箇所の上面を確認した。土層観察の結果、掘削は、全て現代の土層中に収まる事が確認された。



(16) 工事箇所位置図



(16) 土層柱状図



(16) 掘削箇所遠景



(16) ハンドホール位置を示す標柱



(16) 掘削風景



(16) 掘削全景



(16) ポイント1 土層断面
高圧ケーブルハンドホール脇



(16) ポイント2 土層断面
電話線ハンドホール脇

(17) 慶宅坂工事立会

原因：慶宅坂北側斜面緊急陥没に伴う工事立会

期日：平成 28 年 10 月 17 日

面積：0.96 m²

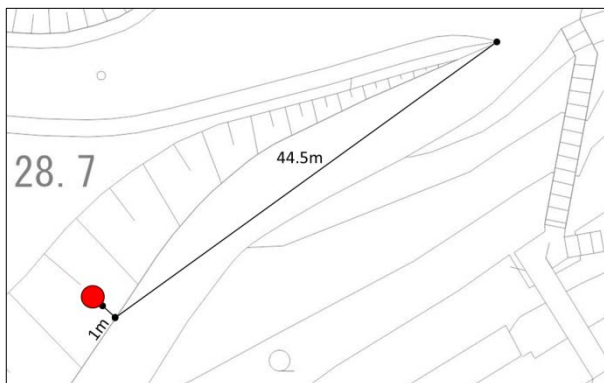
方法：陥没部分の埋め戻し前に記録保存を行った。

成果：今回慶宅坂北側の斜面が突如として陥没。平面積約 1 m²、深さ約 1.7mの穴で、観光客も多く往来する場所であるため、緊急に埋め戻す前に土層の観察と、文化財の確認のため、記録保存を行った。

土層堆積は、以下の通りである。

- 1層：表土層 10YR6/8（明黄褐色）ローム土二次体積土層。
- 2層：盛土層 10YR2/3（黒褐色）ロームブロック、砕石、ビニール片を含む。
- 3層：客土層 10YR3/3（暗褐色）しまり無し、拳大から人頭大礫を含む、水分多い。
- 4層：客土層 10YR3/4（暗褐色）粒子粗い土、水分多い。
- 5層：盛土層 10Y4/4（褐色）標高から高い方からの傾斜堆積を示す、ローム粒子を含む。

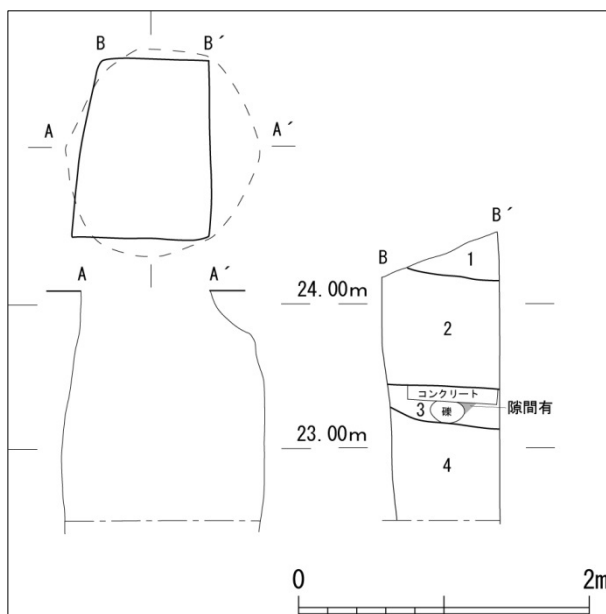
観察の結果、いずれも現代の堆積土層で、3層と4層は5層を切り込む暗渠状の構造体であり、3層上で確認された板状コンクリートは暗渠の蓋と考えられる。遺物については出土していない。以上の結果、当該地において文化財は確認されなかった。暗渠についても、慶宅坂上部に位置する薬研堀からの暗渠と考えられるが、これ以上の確認は出来ていない。



(17) 調査地点図



(17) 調査地点



(17) 平面図、土層断面図



(17) 土層断面

(18) 二の丸広場陥没補修工事立会

原因：二の丸広場において10月23日（日）に陥没が起こっていることが確認された。陥没を補修するため工事立会を行った。

期日：平成28年10月24日

面積：0.51 m²

方法：現場はすでに陥没し穴が開いており、崩落土砂を出す作業をしたため、陥没状況よりも穴の径が広がっている。掘削箇所は1箇所、平面85×60cm、深さ90cmの規模であった。

成果：土層観察の結果、1層が山砂層、2層が暗褐色土層（レンガ片、コンクリート片混入）で二の丸公園整備時の造成土と考えられる。3層は黒褐色土層（粒度が粗く、ややグライ化しており、ドブ臭い。）井戸を埋めた土であると考えられる。1層の山砂ブロックを含むことから何度か陥没して補修している可能性がある。



(18) 土層断面

(19) 二の丸広場水道工事立会

原因：水道管漏水に伴う盛替え工事（緊急工事）

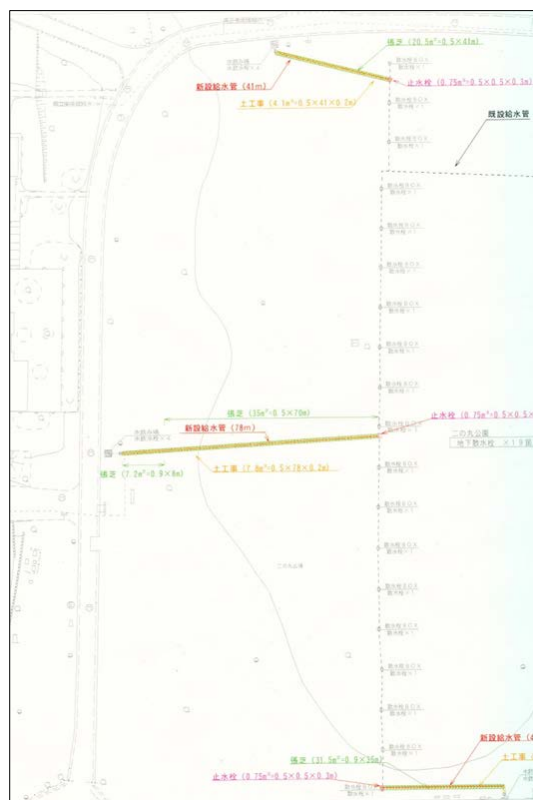
期日：平成28年11月16日・17日

方法：掘削範囲が狭小だったので、工事立会とした。

成果：既存水道管の付け替え工事であったので、現地表面下約20cmの掘削であった。掘削する土を観察したが全て山砂層が確認された。以上の結果、史跡への影響は無いものと判断される。



(19) 土層断面



(19) 調査地点図

(20) 熊本城稲荷神社ボーリング調査立会

原因：熊本地震対応による地質調査

期日：平成 28 年 11 月 11 日・12 日

方法：ボーリングコアの確認を主とした立会とした。

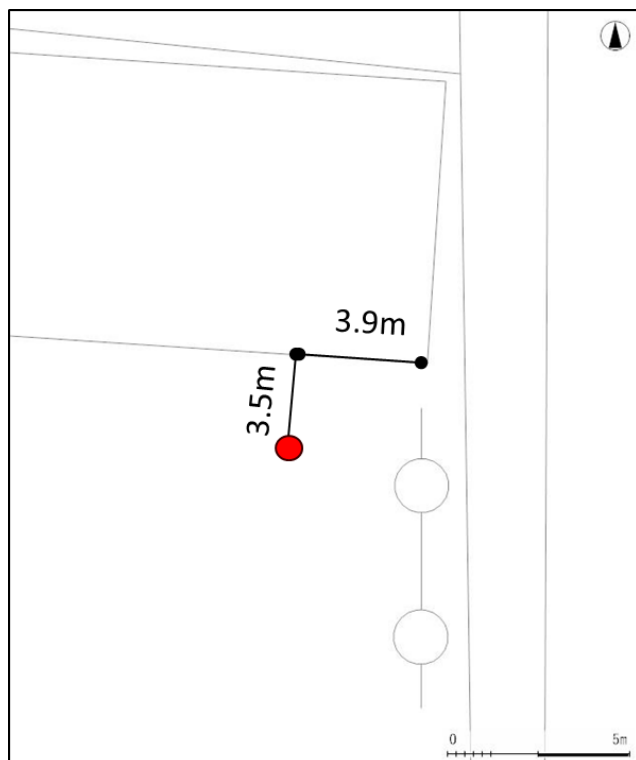
成果：ボーリング調査については、1m毎にコアチューブを観察する方法を行った。

したがって概略として図化している。

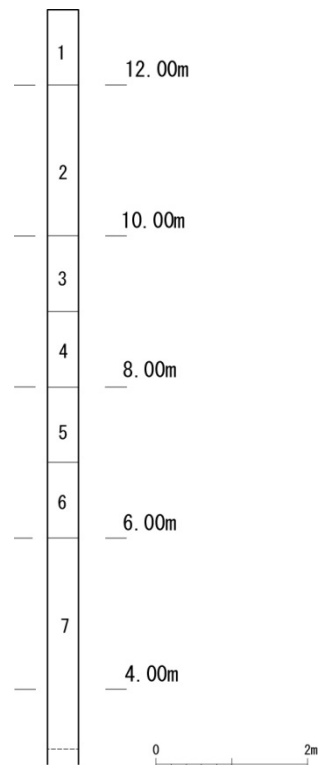
1層は表土層を含む土層。

2層から4層は旧流路あるいは沼沢地とも想定される。

5層はローム土層。7層は火砕流堆積層である。



(20) 調査地点図



(20) 土層断面略図



(20) 4層土層



(20) 5層土層

(21) 花畑公園水道管理設工事立会

原因：水道（花畑公園内既設給水管）移設工事

期日：平成 28 年 11 月 30 日

方法：当地は花畑邸跡の一角であるため、今回の工事に際しては、掘削に立ち会い、土層観察を行なった。図面に示した 1～5 地点において写真を撮影している。工事内容は、通知書とはやや異なっており、水道管径 20 mm、掘削深度 50～60 cm であった。図面に示した 1・2・5 地点が深く、深度約 60 cm である。

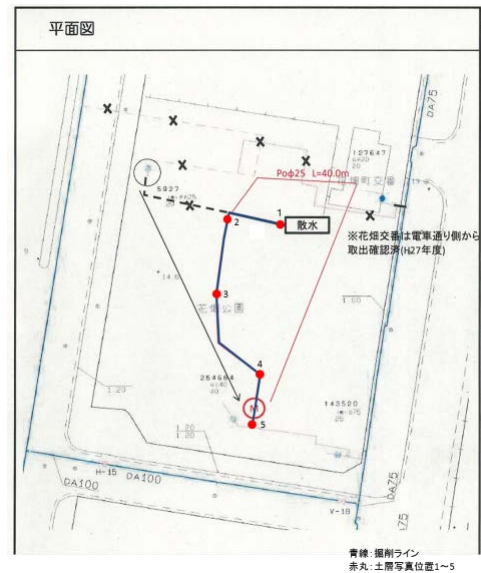
成果：土層は、1 地点において掘削基底面付近において、比較的粒度が細かい土層（暗褐色土 10YR3/4～10YR3/3、ニガ土ブロック？が混入する）が認められ、これは江戸時代に上る可能性のある二次堆積土層である。その他は、表土から掘削基底まで全て間隙性が高く比較的締りが弱い土層で、これは近現代の造成土と判断される。なお、遺物は確認されなかった。

以上、1 地点基底付近に江戸時代に上る可能性のある土層上位の露出は認められたものの、部分的な状況であり、工事に伴う掘削は、概ね近現代の造成土に収まっている。

今回工事は、埋蔵文化財について支障は無いと判断される。



(21) 調査地位置図



(21) 調査箇所地点



(21) 掘削風景



(21) 1 地点



(21) 1 地点



(21) 2 地点



(21) 2 地点



(21) 3 地点



(21) 3 地点



(21) 3 地点



(21) 3 地点

(22) 熊本家庭裁判所境界ブロック壁設置工事立会

原因：既存ブロックの撤去及び新規ブロック建設

期日：平成 28 年 12 月 2 日、平成 29 年 1 月 14 日

方法：既存ブロック基礎部分を転用する形での施工であったので、工事立会とした。

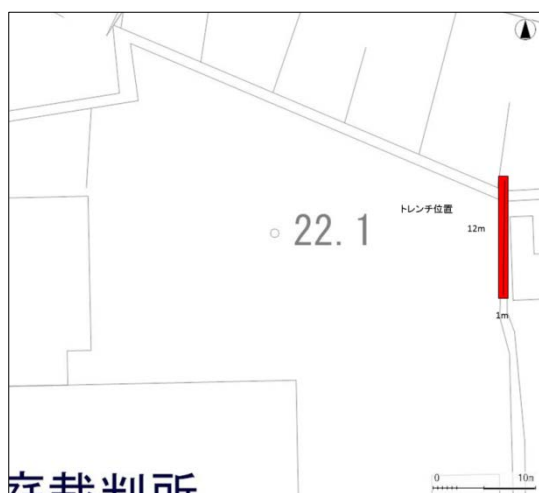
成果：土層の堆積状況は、以下の通りである。

1 層：表土層、アスファルト層。

2 層：客土層 現代土層。

3 層：碎石層である。遺構・遺物とも確認されていない。

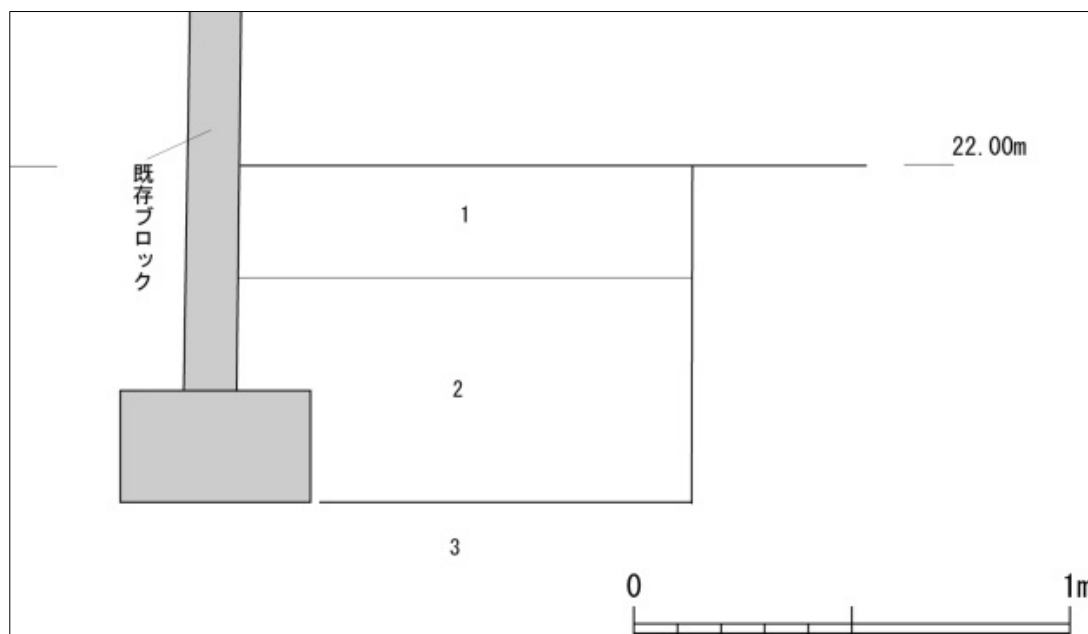
以上の結果、当該地において埋蔵文化財への影響は無いものと判断される。



(22) 調査地



(22) 右上：土層断面図



(22) 土層断面図

(23) 旧熊本国税局石垣崩落部分の法面整形に伴う確認調査

原因：石垣崩落部分の法面整形ほか

期日：平成 28 年 12 月 12 日～同月 26 日・1 月 4 日～20 日

面積：5775.11 m²

経緯：本項 (32) を参照されたい。

方法：今回の確認調査においては、特別史跡範囲の東面する石垣背後の削平予定部分にトレンチを 4 箇所設けた (1～4 トレンチ)。ただし、調査地の現状は、応急措置の際に発生した廃土が積んであり、トレンチ 4 箇所を同時に調査することはできず、2 箇所ずつの調査となった。

1 トレンチは敷地に南面する歩道脇の石垣との関係を捉えることを目的として、これに直交する方向 (南北方向) に設定している。

2・4 トレンチは、東面する石垣の土層の状況を確認することを目的として東西方向 (石垣面に直交) に設けている。

3 トレンチは東面する石垣に平行する方向 (南北方向) に設定している。石垣の途中には隅石が存在し、その南側と北側では石材の大きさ、積み方も異なっており、北側は追加した石垣と考えられる。3 トレンチは、隅石から西側に延びる石垣線やその痕跡の有無を確認することを目的として設けている。

なお、4 トレンチは、近くに井戸や鋳物製の汚水蓋が存在することから、元々、設定位置について制限があった。さらに、重機掘削中に下部に高電圧ケーブルがあることを示すビニールシート・コンクリート製保護板が検出されたことから、それ以上の延長を中断したため、他のトレンチよりも小規模なものとなっている。

成果：土層は 4 枚に大別される。ローマ数字については、土質・層序・標高の比較から各トレンチに共通するものと考えられる。これを細分したアルファベット小文字・アラビア数字はトレンチごとの表記である。確認されたのはいずれも二次堆積土層であり、江戸時代以降の造成・整地に伴うものである可能性が高い。自然堆積土は認められなかった。

I 層は現代の表土・整地層である。

II 層は、近代の瓦片・陶磁器片が出土する二次堆積土である。1 トレンチでは、下面の高さが、南面する歩道脇石垣の新旧の石材の境 (下 2 段は安山岩製の大きめの石材でその上は近代以降の所産とみられる凝灰岩製の石材) とほぼ対応している。2 トレンチでは、III 層を掘り込んで認められ、これは東面する石垣の近代以降の修理の際の削平と考えられる。

III 層は、江戸時代後期～近代初頭の造成土である。凝灰岩粒を基質とする二次堆積土で、瓦片や江戸時代後期の陶磁器片を含む。いずれのトレンチとも数枚に細分され、2・3 トレンチにおいては西から東方向への傾斜が明らかである。これは、西から東へ (東面する石垣の背後方向へ) 土を造成した結果とみられる。また、本層上面を掘り込む土坑があり、2 トレンチにおいては 19 世紀代とみられる便槽を埋設した土坑 (SK01)、3 トレンチにおいては明治初年～中頃 (19 世紀代後半) の陶磁器を多量に埋納する土坑 (SK02) を検出している。

IV 層は、火砕流土粒・砂粒・凝灰岩粒をそれぞれ基質とする二次堆積土が交互に堆積する層で、これらを一括して扱った。1～3 トレンチにおいて確認され、III 層のような明確な傾斜は認められない。土質・堆積方向とも上部の III 層との間に画期が想定できるものである。ただし、上面 (火砕流土粒を基質とする土) が硬化する、平坦に整地されているといった状況は認められない。本層の上位からは江戸時代以降の瓦片が出土している。

以上、調査地全域に認められる III 層は、江戸時代後期～近代初期の造成土と判断され、その下面の高さは、東面する石垣の、残存する下 1・2 段の石材の高さに対応する。すなわち、東面する石垣は、その背

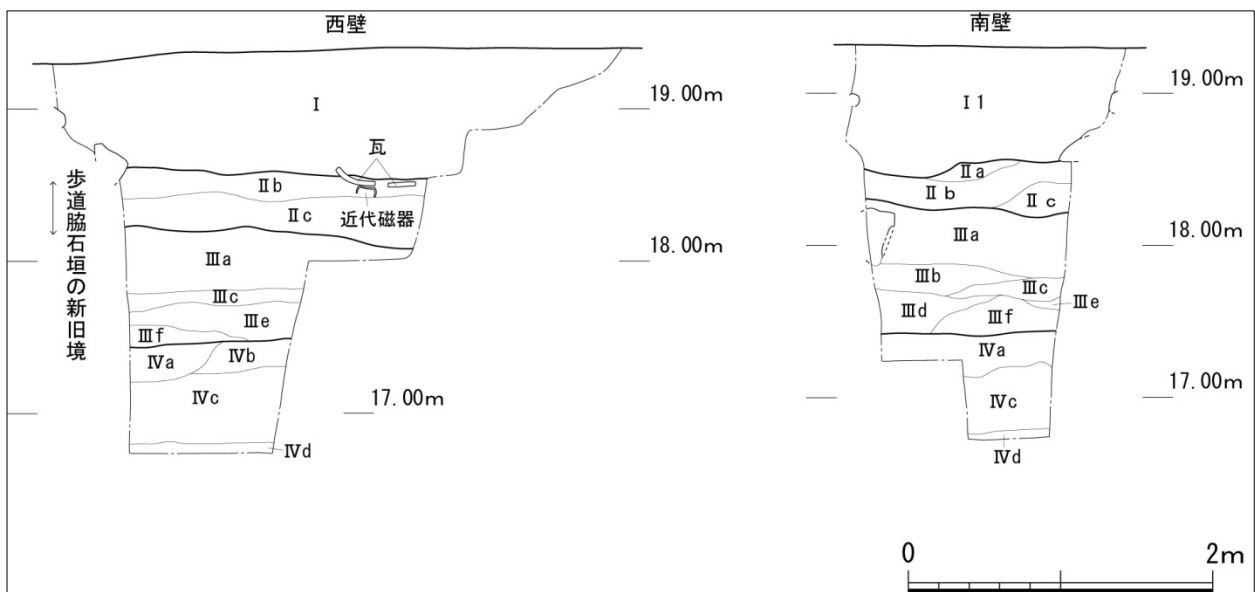
後をⅢ層によって造成しており、Ⅲ層堆積時期に積んだ(積み直したのか新たに積んだものかは不明)可能性が高い。さらに、上位は2トレンチにおけるⅡ層の堆積状況から、部分的にせよ近代以降に修理したものと考えられる。

遺構は、前述した2・3トレンチにおけるⅢ層を掘り込む土坑に加え、4トレンチにおいてA・B層とした重複する掘り込みを確認している。新期のA層からはコークス片が出土しており、近代以降の埋没と想定される。

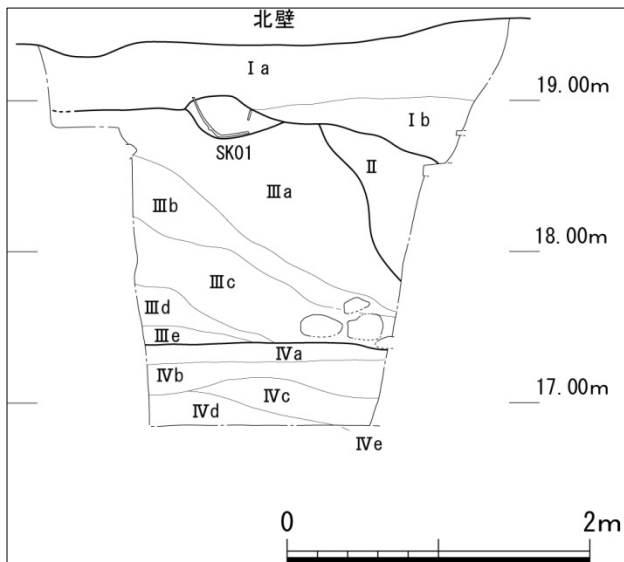
以上、浅い部分で現地表面下40cmにおいて検出されたⅢ層以下と、Ⅲ層を掘り込む遺構は、近代初頭期(明治10年頃)以前を保護対象とする熊本城跡における取り扱いを鑑みれば、埋蔵文化財と認識される。今回工事は、これに影響を及ぼすため、事前の本調査が必要である。



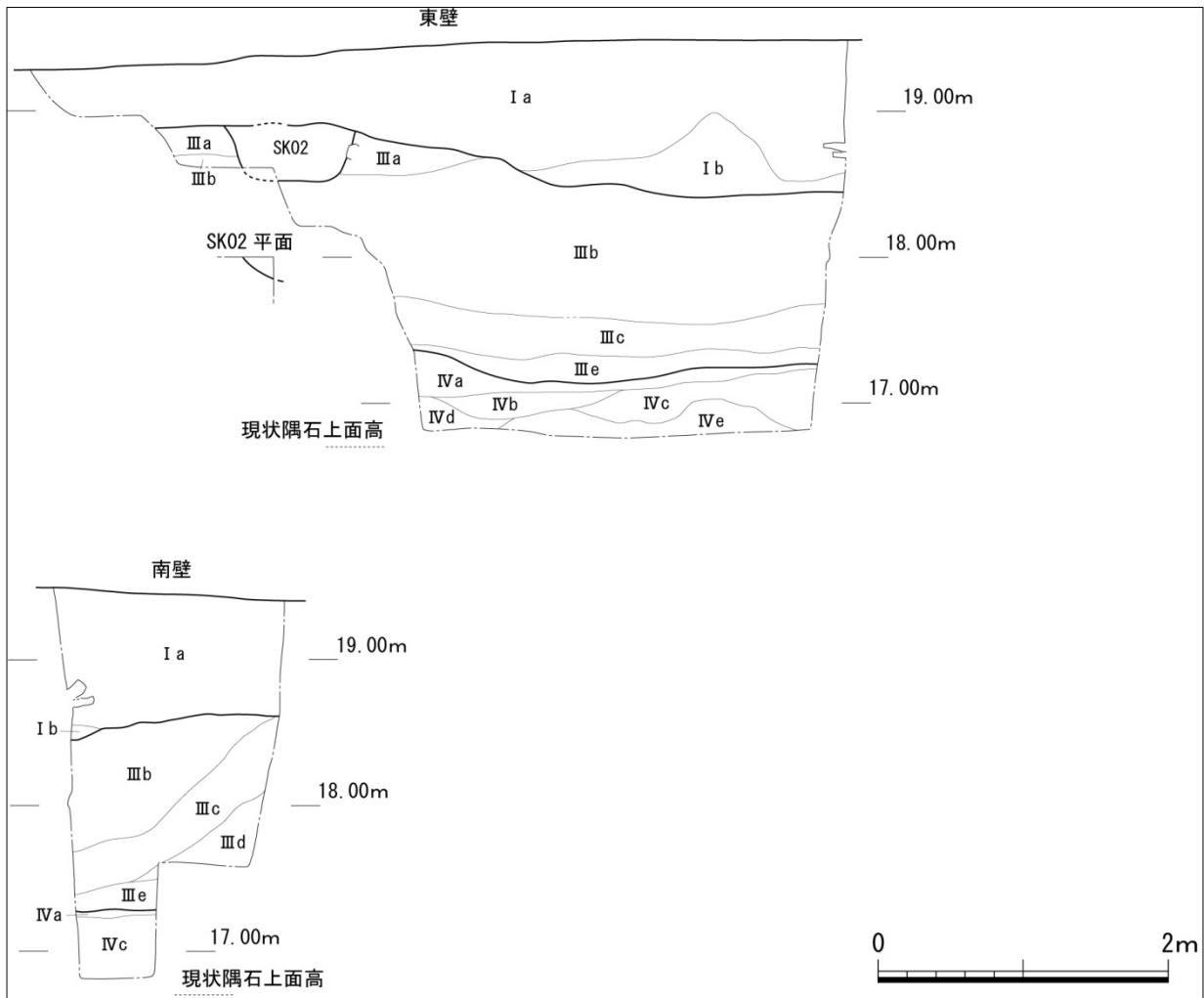
(23) 調査地位置図



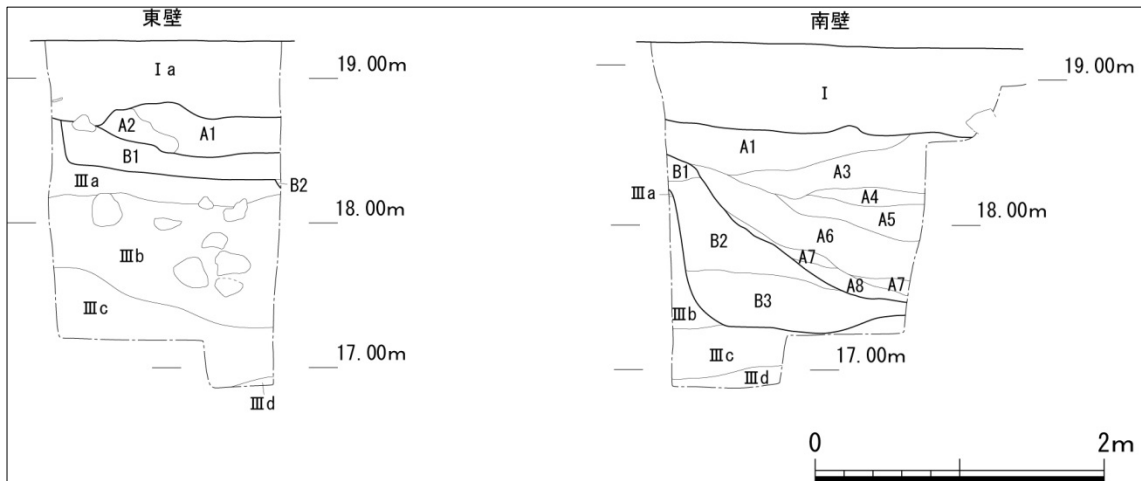
(23) 1トレンチ土層断面図



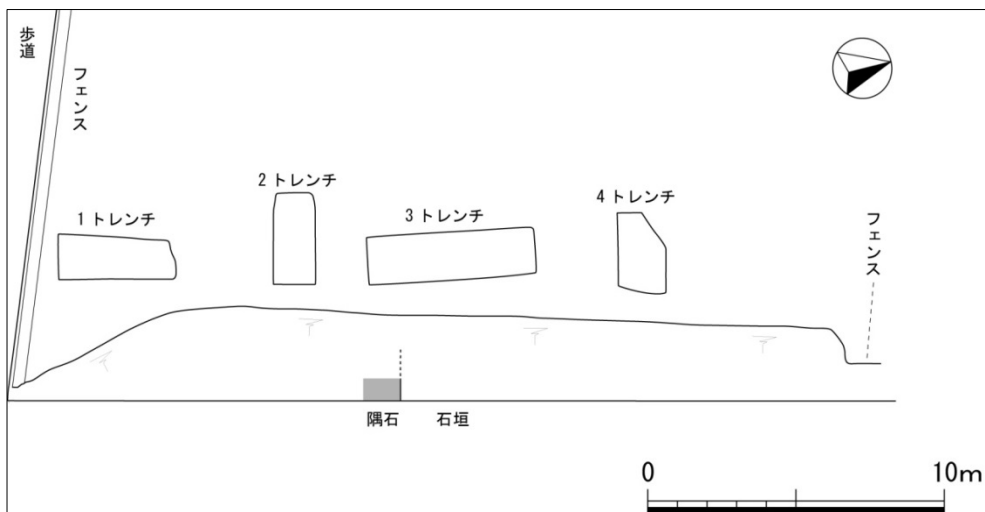
(23) 2 トレンチ土層断面図



(23) 3 トレンチ土層断面図



(23) 4 トレンチ土層断面図



(23) トレンチ配置図



(23) 1 トレンチ西壁土層断面



(23) 1 トレンチ西壁土層断面
下位層断面



(23) 1 トレンチ南壁土層断面



(23) 2 トレンチ北壁土層断面



(23) 2 トレンチ北壁
土層断面下位



(23) 3 トレンチ東壁土層断面



(23) 3 トレンチ南壁
土層断面



(23) 4 トレンチ南壁
土層断面



(23) 4 トレンチ東壁
土層断面

(24) 熊本県立第一高校石垣ネット養生工事立会

原因：正門の石垣に熊本地震によりはらみ等の変位が起きたため。

期日：平成 29 年 1 月 27 日

方法：熊本地震によりはらみ等の変位が起きた正門前の石垣にネット養生をする。なお、主体は熊本県文化課であり、本センターは、これに立ち会ったものである。

成果：正門前の石垣の根元にワイヤーを固定するためのアンカーを打ち込んだ(長さ 70cm) 石垣面に影響がないように注意をして施工した。そのワイヤーで金網を引っ張って固定した。



(24) 作業状況



(24) 作業完了状況

(25) 熊本家庭裁判所存在状況確認調査

原因：埋蔵文化財の存在状況確認

期日：平成 29 年 1 月 7 日～12 日

方法：トレンチは現状における掘削予定箇所付近に 3 箇所設けた (1～3t)。現地の現況は駐車場でアスファルトで舗装してあり、その下部には厚さ 15～20 cm のコンクリートが敷いてある。調査は、まずはこれらを除去し、土を露出させたうえで行った。廃土は 10t ダンプに仮積みし、この廃土をもって埋め戻した。復旧は廃土で埋め戻した後、セメントを混合した砕石、アスファルトをもって行ない、さらに、駐車場の白線を引いた。

成果：土層堆積は、トレンチ 3 箇所ともほぼ共通し、1～3 層に大別される。

1 層は現代の堆積層で、上からアスファルト・コンクリート・転礫を含む砂層・コンクリート片等を含む凝灰岩粒層によって構成される。

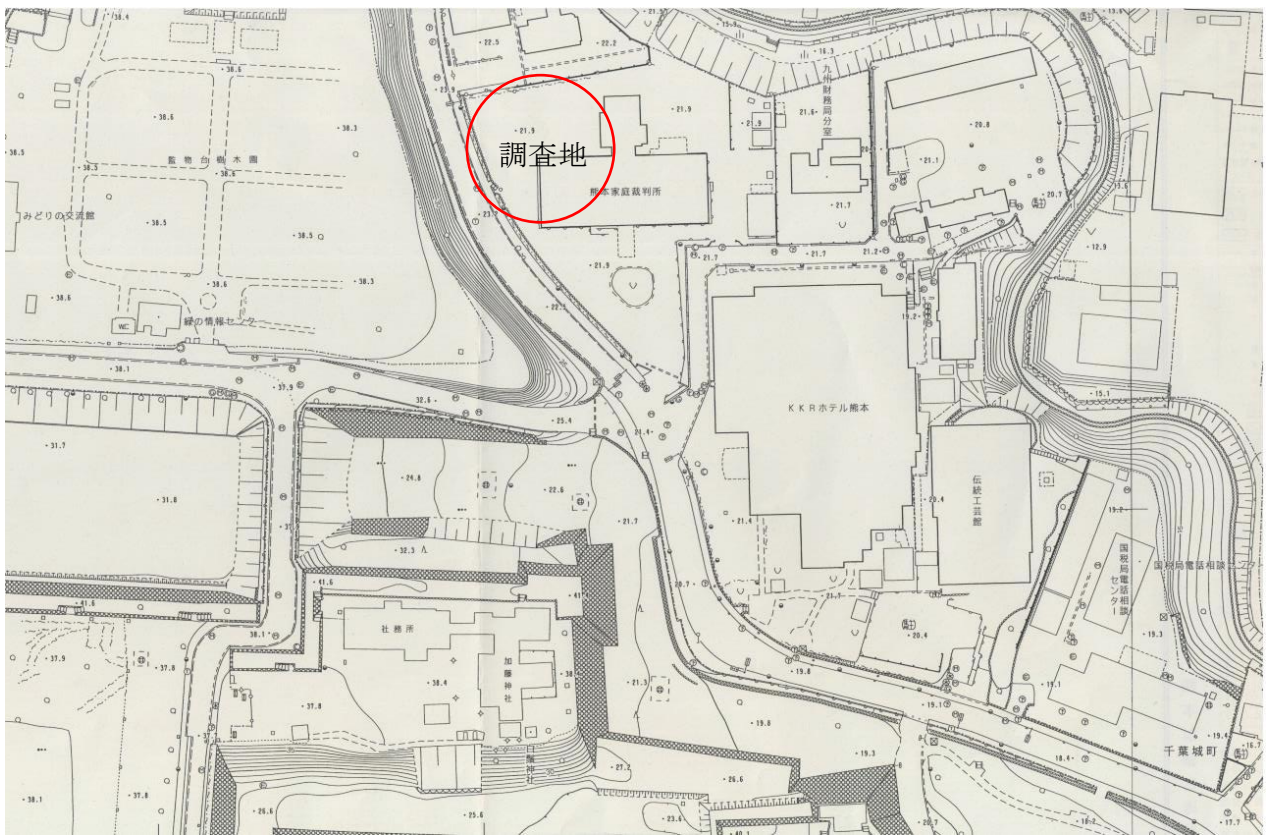
2 層は火砕流土粒・凝灰岩粒による二次堆積層で、造成土と判断される。2t においては遺物が出土し、江戸時代後期の陶磁器約 10 片 (新しいものでは 19 世紀初～中頃の染付端反碗)、江戸時代とみられる瓦

片が認められる。堆積方向は、1t においては南東→北西、2t においては東→西、3t においては南→北方向へ傾斜しており、これは造成の際に土を押し込んだ方向を示すと考えられる。

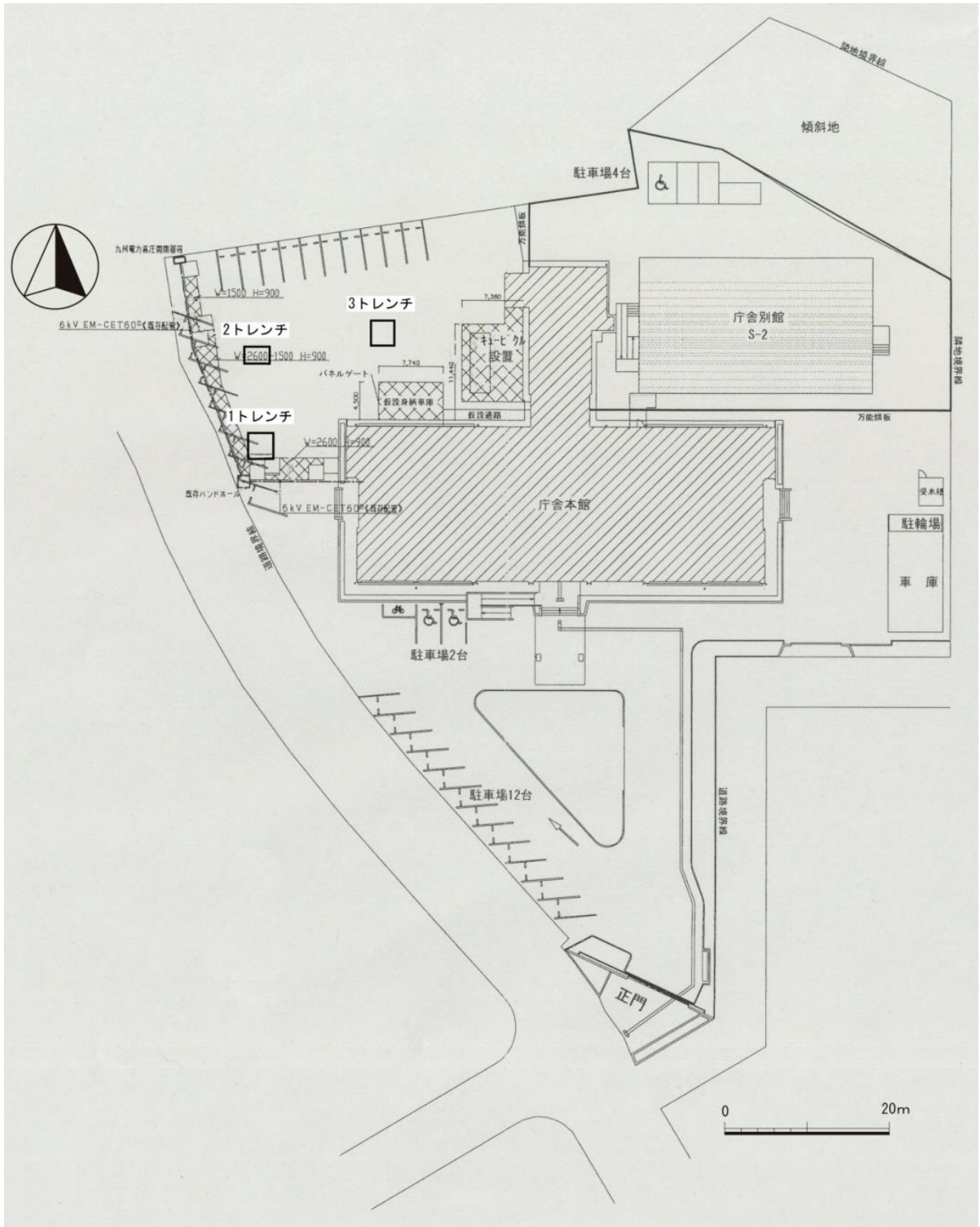
3層は2tのみで検出された。凝灰岩粒を基質とし、同ブロック・軽石片を極多量に含む間隙性の高い土で、あるいは自然堆積層の可能性も考えられる。

遺構は、1t において2層を掘り込む土坑を検出している。遺物は出土していない。他、3t において近代に上る可能性のある掘り込みA・B、コンクリート基礎が検出されており、掘り込みAからは煉瓦片・煉瓦が付着したコンクリート塊が出土している。近代に建設された煉瓦建物の廃棄に伴うものと想定される。

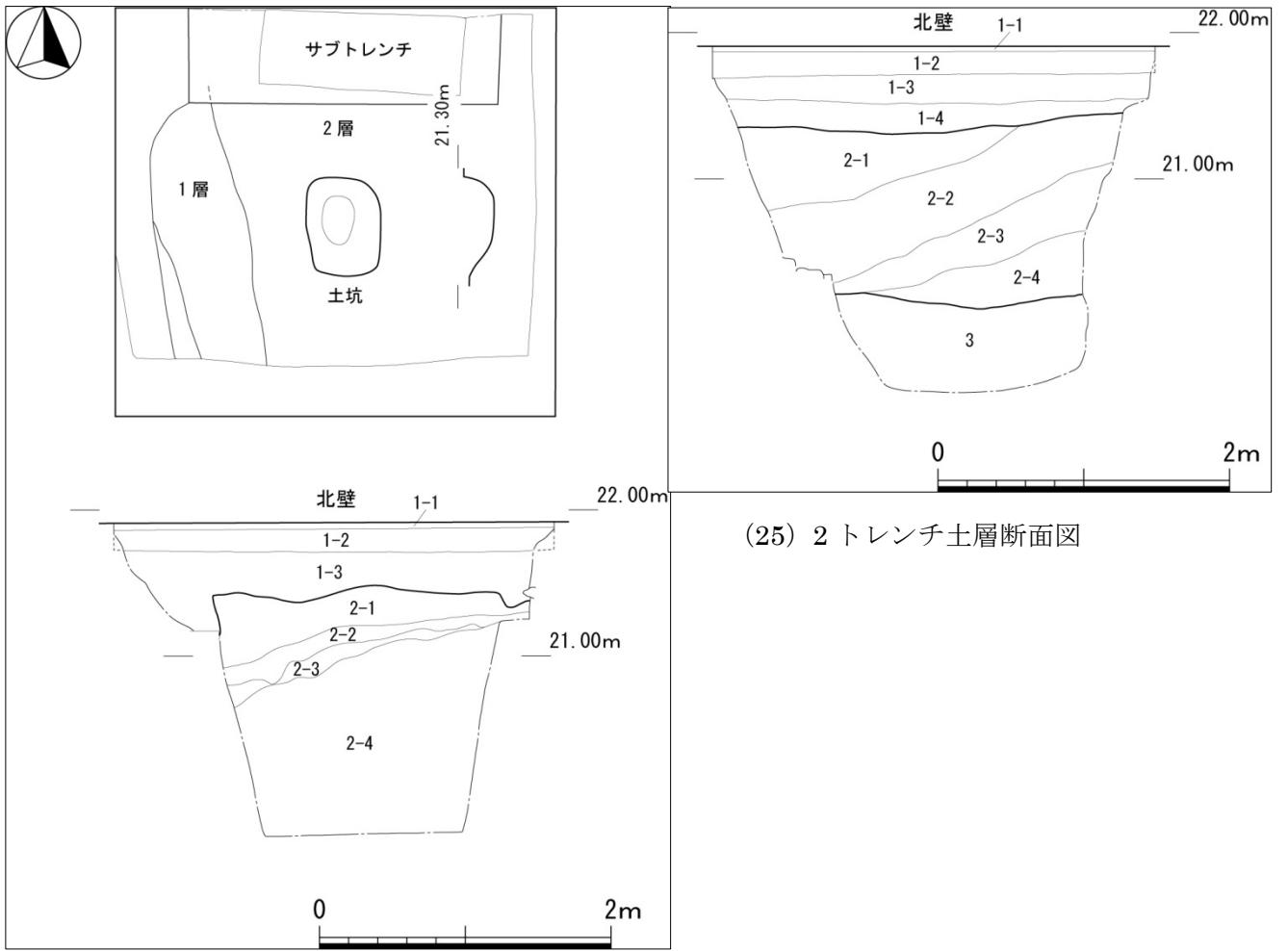
上記から、調査地においては、現地表面下60cmにおいて江戸時代後期の遺物を含む造成土が堆積しており、さらにこれを掘り込む土坑検出されている。これらは熊本城に関わる土層・遺構であり、保存対象と判断される。



(25) 調査地位置図

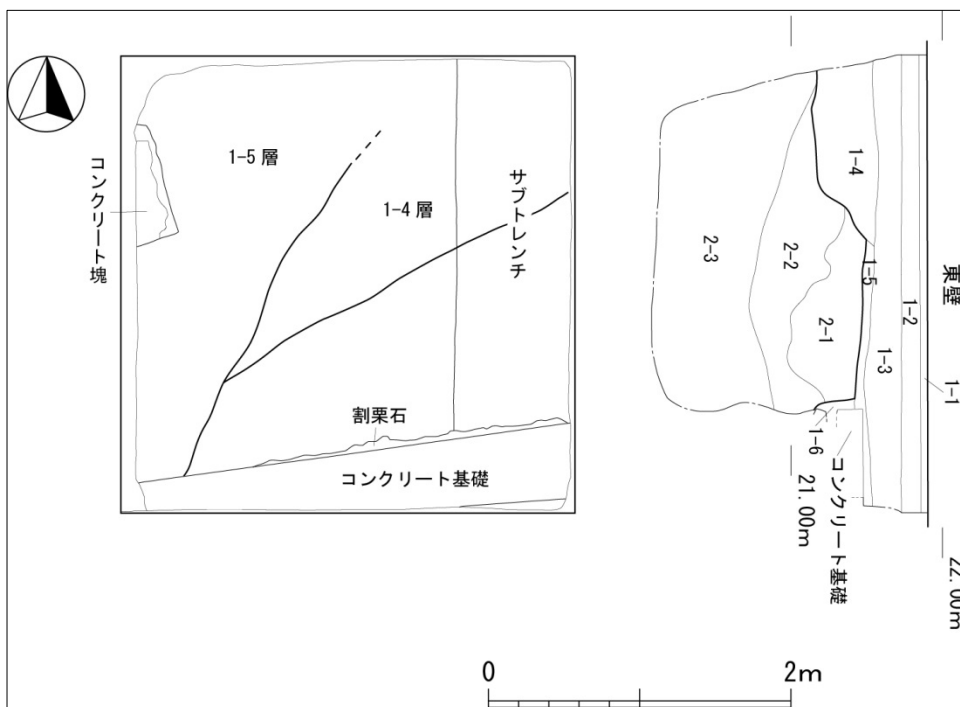


(25) トレンチ配置図



(25) 2 トレンチ土層断面図

(25) 1 トレンチ平面図・土層断面図



(25) 3 トレンチ平面図・土層断面図



(25) アスファルト・
コンクリート除去風景



(25) 1t, 西から



(25) 1t, 西から土坑完掘,
西から



(25) 1t, 北壁土層断面



(25) 1t, サブトレンチ内
西壁土層断面



(25) 2t, 西から



(25) 1t, 北壁土層断面



(25) 2t, 北壁土層断面下位, 2 -
4層・3層



(25) 4t, 西から



(25) 4t, サブトレンチ東壁



(25) 復旧, 砕石填圧



(25) アスファルト復旧

(26) 熊本市役所古京町別館解体工事立会

原因: 熊本市役所古京町別館解体工事

期日: 平成 29 年 2 月 6 日～28 日

方法: 熊本地震被害により解体することとなった古京町別館については、平成 28 年 8 月 31 日、解体工事の設計に伴って事前に建物の基礎構造を確認する必要があり、その際に建物に沿って 2 箇所を掘削した。文化振興課・調査研究センターはこれに立会い、現代・近現代の土層のみを確認している。また、

遺構は確認されず、埋蔵文化財について影響が及ぶものではなかった。今回の工事立会は解体工事の実施に伴うものである。掘削箇所について、基底面・断面の土層観察を行なっている。

成果：土層観察箇所は3箇所である（ポイント1～3）。以下、各ポイントの土層を記す。

ポイント1

1層：現表層。コンクリート敷き。

2層：砕石層。

3層：近現代の整地層 暗褐色土（10YR3/3） 砕石、炭化物粒・ブロックを含む。

ポイント2・3

1層：現表層。コンクリート敷き。

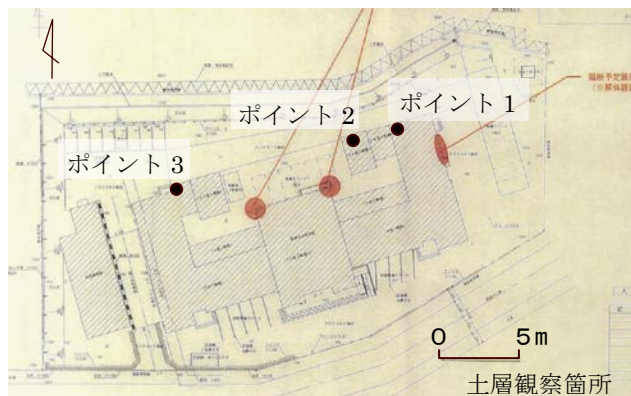
2層：砕石層。

3層：近現代の整地層 暗褐色土（10YR3/3） 砕石、火砕流土粒を含む。締り弱い。

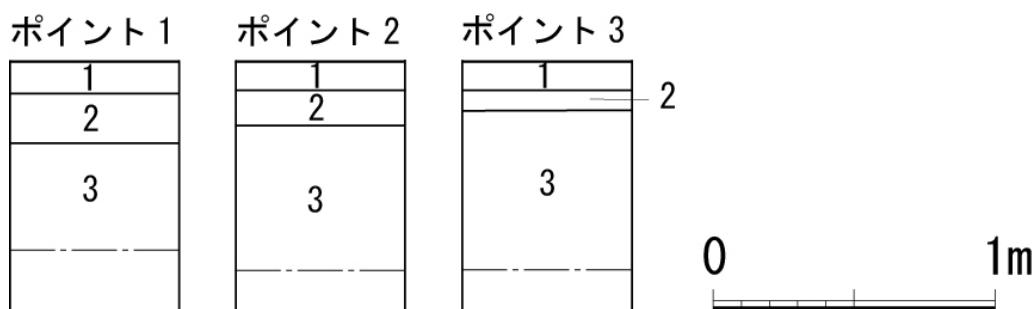
以上、本工事は、埋蔵文化財に影響を与えるものではないことを確認した。



(26) 遺跡範囲と今回申請地（縮尺任意）



(26) 今回工事地点（縮尺任意）



(26) 土層柱状図



(26) 解体風景



(26) 解体風景



(26) ポイント1



(26) ポイント 2



(26) ポイント 3

(27) 日本たばこ産業（JT）解体工事立会

原因：日本たばこ産業（JT）既存建物解体工事

期日：平成 29 年 2 月 24 日～3 月 15 日

方法：日本たばこ産業（JT）既存建物解体工事に伴って立会調査を実施した。なお、2 月 24 日に実施した解体請負業者（清水建設）との協議によれば、解体する既存建物の基礎深度は、中央の地階部分で現地地表下約 7m、それ以外の部分で現地地表下 1.5m とのことであった。解体に伴い立会調査を実施し、3 箇所において土層観察を行なった（ポイント 1～3）。

成果：ポイント 1：建物北側の基礎抜き取りの際の確認。現地表面下 140 cm まで既存建物建設時の埋め土であることを確認した。

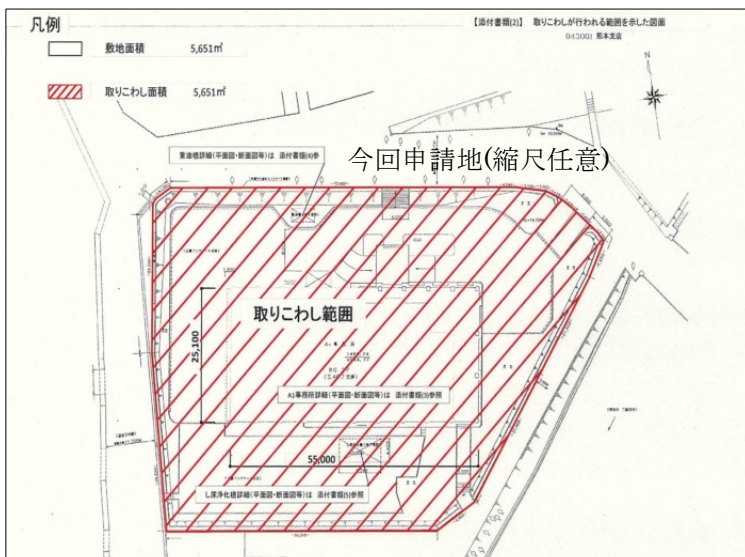
ポイント 2：地階への重機搬入スロープの壁断面の確認。現地表面下 1.5～3.5m の土層を確認し、既存建物建設時の埋め土であることを確認した。地階部分建設時の余掘り部分と考えられる。

ポイント 3：地階部分の壁・床材を内側から撤去する際の確認。現場に近づくのが危険であるため、離れた位置からの確認であることお断わりしておく。露出した土層を南北壁において確認し、ポイント 1・2 と同様、既存建物建設時の埋め土であることを確認した。地階部分建設時の余掘り部分と考えられる。深度は解体工事担当者に訊いたところ現地表面下約 7m であるという。

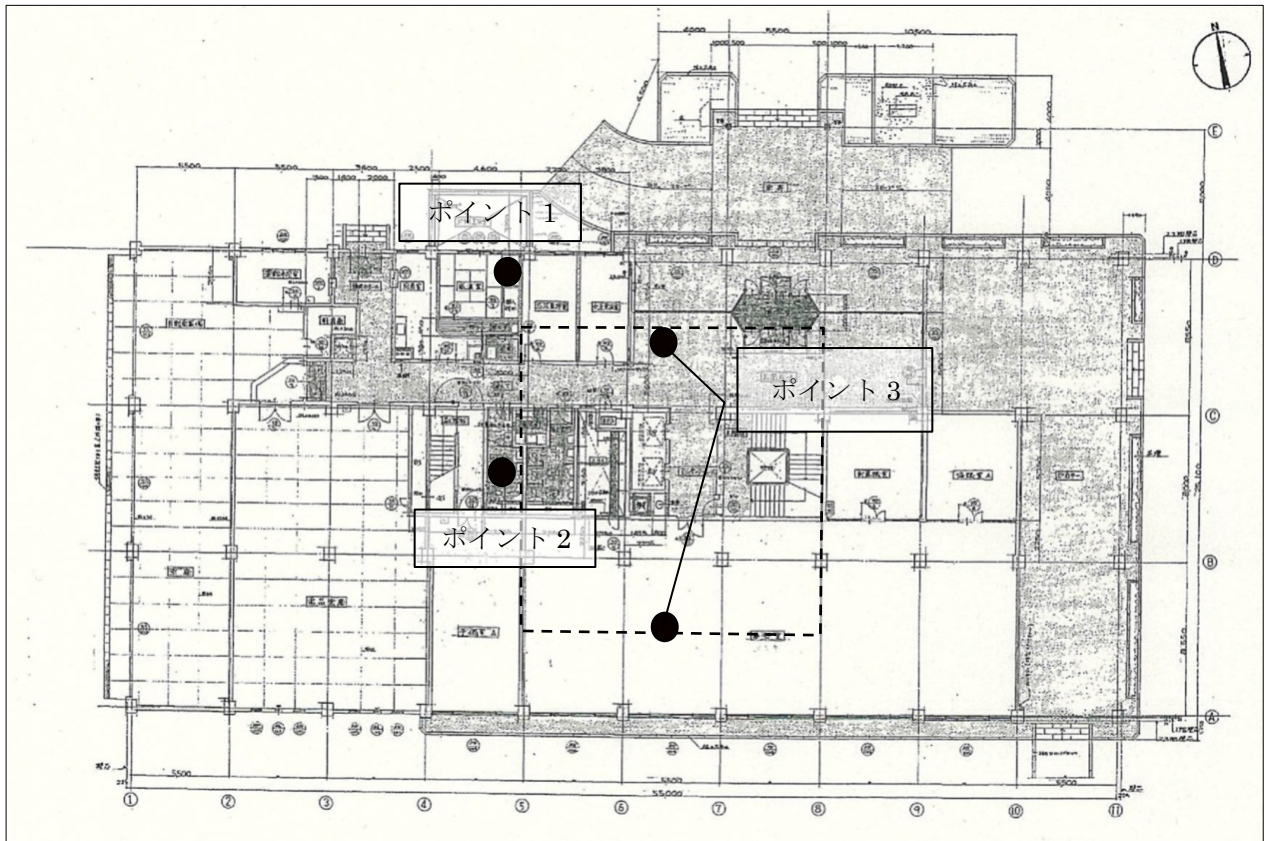
※土層はポイント 1・2 において確認した。単一層である。

黒褐色土（10YR3/2） 全体に灰色味を帯びた色調で、河岸段丘低位面の基盤層となる褐色砂質土ブロック・軟質砂岩ブロックを混入し、他、コンクリート塊も認められる。

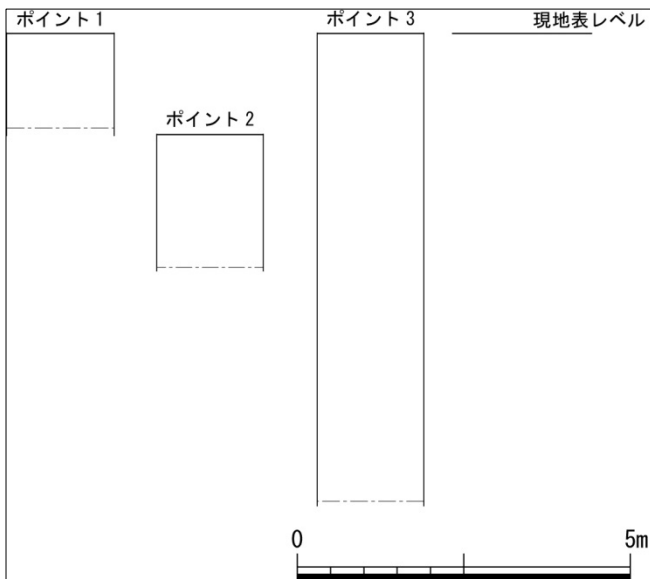
以上、今回の解体工事は埋蔵文化財に対して支障が無いことを確認した。



(27) 今回工事地点(縮尺任意)



(27) 既存建物図と土層観察ポイント (縮尺任意)



(27) 土層柱状略図



(27) 解体風景



(27) 解体風景



(27) ポイント1



(27) ポイント 2



(27) ポイント 3 (南壁)



(27) ポイント 3 (北壁)

(28) 熊本博物館室外機設置工事立会

原因：熊本博物館リニューアル工事 室外機・目隠し塀設置工事

期日：平成 29 年 3 月 1 日

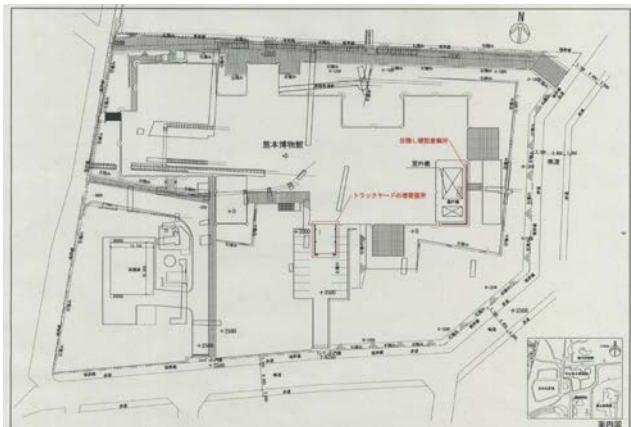
方法：熊本博物館リニューアル工事のうち、室外機とその目隠し塀の設置による掘削に伴って立会を行なった。当該区域は平成 25 年度、リニューアル工事計画に先行してトレンチ調査を行っており、工事の掘削深度はその結果を受け、史跡への影響が及ばないように計画されたものである。したがって、今回の立会調査は、平成 25 年度のトレンチ調査の結果に問題が無いことを確認するためのものである。

成果：土層観察は 2 箇所において行なった（ポイント 1・2）。土層堆積は下記の通り。

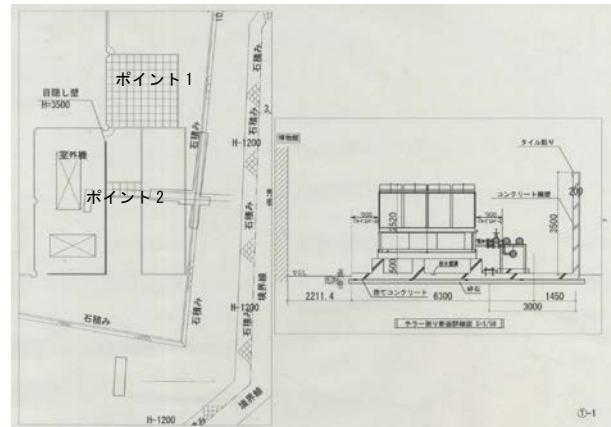
ポイント 1 1：山砂層

ポイント 2 1：砂利層 2：暗褐色土…現代の堆積土。ロームブロック・コンクリート塊・砕石を多量に含む。締り強い。

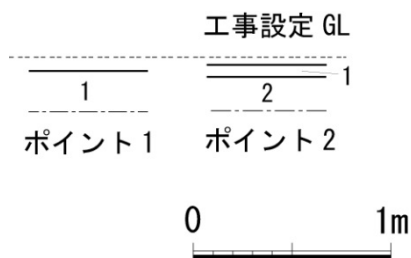
以上、今回の掘削は現代の土層に収まるものであり、史跡に影響が無いことを確認した。



(28) 調査地位置図



(28) 調査地点



(28) 土層柱状図



(28) 工事風景



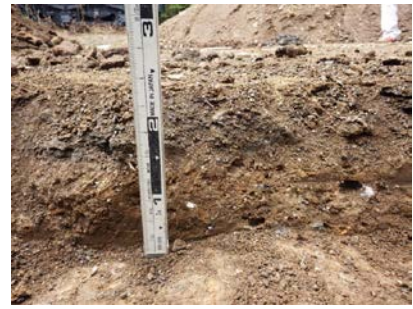
(28) ポイント 1 付近掘削



(28) ポイント 1 土層断面



(28) ポイント 1 土層断面



(28) ポイント 2 土層断面

(29) 熊本家庭裁判所平板載荷試験用掘削に伴う工事立会

原因：新設建物建設に伴う平板平板載荷試験用掘削に伴う工事

期日：平成 29 年 3 月 10 日

方法：試験予定部分の掘削時に、工事立会を実施した。

成果：今回北西の駐車場部分に、一辺 1.8m 正方形のトレンチを 2 箇所設定している。西側を 1 トレンチ、東側は 2 トレンチとした。掘削深度はいずれも 30 cm までであった。土層堆積は以下の通りである。

1 層：アスファルト層。

2 層：砕石層。

3 層：客土層 ローム土層が主体。

4 層：黒褐色 (10Y R3/2) 客土層、瓦片、煉瓦片を含む、5 cm 代の小石を含む。

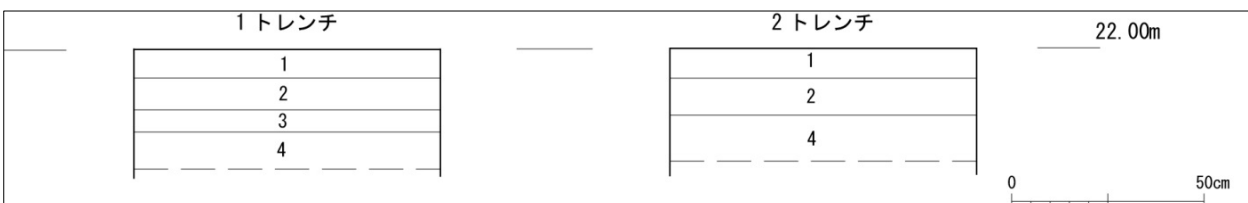
土層を確認した結果、全て現代に堆積した土層を確認した。以上の結果、当該地において埋蔵文化財への影響は無いものと判断される。



(29) 調査地点図



(29) 土層断面写真



(29) 土層柱状図

(30) 熊本合同庁舎跡地ガス管撤去工事立会

原因：既存ガス管撤去工事

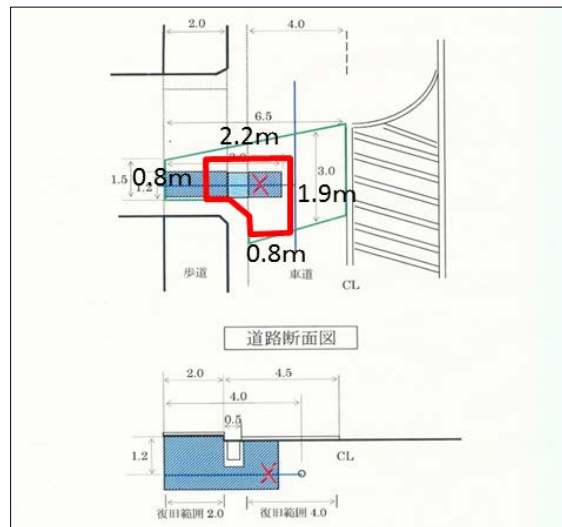
期日：平成 29 年 3 月 14 日・16 日

方法：掘削範囲が狭小であったので、工事立会とした。

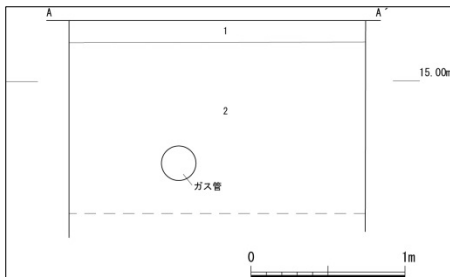
成果：今回は、既存ガス導管撤去の工事立会である。申請地南東隅の敷地外側と、申請地東側の計 2 箇所の掘削であった。南東隅を 1 トレンチ、東側を 2 トレンチとする。1 トレンチについては、表土直下全て山砂層であった。2 トレンチにおいても同様の堆積状況であった。しかし、トレンチ東壁において、煉瓦構造体を検出した。平面約 40 cm×30 cm。高さ約 50cm。5 段の階段構造であった。これは、煉瓦建物の内部に位置する柱部分の基礎構造物である。今回の撤去工事への影響は皆無である。以上の結果、工事着手による埋蔵文化財への影響は、無いものと判断される。



(30) 1 トレンチ掘削地点図



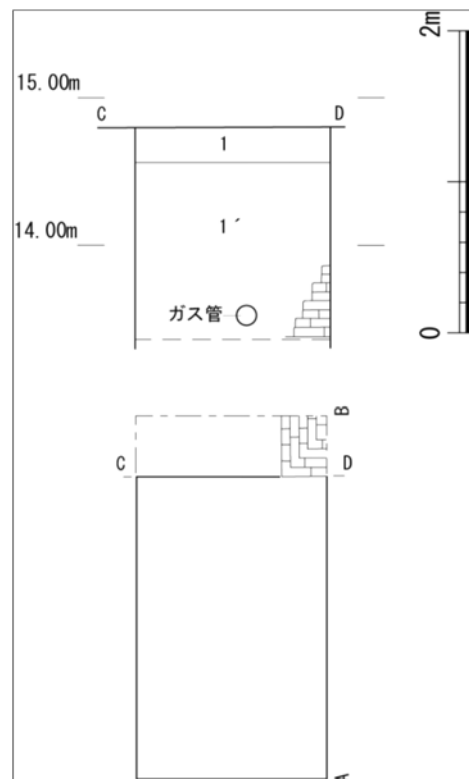
(30) 1 トレンチ掘削範囲図



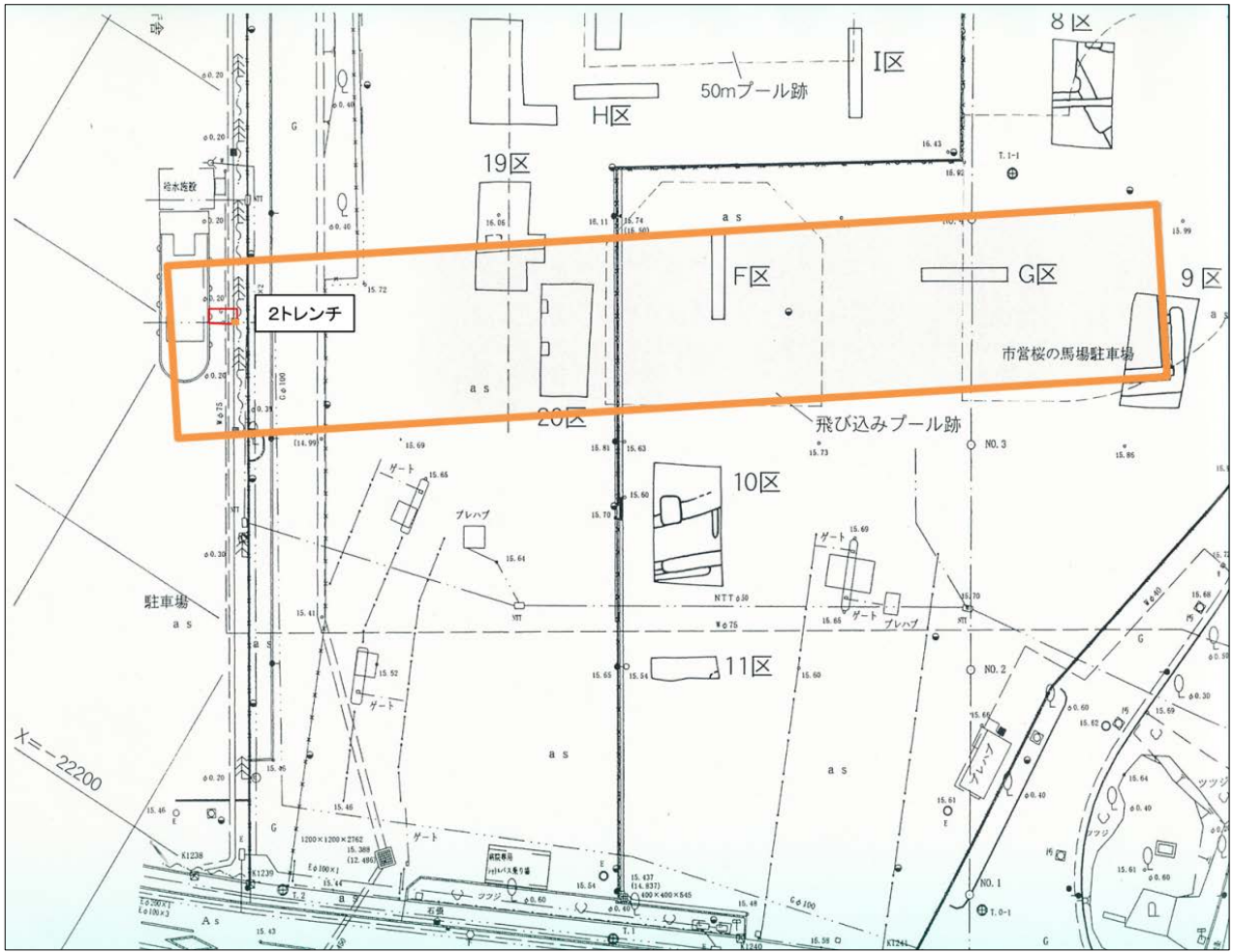
(30) 1 トレンチ土層断面図



(30) 2 トレンチ調査地点図



(30) 2 トレンチ平面図・断面図



(30) 2 トレンチ 煉瓦建物配置図 (橙色線は煉瓦建物)



(30) 1 トレンチ土層断面写真



(30) 2 トレンチ写真

(31) 民間駐車場内下水道復旧工事立会

原因：既存浄化槽撤去後、隣地境界外の下水道に復旧工事立会（「お城前有料駐車場」）

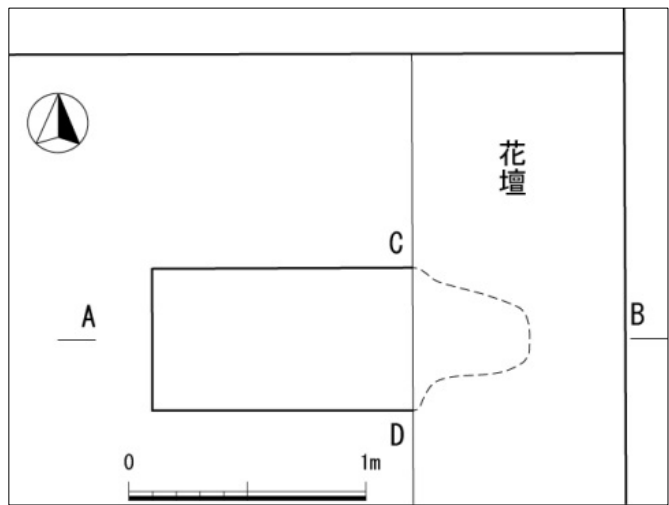
期日：平成 29 年 3 月 21 日

方法：既存部分のやり替えと掘削部分が狭小であったため、工事立会とした。

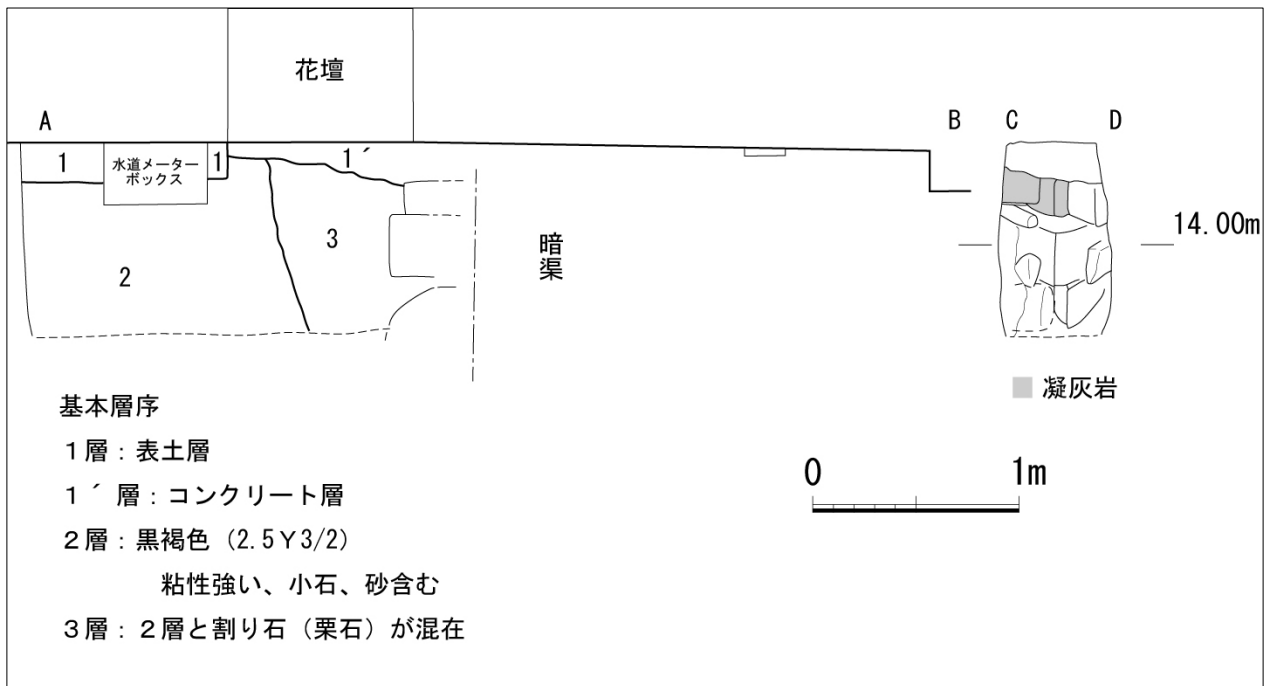
成果：掘削の結果、表土直下は全て現代に堆積した土層であることが確認された。隣地境界付近には、3 段組の石垣を確認することができた。裏側からの確認だったが観察の結果、①控えの形状は先細りであり明確な間知石も確認できた。②材質も安山岩と凝灰岩（灰石）の混合であった。③築石同士の間は間詰め石ではなく、モルタルの充填が確認された。④裏栗層（3 層）であったが、割り石の栗石と混在して土が確認された。以上①から④の結果から、確認された石垣は現代に構築されたものである。



(31) 調査地点図



(31) 調査地点平面図



(31) 調査地点断面図



(31) A－B土層写真



(31) C－D土層写真

(32) 旧熊本国税局石垣の背後の法面削平工事に伴う立会

原因：熊本地震によって崩壊した石垣背後の法面削平に伴う立会調査

期日：平成 29 年 3 月 28 日～平成 29 年 3 月 31 日

経緯：平成 28 年 4 月の熊本地震により、特別史跡に指定されている旧熊本国税局敷地東側の石垣は、石垣の下位 1～3 段を残して倒壊し、隣接地（民有地）に石垣石材が流出した。所有者である九州財務局は、地震直後にこれら民有地に影響を及ぼす石材を撤去し、旧熊本国税局敷地内に仮置きするとともに、倒壊した後の石垣背後の法面を削平してシートで覆うなどの応急措置を行なった。

その後、九州財務局は現状の石垣背後の法面を緩やかな安定勾配（35 度）に削平・整形し、併せて、その際に障害となる石垣石材・樹木・電柱を撤去するという工事を計画し、現状変更の許可を得るとともに、史跡範囲外の部分を対象として、平成 28 年 10 月 18 日、熊本市教育委員会に対し文化財保護法第 94 条に基づく埋蔵文化財発掘の通知を提出した。これを受け、熊本市文化振興課・熊本城調査研究センターは平成 28 年 12 月 12 日～平成 29 年 1 月 20 日、確認調査を実施した。結果、江戸時代後期の造成土と、これを掘り込む近代初頭の土坑などの遺構を検出し、工事着工前の本調査が必要であると判断した。この成果は、本項（23）を参照されたい。

この結果をもとに九州財務局と熊本市は協議を行ない、法面の角度は原則、現状のままとし、応急措置の際に削平していなかった法面の南北端を慣らすとともに、その際に障害となる石垣石材・樹木を撤去するという内容に工事計画を変更した。削平面積を大幅に縮減したものである。これによって事前の本調査は実施せず、工事立会をもって対処することとなった。なお、工事に際しては、測量業者に委託し、石垣の現況と石材の撤去過程について記録をとっている。

調査は、現状の法面肩にある樹木（クス）伐根の際に土層を確認し、次いで、削平する法面の南北両端部分について土層を確認するとともに、移動・撤去する石垣石材の状況を確認するものであった。石垣石材については、随時、測量業者による実測を行なっている。なお、史跡指定されている敷地東側の東面する石垣（以下、東面石垣）は、隅石様の築石を境として、その南側と北側とで石材・積み方が異なっている。南側は石材が大きい割石積みであるが、北側は石材が小さく、積み方に規則性は認められないものである。このことから、北側については積み足した可能性が指摘できる。

1、樹木伐根 重機により樹木の周辺 2.5×5.5mの範囲を約 80 cm掘り下げた。土層観察の結果、掘削は全て現代の土層に収まるものであった。この結果は、近接・重複する確認調査 1 トレンチにおける成果と合致している。

1 層：主ににぶい黄褐色土（10YR4/3～10YR3/3）を基質とする。ビニール片など現代の遺物が認めら

れ、歩道に面する南側石垣の背後付近においては凝灰岩砕礫を多く含む。部分的に瓦片が集中し（特に樹木の北側）、そのなかには近代の所産もみられる。

- 2, 法面南側の削平 伐根の際の掘削部分を発生土で簡易に埋め戻した後、主に重機により法面を削平した。法面を精査したところ、基質土は伐根箇所 1 層とほぼ同様に、主ににぶい黄褐色土（10YR4/3～10YR3/3）であり、掘削下端レベルから 50 cm の高さからビニール片が、30 cm の高さから現代住宅の外壁材片（サイディングボード片）が出土した。後者の出土レベルは、今回工事で撤去する東面石垣の築石のレベルに一致するものである（断面 a-a'）。なお、石垣背後の状況を見ると、東面石垣の背後については、部分的に安山岩転礫が集中する箇所もみられるが、大部分はにぶい黄褐色土を基質とし、そこに転礫が少量混ざる程度であった。敷地南側の歩道に面する石垣（以下、南面石垣）の背後については、東面石垣よりは礫が多く、特に掘削下位において安山岩碎石を主体に安山岩転礫・凝灰岩碎石が集中していたが、そのなかにコンクリート片 1 点を確認している。
- 3, 法面南側の削平に伴う石垣石材の撤去 法面よりも上部に露出する石材を撤去したものである。東面石垣については下位 3 段を残して、その上部 1～3 段の石材を撤去した。間詰め石に凝灰岩を用いる部分もあるが、築石は安山岩の割石積で、個々の石材も大きいもので、隙間には砂漆喰が詰めてあった。ただし、撤去した石材のうち、最下段の築石間の控え部分の隙間に詰まった土中から現代住宅の外壁材片 3 片・スレート瓦片が出土している。南面石垣は、法面の傾斜方向に沿っており、石材は階段状に撤去した。南面石垣の築石は、隅石を除いて下位 2 段は安山岩であるが、これより上は凝灰岩で規模も小さい。天端石には玉垣などの石柵の基礎を転用したのもみられる。安山岩築石間の間詰め石の背後からコンクリート片が出土し、また、今回工事で保存される築石の上面奥側からはガラス瓶片（ビール瓶か）が出土している。石積み後、挿し込まれたものではないと判断できる出土位置である。
- 4, 法面北側における石塁の検出 今回調査で注目されるのは東西方向に伸びる石塁を検出したことである。これは、東面石垣によって破壊され、東面石垣の背後に埋もれていたものであり、現況からさらに西側の土中に延びている。応急措置で張っていたシートを剥がした時点で一部が露出し、そのため法面の削平は手掘りにて行なった。幅は約 1.6m で、北面では安山岩割石 3 段を、南面では規模の小さい凝灰岩割石 2 段を確認している。最下段の石はやや締りの強い褐色土層（4 層）上面に乗っており、これが根石と判断される。北面は築石の隙間に砂漆喰が詰めてあった。なお、石塁との判断は、石積みの状況に加え、裏込めの土層（2・3 層）が石塁外とは明らかに異なっていることを根拠としている。3 層からは近現代産の所謂筋瓦が出土している。なお、図示した東西方向の見通し・土層図は、斜めに削った断面において行なったものである。土層は以下の通り。
 - 1 層：にぶい黄褐色土（10YR4/3） 石塁上部に被覆する表土。締り弱い。
 - 2 層：凝灰岩碎石が集中する。碎石の隙間には殆ど土が無い。
 - 3 層：褐色土（10YR4/4） 安山岩転礫・凝灰岩碎石を極多く含む。
ただし、石と石が噛み合わない部分が多い。
 - 4 層：褐色土（10YR4/4） 以下は東面石垣背後の土層に一致する。
安山岩転礫・凝灰岩碎石をやや少量含む。締りやや強い。
 - 5 層：安山岩転礫・碎石が集中する。石と石の隙間に褐色土（10YR4/4）が詰まるが締りは弱い。※5 層は石塁には接していないため、また、斜めに削った断面において確認された土層であるため、これが石塁の下部にまで伸びているのか、あるいは石塁の手前までに途切れているのか、今回の立会調査では判断できていない。
- 5, 法面北側の削平と石材の再設置 前述のように法面の削平は手掘りにて行なった。傾斜は南側よりも急角度である。法面削平時、下位においてコンクリートブロック片・ビー玉が出土している。これ

らの出土層位は前記4層と同レベルであるが、4層そのものであるか否か、観察はできていない。

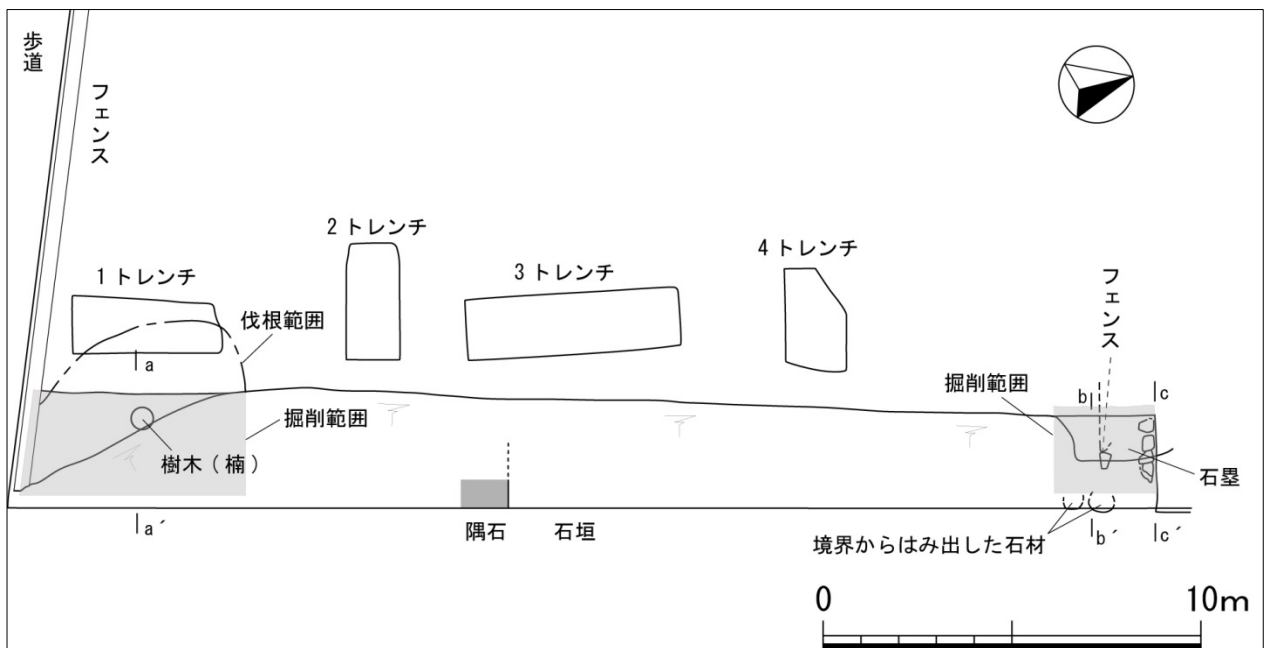
地震により崩壊しなかった築石には、明らかに傾き、隣接する民有地との境界からはみ出したものが2石あった。ともに石垣最下段の安山岩石材である。今回工事では、これらを一旦取り上げ、後、再設置している。その際、石の据わりを良くするため、部分的に背後の法面を削平した。土層を観察したところ、築石の背後は前記5層であり、直下には火砕流堆積土粒（褐灰色 10YR6/1）を基質とした二次堆積層が確認され、その下部に築石は続いていなかった。背後の5層からは、コココーラ瓶形のプラスチック製キーホルダが、下部の火砕流堆積土層からは近世以降の瓦片が出土している。

成果：樹木伐根 掘削は現代の層中に収まるものであった。

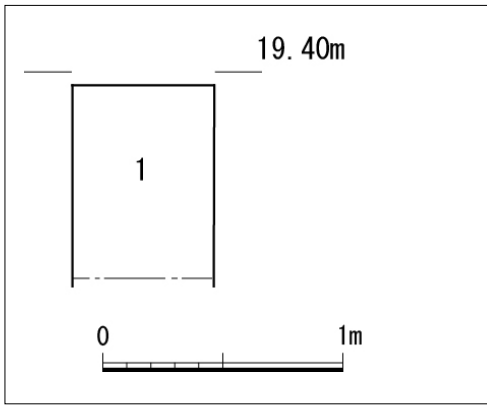
法面南側の削平と石垣石材の撤去 掘削した石垣背後の法面は現代の土層である。史跡指定されている東面石垣は、石材自体は築城期頃のものと考えられるが、少なくとも石材を撤去した部分から上部については現代に積み直したものと判断される。歩道に面する南面石垣は石材自体が新しい中上位の凝灰岩部分は近代以降に積んだもの、下位の安山岩石材についても近代以降に積んだ、あるいは積み直したものと判断される。

法面北側の削平と石塁の検出 今回工事で取上げ、再度設置した東面石垣の最下段の築石は現代に積んだ、あるいは積み直したものと判断される。前述した東面石垣の現況観察結果を証左するものといえる。

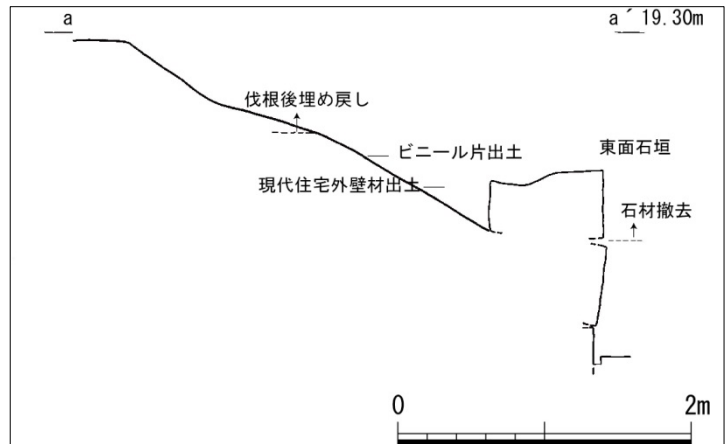
今回検出した東西方向の石塁は、東面石垣によって壊され、背後に埋まっていたものであり、近代以降の構築物と判断される。現況からさらに西側の土中に伸びており、このことは、今回削平した法面が近代以降の堆積土であることを示している。



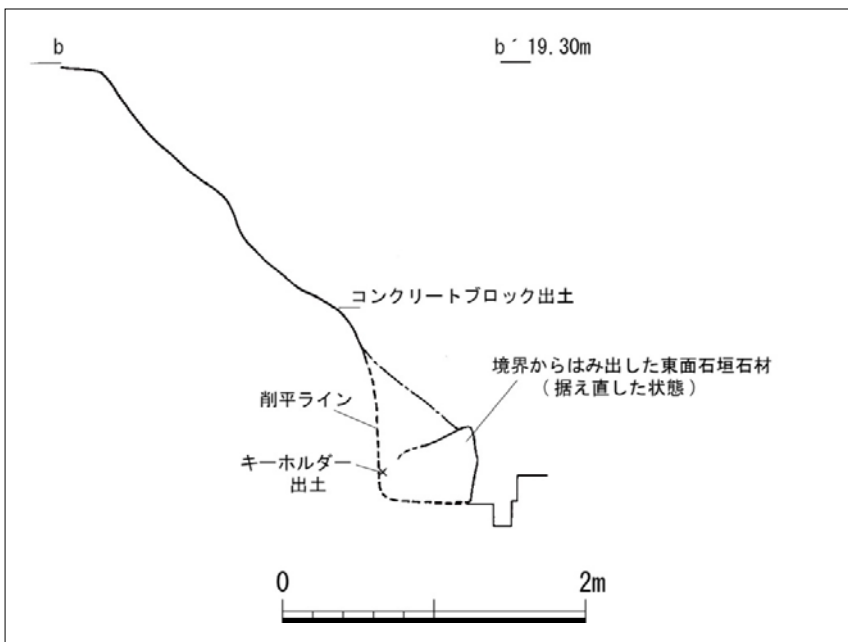
(32) 調査区配置図



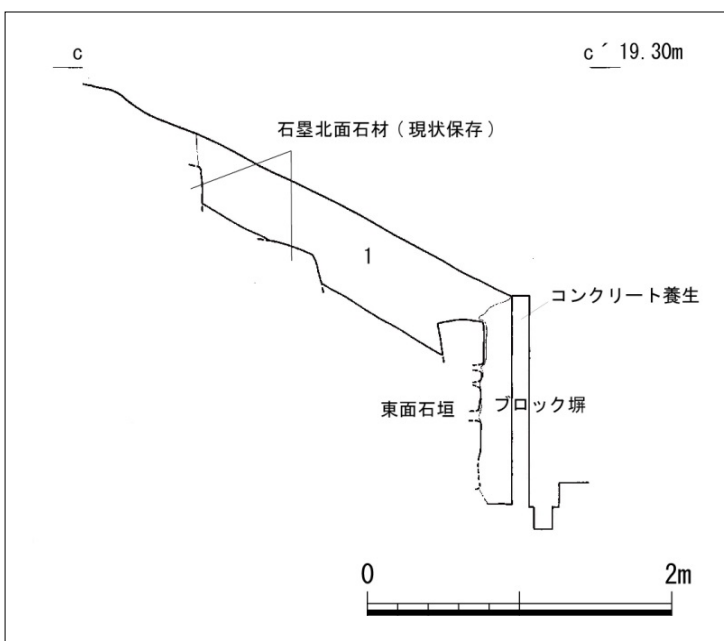
(32) 伐根部分北壁土層柱状図



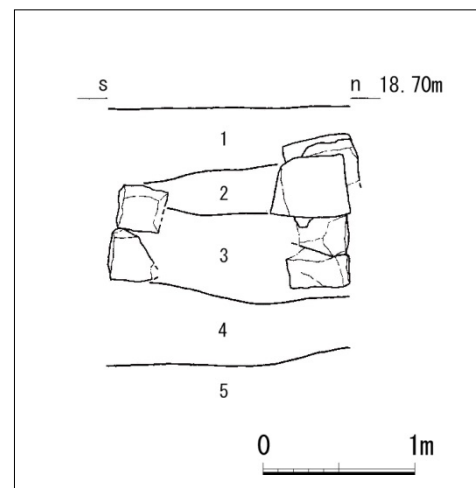
(32) 石垣断面図 (a—a')



(32) 石垣断面図 (b—b')



(32) 石垣断面図 (c—c')



(32) 法面北側 東西石塁断面図



(32) 法面南側
南側石垣の石材撤去状況



(32) 法面北側
東西方向石垣断面



(32) 樹木に伴う掘削部
北側の土層



(32) 法面南側の削平



(32) 法面南側削平に伴う
東面石垣の撤去石材



(32) 法面南側 南面石垣
(テープを貼った石材を撤去)



(32) 法面北側
ブロック塀に保護され
現状保存される東面石垣石材



(32) 法面北側 工事完了状況



(32) 法面北側 工事完了状況

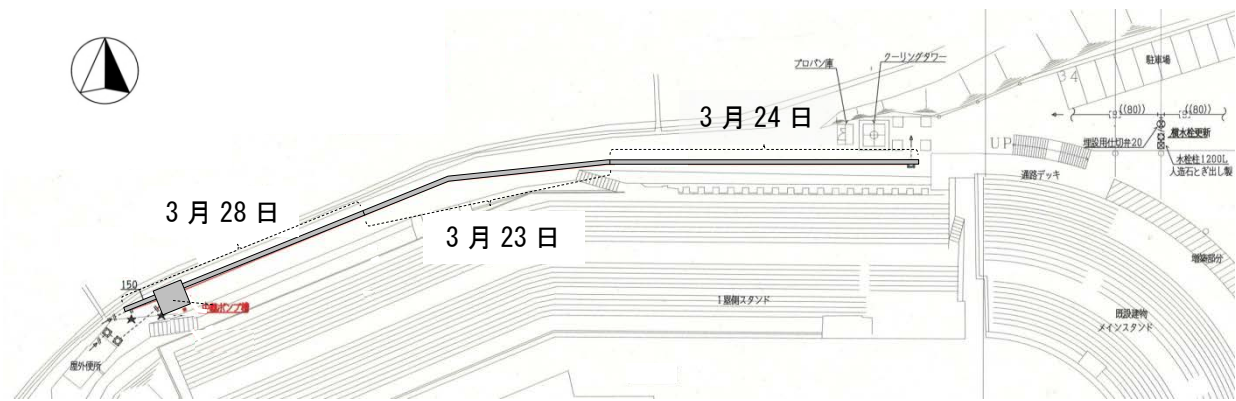
(33) 藤崎台県営野球場配管工事立会

原因：野球場北側外周の配管工事

期日：平成 29 年 3 月 22 日～同月 28 日

方法：今回の工事は、主に既設配管を撤去し、同じ位置に管を設置するものであることから、工事立会をもって対処した。掘削規模は、配管部分は幅 80 cm・深さ 35～45 cm、中継ポンプ槽の設置部分（1 箇所）は幅約 200 cm・深さ 250 cmである。

成果：壁断面・基底の土層観察を行ない、掘削が現代・近現代の層中に収まるものであることを確認した。今回の工事は、埋蔵文化財について支障が無いものと判断される。



(33) 調査地点図



(33) 3月22日掘削風景



(33) 3月22日掘削断面 (西側)



(33) 3月22日掘削断面 (東側)



(33) 3月23日掘削風景



(33) 3月23日掘削断面 (西側)



(33) 3月23日掘削断面 (東側)



(33) 3月24日掘削断面 (西側)



(33) 3月24日掘削断面 (東側)



(33) 3月28日掘削断面
(中継ポンプ槽)

(34) 熊本博物館トラックヤード工事立会

原因：熊本博物館リニューアル工事 室外機トラックヤード基礎部分地盤改良に伴う掘削工事

期日：平成29年3月27日

方法：熊本博物館リニューアル工事のうち、トラックヤード設置箇所については地盤改良工事を実施することとなり、これに伴う掘削に伴って立会調査を行なった。当該区域は昭和50年の熊本博物館建設の際に3m以上の盛土を行なっていることが、現況の地形からみても明らかである。ちなみに、平成24年

10月にトラックヤード予定箇所でボーリング調査を行なった結果、現地表から約6.90mまでは博物館建設工事による客土であった。したがって、今回調査は、盛土の状況を確認することを主眼としたものである。

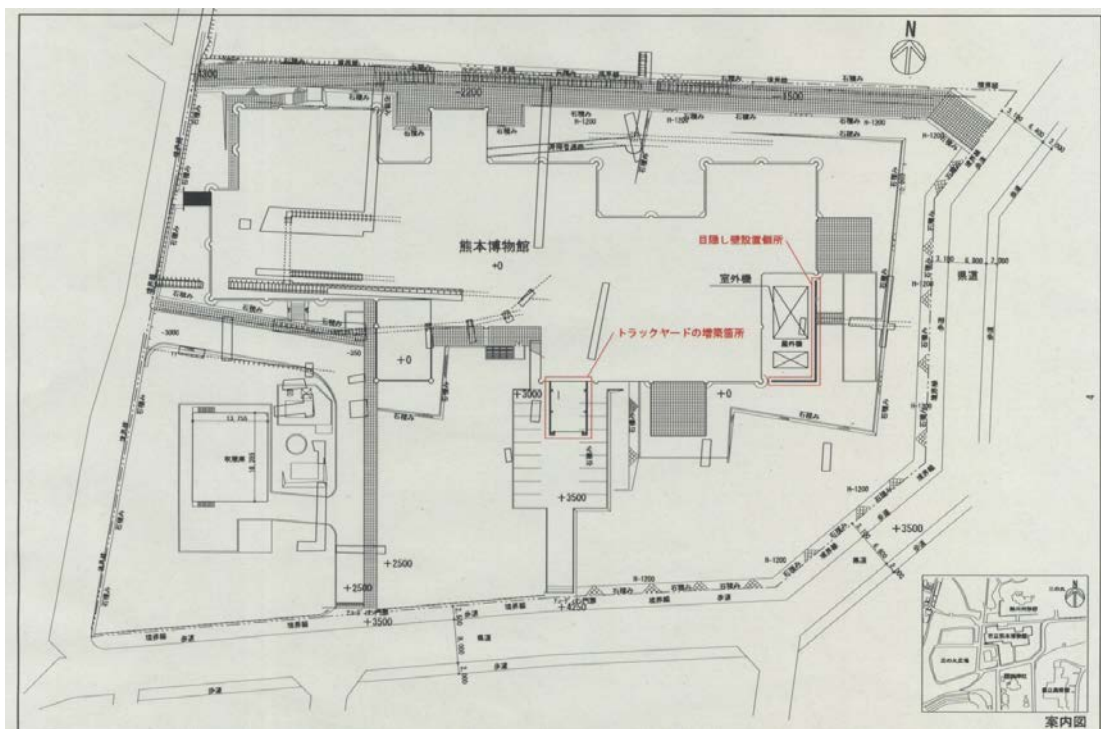
掘削範囲は東西8.6m×南北7.2m、掘削深は現地表面（アスファルト）下1.2m、地盤改良は掘削基底面下1.8m深までの予定である。

成果：土層観察は東壁において行なった。土層注記は下記の通り。ただし、2層は均質性に欠け、部分によって基質土が異なっており、これは盛土ゆえである。

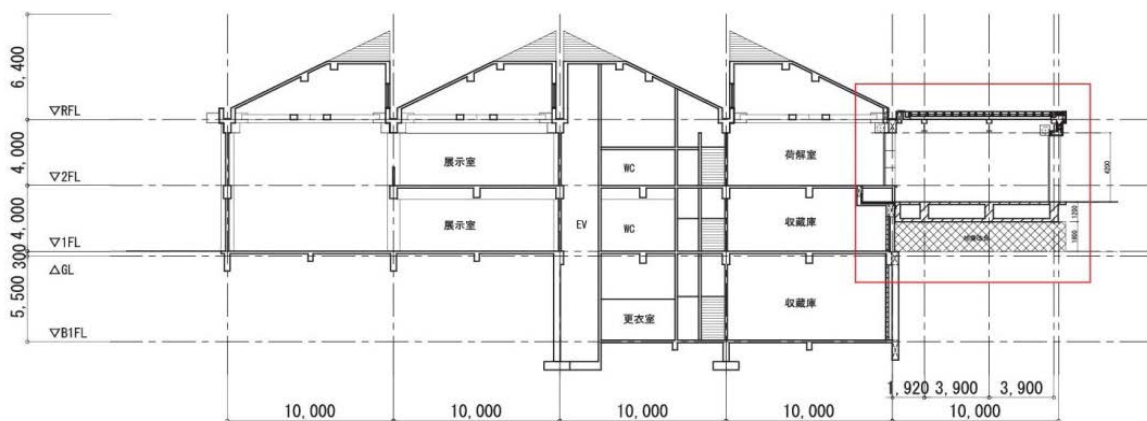
1層：アスファルト・碎石層

2層：褐色土7.5YR4/3～7.5YR3/3 コンクリート塊・ビニールコード片を含む。

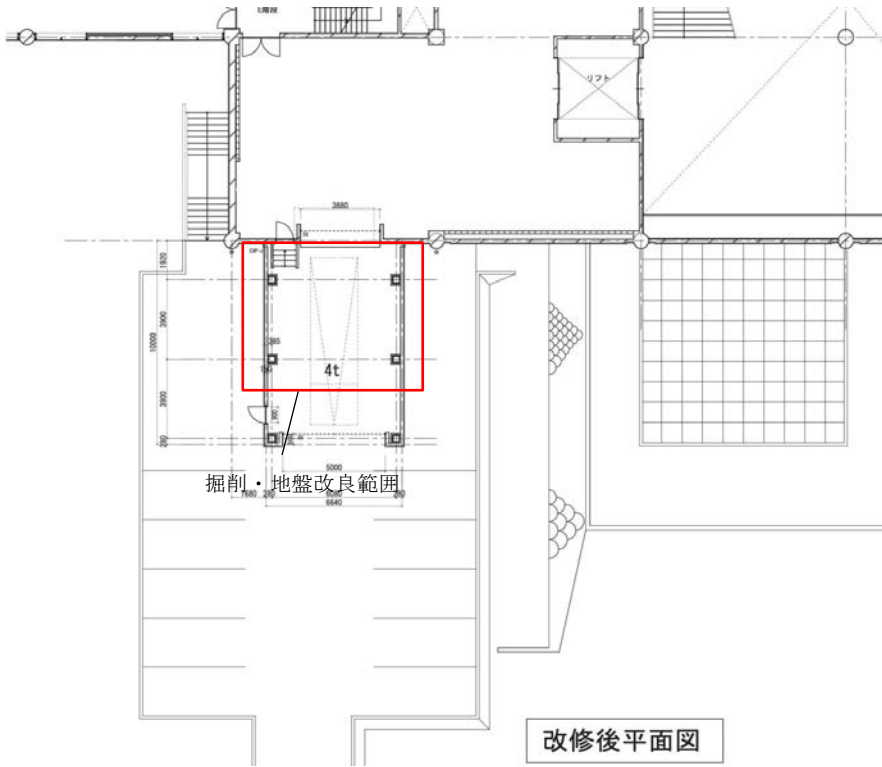
以上、今回の掘削工事は現代の土層に収まるものであり、史跡に影響が無いことを確認した。また、地盤改良工事についても、今回の立会調査の結果に加え、平成24年のボーリング調査の結果から、支障が無いものと判断する。



(34) 調査範囲位置図



(34) 博物館立面図（改修後）



(34) 掘削・地盤改良範囲



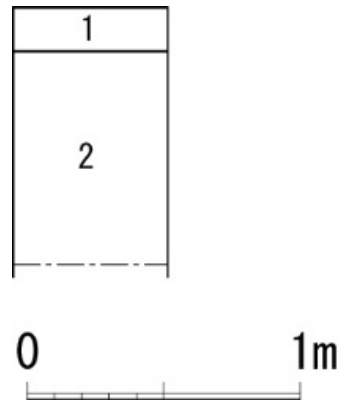
(34) 掘削状況



(34) 掘削基底の状況



(34) 東壁土層写真



(34) 東壁土層柱状図

3. 史料調査

平成 27 年度に引き続き、熊本城・城下町に関する総合的な調査研究と報告書作成の基礎作業として、古文書・絵図・古写真等の史資料の所在を確認し、収集・目録化を進めた。また、各調査先において史資料の現物確認・撮影を実施した。

(1) 主な調査先

平成 28 年 9 月 27～29 日 東京国立博物館、防衛研究所、宮内庁宮内公文書館、東京大学史料編纂所（いずれも東京都）

12 月 19・22 日 熊本大学附属図書館寄託永青文庫（熊本市）

平成 29 年 2 月 9・10 日 熊本県立図書館（熊本市）

3 月 3 日 熊本大学附属図書館寄託永青文庫（熊本市）

*熊本市歴史文書資料室で収集されている永青文庫細川家文書、熊本県立図書館所蔵文書等のマイクロフィルムを随時調査研究に利用している。

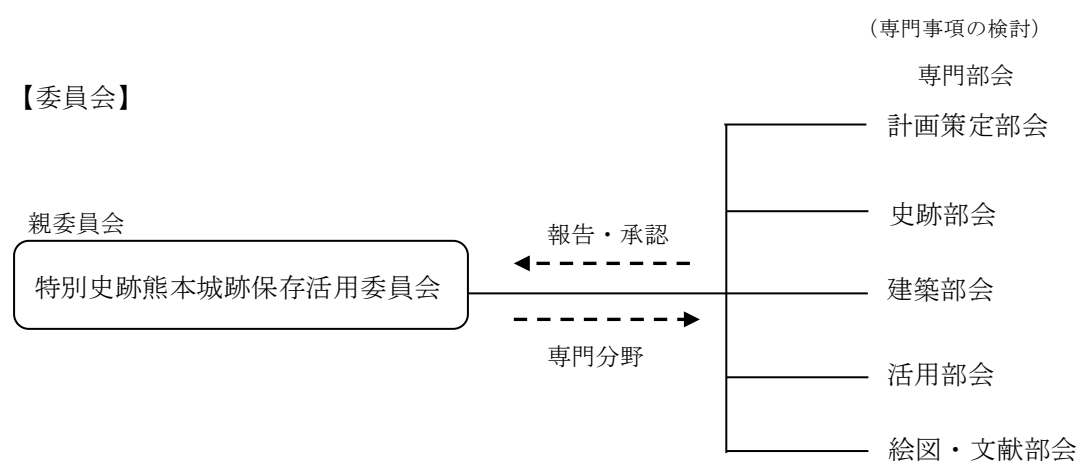
(2) 主な成果

・熊本大学三澤純准教授を通じて宮内庁書陵部より、明治 22 年（1889）に発生した地震の熊本城被害に関する史料を宮内公文書館で所蔵しているとの情報を得た。9 月末に調査を実施し、11 月 1 日に報道発表を行なった。

4. 委員会運営

(1) 委員会の目的

今後の熊本城の保存と活用のあり方について、文化財保護、魅力づくり及び地域の活性化などの観点から、幅広く総合的に検討する。



特別史跡熊本城跡保存活用委員会（H28 年度）組織図

特別史跡熊本城跡保存活用委員会委員名簿（平成 28 年度）

(50 音順、◎委員長、○委員長代理、㊦計画策定部会長、㊧史跡部会長、㊨建築部会長、㊩活用部会長、㊪絵図・文献部会長)

氏名	役職等	分野	専門部会
伊東 龍一	熊本大学大学院自然科学研究科教授	日本建築史	建築／絵図・文献
伊東 麗子	樹木医	植物	計画策定
㊦今村 克彦	熊本県文化財保護審議会委員	考古・史跡	計画策定／史跡
北野 博司	東北芸術工科大学 歴史遺産学科長	考古学	史跡
北原 昭男	熊本県立大学環境共生学部環境学科教授	木質構造	建築
千田 嘉博	奈良大学長	考古学	計画策定
㊧田中 哲雄	日本城郭研究センター名誉館長	石垣・城郭	計画策定／史跡
谷崎 淳一	熊本商工会議所専務理事	地域活性化	活用
富田 紘一	熊本市文化財専門相談員	考古学	活用／絵図・文献
中井 滋		公 募	活用
永田 求	熊本県文化協会常務理事	文化振興	活用
西嶋 公一	熊本経済同友会 熊本の価値創造委員会副委員長	地域活性化	計画策定／活用
西村 邦昭		公 募	建築／活用
◎平井 聖	東京工業大学名誉教授、昭和女子大学特任教授	日本建築史	
松永 和典	熊本市中心商店街等連合協議会副会長	地元地域	活用
㊪松本寿三郎	熊本大学名誉教授	歴史学	活用／絵図・文献
㊩毛利 秀士	一新校区自治協議会会長	地元地域	計画策定／活用
山尾 敏孝	熊本大学大学院自然科学研究科教授	土木遺産学	史跡／活用
㊨吉田 純一	福井工業大学工学部建築土木工学科教授	日本建築史	計画策定／建築
○吉丸 良治	熊本県文化協会会長	文化振興	

※平成 28 年 4 月現在の役職等で記載

(2) 審議内容

a. 委員会

特別史跡熊本城跡保存活用委員会

第 1 回 平成 28 年 10 月 21 日（金）

- 議 題
- ・被害状況報告
 - ・地震後の経過報告
 - ・熊本城復旧の基本的な考え方について
 - ・今後の特別史跡熊本城跡保存活用委員会について

出席者 平井委員長、伊東（龍）委員、伊東（麗）委員、今村委員、北野委員、千田委員、田中委員、谷崎委員、富田委員、中井委員、永田委員、西嶋委員、西村委員、松永委員、松本委員、毛利委員、吉田委員、吉丸委員、熊本県文化課

b. 専門部会

計画策定部会

第1回 平成28年10月21日（金）

議 題 熊本地震による計画策定への影響について

出席者 今村部会長、伊東（麗）委員、千田委員、田中委員、西嶋委員、松本委員、毛利委員、吉田委員、文化庁記念物課、熊本県文化課
（オブザーバー）平井委員長

第2回 平成29年3月2日（木）

議 題 特別史跡熊本城跡保存活用計画の改訂について

出席者 今村部会長、伊東（麗）委員、田中委員、西嶋委員、松本委員、毛利委員、吉田委員、文化庁記念物課、熊本県文化課
（オブザーバー）平井委員長

史跡部会・建築部会（合同開催）

第1回 平成28年10月22日（土）

議 題 [報告事項]

熊本地震後の取り組みについて

- ・今後の特別史跡熊本城跡保存活用委員会について
- ・熊本城復旧の基本的な考え方について
- ・天守閣復旧整備事業スケジュールについて

[審議事項]

天守台石垣の取扱いについて

出席者 田中史跡部会長、吉田建築部会長、伊東（龍）委員、今村委員、北野委員、西村委員、山尾委員、文化庁記念物課、熊本県文化課
（オブザーバー）平井委員長

第2回 平成28年12月11日（日）

議 題 天守閣の災害復旧・整備事業について

出席者 田中史跡部会長、吉田建築部会長、伊東（龍）委員、今村委員、北野委員、北原委員、西村委員、山尾委員、文化庁記念物課、熊本県文化課
（オブザーバー）平井委員長

第3回 平成29年3月1日（水）

議 題 [報告事項]

進捗状況について

- ・熊本城復旧基本方針について
- ・熊本城災害復旧の取組状況について

前回部会について

天守閣復旧整備事業について

- ・地質調査について
- ・石垣変状について

[検討事項]

天守閣復旧整備事業について

- ・石垣修復（解体・復旧）方法について
- ・石垣構造解析について

熊本城復旧基本計画の概要と進め方について

出席者 田中史跡部会長、吉田建築部会長、伊東（龍）委員、今村委員、北野委員、
北原委員、西村委員、山尾委員、文化庁記念物課、熊本県文化課
（オブザーバー）平井委員長、西形達明氏、和田章氏

活用部会

第1回 平成29年1月20日（金）

議 題 ・天守閣内の内装・展示について

出席者 毛利部会長、谷崎委員、富田委員、中井委員、永田委員、西嶋委員、西村委員、
松永委員

絵図・文献部会

第1回 平成29年3月6日（月）

議 題 [報告事項]

- ・前回の絵図・文献部会について
- ・総括報告書資料編の進捗状況について
- ・本年度の調査実施状況について
- ・総括報告書資料編の構成について

[検討事項]

- ・総括報告書資料編の掲載資料について

出席者 松本部会長、伊東（龍）委員、富田委員、熊本県文化課

5. 啓発（刊行図書・論文・報道・講演等）

(1) 熊本城調査研究センター刊行図書

『熊本城跡発掘調査報告書4—熊本博物館増改築工事に伴う三の丸地区の発掘調査—』(平成29年3月)

(2) 論文・新聞連載

美濃口雅朗

「九州の譜代・親藩墓所」『第8回 大名墓研究会』大名墓研究会 2016年10月（共著）

木下 泰葉

「一筆 修理も歴史の一場面」2017年1月10日熊本日日新聞夕刊

「一筆 史料との出会い」2017年1月17日熊本日日新聞夕刊

「一筆 記録と記憶の継承」2017年1月24日熊本日日新聞夕刊

「一筆 武器を自制した民衆」2017年1月31日熊本日日新聞夕刊

「一筆 現物史料を読み取る」2017年2月7日熊本日日新聞夕刊

「一筆 マラソン 復旧感じる機会に」2017年2月14日熊本日日新聞夕刊

「一筆 先人の思い忘れずに」2017年2月21日熊本日日新聞夕刊

「一筆 宇土櫓を国宝に」2017年2月28日熊本日日新聞夕刊

「一筆 城から知る地域の歴史」2017年3月7日熊本日日新聞夕刊

- 「一筆 築城の活気」2017年3月14日熊本日日新聞夕刊
- 「一筆 防災考える『一年目』に」3月21日熊本日日新聞夕刊
- 「一筆 一緒に勉強しませんか」3月28日熊本日日新聞夕刊

(3) 報道

報道公開

- 4月17日 熊本城の被害報告（市役所にて会見）
- 5月11日 危険区域内を初公開
- 5月25日 百間石垣の応急工事・発掘調査着手
- 6月7日 東十八間櫓下石垣（民間駐車場）の崩落石撤去
- 6月16日 飯田丸五階櫓崩落防止工事着手
- 7月12日 宮内橋横石垣から人形の彫刻を発見
- 7月21日 飯田丸五階櫓崩落防止工事進捗状況
- 7月26日 市長会見「熊本城復旧の基本的な考え方」を発表
- 7月28日 定期公開（危険区域内を再公開）
- 8月1日 市道開通（百間石垣応急工事の終了）
- 9月21日 頬当御門周辺の石垣・建築部材撤去工事、建築部材の保管庫を公開
- 10月12日 定期公開（本丸御殿・大天守入口内部の公開）
- 11月1日 明治22年震災記録『震災ニ関スル諸報告』（宮内公文書館所蔵）記者発表
- 11月4日 天守内部映像を公開
- 11月18日 宇土櫓内部映像を公開
- 12月2日 定期公開（加藤神社・頬当門・大イチョウ）
- 1月24日 定期公開（櫓方門・長堀・頬当門・スロープ・七間櫓・天守前広場）
- 3月24日 定期公開（東竹の丸、天守前広場、スロープ、奉行丸、桜公開）

新聞記事見出し（当方で把握している記事のみ）

- 4月15日 「住民恐怖 不安な夜」（熊本日日新聞）
- 4月15日 「熊本地震 9人死亡 860人負傷 避難4万人超 救助続く」（熊本日日新聞夕刊）
- 4月16日 「熊本城 深手負う 石垣、川原…崩落 国重文長堀も」（熊本日日新聞）
- 4月16日 「熊本城東十八間櫓崩れる」（熊本日日新聞夕刊）
- 4月17日 「地域の宝 無残な姿 踏ん張れ『飯田丸』 本妙寺石塔ごろり ジェーンズ邸全壊」（熊本日日新聞）
- 4月18日 「熊本城400年『最大級被害』 熊本地震 重文建物5件被害」（熊本日日新聞）
- 4月20日 「日本財団、93億円を支援 見舞金や融資、城修復に」（熊本日日新聞）
- 4月22日 「『熊本城 元の姿に』 熊本市が支援口座」（熊本日日新聞）
- 4月22日 「熊本地震 国の重要文化財45件被害 熊本城や阿蘇神社 倒壊、崩落、亀裂…」（熊本日日新聞）
- 4月22日 「文化財調査官 きょう熊本入り」（熊本日日新聞）
- 4月23日 「熊本城 国重文13棟破損 櫓や石垣 文化庁が初調査」（熊本日日新聞）
- 4月23日 「熊本市に支援事務所 日本財団の理事長表明」（熊本日日新聞）
- 4月23日 「本震で“面”として崩壊 熊本市文化財専門相談員 富田紘一さんに聞く」（熊本日日新聞）

- 4月25日 「社説 被災文化財の再建 復旧、復興の精神的支えに」(熊本日日新聞)
- 4月25日 「県内観光にも“劇震” 大型連休直前…宿泊キャンセル相次ぐ」(熊本日日新聞)
- 4月29日 「元総合事務所長今村克彦さん『カギは凶面と技術者』 熊本城の石垣修復」
(熊本日日新聞)
- 5月1日 「崩落した石垣 観光客ぼう然 被災の熊本城」(熊本日日新聞)
- 5月1日 「読者ひろば 孫は一口城主 一緒に行こう」(熊本日日新聞)
- 5月2日 「『熊本城を必ず元に』 馳文科省 損壊現場へ」(熊本日日新聞)
- 5月2日 「読者ひろば 復興の象徴に熊本城再建へ」(熊本日日新聞)
- 5月4日 「細川護熙さん 被災した熊本城など視察」(熊本日日新聞)
- 5月4日 「読者ひろば 崩壊の熊本城 未来に残そう」(熊本日日新聞)
- 5月8日 「熊本城 櫓や長堀 5カ所全壊 建造物26棟 大半に被害」(熊本日日新聞)
- 5月8日 「地震で損壊 熊本城の櫓2棟 瀬戸際 踏ん張る角石」(熊本日日新聞)
- 5月10日 「国指定文化財 36%が被害 熊本市」(熊本日日新聞)
- 5月10日 「熊本城復旧チーム設置 文科相表明 きょう初会合」(熊本日日新聞)
- 5月11日 「文化財復旧 課題を確認 文化庁が初会合」(熊本日日新聞)
- 5月12日 「石垣崩落、櫓倒壊、地割れ 熊本城レポ」(熊本日日新聞)
- 5月13日 「熊本城復旧へ連携 国、県、熊本市 実務者初会合」(熊本日日新聞)
- 5月13日 「文化財保存 基金創設を イコモス国内委、緊急アピール」(熊本日日新聞)
- 5月13日 「読者ひろば 熊本城の復興 県民の希望に」(熊本日日新聞)
- 5月13日 「読者ひろば 先人の技残る熊本城は誇り」(熊本日日新聞)
- 5月14日 「熊本城修復に6億円寄附 再春館製菓所『復興のシンボルに』」(熊本日日新聞)
- 5月14日 「読者ひろば 被害受けても美しく堂々と」(熊本日日新聞)
- 5月14日 「福島の城は修復に50億円 『崩壊の仕組み解明先決』」(西日本新聞)
- 5月14日 「熊本城の修復に向けて 復元方法の議論、見学者の安全重視で 未来の石工棟梁の育成も」
(西日本新聞)
- 5月15日 「社説 熊本城再建」(熊本日日新聞)
- 5月16日 「立ち入り禁止解除 熊本城櫓方門附近」(熊本日日新聞)
- 5月16日 「想 前例ない事態 前例ない対応で」(熊本日日新聞)
- 5月18日 「熊本地震 連鎖の衝撃 文化財編① 熊本城㊦」(熊本日日新聞)
- 5月19日 「熊本城修復 『手助けを』 小田原市が義援金」(熊本日日新聞)
- 5月20日 「熊本地震 連鎖の衝撃 文化財編② 熊本城㊧ ルポ・小峰城(福島県白河市)」
(熊本日日新聞)
- 5月20日 「読者ひろば 熊本城崩壊も 城下町守って」(熊本日日新聞)
- 5月21日 「熊本城再建支援シール 県みそ醤油組合製作」(熊本日日新聞)
- 5月21日 「読者ひろば 『武者返し』に再生の意味が」(熊本日日新聞)
- 5月22日 「読者ひろば 傷ついた城と心通わせる」(熊本日日新聞)
- 5月23日 「清正の危機 秀吉が支援 被災の加藤神社に寄付 名古屋市の豊国神社」(熊本日日新聞)
- 5月23日 「『修復に役立ちたい』 東京・豊島区長 熊本城を視察」(熊本日日新聞)
- 5月25日 「読者ひろば 『城主手形』を外部委託しては」(熊本日日新聞)
- 5月26日 「熊本城 百間石垣を緊急工事 復旧向け発掘調査着手」(熊本日日新聞)
- 6月1日 「ともに明日へ 復興くまもと 第1回シンポジウム「熊本城はいま」参加者募集」

(熊本日日新聞)

- 6月2日 「名城に復興のともしび ライトアップ再開」(熊本日日新聞)
- 6月2日 「熊本地震 連鎖の衝撃 経済編① 観光客激減 回復に時間も」(熊本日日新聞)
- 6月3日 「読者ひろば ライトアップ再開 すばらしい熊本城」(熊本日日新聞)
- 6月4日 「特別チームで総体的議論を 城郭の専門家が対談 佐賀大宮武正登教授 奈良大千田嘉博教授」(西日本新聞)
- 6月5日 「『お城も早く元気に』 城彩苑湧々座が一部再開」(熊本日日新聞)
- 6月5日 「読者ひろば 熊本城の雄姿 熊本人の気概」(熊本日日新聞)
- 6月6日 「熊本城築城以降何度も被災 熊本市・熊本大が文献調査 修理繰り返し威容維持」(熊本日日新聞)
- 6月6日 「熊本城 危なくて本丸に居れない… 藩主忠利 地震恐れる」(熊本日日新聞)
- 6月6日 「熊本城修復 公開を提案 有識者会議座長 防災教育重要性を指摘」(読売新聞)
- 6月7日 「熊本城 石垣復旧 350億円 3割で積み直し必要」(熊本日日新聞)
- 6月7日 「熊本城 石垣3割積み直す必要」(読売新聞)
- 6月8日 「熊本城 崩壊の石垣 撤去本格化」(読売新聞)
- 6月8日 「熊本城 崩落石垣撤去を公開 復旧へ まず1歩」(熊本日日新聞)
- 6月8日 「加藤神社通行規制一部解除 熊本城内、きょうから」(読売新聞)
- 6月8日 「熊本の被害にどう学ぶ 文化財と地震」(中国新聞)
- 6月9日 「新生面」(熊本日日新聞)
- 6月10日 「天守閣 3年以内に再建 熊本城、県・市が方針」(日本経済新聞)
- 6月10日 「熊本城 19年までに『再生を』 義家・文科副大臣ら視察」(熊本日日新聞)
- 6月10日 「読者ひろば 熊本城写真集『地震後版』作ったら」(熊本日日新聞)
- 6月11日 「熊本市議会は190億円を可決 定例会、1日で閉会」(読売新聞)
- 6月11日 「熊本城 被災と復興見に来て 『案内人の会』活動再開」(熊本日日新聞)
- 6月11日 「読者ひろば 熊本城の復興姿は希望の光」(熊本日日新聞)
- 6月12日 「石垣覆う“石垣”？ 熊本城内の道路 土のうで崩落防止」(熊本日日新聞)
- 6月12日 「台湾2市長 被災地視察 熊本市に募金など6600万円寄付」(読売新聞)
- 6月14日 「読者ひろば ライトアップ 元気出てくる」(熊本日日新聞)
- 6月15日 「読者ひろば 熊本城の再建 本物の木造で」(熊本日日新聞)
- 6月15日 「読者ひろば 一口登城制度 お城を守ろう」(熊本日日新聞)
- 6月16日 「熊本城入場 今夏にも 再建過程 一部を公開へ」(日本経済新聞)
- 6月17日 「修復・保全へ被災調査急務 文化財編」(熊本日日新聞)
- 6月17日 「熊本市文化財保護委員会 被災状況を報告 熊本城視察」(熊本日日新聞)
- 6月17日 「飯田丸崩落防げ 『1本足』緊急工事」(熊本日日新聞)
- 6月17日 「倒壊危機の櫓守れ 熊本城・飯田丸 緊急工事進む」(読売新聞)
- 6月18日 「復旧費に210億円 熊本城天守閣・飯田丸・本丸御殿」(熊本日日新聞)
- 6月18日 「被害文化財 雨から守れ 大型テントやシートで覆う 官民協力 再建へ 部材の腐食防止」(熊本日日新聞)
- 6月18日 「崩落 過去の修復影響か 熊本城復旧に寄せて 伝統的石垣 再現を」(読売新聞)
- 6月20日 「復旧信じて 熊本城シンポに300人」(熊本日日新聞)
- 6月21日 「熊本城 災難続く 石垣崩落 雨で拡大」(熊本日日新聞)

- 6月21日 「読者ひろば 熊本城の修復 観光客に公開」(熊本日日新聞)
- 6月22日 「いろはにはへと新聞部の時事わーど 熊本城 被災で全体修復に数十年」(読売新聞)
- 6月23日 「熊本城 石の特徴捉えて 熊日情文懇6月例会 熊本大名誉教授の北野氏講演」
(熊本日日新聞)
- 6月23日 「熊本城の雄姿 東京で 再現映像特別上映 鑑賞料 復旧支援に寄付」(熊本日日新聞)
- 6月25日 「読者ひろば 解体ではなく地震の記憶に」(熊本日日新聞)
- 6月26日 「観光客を被災地に 旅行会社向け研修 日本航空」(熊本日日新聞)
- 6月27日 「第1回シンポジウム『熊本城はいま』 石垣、櫓…完全修復へ長い道のり」
(熊本日日新聞)
- 6月28日 「文化財 修復費補助 引き上げを 国・県指定2割被災 県審議会が緊急提言」
(熊本日日新聞)
- 6月28日 「熊本城『本物』の復元を 熊日情報文化懇話会 6月例会詳報」(熊本日日新聞)
- 6月28日 「経済5団体 復興へ提言 27項目 県・熊本市に提出」(熊本日日新聞)
- 6月29日 「政府 熊本地震復旧に210億円 累計1822億円 南阿蘇鉄道、熊本城」(熊本日日新聞)
- 6月29日 「熊本城の修復 来月中に工程」(熊本日日新聞)
- 6月29日 「読者ひろば 熊本城に思う県民の強さ」(熊本日日新聞)
- 6月29日 「国・県文化財150件被災 緊急工事費29億4000万円」(読売新聞)
- 6月29日 「熊本城修復に3億6000千万 復旧予備費 210億使途決まる」(読売新聞)
- 6月30日 「熊本城ラブ 芸人語る 東京・新宿で復興支援 チャリティトーク」(熊本日日新聞)
- 6月30日 「熊本城の雄姿 被災前を記録 本紙連載写真集を復刊」(熊本日日新聞)
- 6月30日 「経済5団体が緊急提言 県や熊本市に 熊本城再建や空港整備」(読売新聞)
- 6月30日 「建築季評 象徴性 どこに求めるか」(読売新聞)
- 6月30日 「あすを探る財政・経済 小田原市で思う『税とは共感』」(朝日新聞)
- 7月1日 「熊本城のいま1 石の『顔つき』 丹念に調査」(熊本日日新聞)
- 7月1日 「熊本城 見た目以上の被害 史跡整備の方法 見直すきっかけに」(朝日新聞)
- 7月4日 「熊本城 今こそ見に来て 『案内人の会』活動再開2週間」(熊本日日新聞)
- 7月4日 「取材前線 焦点を合わせる力」(熊本日日新聞)
- 7月5日 「熊本城天守閣 夏草生い茂る」(熊本日日新聞)
- 7月6日 「城郭史、石垣から魅力再発見 チャリティシンポジウム『今だからこそ、熊本城を考える』
(大阪大谷大)」(熊本日日新聞)
- 7月6日 「熊本城ボランティアガイド再開『復興の過程見てほしい』」(読売新聞)
- 7月8日 「クルーズ船寄港 熊本城に久々の活気 中国人観光客次々と」(熊本日日新聞)
- 7月8日 「熊本城のいま2 江戸の名残 陸軍造成で消失？」(熊本日日新聞)
- 7月9日 「文化財修復へ著名人一丸 細川元首相、山下泰裕さんら 19日に支援委発足」
(熊本日日新聞)
- 7月12日 「熊本城『ロマンある復興を』 細川元首相 知事に要望」(熊本日日新聞)
- 7月12日 「読者ひろば 熊本城の手術 早期成功祈る」(熊本日日新聞)
- 7月13日 「お城に久々 児童の列 熊本地震後 初の修学旅行」(熊本日日新聞)
- 7月13日 「青鉛筆」(朝日新聞)
- 7月13日 「熊本城 石垣に『こけし』？ 線画発見 地鎮や祈念の意味か」(熊本日日新聞)
- 7月13日 「熊本城石垣 400年前の人物画 崩落で発見、建設時の安全祈る？」(西日本新聞)

- 7月13日 「熊本城の石垣 人形の線刻確認 築城時の安全祈願か」(毎日新聞)
- 7月15日 「熊本城のいま3 時代で異なる石と積み方」(熊本日日新聞)
- 7月16日 「熊本城 史上最大級の被害 石垣10万個近く積み直し」(熊本日日新聞)
- 7月16日 「この人に聞く熊本地震 2019年までに天守閣修復を」(熊本日日新聞)
- 7月16日 「震災3ヶ月の熊本城 文化財としての価値とは 建築技術伝える歴史的建造物」(西日本新聞)
- 7月18日 「被災、復興の歩み伝えます 英語ガイド熊本城で研修会」(熊本日日新聞)
- 7月18日 「伸びる鉄の腕 櫓抱えるぞ! 石垣崩壊 熊本城飯田丸」(熊本日日新聞)
- 7月18日 「熊本城の今 見に来て 逆境 観光に活用」(読売新聞)
- 7月20日 「被災文化財修復『オール熊本で』 支援委が発会式」(熊本日日新聞)
- 7月22日 「飯田丸へ『鉄の腕』 熊本城 倒壊防止工事進む」(熊本日日新聞)
- 7月22日 「熊本城の櫓守れ 工事を公開」(読売新聞)
- 7月22日 「熊本城のいま4 南大手門支える『鉄骨のトンネル』」(熊本日日新聞)
- 7月22日 「熊本城修復 役立てて 藤園中の生徒校内募金寄付」(熊本日日新聞)
- 7月22日 「読者ひろば 熊本城の復旧の手伝いしたい」(熊本日日新聞)
- 7月22日 「読者ひろば 『本物』の力で復興の牽引を」(熊本日日新聞)
- 7月23日 「早速プレー 若者ら歓声 熊本城 規制内立ち入り騒ぎも」(熊本日日新聞)
- 7月23日 「3ヶ月で10億円突破 熊本城災害復旧支援金」(熊本日日新聞)
- 7月23日 「熊本城の雄姿 つまようじで 『復興を応援する作品に』兵庫の高校生が描画」(熊本日日新聞)
- 7月25日 「編集手帳」(読売新聞)
- 7月26日 「熊本城 飯田丸 五階櫓囲う『鉄の腕』」(熊本日日新聞)
- 7月26日 「Tシャツ作り販売 熊本城の再建支援 清正ゆかり 広島6社」(熊本日日新聞)
- 7月26日 「熊本城櫓耐えて 鉄骨架台で囲む工事進む」(読売新聞)
- 7月27日 「熊本城 復旧計画17年度中に策定 熊本市 天守閣は19年までに」(読売新聞)
- 7月27日 「熊本城『20年で復旧』 天守閣 3年後に再建 大西市長意向」(熊本日日新聞)
- 7月27日 「読者ひろば 熊本城石垣 観音菩薩に感動」(熊本日日新聞)
- 7月29日 「熊本城のいま5 『復旧は県民の励み』思い熱く」(熊本日日新聞)
- 7月29日 「熊本城北側の市道 来月から通行可能」(熊本日日新聞)
- 7月29日 「崩れた石垣いまだ… 熊本城公開」(熊本日日新聞)
- 7月29日 「雑草茂る武者返し 熊本城無人の夏」(熊本日日新聞)
- 7月29日 「天守下部 依然むき出し 熊本城郭 報道陣公開」(読売新聞)
- 7月30日 「熊本城の今 知って 城彩苑湧々座 石材や瓦を展示」(熊本日日新聞)
- 7月30日 「読者ひろば 熊本城の瓦 願い事書いては」(熊本日日新聞)
- 7月31日 「熊本城 清正の知恵光る」(中日新聞)
- 8月5日 「熊本城マラソン2017 城内道路復旧後押し 2月19日開催決定」(熊本日日新聞)
- 8月5日 「熊本城マラソン 2月19日 実行委決定 地震でコース変更も」(熊本日日新聞)
- 8月5日 「熊本城のいま6 『3D』測量で櫓の現状把握」(熊本日日新聞)
- 8月7日 「『湧々座』定期公演が再開 中央区城彩苑」(熊本日日新聞)
- 8月11日 「社説 熊本城マラソン 全国に元気な姿見せよう」(熊本日日新聞)
- 8月12日 「猛暑に“緑の楽園” 監物台樹木園『山の日』に再開」(熊本日日新聞)

- 8月12日 「熊本城のいま 7 市民の道ようやく『開通』」(熊本日日新聞)
- 8月16日 「天守閣復旧 民間提案で 熊本市 公募手続き開始」(熊本日日新聞)
- 8月16日 「復旧の歩み 熊本城と共に 日本料理店『城見櫓』『恩返し』…展望客室を開放」(熊本日日新聞)
- 8月19日 「熊本城のいま 8 『幕末期の姿』夢見て」(熊本日日新聞)
- 8月23日 「熊本城復旧 7億7700万円 市補正予算案 天守閣の耐震診断実施へ」(読売新聞)
- 8月23日 「石橋修復の技術磨こう 県内外19人 『種山石工』講座始まる」(熊本日日新聞)
- 8月23日 「再生への道筋 点検・県復興プラン⑬ 文化財復旧 国の全額補助制度要望」(熊本日日新聞)
- 8月25日 「熊本城復旧で連携強化 県と熊本市 実務トップ会議設置へ」(熊本日日新聞)
- 8月25日 「熊本城復旧へトップ連携 知事と市長が協議、合意」(読売新聞)
- 8月26日 「熊本城のいま 9 割れ瓦に寄付の墨書」(熊本日日新聞)
- 8月28日 「熊本城の大太鼓 元気奏でる 必由館高和太鼓部 東京で披露」(熊本日日新聞)
- 8月28日 「熊本市 二の丸広場に仮設ステージ 復興イベントに使用 18年2月末まで 遺構への影響懸念も」(熊本日日新聞)
- 8月29日 「復興カフェトーク熱く『空き家で交流』『城の瓦を販売』」(熊本日日新聞)
- 8月31日 「二の丸仮設ステージ費 肥後銀が全額負担」(熊本日日新聞)
- 9月1日 「熊本城復興 Tシャツで応援」(熊本日日新聞)
- 9月2日 「熊本城のいま 10 3次元データを修復に活用」(熊本日日新聞)
- 9月2日 「奉行丸の塀が倒壊 熊本城」(熊本日日新聞)
- 9月2日 「城を美しく 青から白へ シート張替え」(熊本日日新聞)
- 9月3日 「史跡 保存か活用か 二の丸広場に仮設ステージ 異例の1年半設置『市民交え議論を』」(熊本日日新聞)
- 9月3日 「熊本城 補助率引き上げ 文化庁 災害復旧 国指定を対象、5ポイント」(熊本日日新聞)
- 9月3日 「読者ひろば 熊本城の石垣迅速に再建を」(熊本日日新聞)
- 9月4日 「2000キロ超え… 熊本城に青森ねぶた」(熊本日日新聞)
- 9月6日 「熊本城復旧で工事状況報告 第4回実務者会合」(熊本日日新聞)
- 9月6日 「読者ひろば 熊本城天守閣木造で復元を」(熊本日日新聞)
- 9月6日 「読者ひろば 熊本城“瓦募金”募っては」(熊本日日新聞)
- 9月7日 「復旧支援へ熊本城視察 県文化財保護協会の役員ら」(熊本日日新聞)
- 9月7日 「読者ひろば 今の熊本城も美しいと思う」(熊本日日新聞)
- 9月9日 「熊本城のいま 11 部材一つずつ地道に回収」(熊本日日新聞)
- 9月10日 「デスク日記 熊本城の宿命的課題」(熊本日日新聞)
- 9月10日 「熊本城の『落ちなかった瓦』いかが 復興へ提供検討」(朝日新聞)
- 9月11日 「熊本城『復興城主』募る 1万以上の寄付者 年内にも開始」(熊本日日新聞)
- 9月13日 「読者ひろば 熊本城の一部を震災遺構に」(熊本日日新聞)
- 9月14日 「新生面」(熊本日日新聞)
- 9月15日 「熊本城復旧費634億円 熊本市試算 石垣3割積み直し」(熊本日日新聞)
- 9月15日 「支援へ 県民の会発足 23日 熊本市でシンポ」(熊本日日新聞)
- 9月16日 「熊本城のいま 12 戦後、櫓に住む『浮浪者』」(熊本日日新聞)
- 9月17日 「集客施設 続く休業 本震から5ヶ月」(熊本日日新聞)

- 9月19日 「こもれび 城の石垣から現れた観音菩薩」(神社新報)
- 9月20日 「読者ひろば 熊本城の石垣創造的復興を」(熊本日日新聞)
- 9月21日 「写り込む熊本近代史の『空気』 明治の熊本城 威容誇る」(熊本日日新聞)
- 9月22日 「読者ひろば 熊本城中心に地震から復興」(熊本日日新聞)
- 9月22日 「文化財復旧に5億円寄付へ 鶴屋百貨店」(熊本日日新聞)
- 9月22日 「部材、石垣一つ一つ回収 熊本城 頬当御門周辺」(熊本日日新聞)
- 9月23日 「熊本城のいま13 石工が思い込めた『人形』」(熊本日日新聞)
- 9月23日 「熊本城シンボルに観光客呼び込もう 熊本市 新たなツアー企画」(熊本日日新聞)
- 9月24日 「読者ひろば 熊本城再建で石垣博物館を」(熊本日日新聞)
- 9月24日 「熊本城復興願い市民語り合う 熊本市『みんなの会』発足シンポ」(熊本日日新聞)
- 9月27日 「熊本地震 文化財被害946億円 県内推計 国指定3割超被災」(熊本日日新聞)
- 10月1日 「熊本城のいま14 2本のスロープで天守へ」(熊本日日新聞)
- 10月1日 「熊本城のカレンダー販売 被災後写真も添える 売り上げ1割寄付」(熊本日日新聞)
- 10月1日 「『湧々座』全館オープン 熊本城の被災状況紹介」(熊本日日新聞)
- 10月3日 「想 足元の歴史を鏡に考える」(熊本日日新聞)
- 10月7日 「熊本城のいま15 『負けんバイ』ガイド熱く」(熊本日日新聞)
- 10月10日 「熊本城の復元『見守りたい』 一新小児童ら見学ツアー」(熊本日日新聞)
- 10月12日 「文化庁『熊本城支援室』を設置 復旧へ連携体制強化」(熊本日日新聞)
- 10月12日 「草茂る天守 今も傷深く 熊本城近影 ドローンで撮影」(熊本日日新聞)
- 10月12日 「熊本城天守閣に雑草 ドローン撮影 瓦の落ちた隙間に」(日本経済新聞)
- 10月12日 「熊本城復旧へ支援室 文化庁が新たに設置 相談や要請 窓口を一元化」(西日本新聞)
- 10月12日 「古今をちこち 熊本城修復 石垣に耐震性」(読売新聞)
- 10月13日 「本丸御殿 構造影響なし 熊本城 地震後初公開 壁などひび割れ」(熊本日日新聞)
- 10月13日 「本丸付近の三角点 北東へ50センチ移動」(熊本日日新聞)
- 10月13日 「本丸御殿も一部傾斜」(熊本日日新聞)
- 10月13日 「熊本城本丸御殿 激震耐えた」(読売新聞)
- 10月13日 「本丸御殿沈む畳 熊本城内報道公開 天守内部 石垣崩壊」(西日本新聞)
- 10月13日 「熊本城復旧 道険しく 天守閣出口 石垣崩落、立ち入り危険」(読売新聞)
- 10月13日 「9月22日『熊本城の日』に 支援団体が制定呼びかけ」(読売新聞)
- 10月14日 「デスク日記 熊本城に母を見た」(熊本日日新聞)
- 10月14日 「新生面」(熊本日日新聞)
- 10月14日 「熊本城のいま16 日本の技術力示す機会に」(熊本日日新聞)
- 10月15日 「熊本市 復興計画を決定 県内初 『熊本城復旧』など重点 あらゆる手段で支援 大西市長」(熊本日日新聞)
- 10月16日 「読者ひろば 阿蘇と熊本城 全国の人見て」(熊本日日新聞)
- 10月19日 「小さな歩み 着実に 熊本地震半年 空撮」(熊本日日新聞)
- 10月20日 「読者ひろば 傷を負う熊本城 魅力増した」(熊本日日新聞)
- 10月21日 「読者ひろば 熊本城の復旧 全国の名人で」(熊本日日新聞)
- 10月21日 「熊本城のいま17 被害少しずつ明らかに」(熊本日日新聞)
- 10月22日 「熊本城管理計画 来年度改定へ 保存活用委 地震後初会合」(熊本日日新聞)
- 10月24日 「熊本城復旧『市民参加を』 熊本市で講演会 歴史や被災状況説明」(熊本日日新聞)

- 10月26日 「集まれ『復興城主』 来月受付開始 熊本市」(熊本日日新聞)
- 10月26日 「大天守にエレベーターを 復旧整備 大林組が提案」(熊本日日新聞)
- 10月27日 「読者ひろば 熊本城エレベーター設置に賛成」(熊本日日新聞)
- 10月28日 「熊本城のいま 18 地元企業「つかみ機」試行錯誤」(熊本日日新聞)
- 10月30日 「復興祈念 ライブ熱狂 二の丸広場に2万人 浜崎貴司さんら競演」(熊本日日新聞)
- 10月30日 「くまにち論壇 熊本城二の丸の活用」(熊本日日新聞)
- 11月1日 「熊本城『復興城主』 スクリーンに名前です きょうから受け付け」(熊本日日新聞)
- 11月1日 「熊本『復興城主』 求む 漫画『ワンピース』とコラボ」(日本経済新聞)
- 11月1日 「シンボル再生 ここから 阿蘇神社 工事の祈願祭 熊本城 寄付で『城主』
(西日本新聞)
- 11月1日 「デジタル芳名板を公開 復興城主特典 城彩苑内、きょうから」(読売新聞)
- 11月2日 「熊本城 明治の被災 克明に 宮内庁所蔵『震災ニ関スル諸報告』 石垣7割今回と重複」
(熊本日日新聞)
- 11月2日 「1889の熊本地震 被害8割重複 市、修復への参考に」(毎日新聞)
- 11月2日 「明治の熊本城被災 詳細に 4月の地震 復旧へ活用」(日経新聞)
- 11月2日 「熊本城築城 清正の妙 地震被害 明治と重複」(西日本新聞)
- 11月2日 「明治地震被害の8割重複 市『修復手法の参考に』」(読売新聞)
- 11月3日 「読者ひろば 熊本城振興は54万人城主で」(熊本日日新聞)
- 11月4日 「熊本城のいま 19 石垣崩落 さまざまな誘因」(熊本日日新聞)
- 11月5日 「デスク日記 文化財の力」(熊本日日新聞)
- 11月5日 「熊本城応援 個人向け国債 肥後銀行が販売 復元基金に寄付」(熊本日日新聞)
- 11月5日 「天守閣内部も石垣崩落 熊本城 動画公開」(熊本日日新聞)
- 11月5日 「天守閣内部の動画公開 熊本城」(西日本新聞)
- 11月5日 「熊本城大天守鉄骨むき出し 映像公開」(読売新聞)
- 11月8日 「復興城主 名乗り続々 熊本城 受け付け1週間 6450万円」(熊本日日新聞)
- 11月8日 「一筆 熊本城の謎解明へ」(熊本日日新聞夕刊)
- 11月9日 「熊本城復旧へ意見交換 熊本市方針案で有識者懇」(熊本日日新聞)
- 11月10日 「熊本城復旧方針の取りまとめに協力 国、県など協力」(熊本日日新聞)
- 11月10日 「熊本城復興城主 ネットでも受け付けへ 申し込み殺到で熊本市長」(熊本日日新聞)
- 11月11日 「熊本城のいま 20 エレベーター案で議論も」(熊本日日新聞)
- 11月11日 「天守閣に『がんばれ熊本』 “レゴのプロ” 三井さん作品 城彩苑に展示」
(熊本日日新聞)
- 11月11日 「二の丸広場の活用 広い視点で」(熊本日日新聞)
- 11月13日 「崩落石垣の点と線 修復パズル 画像ソフト活用」(日経新聞)
- 11月14日 「遺構に影響 懸念やまず 被災の熊本城 イベント続々」(熊本日日新聞)
- 11月15日 「取材前線 『うるさ型』はいらないか」(熊本日日新聞)
- 11月15日 「『復興城主』1万人突破 熊本城 寄付金1億6千万円」(熊本日日新聞)
- 11月15日 「熊本城復旧支援へ 株主数に応じ寄付 平田機工」(熊本日日新聞)
- 11月16日 「読者ひろば 『復興城主』 県外向けの特典を」(熊本日日新聞)
- 11月16日 「読者ひろば 二の丸広場の活用広い視点で」(熊本日日新聞)
- 11月17日 「読者ひろば 復興城主一口1万円以下も」(熊本日日新聞)

- 11月18日 「復旧工事の担い手に 高校生向け 建設業ガイダンス」(熊本日日新聞)
- 11月18日 「熊本城のいま 21 『文化財』の認識あった陸軍」(熊本日日新聞)
- 11月19日 「宇土櫓 壁剥げ、床傾く 大規模修理の可能性も」(熊本日日新聞)
- 11月19日 「文化財復旧へ意見交換 専門家ら県庁で大会」(熊本日日新聞)
- 11月20日 「被災の熊本城 癒す紅葉」(熊本日日新聞)
- 11月21日 「阿蘇～熊本市 80 キロウォーク 熊本城復興呼びかけ」(熊本日日新聞)
- 11月23日 「熊本城復旧 専門職派遣を 初の実務者会議 熊本市が県に要望」(熊本日日新聞)
- 11月23日 「被災地を視察、意見交換 熊本市 有識者会議第2回会合」(熊本日日新聞)
- 11月23日 「読者ひろば 復興城主制度『策士』感じる」(熊本日日新聞)
- 11月24日 「熊本城の石垣 顔認証で復元 崩落前写真から位置特定」(西日本新聞)
- 11月24日 「ドキュメント熊本地震 熊本城 思い出つむぎ 再興へ 市民の心一つ」(西日本新聞)
- 11月24日 「お城と復興1 あるはずの場所がない」(西日本新聞)
- 11月24日 「ブラジル便り 被災の故郷歩き 心痛める」(熊本日日新聞)
- 11月25日 「お城と復興2 一本足支える技術者魂」(西日本新聞)
- 11月25日 「読者ひろば 熊本城の復興日々眺めたい」(熊本日日新聞)
- 11月25日 「読者ひろば 二の丸広場『避難所』では」(熊本日日新聞)
- 11月25日 「紅葉、夜景彩る 旧細川刑部邸 期間限定ライトアップ」(熊本日日新聞)
- 11月25日 「熊本城のいま 22 透明性求められる複数委員会」(熊本日日新聞)
- 11月26日 「お城と復興3 先人に学びつなぐ未来」(西日本新聞)
- 11月26日 「石垣『元の位置』 ソフトで推定 上瀧助教(熊本大大学院) 開発 熊本城修復に活用へ」(熊本日日新聞)
- 11月27日 「お城と復興4 420年経て清正へ恩返し」(西日本新聞)
- 11月27日 「涙誘う名曲 復興エール スターダストレビュー ライブに5000人 二の丸広場」(熊本日日新聞)
- 11月28日 「熊本城の被害生々しく 『みんなの会』本震直後の写真集」(熊本日日新聞)
- 11月28日 「お城と復興5 前向きに『見せる復旧』」(西日本新聞)
- 11月28日 「いざ熊本城、震災修復支援 全国に『復興城主』の輪」(日経新聞)
- 11月29日 「熊本城の復旧 方針案を議論 国、県など」(熊本日日新聞)
- 11月29日 「お城と復興6 20年後に『またここで』」(西日本新聞)
- 12月1日 「熊本市が小峰城視察 被災の熊本城 修復工事の参考に」(読売新聞)
- 12月2日 「大賞 神ってる 復興城主 特別賞 今年の流行語」(熊本日日新聞)
- 12月2日 「熊本城のいま 23 石垣復旧 画像検索で効率化」(熊本日日新聞)
- 12月3日 「静寂…黄金の大銀杏 熊本城天守前」(熊本日日新聞)
- 12月5日 「射程 『復興城主』に託す思い」(熊本日日新聞)
- 12月7日 「熊本城天守にエレベーター 市が復旧方針案 バリアフリー促進」(朝日新聞)
- 12月8日 「熊本城天守修復で契約 熊本市長 エレベーターに意欲 『高齢者によい』『違和感』」(熊本日日新聞)
- 12月9日 「熊本城のいま 24 グリ石利用した『ふとんかご』」(熊本日日新聞)
- 12月9日 「天守閣バリアフリー化 基本方針原案 重文建造物を優先 文化財への影響危惧する意見も」(熊本日日新聞)
- 12月10日 「読者ひろば 熊本城にエレベーター反対」(熊本日日新聞)

- 12月11日 「科学の扉 よみがえれ熊本城 石垣 美観と耐震両立探る」(朝日新聞)
- 12月13日 「読者ひろば 熊本城にエレベーター賛成」(熊本日日新聞)
- 12月16日 「熊本城のいま 25 明治の積み直し 市民を意識か」(熊本日日新聞)
- 12月18日 「熊本城 目に焼き付けよ 東京発着ツアー 武将隊が案内 県と熊本市PR企画」
(熊本日日新聞)
- 12月19日 「再興に向け 若手育てたい 傷ついた名城を前に思いを強く」(西日本新聞)
- 12月21日 「熊本城から『紅白』中継 楽しみ」(熊本日日新聞)
- 12月22日 「県美～護国神社 あすから通行可 『野鳥園』横の歩道も」(熊本日日新聞)
- 12月23日 「『ゆず』の歌声 熊本城に響く 無料ライブ」(熊本日日新聞)
- 12月23日 「熊本城のいま 26 天守にエレベーター 賛否」(熊本日日新聞)
- 12月24日 「熊本城の“謎石”も 横浜市でイベント 人為的な線刻 初公開」(熊本日日新聞)
- 12月26日 「熊本城など甚大な被災 『未指定』の復旧も課題に 文化財被災」(熊本日日新聞)
- 12月29日 「国重文『波奈之丸』修復へ 細川家御座船 天守閣“出帆”九博に」(熊本日日新聞)
- 12月29日 「迎春行事 二の丸広場で 城内立ち入り禁止受け 『復興』かわらけ配布も」
(熊本日日新聞)
- 平成29年1月 「記録を参考に石垣の修復を 石に番号 積み直しへ」
(熊本日日新聞 くまもと元氣ばい新聞)
- 1月1日 「熊本城の雄姿 復興元年」(日本経済新聞)
- 1月1日 「被災地元気に 九州一丸 熊本城の石垣修復 『後進育てたい』」(朝日新聞)
- 1月3日 「復興、再建 思い深く 地震後初の新年 『支え合う』『恩返しを』」(熊本日日新聞)
- 1月3日 「初日の出に 傷ついた熊本城 歓声と祈り」(熊本日日新聞)
- 1月3日 「震災の遺構 どう継承『我らの城』再建 官民総力」(西日本新聞)
- 1月4日 「『みんなで支える』熊本城 官民一体で再建目指す」(島根日日新聞)
- 1月5日 「加藤神社に初詣、城の再建祈る」(熊本日日新聞)
- 1月5日 「読者ひろば エレベーター地震の視点は」(熊本日日新聞)
- 1月6日 「熊本城のいま 27 『鏡石』から加工過程探る」(熊本日日新聞)
- 1月12日 「読者ひろば 天守閣復旧より被災者支援を」(熊本日日新聞)
- 1月13日 「熊本城のいま 28 昭和初期の修復 異論も」(熊本日日新聞)
- 1月14日 「『城主』の寄付 6億円超 熊本城修復費 2ヵ月で」(熊本日日新聞)
- 1月18日 「熊本城マラソン2017 参加賞に天守閣の瓦」(熊本日日新聞)
- 1月18日 「熊本城案内板 2ヵ所で破損 熊本市、県警に被害届」(熊本日日新聞)
- 1月20日 「熊本城のいま 29 石垣修復議論 まず天守」(熊本日日新聞)
- 1月25日 「熊本城 復旧へ一歩ずつ 天守にスロープ、長堀解体」(熊本日日新聞)
- 1月27日 「熊本城のいま 30 定点観測で残す復旧過程」(熊本日日新聞)
- 1月27日 「熊本城石垣 修復20年 地震被害 『数百年残したい』積み直し」(読売新聞夕刊)
- 1月29日 「くまにち論壇 天守閣の復旧 拙速避けたい」(熊本日日新聞)
- 2月1日 「熊本城 石垣修復 意見交わす 熊本大でシンポジウム」(熊本日日新聞)
- 2月2日 「熊本城入場規制 外国人がっかり 公式サイト 日本語以外記載なし」(熊本日日新聞)
- 2月3日 「宇宙人が熊本城応援 サントリー新CM 7日から全国放映」(熊本日日新聞)
- 2月3日 「熊本城復旧や産業創出議論 東京で有識者会議」(熊本日日新聞)
- 2月3日 「一転『外国語発信します』 熊本城 立ち入り規制情報」(熊本日日新聞)

- 2月3日 「熊本城のいま 31 松崎翁と天守㊦」(熊本日日新聞)
- 2月6日 「熊本城被災 写真や映像で表現 熊本市 崇城大生ら企画展」(熊本日日新聞)
- 2月7日 「災害対応 被災地に学ぶ 中米6ヵ国の防災担当者 JICA 支援 熊本城を視察」(熊本日日新聞)
- 2月7日 「公園事業予算で対応 天守閣耐震、バリアフリー化」(熊本日日新聞)
- 2月8日 「熊本城に宇宙人ジョーンズ 人気CM最新作 再建へエール込める」(読売新聞)
- 2月8日 「熊本城復旧考 空間の様相と時間の経過」(熊本日日新聞)
- 2月9日 「英語と中国語 規制情報掲載 熊本城ホームページ」(熊本日日新聞)
- 2月9日 「熊本城石垣の崩壊要因考察 熊大でシンポジウム」(読売新聞)
- 2月9日 「加藤神社が義援金寄付」(読売新聞)
- 2月10日 「熊本城のいま 32 松崎翁と天守㊦」(熊本日日新聞)
- 2月11日 「かすむ天守閣 この冬一番 県内に寒気」(熊本日日新聞)
- 2月12日 「本と旅する 城が燃えた 民は泣いた」(北海道新聞)
- 2月14日 「地域の宝 文化財守りたい 『未指定』町屋 修復へ負担重く」(熊本日日新聞)
- 2月14日 「読者ひろば 天守閣の復旧 創建時の姿に」(熊本日日新聞)
- 2月14日 「読者ひろば 天守閣再建の記念メダル？」(熊本日日新聞)
- 2月15日 「熊本城復旧考 熊本人の『心と知』結集を」(熊本日日新聞)
- 2月16日 「震災復興 熊本城に17億5000万円 県、文化財基金を配分」(熊本日日新聞)
- 2月17日 「熊本城のいま 33 天守復元“職人魂”を撮影」(熊本日日新聞)
- 2月18日 「熊本地震の被害知って 新市街 マラソン実行委がパネル展」(熊本日日新聞)
- 2月20日 「熊本城復旧考 市民に開かれた議論の場を」(熊本日日新聞)
- 2月20日 「読者ひろば 観光客第一の情報の発信を」(熊本日日新聞)
- 2月21日 「読者ひろば 熊本城入場券 一言つけては」(熊本日日新聞)
- 2月22日 「読者ひろば テレビCMで熊本復興願う」(熊本日日新聞)
- 2月24日 「読者ひろば 熊本城復興へ19年後見たい」(熊本日日新聞)
- 2月24日 「熊本城のいま 34 『観音様』に秘められた発見」(熊本日日新聞)
- 2月24日 「第1回熊本大学 熊本城復興シンポジウム『熊本城石垣の補修・復旧支援編』が開催。熊本城石垣修復などの意見交換」(絆っせ新聞)
- 3月1日 「熊本城復旧考 天守閣 木造復元できないか」(熊本日日新聞)
- 3月2日 「読者ひろば 熊本城の天守 木造で再建を」(熊本日日新聞)
- 3月3日 「熊本城のいま 35 長堀“被災歴ナンバーワン”」(熊本日日新聞)
- 3月7日 「熊本城飯田丸『奇跡の1本石垣』解体 大林組 積み直し提案」(熊本日日新聞)
- 3月7日 「取材前線 いま残しておかないと」(熊本日日新聞)
- 3月7日 「熊本城の思い出」(熊本日日新聞夕刊)
- 3月8日 「雄姿再び…願い込め 慶徳小児童 段ボールで熊本城」(熊本日日新聞)
- 3月9日 「熊本城“飲んで”復興 サッポロビール『応援缶』発売へ」(熊本日日新聞)
- 3月10日 「熊本城のいま 36 地震後できた“白い石垣”」(熊本日日新聞)
- 3月11日 「熊本城復旧に『やりがい』 石垣積み直しに携わる」(大分合同新聞)
- 3月12日 「熊本 姫路 名城がタッグ 両城下町でスタンプラリー」(熊本日日新聞)
- 3月13日 「魅力海外へ『復興後押し』 岸田外相、熊本城など訪問」(熊本日日新聞)
- 3月13日 「熊本城復旧考 国際大会意識した工程」(熊本日日新聞)

- 3月13日 「岸田外相が来県 熊本城など視察」(読売新聞)
- 3月17日 「読者ひろば 熊本城修復は将来見据えて」(熊本日日新聞)
- 3月17日 「熊本城のいま 37 復旧 1社単独提案続く」(熊本日日新聞)
- 3月17日 「巨大スロープ出現 頼当御門」(熊本日日新聞)
- 3月17日 「行幸坂の桜歩いて、楽しんで 立ち入り規制の熊本城 4日限定で開放」(熊本日日新聞)
- 3月17日 「熊本城天守閣に覆い 5月から 復旧工事で危険防止」(熊本日日新聞)
- 3月19日 「熊本城で歌いたい 石川さゆりさん無料ステージ 25日二の丸広場」(熊本日日新聞)
- 3月19日 「二の丸に 笑顔広がる 春うらら 『お城まつり』開幕、26日まで」(熊本日日新聞)
- 3月21日 「励ましの歌声響く スガシカオさん復興支援ライブ」(熊本日日新聞)
- 3月21日 「『ひごまる』仲間できた 生みの親 熊本城モチーフに」(熊本日日新聞)
- 3月21日 「熊本城応援 新キャラお披露目 『なかまたち』5種類 復興PR」(読売新聞)
- 3月22日 「動画で復興にエール 米国領事館などがくまモン体操撮影」(熊本日日新聞)
- 3月24日 「熊本城のいま 38 大天守に特大の『棟札』」(熊本日日新聞)
- 3月25日 「城跡修復経験 熊本で生かす 仙台市が職員派遣」(河北新報)
- 3月25日 「天守復旧へ大型車続々 スロープ完成」(熊本日日新聞)
- 3月25日 「熊本城天守閣 復旧への道 重機通行用スロープ整備」(西日本新聞)
- 3月26日 「“74万市民”が総力を挙げ あすを見据えた復興を くまもとのシンボル『熊本城』復旧プロジェクト」(熊本日日新聞)
- 3月26日 「熱唱、踊り 熊本に元気 熊本市街地 九州76の祭り集結 天守閣望み『胸いっぱい』」(熊本日日新聞)
- 3月26日 「開花待つ“桜坂” 熊本城の行幸坂 限定開放」(熊本日日新聞)
- 3月27日 「射程 熊本城復旧過程の公開」(熊本日日新聞)
- 3月28日 「熊本城の変更基準明確化 市が保存活用計画改定案 文化財保護委」(熊本日日新聞)
- 3月28日 「復旧計画策定検討委設置へ 熊本市」(熊本日日新聞)
- 3月29日 「熊本城復旧考 市街地含めた価値増大図れ」(熊本日日新聞)
- 3月31日 「熊本城のいま 39 再建当時を知る元建築係」(熊本日日新聞)
- 3月31日 「『くまもと復興映画祭』概要決定 高良さんら ゲスト多彩」(熊本日日新聞)

(4) 講演等

a. 定期講座「熊本城学」

熊本城調査研究センター主催。時間はいずれも10:00～11:30。

回	講師	講座名	場所	実施日	聴講者数
1	渡辺 勝彦	熊本城の重要文化財建造物	城彩苑多目的室	11月19日(土)	63名
2	鶴嶋 俊彦	熊本城の防衛術	城彩苑多目的室	12月17日(土)	64名
3	美濃口 雅朗	出土品が語る熊本城本丸御殿	城彩苑多目的室	1月21日(土)	53名
4	木下 泰葉	書状にみる熊本城築城	城彩苑多目的室	2月18日(土)	63名
5	金田 一精	本丸御殿の発掘調査	城彩苑多目的室	3月18日(土)	56名
合 計					299名

b. その他の啓発事業

熊本城調査研究センター主催、または市民・団体等からの講師派遣依頼に対応したもの。
そのほとんどが「熊本城と大地震」など、熊本地震の被害・復旧に関する内容である。

・パネル展示（データ提供含む）	5件	（不特定多数）
・遺物展示	3件	（不特定多数）
・シンポジウム（パネリスト）	3件	510名
・講演・講座（フォーラム、事例報告等も含む）	77件	6578名
・寄稿	10件	
・現地説明（レクチャー含む）	11件	684日

6. 寄贈資料（敬称略）

熊本城本丸御殿1階指図 鉛筆書絵図
熊本城本丸御殿地階指図 鉛筆書絵図
熊本城本丸地階平面図 版下用墨入れ図
熊本城本丸1階平面図 版下用墨入れ図
熊本城天守1階平面図 版下用墨入れ図
熊本城天守1階平面図 版下用墨入れ図

寄贈者 平井 聖氏 2016年4月20日

7. 寄贈図書（敬称略）

朝倉市教育委員会

『朝倉市文化財調査報告書 第17集 小石原ダム文化財調査報告書』同教育委員会 2013

『朝倉市文化財調査報告書 第18集 朝倉市文化財年報（平成23年度）』同教育委員会 2013

『朝倉市文化財調査報告書 第19集 黒川院Ⅲ 福岡県朝倉市黒川所在中世黒川院関連遺跡群の調査』同教育委員会 2013

天草市観光文化部文化課

『天草市文化財調査報告書 第5集 上津浦城跡1』天草市教育委員会 2016

天草市教育委員会『大矢遺跡保存活用計画書』同教育委員会 2016

石川県金沢城調査研究所

『金沢城調査研究所年報9（平成27年度）』石川県金沢城調査研究所 2016

『研究紀要 金沢城研究 第14号』同研究所 2016

『金沢城史料叢書25 金沢城普請作事史料4』同研究所 2016

『金沢城史料叢書26 金沢城跡石垣保存実態調査報告書Ⅰ』同研究所 2016

『金沢城史料叢書27 金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 9 金沢城跡 一鶴ノ丸第1次・新丸第1次・尾坂門・二ノ丸園路・数寄屋屋敷一』同研究所 2016

一般社団法人 国宝修理装演師連盟

『平成27年度 一般社団法人国宝修理装演師連盟 第21回定期研修会報告集』一般社団法人 国宝修理装演師連盟 2015

鹿児島県

(株)中桐造園設計研究所『鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画』鶴丸城楼門建設協議会・鹿児島県 2016

熊本県文化財資料室

熊本県教育委員会『熊本県文化財調査報告書317集 新屋敷遺跡群6 一国土交通省白川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査一』熊本県教育委員会 2016

同教育委員会『熊本県文化財調査報告書318集 飛田遺跡群2 一般国道3号熊本北バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』同教育委員会 2016

同教育委員会『熊本県文化財調査報告書319集 北中島西原遺跡 九州横断自動車道延岡線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（本文編）』同教育委員会 2016

同教育委員会『熊本県文化財調査報告書319集 北中島西原遺跡 九州横断自動車道延岡線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（図版編）』同教育委員会 2016

同教育委員会『熊本県文化財調査報告書320集 新南部遺跡群吉原遺跡（10次・11次） 白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』同教育委員会 2016

同教育委員会『熊本県文化財調査報告書321集 託麻弓削遺跡群中江町遺跡 白川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）』同教育委員会 2016

同教育委員会『熊本県文化財調査報告書322集 志柿城跡 江川防災・安全対策等緊急工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』同教育委員会 2016

同教育委員会『熊本県文化財調査報告書323集 伝大道寺跡遺跡群2 一熊本地方気象台ウインドプロフアイラー発動発電機工事に伴う埋蔵文化財発掘調査一』同教育委員会 2016

熊本市教育委員会

『茶臼塚遺跡 熊本市植木地域農産物の駅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』熊本市教育委員会 2016

『熊本市の文化財 第49集 熊本市埋蔵文化財調査年報 第18号 一平成26年度一』同教育委員会 2016

『熊本市の文化財 第50集 峠南平遺跡・鏡田中尾遺跡・沖遺跡 南尾迫地区経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』同教育委員会 2016

『熊本市の文化財 第51集 茶臼塚遺跡 熊本市植木地域農産物の駅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』同教育委員会 2016

『熊本市の文化財 第52集 新南部遺跡群1 一新南部遺跡群第23次調査区（平成25年度）発掘調査報告書一 白川河川激甚災害対策特別緊急事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書』同教育委員会

2016

『熊本市の文化財 第53集 新南部遺跡群2 一新南部遺跡群第23次調査区(平成26年度)発掘調査報告書―白川河川激甚災害対策特別緊急事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』同教育委員会 2016

『熊本市の文化財 第54集 渡鹿遺跡群I 一渡鹿遺跡群第7次調査区発掘調査報告書―白川河川激甚災害対策特別緊急事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書』同教育委員会 2016

『熊本市の文化財 第55集 桑鶴遺跡群1 一一般県道砂原四方寄線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告(1)―』同教育委員会 2016

『熊本市の文化財 第56集 東中原遺跡 山頭遺跡 一般国道3号植木バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2分冊』同教育委員会 2016

『熊本市の文化財 第57集 舟底遺跡I 第6次・9次調査、田原坂資料館改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』同教育委員会 2016

『熊本市の文化財 第58集 五丁中原遺跡群1 一一般県道砂原四方寄線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告(2)―』同教育委員会 2016

『熊本市の文化財 第60集 大江遺跡群12 一平成27年度―』同教育委員会 2016

『熊本市の文化財 第61集 熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集 一平成27年度― 第1分冊』同教育委員会 2016

『熊本市の文化財 第61集 熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集 一平成27年度― 第2分冊』同教育委員会 2016

熊本大学文学部附属永青文庫研究センター

『熊本大学文学部附属 永青文庫研究センター 年報 第7号』同センター 2016

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-7 平安京左京五条三坊十町・烏丸綾小路遺跡』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015

『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-9 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園』同研究所 2016

『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-13

平安京左京一条四坊九町跡・公家町遺跡』同研究所 2016

『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-15 平安京左京四条三坊四町跡・烏丸綾小路遺跡』同研究所 2016

『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-1 平安京右京六条四坊一町跡・西京極遺跡』同研究所 2016

『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-2 平安京右京七条一坊七町跡』同研究所 2016

『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-3 法住寺殿跡』同研究所 2016

公益財団法人 千葉県教育振興財団

『千葉県教育振興財団 文化財センター年報No.41 一平成27年度―』公益財団法人 千葉県教育振興財団 2016

『房総の文化財VOL. 55』同財団 2015

『研究連絡誌 第77号』同財団 2016

国立大学法人熊本大学文書館

『熊本大学史資料集 新聞に見る明治熊本の高等教育1 一明治11年～明治27年―』国立大学法人 熊本大学文書館 2016

静岡県埋蔵文化財センター

『ふじのくに考古通信 Vol. 11』静岡県埋蔵文化財センター 2016

『ふじのくに考古通信 Vol. 12』同センター 2017

『静岡県埋蔵文化財センター 研究紀要 第5号』同センター 2016

仙台市教育委員会

『仙台市文化財調査報告書451 仙台北城跡東日本大震災復旧事業報告書 第1分冊』仙台市教育委員会 2016

『仙台市文化財調査報告書451 仙台北城跡東日本大震災復旧事業報告書 第2分冊』同教育委員会 2016

鳥取市教育委員会

『平成27年度(2015)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』鳥取市教育委員会 2016

同教育委員会『鳥取城調査研究年報 第9号』同教育委員会 2016

同教育委員会『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅲ 一第34次発掘調査―』同教育委員会 2016

中津市教育委員会

『市内遺跡試掘確認調査 中近世城館確認調査 (3)
長者屋敷官衙遺跡 市内遺跡発掘調査概報9 中津
市文化財調査報告第75集』中津市教育委員会 2016

彦根市教育委員会

『彦根市埋蔵文化財調査報告書第64集 平成25～27
年度 彦根市内遺跡発掘調査報告書 一彦根市佐
和山城跡総合調査に伴う範囲確認調査および測量
調査一』彦根市教育委員会文化財課 2016

姫路市観光交流局

『国宝姫路城大天守保存修理事業 公式記録集』姫路
城総合管理室・姫路城管理事務所 2016

姫路市立城郭研究室

『城郭研究室年報 VOL. 26』姫路市立城郭研究室
2016

弘前市教育委員会

『弘前市内遺跡発掘調査報告書20』青森県弘前市教育
委員会 2016
同教育委員会『史跡大森勝山遺跡整備計画策定報告書』
同教育委員会 2016

福井市教育委員会

福井市文化財保護センター『平成26年度 年報』福井
市文化財保護センター 2016

松江市歴史まちづくり部史料編纂課松江城調査研究 室

松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 松
江城国宝化推進室『松江城調査研究集録3』松江市
歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 松江城
国宝化推進室 2016

南島原市教育委員会

『初公開資料！ 原城落城のとき 一禁教・潜伏への
道のり一』南島原市 2017

盛岡市教育委員会

『史跡盛岡城跡 一下曲輪土塁修復工事報告書一』盛
岡市教育委員会 2016

FUT 福井城郭研究所

『FUT 福井城郭研究所年報・研究紀要 2016 N04』
FUT 福井城郭研究所 2016

Ⅲ. 補遺報告

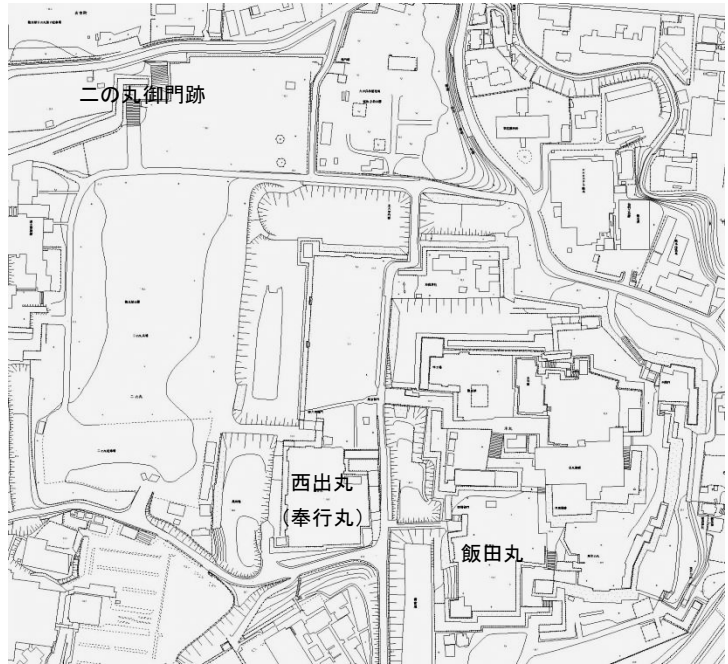
熊本城飯田丸出土の石造物

美濃口 雅朗

1. はじめに (第1図)

熊本城調査研究センターが発行した『熊本城発掘調査報告書1-飯田丸の調査-』¹⁾には、飯田丸の石垣解体修理工事に伴う工事発生土から採集した石造物の報告が漏れていた。本稿をもって、これを補うこととする。あわせて、西出丸(奉行丸跡)に置かれていた、多くは昭和63年~平成8年度に実施された西出丸や二の丸御門跡の石垣保存修理工事の際に採集した石造物の報告も行なう。

なお、本報告資料は、現在、本センターが管理する出土品収蔵庫脇において収納している。

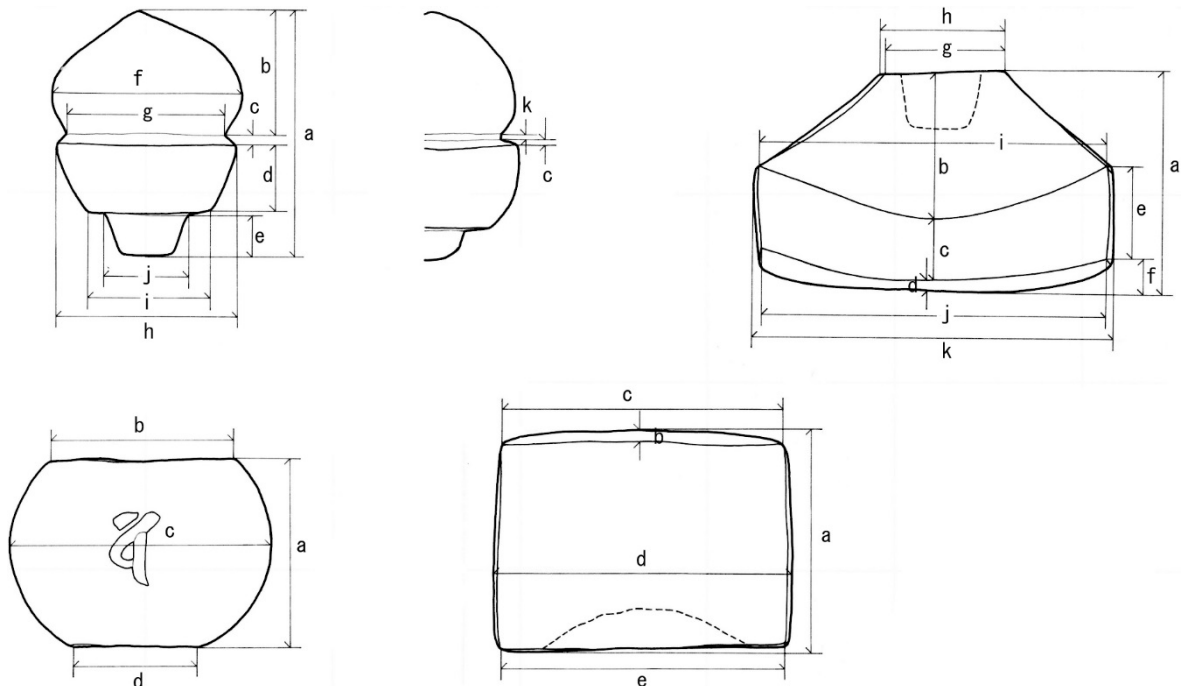


第1図 資料採集位置図(縮尺任意)

2. 報告の方法-五輪塔の観察と分類

a. 報告の方法 (第2図)

本報告の主体となる資料は五輪塔の部材(各輪)である。計測部位は第2図に凡例を示し、また、計測



第2図 五輪塔設計部位凡例

値・石材・調整は第1表をもって記している。

計測値は歪みのために箇所によって値が異なる場合が多いが、その場合、形状の特徴を標準的に示す箇所を選んで計測している。火輪の軒端の高さ（ $e \cdot f$ ）は、原則、実測図の右側を計測している。石材は肉眼観察によるものである。調整は、表面残存箇所の観察に基づくものであり、鑿・鉋などの金属加工具による削痕を認めるものを「削り」、石材の肌理が潰れるほどに表面が滑らかで、明らかに磨いたと判断できるものを「研磨」、表面が滑らかであるものの、研磨の痕跡が不明瞭なものを「平滑」と表記している。

b. 五輪塔の分類（第3～6, 9～15図）

空風輪・火輪・水輪については、型式的属性を勘案して以下のような形態分類を行なう。

空風輪（アルファベット小文字は第2図に対応、以下同じ）

- 1類（1～5, 42～44） 空輪は、原則均整のとれた宝珠形を呈するが、頂部が不明瞭で球形に近いもの（団子形）もある。風輪の側辺は丸味を帯びており、腰部の張りが明瞭である。空輪と風輪の境は明確に括れ、風輪の最大幅（ h 、上端の場合と中位の場合がある）は、空輪の最大幅（ f ）よりも広い。
- 2類（6～11, 45～49） 空輪は、原則均整のとれた宝珠形を呈する。風輪の側辺は1類に比べて張りが弱く、直線的である。本類は、空輪と風輪の最大幅の比較からA・Bに細分する。A類は風輪最大幅（ h ）が空輪の最大幅（ f ）とほぼ同じか、または広いもの、B類は風輪の最大幅（ h ）が空輪最大幅（ f ）より狭いものである。B類はA類に比べ、概して空輪側辺下位（腰部）の張りが弱く、より3類に近い形状を呈している。
- 3類（12～19, 50～61） 形状は不安定であり、特に空輪において個体差が大きい。空風輪とも、1・2類に比べて側辺が直線的であり、縦に長い（横幅に対して高さの比率が大きい）ものが目立つ。空輪は、上位に稜が認められるものがある。空輪と風輪の境の括れは、粗く、浅く削り取る程度か、あるいはコ字形の溝を巡らせるだけで作り出しており、そのため、空輪下位に稜が認められるものがある。括れ幅（ g ）と風輪最大幅（ h ）との数値の差は小さい。ホゾには四角柱状のものも認められる。
- 4類（62） 3類に近似するが、特異な形態で均整のとれた丁寧なつくりであることから弁別した。空輪上位の稜が強く張り、稜を境に上部（頂部側）の辺はほぼ直線となる。風輪側辺もほぼ直線を呈する。

火輪

形態差が見出しにくいいため、便宜上、最大幅（ k ）と上面幅（ h ）との数値の比率を主眼とし、これに軒裏面の反り上がり等を加味して分類した。

- 1類（20） 最大幅：上面幅が1：約0.4となるもの。軒裏面は反り上がりが高く、ほぼ全体が凸曲面（真反り）を呈する。また、軒口の幅は中央（ c ）から端部（ e ）までほぼ同じである。
- 2類（21・22, 63～67） 最大幅：上面幅が1：0.4前後（36～44%）となるもの。軒裏面は1類に比べて反り上がりが低く、中央部が平坦に近く周縁部のみを反り上がらせるものが目立つ。軒口の幅は、中央（ c ）から端部（ e ）までほぼ同じのもの、軒先が強く反り上がるもの（中央と端部の差が大きいもの）が半々程度みられ、この傾向は3・4類においても同じである。
- 3類（23, 68～74） 最大幅：上面幅が1：0.4台後半（45～49%）となるもの。軒裏面の反り上がりは概ね2類と同様であるが、平坦化するものも認められる。
- 4類（24～26, 75～81） 最大幅：上面幅が1：0.5～0.6となるもの。概してつくりは雑で、軒裏面の反り上がりは3類と同様であるが、軒口の下辺が直線的なものが目立つ。隅棟線も直線的なものが多い。
- 5類（27） 上面幅が1：0.4となるものであるが、特異な形態であることから弁別した。全体に縦長の形状で、軒口の幅（ c ）は広く、軒先は強く反り上がる。軒裏面はほぼ平坦である。

水輪

- 1類（28～30, 82～86） 上・下面の幅（ $b \cdot d$ ）と最大幅（ c ）の差が大きく、側辺が丸く張る形態で

ある。2～4類に比べ、球形に近い形状である。

2類 (31, 87～90) 上・下面幅 (b・d) と最大幅 (c) の差が小さく、側辺の張りが弱い形態である。

3類 (32・33, 91～96) 1・2類に比べ、横幅に対して高さ (a) が低く、扁平な形態である。

4類 (34) 形状が歪なものである。

3. 飯田丸石垣出土石造物

平成12年度に実施された飯田丸の石垣解体修理工事に伴い、工事発生土から採集した石造物を報告する。石垣の裏込めとして使用されたものである。

a. 五輪塔 (第3～6図1～36)

空風輪 (1～19)

1～5は1類である。1は、他に比べ頂部が強調された形状を呈する。五大種子の四転が丁寧な字体で大きく刻まれており、最も残存状況の良い面(菩提門)を正面として図化した。空輪は、正面にケン、左面にキヤク、右面にキヤー?、風輪は、正面にカン、右面にカー、背面にカが認められる。他は剥落により不明である。6～8は2A類である。7は横断面がやや歪な楕円形であり、正面観のみを意識して製作したものとみられる。9～11は2B類である。12～19は3類である。14～17は、円筒形あるいは楕円体形の中心に溝を巡らせただけで空輪と風輪の境の括れを削り出したものであり、空輪下位には、通常は滑らかに整形して削り取ってしまうべき稜が残存している。19は空輪が縦長で、上位には稜が認められる。ホゾは四角柱形である。

火輪 (20～26)

いずれも軒裏面にホゾ受けは認められない。20は1類である。安山岩製で、表面調整は削りのみである。削りの方向には概ね規則性が認められ、平部は菱形、軒口部は綾杉形を呈する。21・22は2類、23は3類、24～26は4類である。24・25は作りが明らかに雑である。24は側面によって軒口の幅の広狭の差が著しく(残存状況の良い側面を図化しており、図正面は幅が狭い)、25は平面形が歪で、略台形を呈している。27は5類である。欠失部が広いものの形状は整っており、丁寧な作りである。

水輪 (28～34)

28～30は1類である。28は、残存状況は悪いものの、四方に種子アが刻まれている。31は2類である。上面に平面長方形の小さく浅い窪みが認められるが、これが奉籠孔かどうかは不明である。32・33は3類である。33は、正面と右面に種子が辛うじて残存する。ともにアであろうか。34は4類である。なお、水輪においてホゾを持つものは無いが、上・下面を浅く繰り込んでズレ防止の措置を採るものが認められる(28・29・31・32・34など)。

地輪 (35・36)

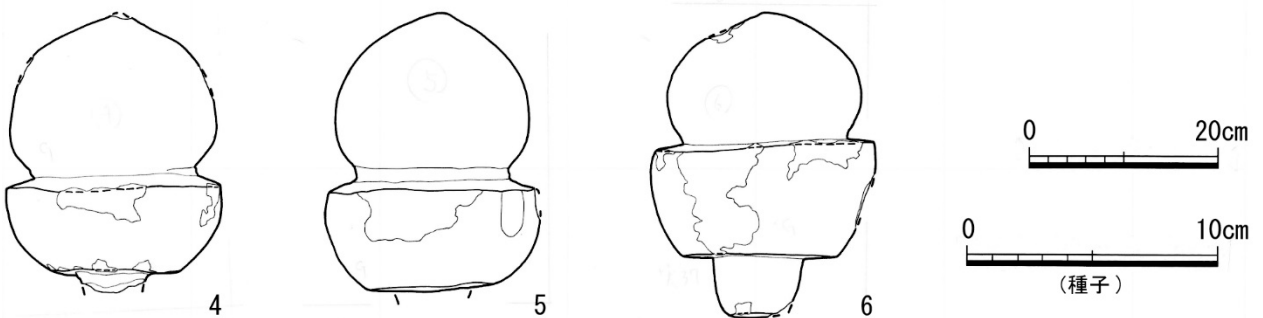
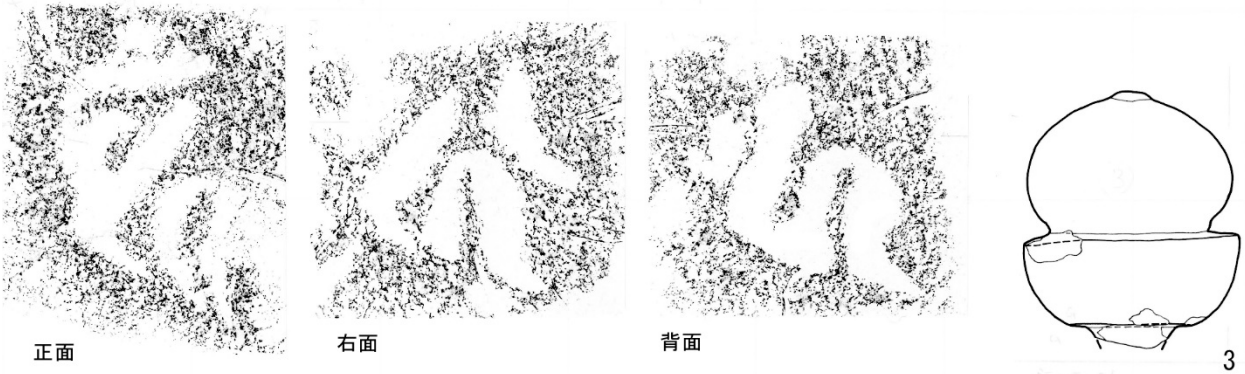
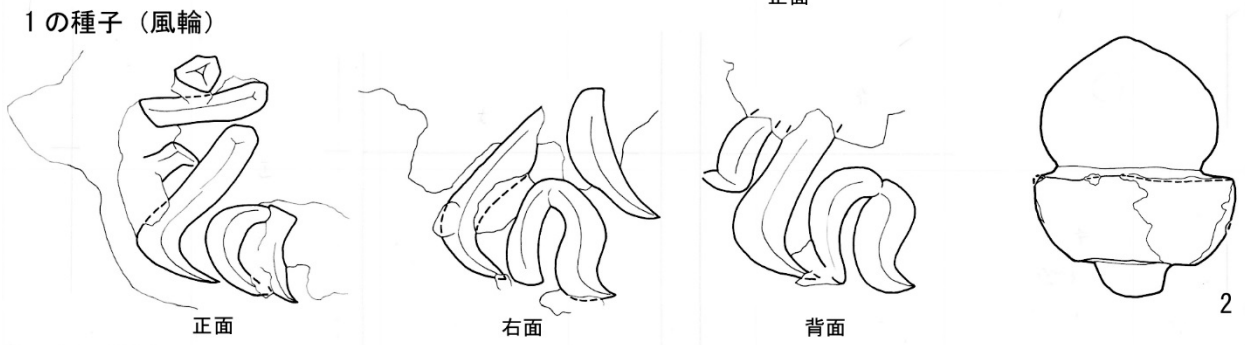
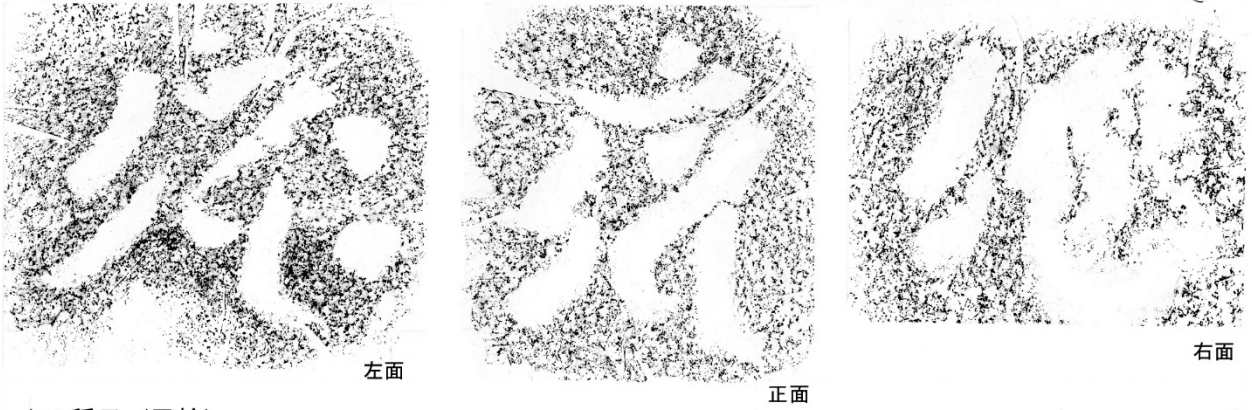
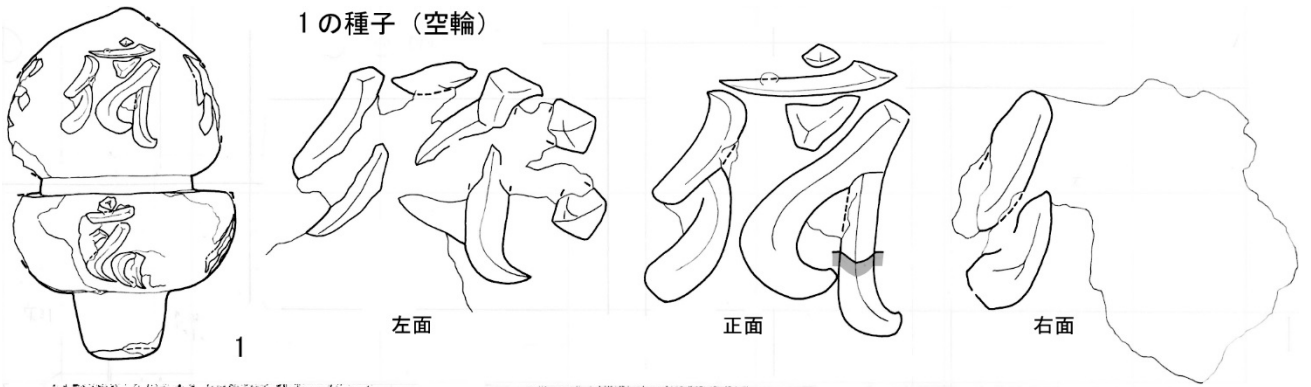
35は各面がやや膨らみ、胴張状を呈する。36は、下面に粗い割り込みが認められる。

b. 宝篋印塔 (第6図37)

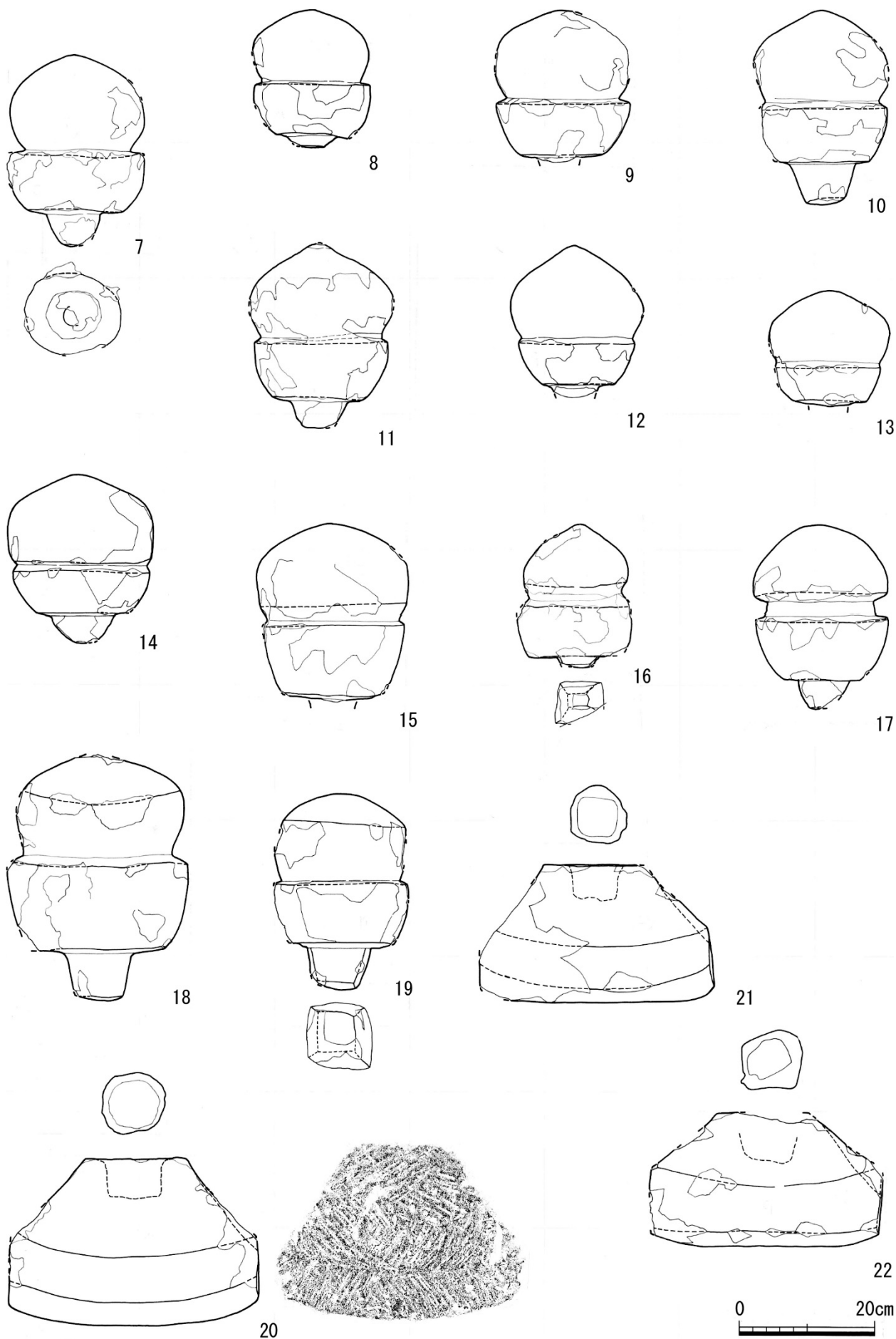
37は宝篋印塔の塔身である。上位に3段の階段状作り出しをもっており、これは、「菊鹿型塔身」と呼ばれる型式である。凝灰岩製で、計測値は、総高21.6cm・塔身高11.9cm・塔身幅16.6cm(横断面ほぼ正方形)・階段状作り出しの高さ9.7cmである。調整は、平滑ではあるものの研磨の痕跡は不明瞭であり、全体に横方向の浅い削痕が残っている。上・下面は平坦ではなく、敲打によるものであろうか、緩やかな凹凸が認められる。正面には残存部において「吉アン(種子) □/アン/至徳元年/正□」が刻まれている。「至徳元年」は北朝年号で、1384年に相当する。

c. 石臼 (第7・8図38～41)

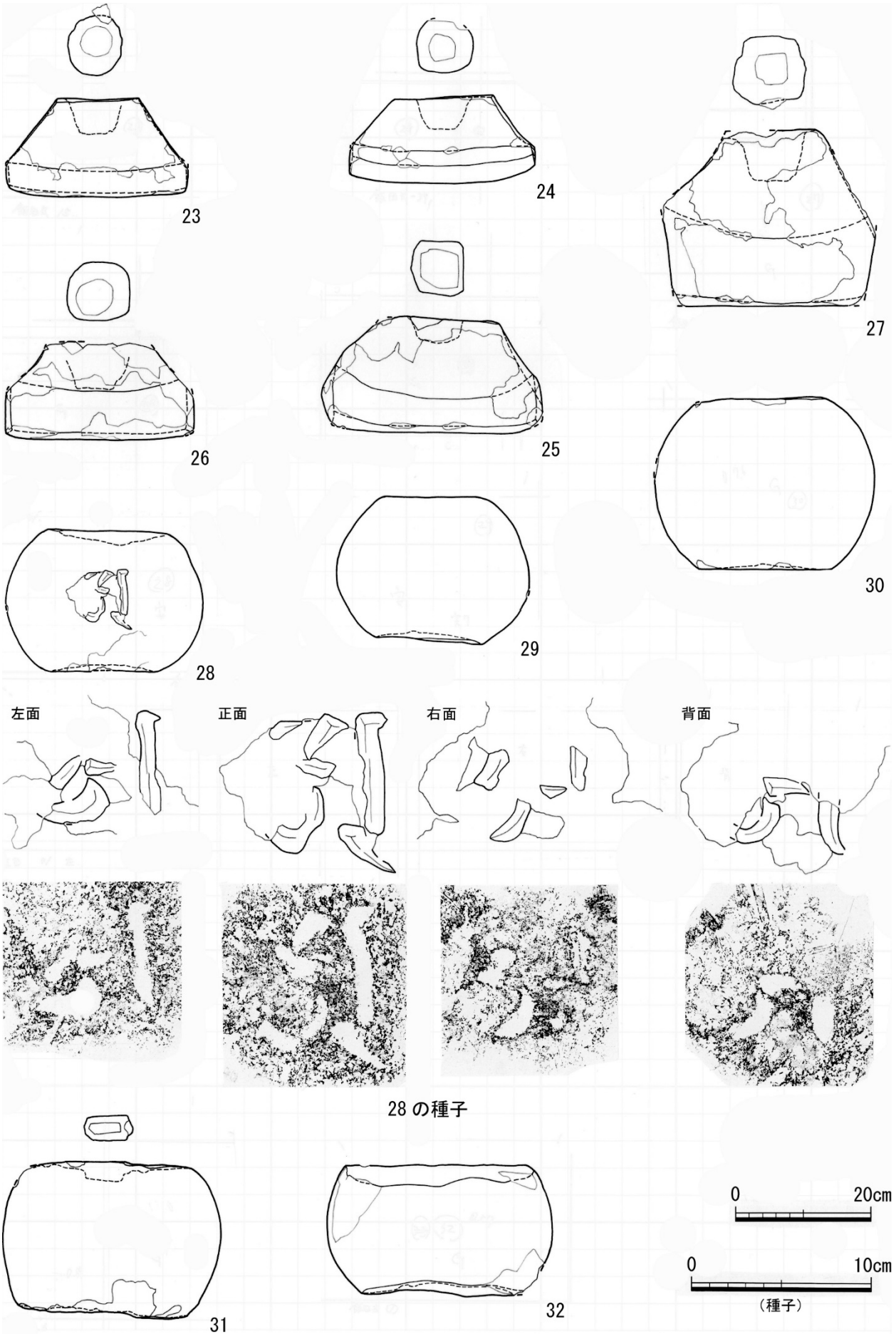
38は小形の搗き臼とみられる。多孔質の安山岩製で、計測値は高さ21.0cm・復元口径31.9cm・復元底



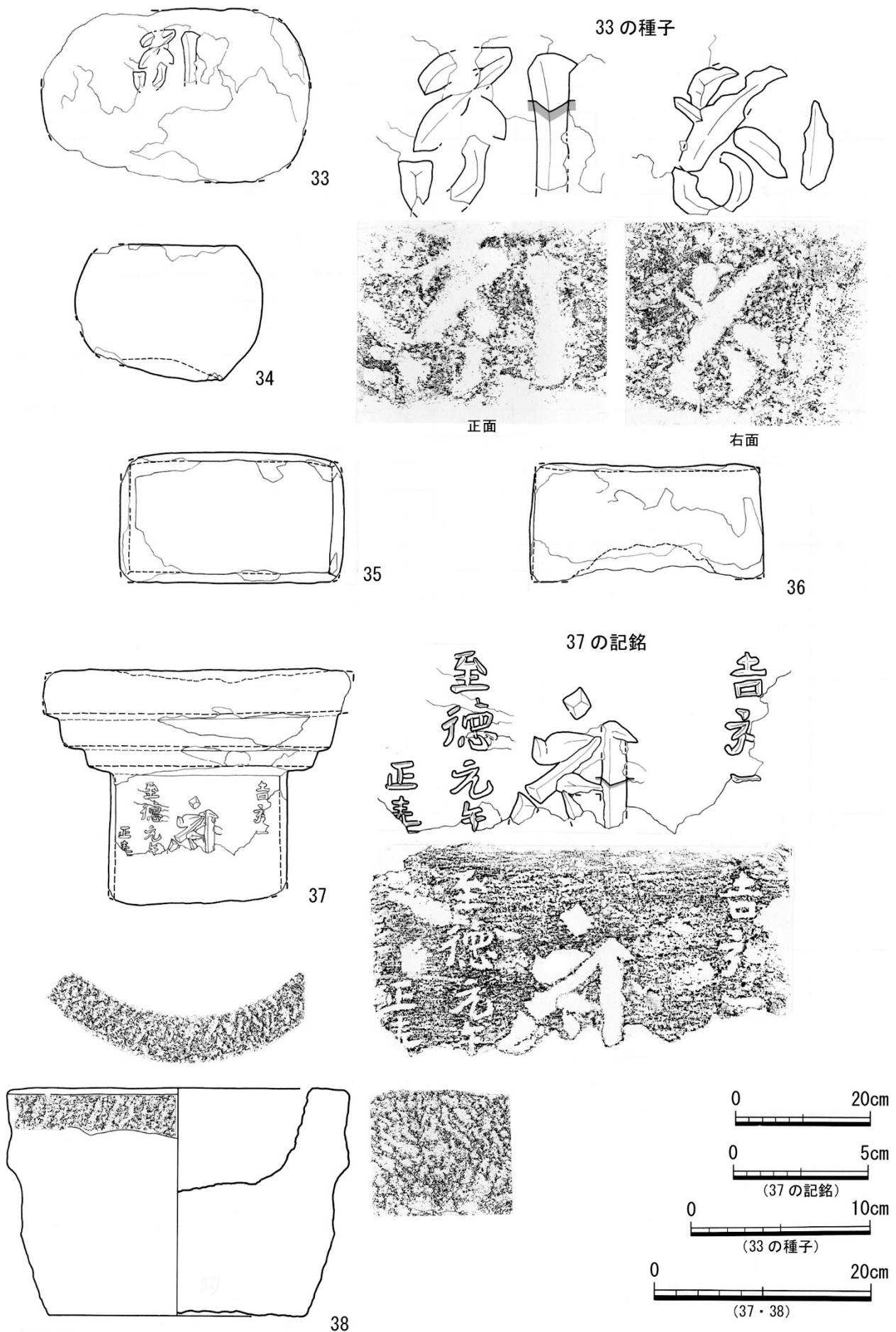
第3図 飯田丸石垣出土石造物実測図1 (1 / 8・1 / 3)



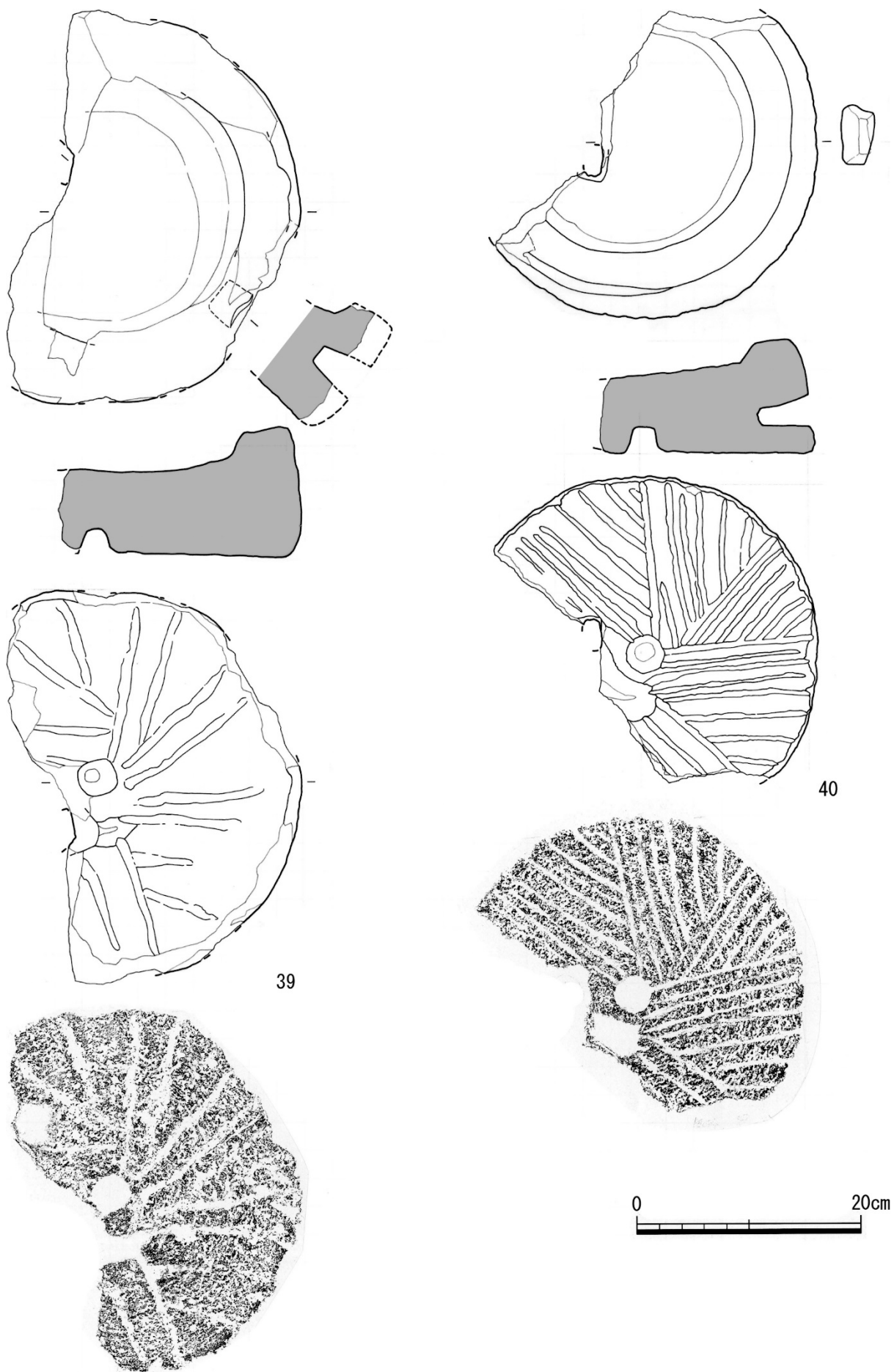
第4図 飯田丸石垣出土石造物実測図2 (1 / 8)



第5図 飯田丸石垣出土石造物実測図3 (1 / 8・1 / 3)



第6図 飯田丸石垣出土石造物実測図4 (1 / 8・1 / 2・1 / 3・1 / 5)



第7図 飯田丸石垣出土石造物実測図5 (1 / 5)

径 23.9 cm である。口唇面～外面口縁部に斜方向の削痕が、内面と外面底部に敲打痕が認められる。外面体部は粗い打ち割りによる整形をそのまま残しており、凹凸が著しい。

39～41 は安山岩製の碾臼である。39・40 は上臼で、ともに溝（目）の分画は 8 分割と想定され²⁾、溝の方向は正目である。各分画内の溝数（主溝＋副溝）は、39 については磨滅が著しいため不明瞭ではあるものの、本数が一定しない（分画がシメトリックではない）ことは明らかで、40 も同様に 6～8 本と一定していない。計測値は、39 が高さ 11.6 cm・外径 35.8 cm、40 が高さ 10.2 cm・外径 32.4 cm である。41 は下臼である。溝の分画および各分画内の溝数は磨滅が著しいため不明瞭で、方向は正目である。計測値は、高さ 8.8 cm・外径 32.3 cm である。

4. 西出丸の石造物

平成 26 年時、西出丸（奉行丸）に置かれていた、石垣の裏込めとして使用されていたと考えられる石造物を報告する。多くは、昭和 63 年～平成 8 年度に実施された西出丸や二の丸御門跡の石垣保存修理工事の際に採集されたものであるが、城内の他の場所からの採集品が含まれる可能性もある。そうした事情から個々の資料について、殆どは出土地を特定できない。ただし、81・83・103 については既刊報告書³⁾に写真等が掲載されていたことにより、二の丸御門跡において採集されたことが明らかである。

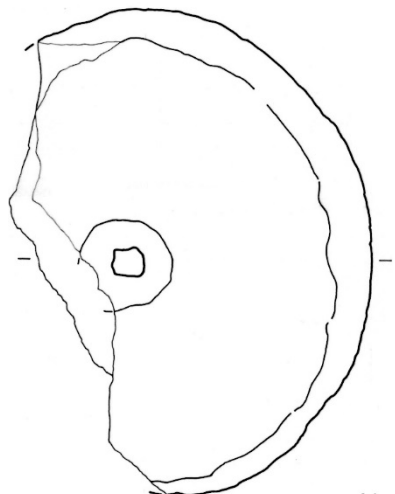
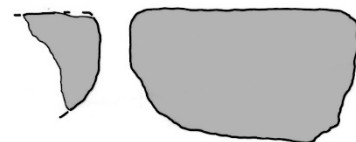
a. 五輪塔（第 9～15 図 42～100）

空風輪（42～62）

42～44 は 1 類である。42・44 の空輪は頂部が丸く、球形に近い形状（団子形）を呈する。45・46 は 2A 類、47～49 は 2B 類である。50～61 は 3 類である。55 は楕円体形の中位に溝を巡らせただけで空輪と風輪の境の括れを削り出したものである。56～61 は空輪上位に稜が認められ、59 は風輪が、60・61 は空輪・風輪の両方が縦に長い形状を呈する。61 は横断面が潰れた楕円形であり、正面観のみを意識して製作したものとみられる。57 はホゾが四角柱形である。62 は 4 類で、風輪に縦方向の割付線が細く残存している。

火輪（63～81）

いずれも軒裏面にホゾ受けは認められない。63～67 は 2 類、68～74 は 3 類である。68 は作りが雑で、形状は歪み、隅棟は一部、面取り状を呈している。71～74 は軒裏面の反り上がりが低く、平坦化の傾向が認められる。74 は小形品で軒口の幅が広い。75～81 は 4 類である。76 は平面形が胴張り状を呈する。78 はホゾ穴の掘り込みが雑で浅い。79 は全体に磨耗が著しい。81 は比較的整った形状を呈し、「逆修／ラー／妙清」を刻んでいる。妙清が逆修供養のために造立したものである。



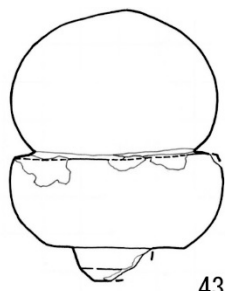
41



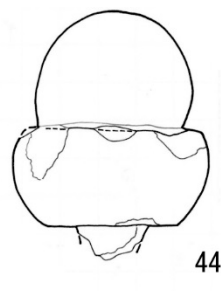
第 8 図 飯田丸石垣出土
石造物実測図 6 (1 / 5)



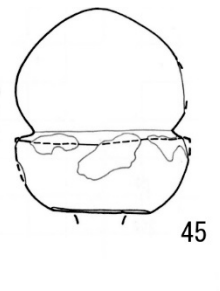
42



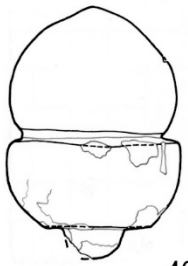
43



44



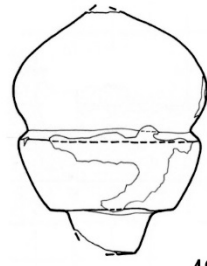
45



46



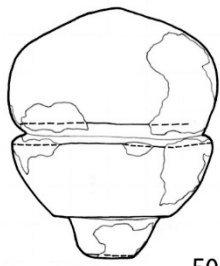
47



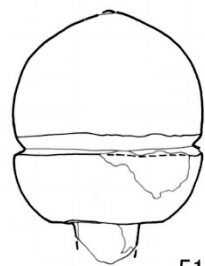
48



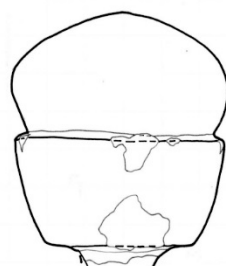
49



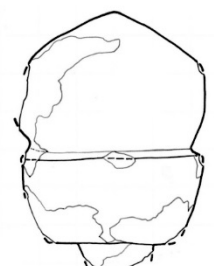
50



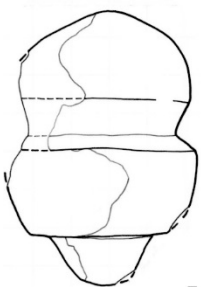
51



52



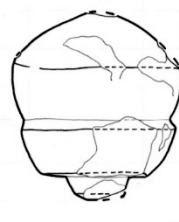
53



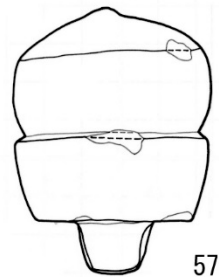
54



55



56



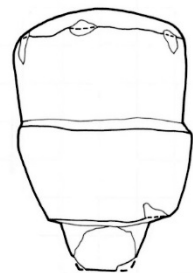
57



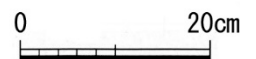
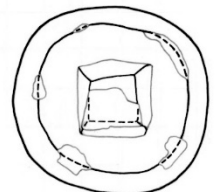
58



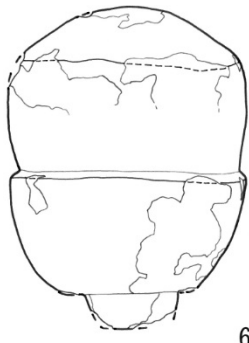
59



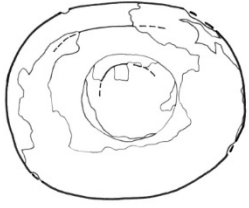
60



第9図 西出丸石造物実測図1



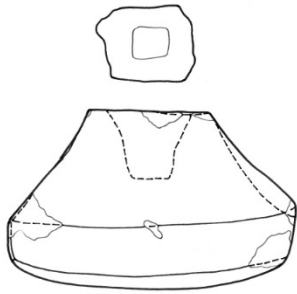
61



62



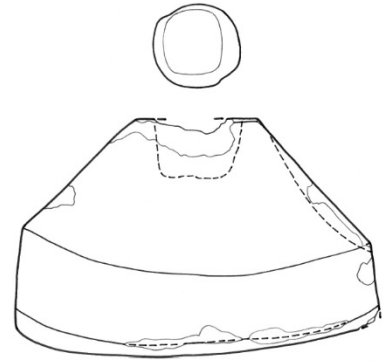
65



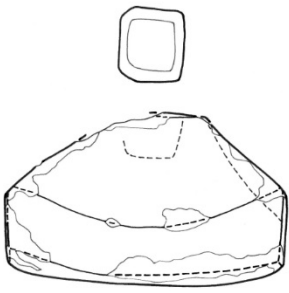
63



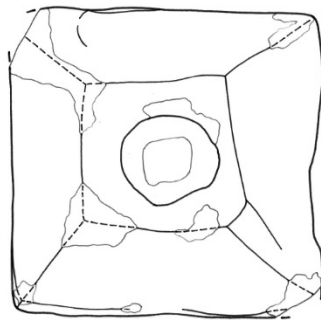
64



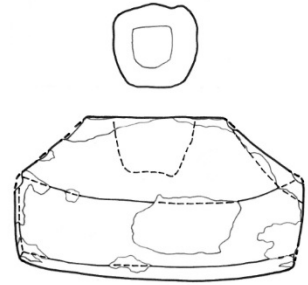
66



67



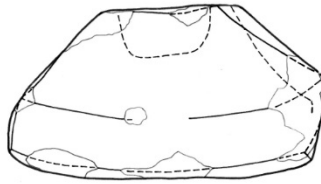
68



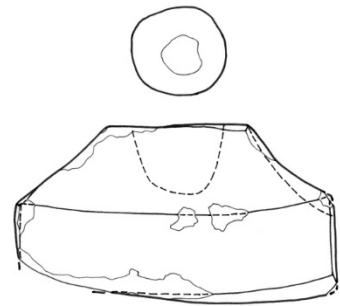
71



69



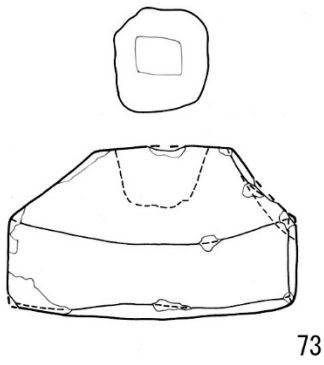
70



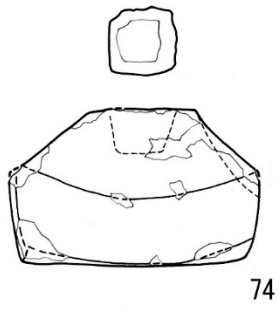
72



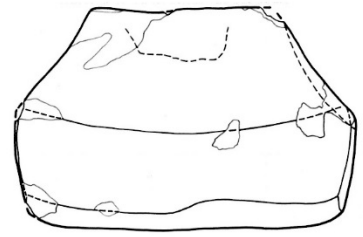
第10图 西出丸石造物实测图2



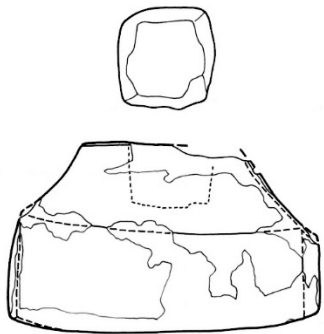
73



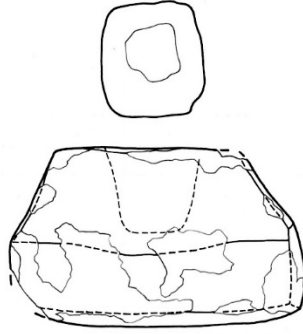
74



75



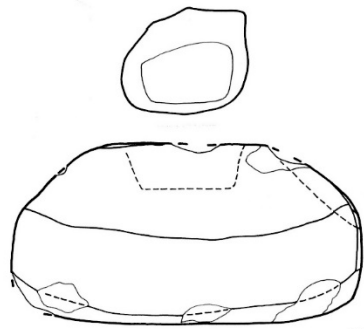
76



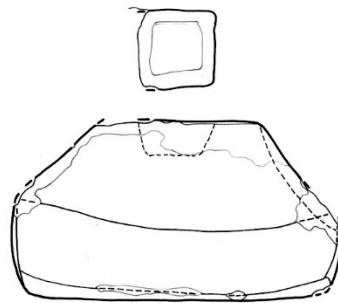
77



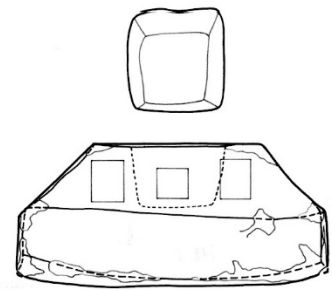
78



79

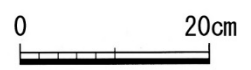
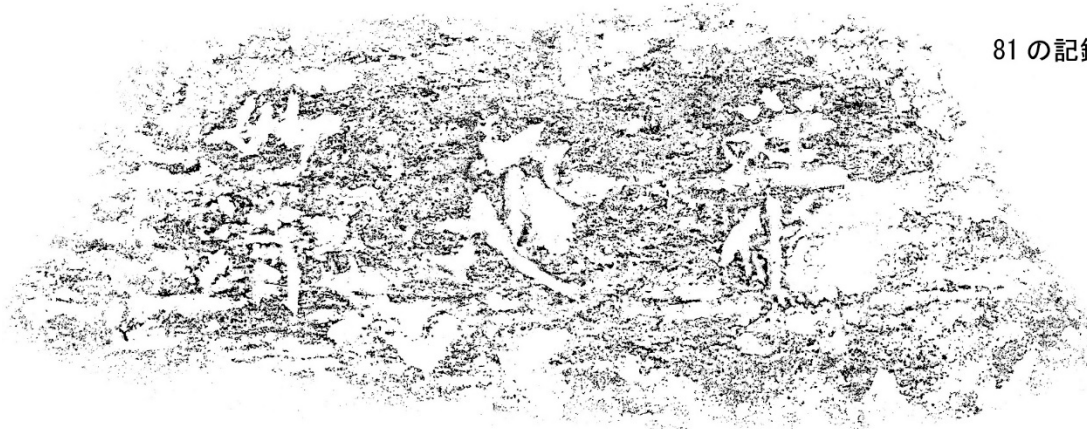


80



81

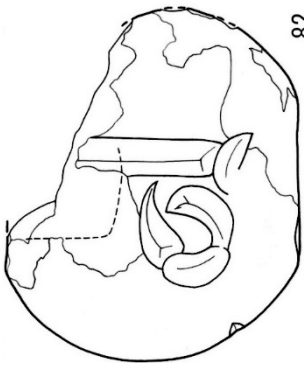
81の記銘



(81の記銘)

第11図 西出丸石造物実測図3 (1 / 8・1 / 2)

82の種子

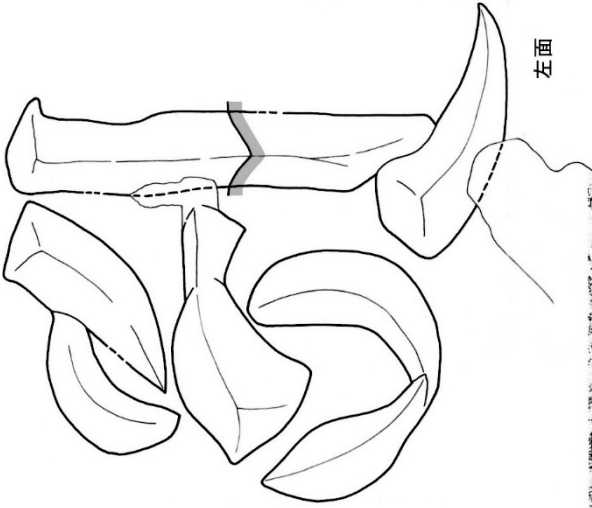


82

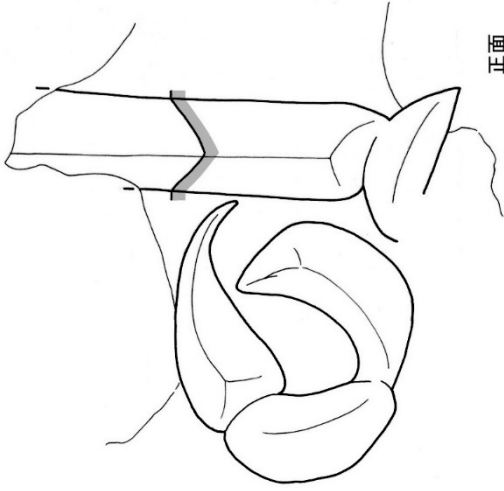
0 20cm

0 10cm

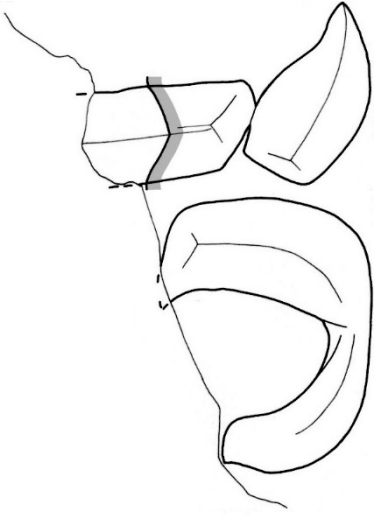
(種子)



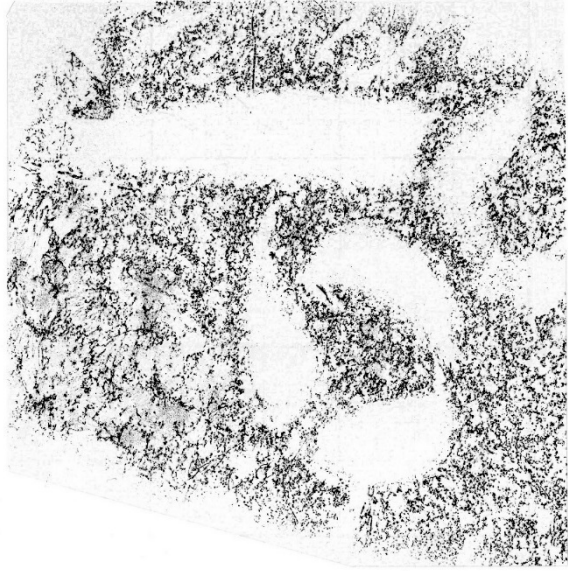
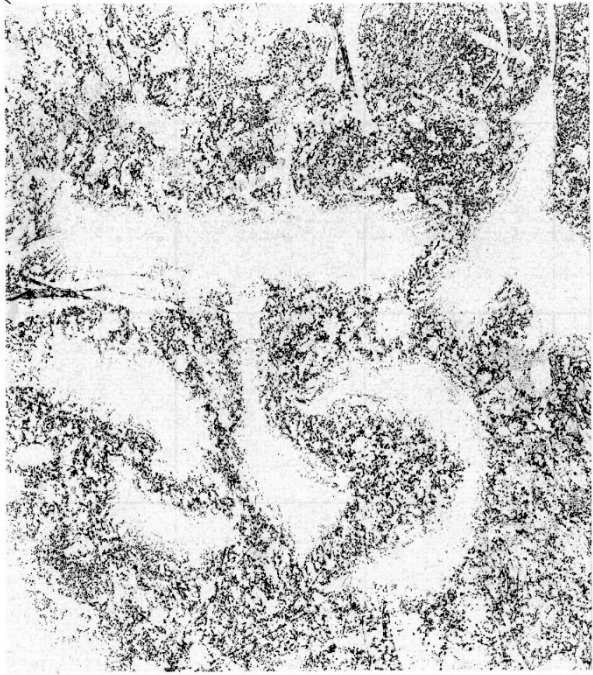
左面



正面

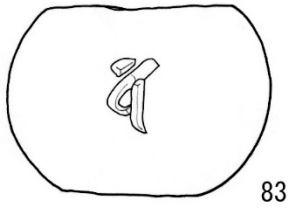


背面

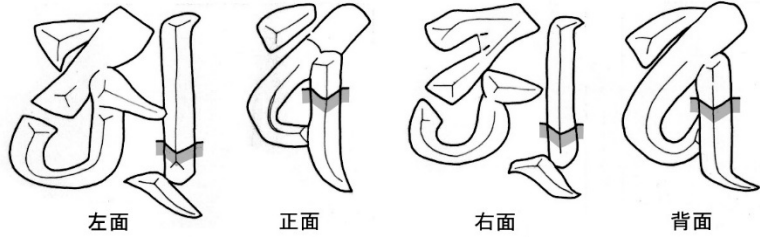


第12図 西出丸石造物実測図4 (1/8・1/3)

83 の種子



83



左面

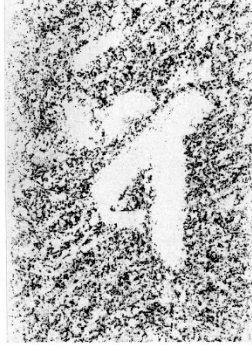
正面

右面

背面



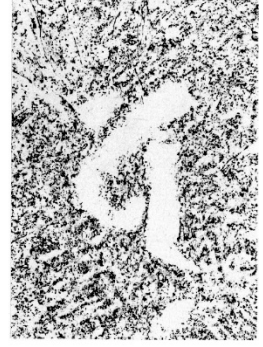
左面



正面

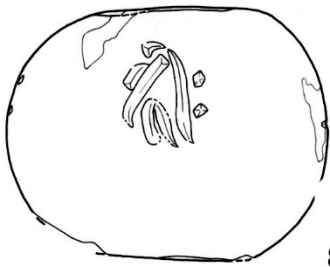


右面

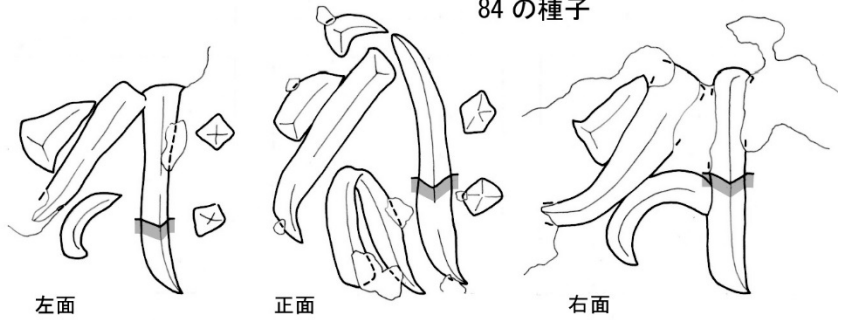


背面

84 の種子



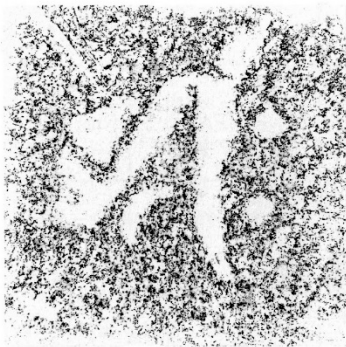
84



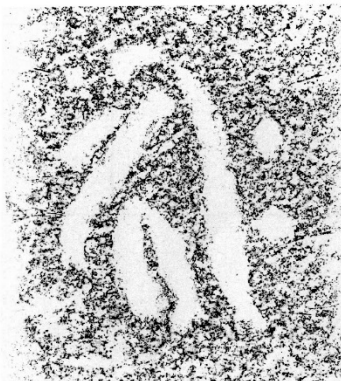
左面

正面

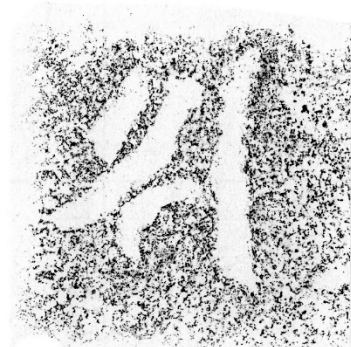
右面



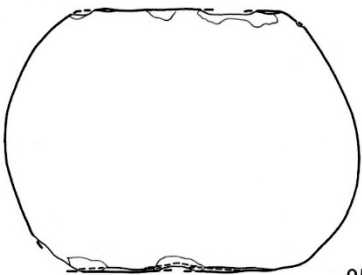
左面



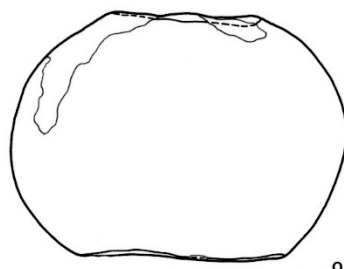
正面



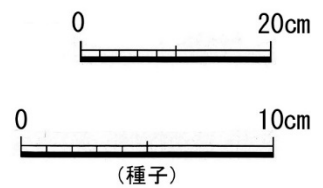
右面



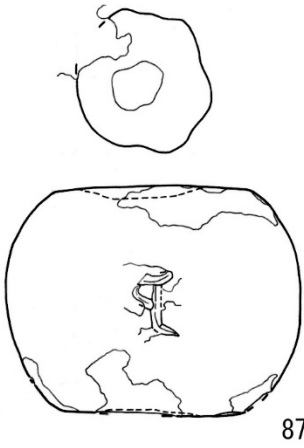
85



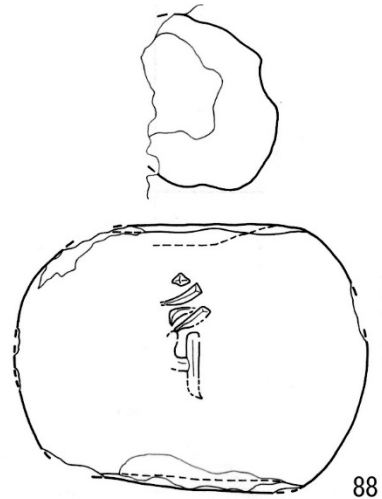
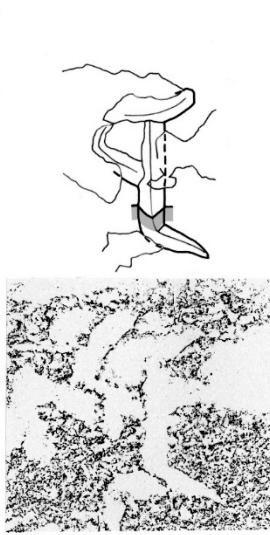
86



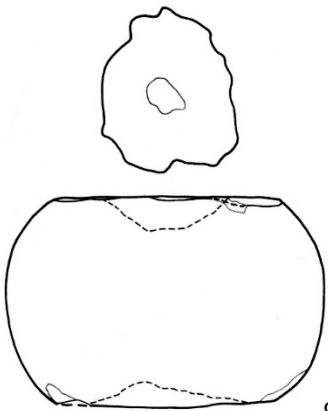
第13図 西出丸石造物実測図5 (1 / 8 · 1 / 3)



87

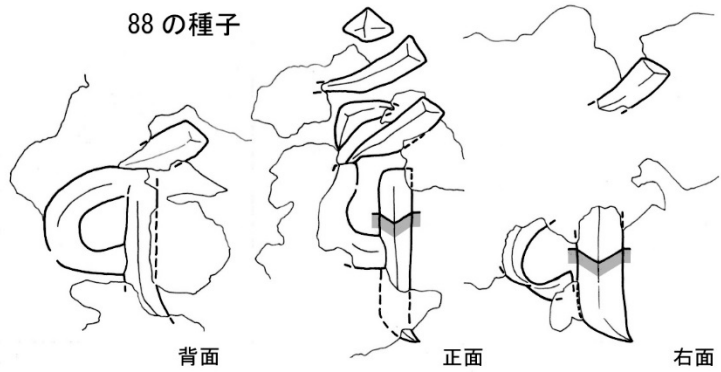


88



89

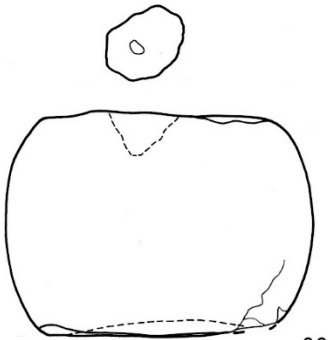
88の種子



背面

正面

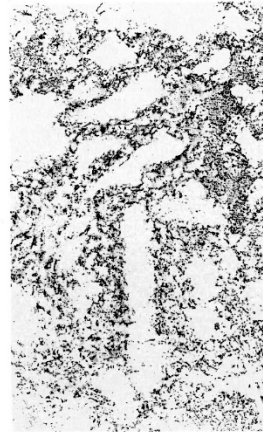
右面



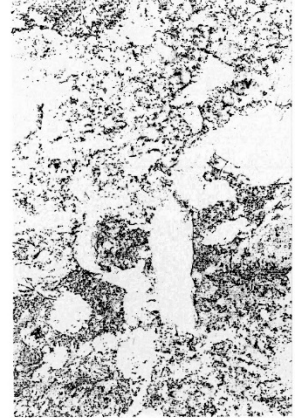
90



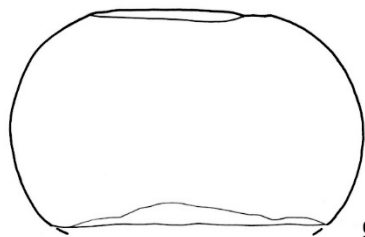
背面



正面



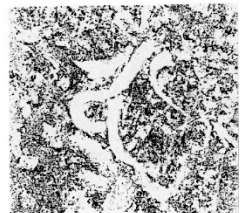
右面



91

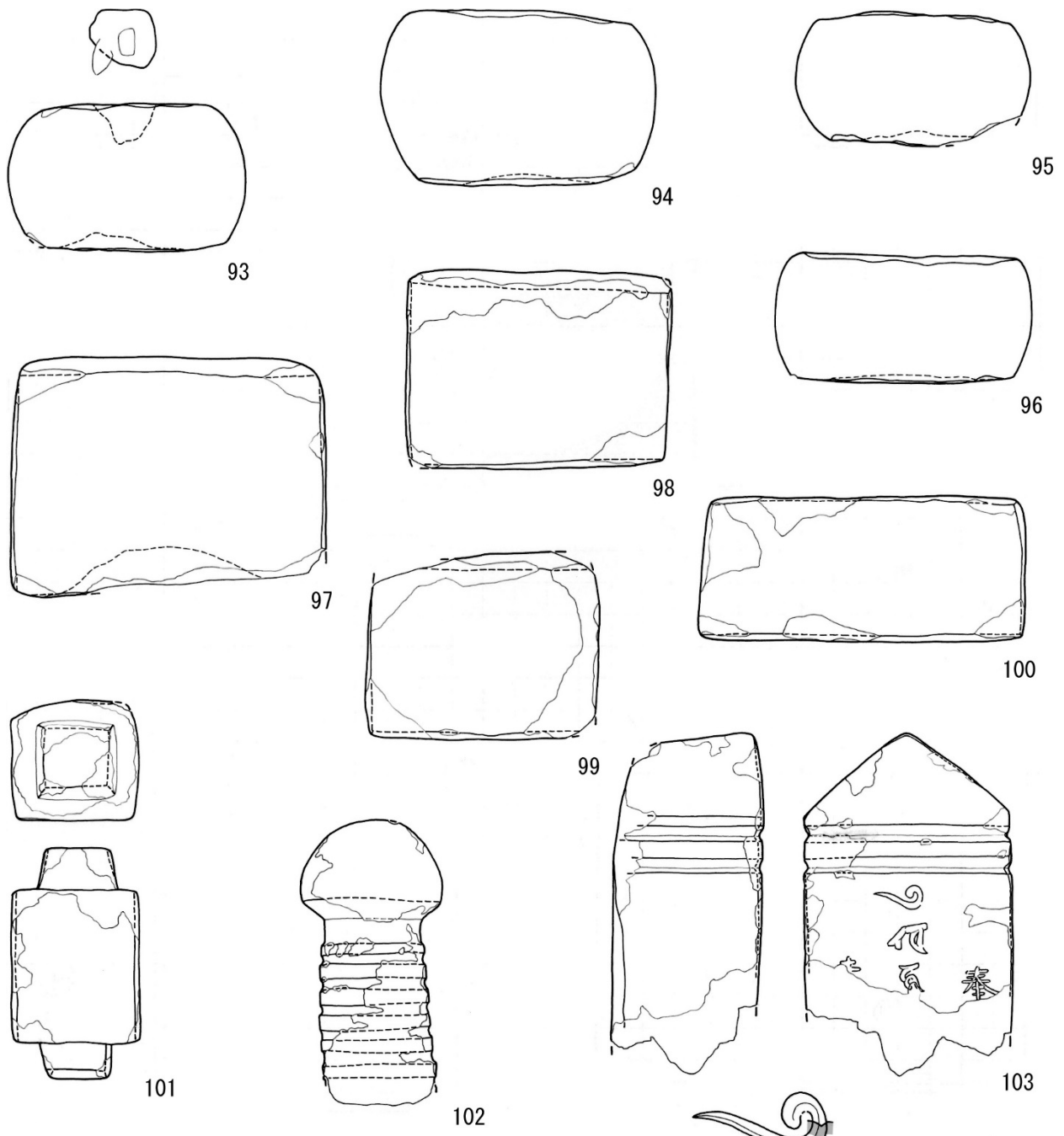


92

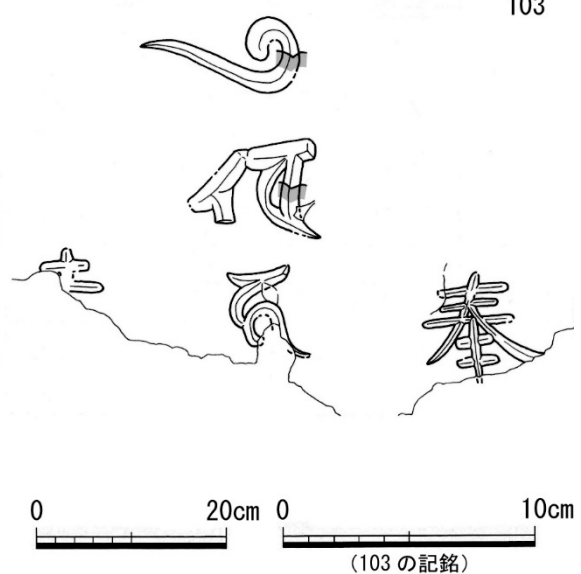
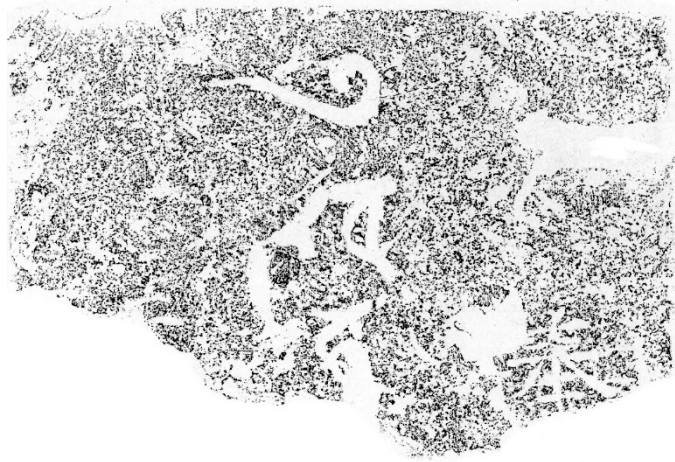


(種子)

第14図 西出丸石造物実測図6 (1/8・1/3)



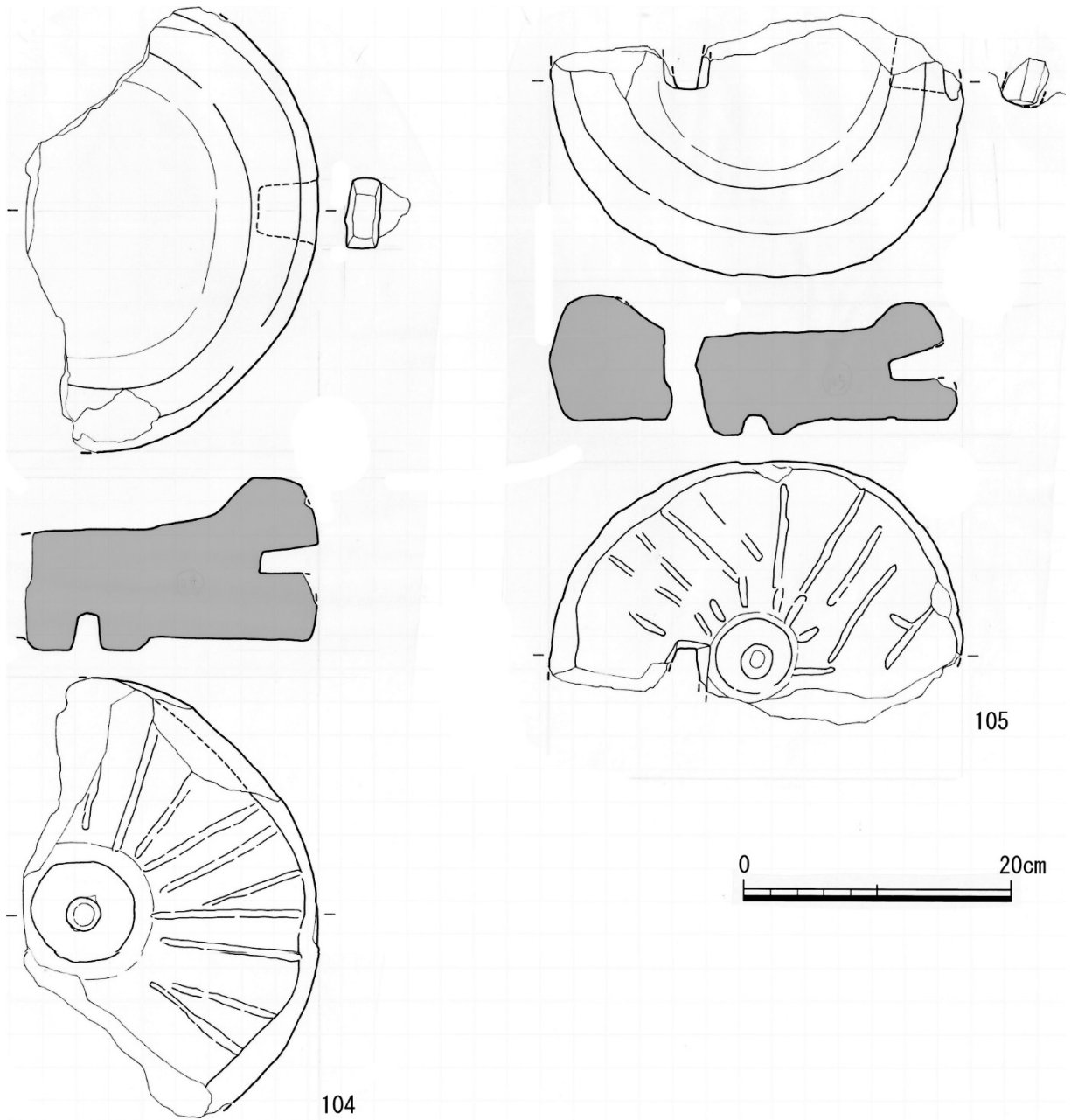
103 の記銘



第 15 図 西出丸石造物実測図 7 (1 / 8 · 1 / 3)

水輪 (82~96)

82~86 は 1 類である。82~84 には種子が刻まれている。82 は欠失する 1 面を除いて、3 面に大きく太い彫りのアが認められる。83 は 4 面に 2 つずつのバとアが、84 は剥落により不明瞭な 1 面を除き、3 面に阿弥陀三尊 (正面キリク・左面サク・右面サ) が認められる。82 には奉籠孔が深く穿たれている。87~90 は 2 類である。いずれも奉籠孔が穿たれているが、掘り方は 82 に比べて浅く粗い。87・88 には種子が認められ、87 は正面にのみ、小さくバが刻まれている。88 は最も残存状況の良い面 (菩提門) を正面として図化しており、剥落した 1 面を除き、バの四転 (正面バン・右面バー?・背面バ) が刻まれている。彫り方は原則、葉研であるが、浅い断面 U 字形の部分もあり、一定していない。91~96 は 3 類で、側辺の張り具合によるバリエーションが認められる。91 は張りが比較的強く、96 は張りが殆ど無く円筒形に近い形状である。92 は正面にのみ、小さく種子バーが刻まれているが、字形からみて、書き順を間違えている可能性が高い。93 は粗く奉籠孔が穿たれている。なお、水輪においてホゾを持つものは無いが、2・3 類については下面を浅く繰り込んでズレ防止の措置を採っている。



第 16 図 西出丸石造物実測図 8 (1 / 5)

地輪 (97~100)

高さ (a) と横幅 (c~e) の比率は様々である。なお、上下の識別が難しいものについては、膨隆して水切りとみられる面を上面として図化している。97は、下面に割り込みが認められる。

b. その他の石塔類 (第6図 101~103)

101 は安山岩製の、恐らくは塔身である。小形の宝篋印塔あるいは笠塔婆の可能性はあるが不確定である。いずれにせよ、上下にホゾがつくことから南北朝期以前の所産とみられる。計測値は、総高 29.1 cm・塔身高 19.1 cm・塔身幅 16.1 cmである。表面は研磨調整を施している。

102 は凝灰岩製の相輪である。宝珠は、頂部が丸く、側辺下位には稜が認められる。請花は省略されている。計測値は、現存高 35.7 cm・宝珠高 12.4 cm・宝珠最大幅 17.8 cmである。表面は平滑ではあるが研磨の痕跡は不明瞭である。

103 は凝灰岩製の板碑である。方柱に近い(奥行きが厚い)形状を呈し、上位に2条の切り込みが認められる。修験者の碑伝から発生したとの説から碑伝形板碑と通称される形態である⁴⁾。計測値は、現存高 42.9 cm・最大幅 26.2 cm・最大厚 18.7 cmである。正面・側面には研磨が認められるが、背面は緩やかに凹凸しており、未調整である。正面には、右に「奉…」、中央に「イ(横位), 五大種子キャ・カ…」、左に「□…」が認められる。左の文字は、上位に「土」がつくもので、年号を表すとみられる。本資料の型式を勘案すれば、「嘉吉」(1441~1444年)の可能性がある。

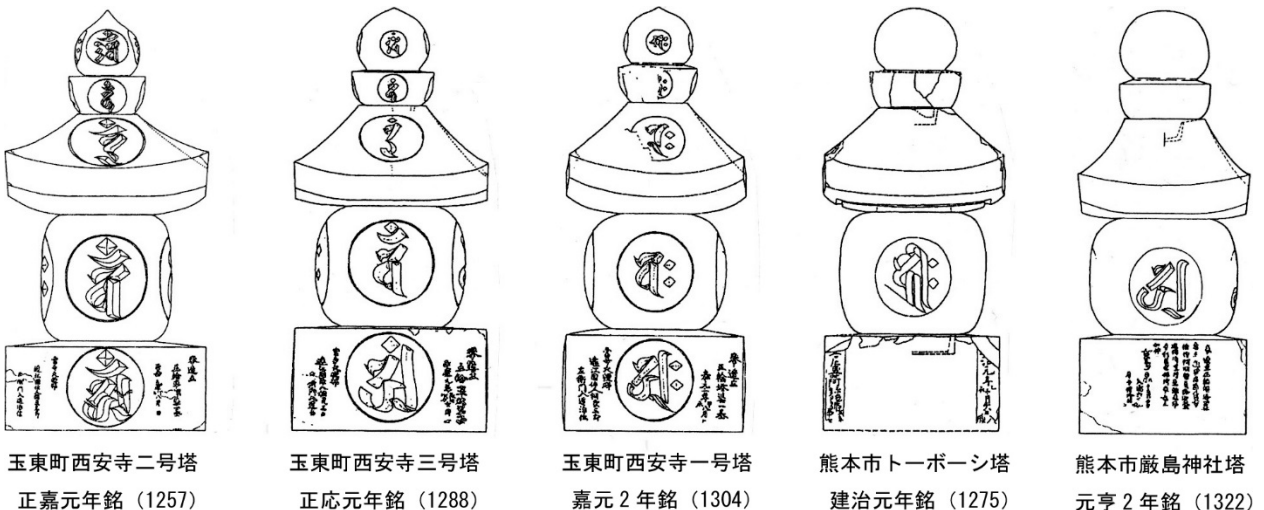
c. 碾臼 (第16図 104・105)

104・105は、多孔質安山岩製の上臼で、ともに軸受の周囲が突起する形態である。摩滅により不明瞭ではあるが、ともに溝(目)の分画は6分割と想定され、溝の方向は正目である。105は、臼面の中心付近に短い放射状の溝が、その周囲に長い溝が刻まれている。計測値は、104が高さ 12.9 cm・復元外径 35.8 cm、105が高さ 9.9 cm・外径 31.2 cmである。

5. 考察

a. 五輪塔の型式的位置付け

本報告資料は石垣の裏込めに使用されたものであり、部材(各輪)ごとに採集されたため、各輪の組み合わせ関係は不明であり、また、記年銘資料も無い。このため、既往研究成果や熊本県内における記年銘資料との対比により、型式的位置付けを行なうこととする。

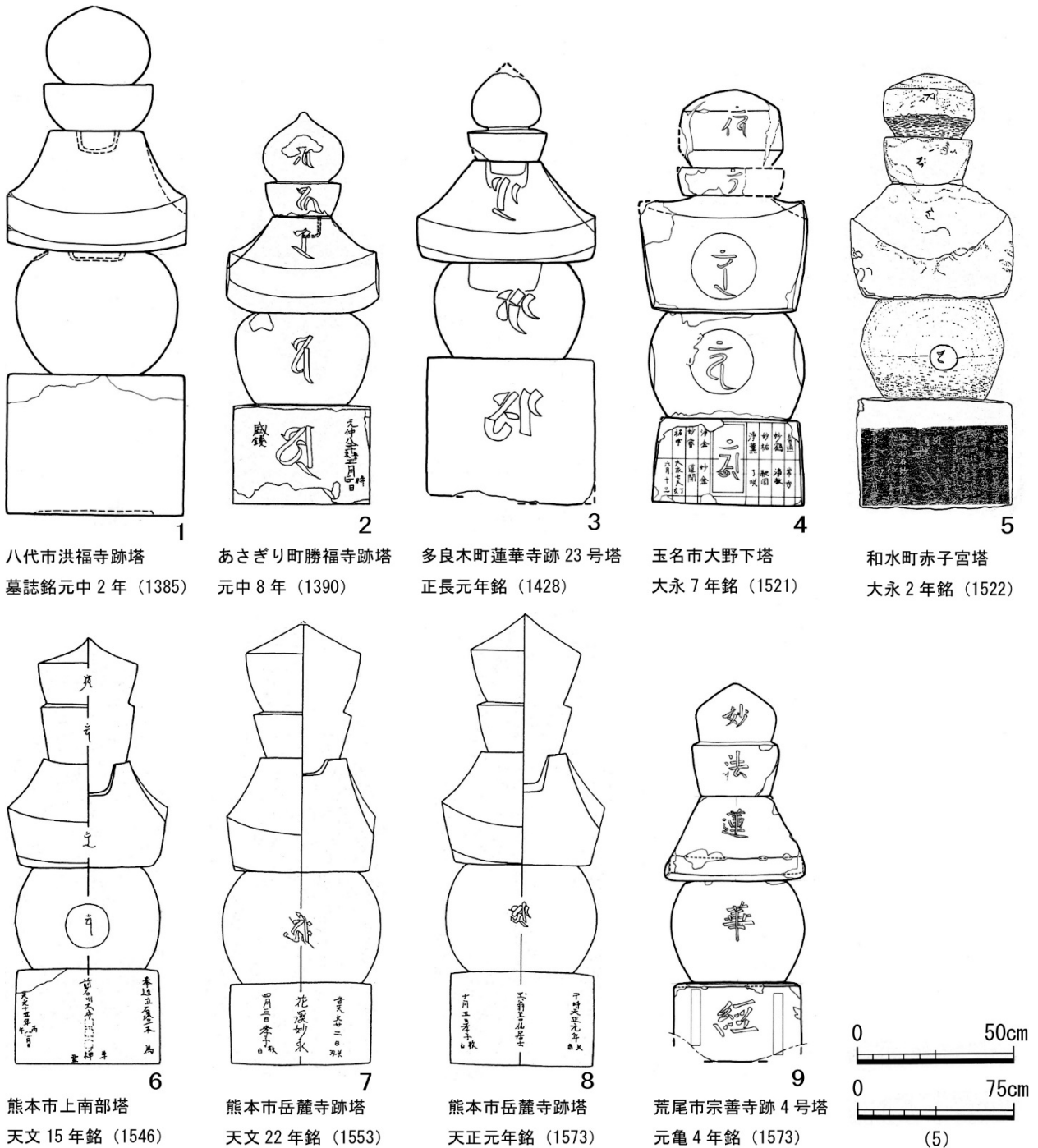


第17図 熊本県北・中部の五輪塔実測図(縮尺不同)

既往研究成果（第17図）

狭川真一氏は、県内中・北部における13・14世紀の石造五輪塔について、玉名郡玉東町西安寺2号塔（正嘉元年銘-1257）を初現とし、火輪軒裏が大きく反り上がる、水輪が棗形を呈するという特徴を指摘し、前者については、木造塔の組物をデフォルメしたところから発生した可能性を示している⁵⁾。確かに、熊本市トーボー五輪塔の火輪をみると、軒裏に組木を簡略化したとみられる表現の溝が彫り込まれている。また、火輪と形状が共通する同地域の宝塔の笠についても、玉名郡和水町江田熊野神社宝塔（貞和5年銘-1349）に組木を表現した段が認められ、その発生要因における狭川氏の見解は肯首される。

前川清一氏は、県内の石造五輪塔の型式変化について、以下のように概述している。鎌倉期は全体的にバランスが良く、西安寺五輪塔の水輪は縦長である。南北朝期は、火輪が腰高になる。戦国期は、火輪の



第18図 熊本県内の対比資料実測図 (1 / 20・1 / 30)

軒口の幅が両端になるほど厚くなり、軒先が反り上る。戦国末から近世初頭には有角五輪塔も出現し、五輪塔の本義が薄れて形骸化した様子がうかがえる⁶⁾。

記年銘資料の紹介（第 18～20 図）

本項では、狭川氏の論考には示されなかった室町・戦国期の五輪塔を紹介し、それらの型式属性を抽出する。同一地域性を評価し得る、熊本県中央～北部の記年資料を扱うものである。ただし、当該期の五輪塔は大量に存在するものの、各輪の組み合わせが本来の状態を保つと判断できる資料、さらに記年銘がある資料となると数は少ない。管見では、15 世紀代のは見出せなかった。そのため、補足資料として、県南部の八代・球磨地方における 14 世紀後半～15 世紀前半の事例を示すこととする。また、宝瓶塔など異形の五輪塔も必要に応じて扱うこととする。以下、第 18～20 図をもとに概述する。

14 世紀後半～15 世紀前半の資料（1～3） 空輪はいずれも均整のとれた宝珠形で、風輪は、1 については側辺が丸味を帯びているが、球磨地方の 2・3 についてはやや直線的である。空輪と風輪の境は大きく括れており、1・3 は最大幅が空輪よりも風輪が大きい。火輪は 14 世紀前半代よりも高い傾向が認められるものの、軒口の幅は中央付近から端部までほぼ同じである。軒裏面の反り上がりは、14 世紀後半の資料（1・2）は真反りで前代を踏襲しているが、15 世紀代前半の資料（3）は中央部が平坦に近く周縁部を反り上がらせるもので、平坦化の傾向がみられる。水輪は、いずれも最大幅が上位にあり、正面観が壺形を呈するもので、特に球磨地方の 2・3 は顕著である。南九州の特徴とされる形状である。1 はホゾは無いものの、上面に浅いホゾ受けを設けており、火輪軒裏面のホゾと組み合わせている。

五大種子は、13 世紀～14 世紀前半の資料に比べると、面に対して小さく彫られている。

16 世紀代の資料（4～13） 当該期の資料は形態差が著しく、現状では 16 世紀のなかでの型式変化を抽出することが難しいため、まとめて扱うこととする。

空輪は、側辺の張りが弱く、縦長のものが多い。上位に稜が認められるものもあり、特に 6～8 の稜は強く張っている。風輪も側辺が直線的であり、明らかに縦長のものも認められる（6・9）。空輪と風輪の境の括れは小さく、粗く削り取る程度で空輪下位に稜が残るもの（4・5）、コ字形の溝を巡らせるだけのもの（11）もある。空輪と風輪の最大径を比べると、殆どにおいて空輪の方が大きい。これらの特徴は、



10 熊本市成道寺塔
天文 5 年銘（1536）

11 宇土市引の花、宝瓶塔
永禄 7 年銘（1564）

12 荒尾市宗善寺跡 6 号塔
天正 8 年銘（1580）

13 荒尾市浄業寺 62 号塔
天文 11 年銘（1542）

第 19 図 熊本県内の対比資料写真 1

製作の粗略化とともに、空輪の団形、風輪の半円形という五輪塔の本義が形骸化していることを示している。火輪は、隅棟線が直線的で、軒口は狭く、中央付近から端部まで幅がほぼ同じなもの(9・10)もあるが、多くの場合、軒口は幅広で、両端になるほど厚く、軒先が反り上っており、これが極端なものも認められる(4・5)。軒裏面の反りは概して弱く、平坦化の傾向が明らかである。水輪は、殆どが側辺の張りが弱く、正面観が太鼓形を呈する。高さが低く扁平な形状のもの(12)もあり、この特徴は、各輪の組合せに疑問がもたれる事例ではあるが、荒尾市浄業寺61～64号塔(全て天文11年銘-1542)な



14 八代市宗覚寺, 加藤忠正塔
慶長12年銘(1607)



15 熊本市泰勝寺跡, 細川藤孝塔
寛永10～14年(1633～37)造立

第20図 熊本県内の対比資料写真2

どにおいて顕著に認められる(13)。水輪の形状が歪み、調整が粗いものも当該期の特徴といえる(5)。

五大種子の彫り方は、14世紀後半～15世紀前半に比べてさらに細く浅く、概して小さい。特に5は明らかに彫り方が雑である。4の火輪の種子(ラの四転)は、幅広な軒口面に彫られている。9は妙法蓮華経が切り葉研彫りにて刻まれている。

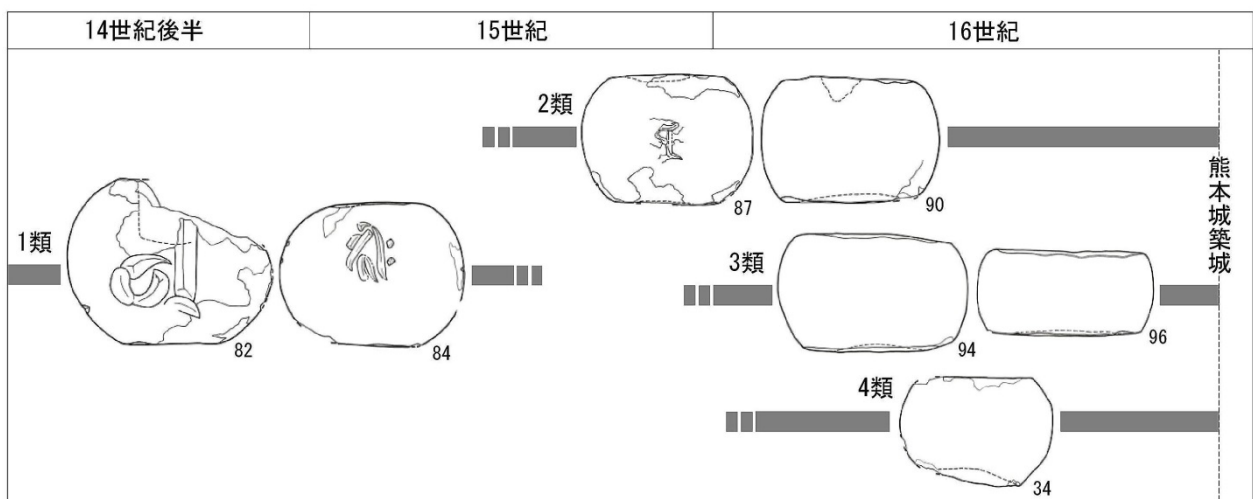
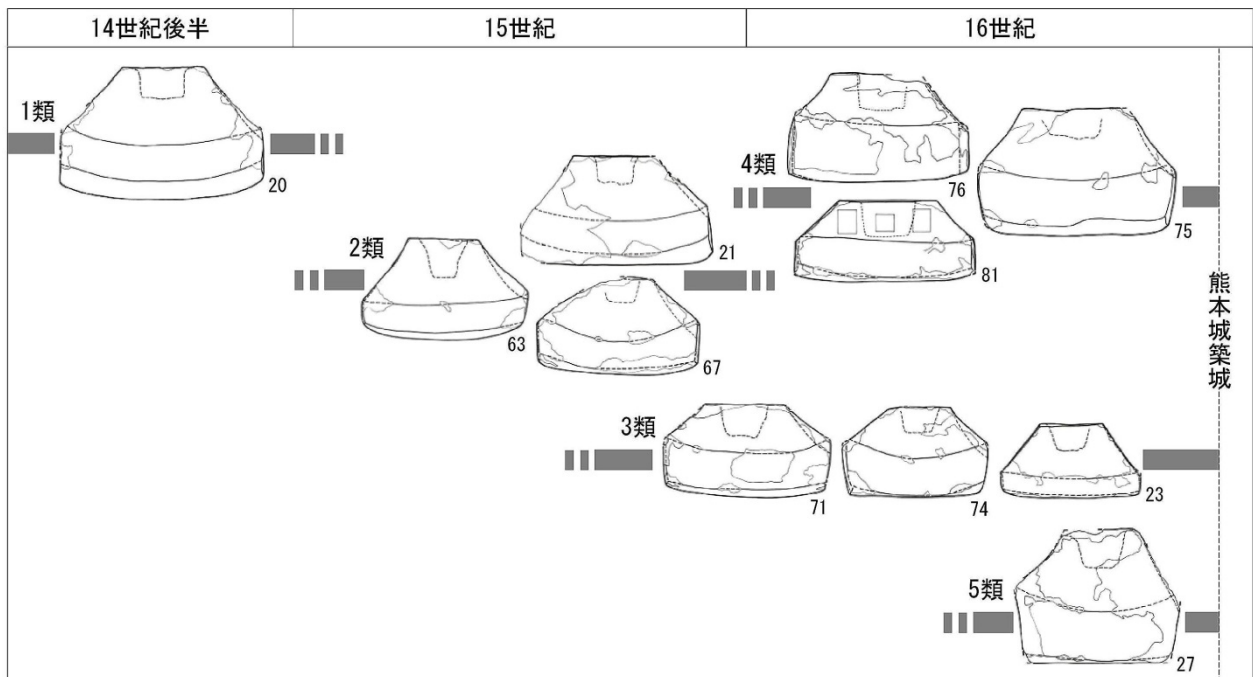
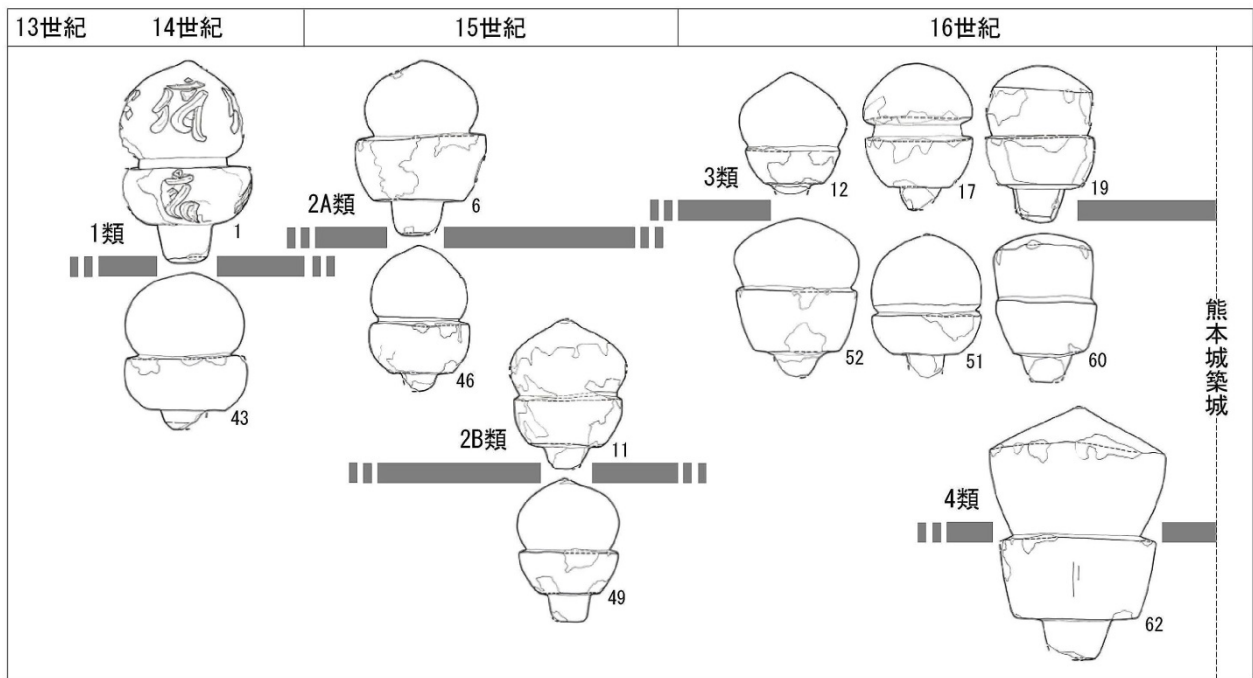
17世紀初頭の資料(14・15) 14は加藤清正息子、忠正墓石とされる五輪塔である(慶長12年銘-1607)。空風輪と火輪については、原則、前代において抽出した型式属性が踏襲されている。すなわち、空輪は側辺下位が直線的でやや縦長の形状であり、風輪の側辺はほぼ直線を呈する。火輪は隅棟線が直線的、軒裏面はほぼ平坦である。正面には妙法蓮華経が切り葉研彫りにて刻まれている。この火輪の特徴は、熊本市泰勝寺跡の細川家四つ御廟の五輪塔のうち、細川忠興を除いた寛永10～14年(1633～1637)の造立と推定される3基においても継承されている(15-細川藤孝五輪塔)。

本報告五輪塔の時間的位置付け(第21図)

上記の知見をもとに、本報告の五輪塔について、概ねではあるが時間的な位置付けを行なう。

空風輪 1類は、概ね14世紀後半以前に位置付けられる。特に1の空輪は頂部を強調しており、種子が大きく刻まれていることも併せて古相を示すものといえる。3類は、概ね16世紀代に位置付けられる。4類は第18図6～8と同形態であることから16世紀中頃～後半に位置付けられ、特徴的な形状は熊本市域の地域性を示すものと考えられる。2類は、1類と3類の間を繋ぐ型式と考えられ、2A類は概ね15世紀代に、2B類は15世紀中頃～16世紀前半に位置付けることが可能である。

火輪 火輪の分類は、形態差が不明瞭であることから、便宜上、軒の最大幅と上面の幅との比率を基準としたものである。そのため、必ずしも時間属性を反映した分類基準とはいえないが、おおよその時期を示すとみられる。1類は、14世紀後半～15世紀前半の形態に合致している。4類は16世紀代に概ね位置付けられ、うち、軒裏面の反りが弱く隅棟線が直線的なものは17世紀代に継続する型式属性とみられる。5類は空風輪4類と組み合わせる形態であり、16世紀代中頃～後半に位置付けられる。2類は1類に後続する型式、3類は2類と4類の間を繋ぐ型式とみられることから、2類は概ね15世紀代に、3類は概ね15世紀後半～16世紀代に位置付けることが可能である。



第 21 図 出土五輪塔の時間的位置付け

水輪 側辺が丸く張るものから、張りが弱いものへと型式変化することが想定され、種子の彫り方の変化（大きく深いものから小さく浅いものへ）もこれに連動している。1類は、2・3類よりも先行する型式であり、特に第12図82は古相を示すものである。形状が橐形を呈するもの、ホゾを認めるものが無いことなどから、概ね14世紀後半～15世紀前半に位置付けられる。2類は1類と3類を繋ぐ型式であり、概ね15世紀中頃～16世紀代に位置付けられ、種子は小さく、彫り方が雑で断面形が一定しないなどの特徴が認められる。3類は扁平な形状から、4類は歪で雑化した形状から、16世紀代に位置付けられる。

地輪 形態差から時間属性を抽出することは難しい。

五輪塔の石材（第22図）

肉眼観察によれば、本報告五輪塔の石材には凝灰岩と安山岩がみられる。凝灰岩は、阿蘇火砕流堆積物が溶結したものであり、安山岩は、熊本市域西側に広がる金峰山塊の噴出物と同定される。ともに市域において採取され、当該地域の石造物の素材として一般的なものである。

五輪塔95点のうち、凝灰岩は77点、安山岩は18点で、凝灰岩が主体をなしており、これは、軟質でより加工しやすい石材が選択されたことが主要因と考えられる。ただし、安山岩についても、触感によるものではあるが、近世の安山岩製石塔類に比べて溶結度の低い石材を用いているように思われる。これは成道寺五輪塔（第19図10）など、市域所在の中世の安山岩製五輪塔についても同様であり、安山岩のなかでも加工技術の適正に応じた石材選択があった可能性を指摘できる。

県内における中世五輪塔の石材について概観すると、具体的な数値化は難しいものの、ほぼ全域で凝灰岩（阿蘇火砕流堆積物）が多くを占めており、このことは特に県北部において顕著である。これに対し、少量ながらも一定量の安山岩使用が認められるのは県央部（熊本・宇土地方）であり、この地域においては、周辺に安山岩石材の産出地が存在している。本報告資料についてみれば、豊富な産出地である金峰山塊が近くにあることが要因となっていることが明らかである。

ちなみに、熊本城下における近世五輪塔は、管見の限りでは、在地産のものは全て安山岩製である。これは、慶長7年（1602）創建とされる加藤家菩提寺の妙永寺に所在する、慶長5年（1600）に没した加藤清正母、聖林院の有角五輪塔（第21図）を嚆矢として、以降、安山岩使用が定着した現象といえる。この慶長5～7年は、熊本城（新城）の築城期にあたり、普請や作事を通して石材加工の技術が進展した時期と考えられる（熊本城は石垣・建造物等の部材に安山岩を使用）。聖林院塔における安山岩使用は、これに連動した、石塔類における硬質石材の加工技術の確立過程を反映したものと捉えることが可能である。

五輪塔の調整

凝灰岩製五輪塔の表面調整は、観察可能なものについては、全てが研磨または平滑である。平滑は、前述のように「滑らかではあるが研磨の痕跡が不明瞭なもの」という意味の表記であり、恐らく本来は研磨であり、凝灰岩製五輪塔の殆どが研磨を施していたとみられる。研磨は、凝灰岩が軟質石材であることから、肌理を潰して表面の剥落を防止するために必要な措置であったと考えられる。一方、安山岩製五輪塔には、痕跡が現れにくい材質によるためか、研磨は2例のみであり、第4図20のように削りのみの調整例もある。これは、凝灰岩に比べて硬質の石材であるため、研磨を施す必然性が乏しかったことを示すと考えられる。



第22図 聖林院塔写真

b. 宝篋印塔「菊鹿型塔身」の位置付け（第23図）

第6図37の宝篋印塔の塔身は、通常は笠につく階段状作り出しが塔身の上位に付く形状である。これは主に熊本県北部に分布する独特の型式で、その主要分布域を冠して菊鹿型塔身と呼称されている。以下、型式設定者の前川清一氏の集成・考察⁷⁾を概述する。熊本県山鹿市・菊池市を中心に43例が知られており、分布の北限は福岡県八女郡の3例、南限は熊本市の1例である。記年銘資料は23例で、正平16年(1361)～天正12年(1584)があり、15世紀中頃～16世紀代に盛行している。

上記の前川氏の集成に加え、筆者の踏査成果によれば他3例がある(後述)。これを加えると本資料は47例目となり、記年銘「至徳元年」(1384)は3番目に古い事例である。階段状作り出しは3段である。この段数には1段～3段のものがあり、3段は古い記年銘資料に多い傾向が認められる。すなわち、本資料の段の数は記年銘の妥当性を証左する属性と評価できる。記銘の「吉アン(種子)」は造立者の戒名を示すとみられ、こうした漢字と種子を組み合わせた戒名は、県内では人吉市の旅館敷地内に所在する多層塔(球磨郡あさぎり町勝福寺跡古塔碑群から移設)基礎の銘に類例があるという⁸⁾。

本資料は、熊本市内では2例目の菊鹿型塔身で、既往の事例(1例目)は中央区出水の国分寺境内に所在する(第23図1)⁹⁾。これら熊本市における2例は主要分布域である県北の菊鹿地域から明らかに離れて存在していることから、菊鹿地域で製作されたものが持ち込まれたとみるのが妥当であろう。参考として、出水所在の菊鹿型塔身資料(塔身のみ)について概述しておく。凝灰岩製で、上位に2段の階段状作り出しをもつ。塔身各面には月輪内に金剛界四方仏、西面に「文明六年/キリク/七月九日」、南面に「當寺再口/タラク/顛朝上口」が刻まれている。これらの記銘から、文明6年(1474)に、恐らくは顛朝上人が当寺(真言系寺院か)の再興事業を記念し、このことを主張するために造立したものと考えられる。

ところで、本資料(第6図37)の記年銘「至徳元年」(1384)は北朝の年号である。この時期は南北朝内乱の末期にあたり、永徳元年(1381)には今川了俊により隈部城(菊池市)など菊池氏の主要な拠点は陥落し、現在の熊本市域の諸城にも北朝方が侵攻している。南朝方内部にあっても、永徳2年に菊池氏当主である武朝への憤懣や主導権をめぐる争いが勃発するなど、その退勢は明らかであった。さらに、至徳3年(1386)には、託麻郡の有力国人である詫磨氏に対する遵行・安堵の書状4通が、今川了俊により発



- 1: 熊本市出水(国分寺境内)
- 2・3: 菊池市七城町大字岡田
(伝菊池兼朝墓所内)
- 4: 菊池市玉祥寺(玉祥寺境内)

第23図 菊鹿型塔身写真

給されている¹⁰⁾。この時には現在の市域は北朝方による制圧が完了し、論功賞が行なわれたと考えられる。そうした時期に、菊池氏の本貫である菊鹿地域において製作され、現在の市域に持ち込まれたであろう本資料が北朝の年号を用いていることは示唆に富む。想像を逞しくすれば、本資料の記年銘は、上記のような社会情勢を反映したものと捉えることができよう。

ちなみに、前川氏作成の菊鹿型塔身集成表から漏れているもので、筆者踏査により確認した事例が3基ある。以下に列記しておく(第23図)。

2: 菊池市七城町大字岡田(伝菊池兼朝墓所内)、塔身のみ、凝灰岩製、四面にアの四転、記銘「逆修圓仙竺心/永享二年(1430)庚口七月廿六カ…」※口は申、階段状作り出し2段

3: 菊池市七城町大字岡田(伝菊池兼朝墓所内)、塔身のみ、凝灰岩製、四面にアの四転、記銘「口貞禪口/十二月廿日」、階段状作り出し2段

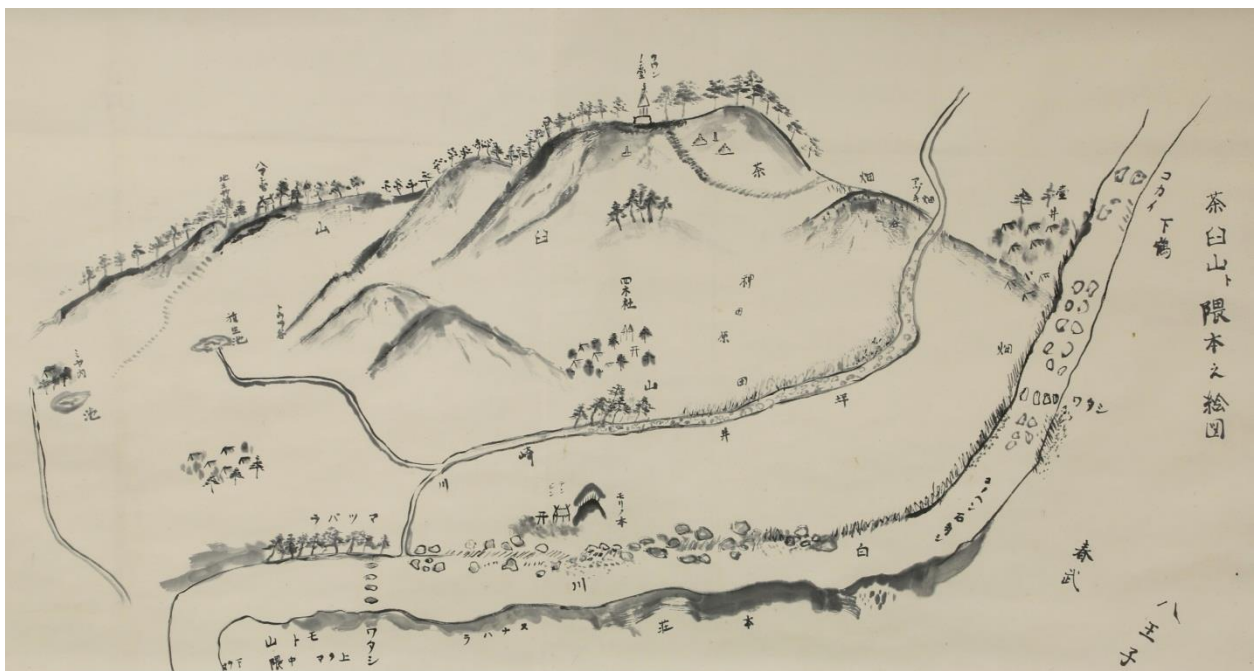
4: 菊池市玉祥寺(玉祥寺境内)、伝肥後国守護菊池為那宝篋印塔、凝灰岩製、記銘「尖活仍勢」、階段状作り出し2段、「尖活仍勢」は菊池為那の戒名・長享2年(1488)没、没年と型式に矛盾は無い

c. 中世における熊本城の景観(第24図)

資料採集の経緯、時期的な位置付けから、本報告の石塔類は熊本城(新城)の築城時、「石狩り」によって石垣裏込めに使用されたことが明らかである。14世紀代後半以前のものであるが、多くは15・16世紀代に位置付けられ、このことは、15・16世紀代において造立階層が拡がり(低層化し)、大量の石塔が製作されたことを反映している。

それでは、本報告の石塔類は何処から供給されたのであろうか。このことについて参考となるのが「茶臼山ト隈本之絵図」(第24図)である。掲載図は、原図の保存状態が悪いために、1978年に撮影した写真をもとに模写したものである。文明年間(15世紀後半)以前とみられる茶臼山一帯、すなわち現在の熊本城周辺が描かれているが、江戸時代に中世史料を使用しながら作製されたものと考えられている¹¹⁾。そのため細部については信憑性に疑問がもたれるものではあるが、中世の景観を描いたものは本絵図しかなく、以下、これをもとに検討することとする。

注目されるのは、丘陵頂部(現在の本丸から西出丸付近)において「クワンノン堂」が、そこに通じる坂道の周辺に4基の墓のようなものが描かれていることである。後者は、石組みの基壇と縦長の方柱形の



第24図 「茶臼山ト隈本之絵図」

※熊本博物館蔵

石塔を描いたもののようにみえる。石塔のようなものは、中世板碑・笠塔婆などの可能性も捨てきれないが、製作時期を勘案すれば、江戸時代に盛行する角柱形の墓石とみるのが妥当であろう。作製当時における作者の石塔・墓石に対するイメージが生んだ誤りと考えられる。それでも、江戸時代において、築城以前、この地に石塔群が存在していたという情報（恐らくは墓地という認識）が反映されていることは重視しなければならない。「クワンノン堂」、すなわち観音堂は、宝形造のようにみえる建物である。これは、単なる持仏堂とみるより、立地状況等を勘案すれば、観音像を安置した墓地の中心施設たる墳墓堂と捉えるのが妥当であろう。

以上から、一次史料とはいえないものの、本絵図には石垣裏込めに使用された石塔類の主要供給地が描かれていると考える。そのあり方は、茶臼山丘陵上位の平坦地に墳墓堂があり、そこに通じる参道沿いの、恐らくは斜面を造成した空間に、石塔を伴う石組墓群あるいは塚墓群が形成された景観が想定される。

なお、当該地の中世寺院については、史料は無いものの、古瓦の出土や天守前における礎石の存在から想定される古代寺院（茶臼山廃寺）¹²⁾ が継続した可能性や、本絵図に描かれている「八幡宮」（藤崎宮）や「四木社」（世継宮）の神宮寺があった可能性が指摘される。

造墓主体者などの背景を想定することは難しいが、参考として文献史の成果を挙げ、その一助とする。村上豊喜氏は、南北朝統一後からしばらくの間、現在の熊本市域においては北朝方として活動した詫磨氏の支配が強化されたとしている。その一方、茶臼山一帯は、15世紀後半においては出田氏の支配地域であった可能性を示している。後者の関連史料として「藤崎宮番次第写」¹³⁾・「菊池重朝書状」¹⁴⁾を挙げ、文明4年（1472）、藤崎宮の宿直番の惣政所に「出田山城守」が任じられていること、藤崎宮造営に際し「出田山城守」が責任者として「宮内荘」（茶臼山周辺に比定される）の給人を指導する立場にあって、それは15世紀後半における守護菊池重朝からも承認されていることを指摘している¹⁵⁾。以上、本報告の石塔類の由来を考えるうえで重要な知見であるため紹介しておく。

おわりに

本稿は、『熊本城発掘調査報告書 1－飯田丸の調査－』の補遺として、飯田丸ほかの石垣の裏込めに使用された石造物について報告した。熊本城内には、同様の経緯から出土したとみられる石造物が各所に散在しており、階段・排水溝などにおいて石塔の部材が転用された状況も確認される¹⁶⁾。その他、経緯が不明なものを含め、板碑・六地藏石幢・石灯笼等も多く存在する。今後、これらについても機を捉えて報告し、同時に適正な管理を行なっていきたい。

本報告の作成に際しては、前川清一氏・狭川真一氏から丁寧なご指導をいただいた。また、関連資料収集に際しては、荒尾市教育委員会・熊本市肥後国分寺・宇土市教育委員会・八代市文化まちづくり課のご協力をいただいた。末筆ながら記して深甚の謝意を表します。

註

- 1) 熊本城調査研究センター『熊本城発掘調査報告書 1－飯田丸の調査－』2014
- 2) 下記文献によれば、8分割のものは、その主要分布域である中国・四国・関西・中部地方からの搬入品である可能性があるという。
前川清一「南関城石垣の転用石及び石工について」『南関町文化財調査報告第12集 南関城跡（鷹ノ原城跡）IV』南関町教育委員会 2011
- 3) 熊本市教育委員会『特別史跡熊本城跡 西出丸（奉行丸跡） 二の丸御門跡 南大手門跡・南坂 石垣保存修理工事・発掘調査報告書』1999

- 4) 下記文献によれば、大分県・宮崎県に多く分布し、最古のものは、熊本県球磨郡あさぎり町の弘安 5 年 (1282) 銘資料とされる。
- 前川清一「板碑」『菊鹿の石造物』菊鹿町教育委員会 1995
- 5) 狭川真一「西安寺五輪塔群の形態的位置」『肥後国西安寺五輪塔群』玉東町教育委員会 2007
- 狭川真一「九州〈五輪塔〉」『中世石塔の考古学』高志書院 2012
- 6) 前川清一「金石遺物 概説」『新熊本市史 史料編 第一巻 考古資料』熊本市 1996 ほか
- 7) 前川清一「宝篋印塔」『菊鹿の石造物』菊鹿町教育委員会 1995
- 8) 前川清一氏のご教示による。
- 9) 青木勝士「国分寺石造物群」『新熊本市史 史料編 第一巻 考古資料』熊本市 1996
- 10) 阿蘇品保夫「今川了俊の肥後制圧」『新熊本市史 通史編 第二巻 中世』熊本市 1998
- 11) 森下 巧「茶臼山ト隈本之絵図」『新熊本市史 別編 第一巻 絵図・地図 上 中世・近世』熊本市 1993
- 富田絃一「江戸時代の地誌の成果の茶臼山古図」『定本 熊本城』郷土出版斜 2008
- 12) 鈴木 喬「茶臼山廃寺」『熊本市北部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会 1971
- 13) 「藤崎宮番次第写」『新熊本市史 史料編 第二巻 古代・中世』熊本市 1993
- 14) 「菊池重朝書状」『新熊本市史 史料編 第二巻 古代・中世』熊本市 1993
- 15) 村上豊喜「千葉城と出田氏 (一)」『熊本城』熊本城顕彰会 2012 ほか
- 16) 前川清一「熊本城内の石造物群」『新熊本市史 史料編第一巻 考古資料』熊本市 1996

「5. 考察」の挿図出展

- 第 17 図 玉東町教育委員会「西安寺五輪塔群の形態的位置」『肥後国西安寺五輪塔群』2007
- 第 18 図 1: 筆者実測。ただし、ホゾ等は下記文献を参考に加筆した。熊本県教育委員会『玉泉寺—古墳と中・近世寺院の調査—』1980 2: 佐藤 誠『九州の石塔調査資料集 1~150 附九州外石塔 1~10』1989 芸文社 3: 下記文献図を筆者トレース。熊本県教育委員会『蓮華寺跡・相良頼景館跡』1977 4: 筆者実測。 5: 下記文献図を一部改変。菊水町『菊水町史 史料編』2006 6~8: 熊本市『新熊本市史 史料編 第一巻 考古資料』1996 9: 筆者実測。

補遺

校了後、平成 28 年 4 月の熊本地震によって崩壊した熊本城東十八間櫓の石垣裏込めのなかから「永正十三 (1516) / □月十四」(□は正あるいは三) 銘を刻む凝灰岩製五輪塔火輪がみつかった。高さ (a) 26.5 cm、上面幅 (h) 25.5 cm、最大幅 (k) 36.9 cm で、最大幅値に対する上面幅値の比率が高く、本報告資料のなかでは 4 類に近い。また、軒裏面がほぼ平坦である、隅軒口の幅が広い、棟線が直線的であるなどの形状も 4 類に共通している。本報告において示した出土五輪塔の年代観を補足・証左する記年銘資料として提示しておく。



東十八間櫓石垣出土、永正 13 年銘火輪

第1表 五輪塔観察表

※数値：単位cm。

括弧内の数値：端部が欠失しているも、残存部から推定が十分に可能な場合は、括弧内に推定値を記している。

飯田丸出土五輪塔

空風輪

報告No.	実測No.	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	石材	調整
1	31	37.2	17.7	0.2	10.5	7.2	(22.5)	16.2	—	13.3	10.3	1.8	安山岩	平滑
2	23	27.7	13.9	1.0	8.9	3.5	18.8	15.1	21.0	12.8	8.2	0.0	安山岩	不明
3	35	—	15.0	0.8	8.9	—	21.6	16.8	22.7	13.3	9.7	0.0	凝灰岩	削り・平滑
4	20	—	(17.2)	1.2	9.2	—	21.9	17.3	22.6	13.6	8.0	~1.0	凝灰岩	研磨
5	28	—	16.4	1.0	10.2	—	20.4	16.7	(22.2)	13.8	—	1.4	凝灰岩	削り・平滑
6	37	32.4	13.9	0.4	11.6	6.6	20.6	17.6	23.1	16.4	9.8	0.0	凝灰岩	研磨
7	17	28.3	14.0	0.8	8.0	4.2	19.7	15.5	(20.1)	14.1	8.0	0.0	凝灰岩	研磨
8	25	20.2	10.6	0.5	7.4	1.8	(17.1)	14.5	16.9	(11.0)	7.7	~0.7	凝灰岩	平滑
9	38	—	13.1	0.7	7.6	—	—	16.5	19.7	12.4	—	0.0	凝灰岩	平滑
10	33	28.8	13.5	0.7	8.0	6.0	19.6	16.9	—	—	9.8	~0.7	凝灰岩	研磨
11	19	(27.2)	13.6	0.6	8.2	3.9	(21.2)	17.9	19.7	13.2	8.9	~0.7	凝灰岩	研磨
12	22	—	13.5	1.0	6.0	—	19.6	16.4	17.2	10.7	7.7	0.0	凝灰岩	不明
13	18	—	10.4	0.8	4.8	—	17.8	15.3	(15.6)	10.5	—	0.0	安山岩	平滑
14	27	24.6	13.2	0.8	6.2	4.0	21.5	19.1	20.3	(13.7)	9.4	0.0	凝灰岩	研磨
15	32	—	14.3	0.7	10.5	—	22.3	19.3	(21.0)	(14.7)	—	0.0	凝灰岩	研磨
16	21	21.1	11.1	1.0	7.2	1.8	15.4	13.7	—	(13.6)	6.2	~1.0	凝灰岩	平滑
17	36	27.2	11.3	0.9	8.8	4.2	19.8	16.6	19.4	11.0	7.6	2.0	凝灰岩	削り・平滑
18	3	—	—	1.3	12.3	6.8	(25.1)	22.3	(26.5)	(19.7)	10.5	0.0	安山岩	研磨
19	29	28.9	12.8	0.5	8.8	6.3	(19.1)	17.3	(19.6)	—	9.6	0.0	凝灰岩	研磨

火輪

番号	実測No.	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	石材	調整
20	12	24.5	14.4	6.6	3.4	(5.8)	(7.4)	14.8	14.8	—	(36.7)	37.0	安山岩	削り
21	9	20.2	12.1	6.3	1.8	5.4	5.6	(13.9)	—	—	—	34.8	凝灰岩	平滑
22	5	19.6	10.9	6.5	1.2	2.1	(2.9)	—	—	—	—	34.4	凝灰岩	削り・研磨
23	15	14.6	(10.9)	—	—	—	—	(12.1)	12.2	—	—	27.0	安山岩	平滑
24	39	12.7	8.0	2.2	2.5	(1.2)	4.1	(14.4)	14.7	—	(36.4)	27.3	安山岩	削り・平滑
25	4	16.7	11.7	4.0	1.0	—	(2.1)	(17.2)	(17.2)	—	(29.9)	32.8	凝灰岩	研磨
26	13	14.4	7.3	(6.2)	(0.9)	—	—	—	—	—	—	28.0	凝灰岩	研磨
27	8	25.7	15.8	9.6	0.3	—	—	(14.0)	(14.0)	—	—	—	凝灰岩	研磨

水輪

番号	実測No.	a	b	c	d	石材	調整
28	41	21.6	18.1	29.1	16.0	安山岩	不明
29	7	21.2	13.9	28.6	15.8	安山岩	平滑
30	11	25.0	(19.0)	32.4	19.4	凝灰岩	平滑
31	6	22.1	—	32.2	24.7	凝灰岩	研磨
32	1	19.2	26.8	33.5	(24.4)	凝灰岩	研磨
33	10	25.7	—	(40.0)	—	凝灰岩	研磨
34	2	19.6	(20.2)	27.9	—	凝灰岩	研磨

地輪

番号	実測No.	a	b	c	d	e	石材	調整
35	16	19.3	1.3	—	33.3	—	凝灰岩	研磨
36	14	16.9	—	(32.9)	34.7	(34.3)	凝灰岩	平滑

西出丸五輪塔
空風輪

報告No.	実測No.	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	石材	調整
42	56	27.4	12.6	0.5	8.6	4.6	17.1	12.8	—	—	8.1	1.0	安山岩	平滑
43	33	28.7	15.3	0.6	9.4	3.7	21.9	16.8	(21.5)	14.3	—	0.0	凝灰岩	平滑
44	1	—	11.8	0.5	9.8	—	16.5	15.3	(18.5)	13.7	8.0	0.0	凝灰岩	研磨
45	57	—	12.9	1.2	7.0	—	(18.2)	14.7	(18.1)	10.3	—	0.0	凝灰岩	平滑
46	29	26.5	13.1	0.8	8.6	3.1	17.8	15.0	17.8	11.2	6.6	0.7	凝灰岩	平滑
47	27	26.4	12.3	1.2	8.5	3.7	19.3	16.3	18.7	11.4	7.5	0.0	凝灰岩	平滑
48	26	(26.4)	(14.3)	1.1	13.5	4.3	20.5	17.1	19.2	13.3	9.0	0.0	凝灰岩	研磨
49	21	(26.0)	(13.0)	0.5	7.5	4.9	18.7	15.3	18.2	10.9	8.0	0.0	凝灰岩	研磨
50	30	26.7	12.2	0.7	7.8	4.2	22.1	18.8	21.3	12.2	9.6	0.0	凝灰岩	研磨
51	24	—	13.2	1.6	7.9	—	20.0	17.7	(19.9)	12.1	7.1	0.0	凝灰岩	研磨
52	34	29.3	12.7	0.8	11.1	4.1	22.8	19.5	22.0	15.4	9.5	0.0	凝灰岩	研磨
53	32	27.3	14.7	0.8	9.0	3.0	—	17.0	(19.3)	(13.4)	8.1	0.0	凝灰岩	研磨
54	20	28.9	13.2	1.5	9.2	5.2	—	—	—	14.3	11.0	0.0	安山岩	不明
55	23	—	(12.6)	0.8	6.4	—	19.3	16.3	18.7	(12.9)	9.4	1.1	凝灰岩	研磨
56	28	(19.8)	(11.4)	1.1	4.7	2.4	17.9	15.5	16.4	11.3	6.6	0.0	安山岩	平滑
57	22	27.9	13.1	0.4	8.8	5.4	20.9	18.4	20.6	16.3	8.0	0.0	凝灰岩	研磨
58	31	23.8	12.7	0.8	8.4	1.6	20.7	17.3	(19.4)	(15.9)	6.0	0.0	凝灰岩	平滑
59	19	30.9	12.4	1.3	13.8	3.3	23.7	22.2	23.7	15.7	11.3	0.0	凝灰岩	平滑
60	2	27.6	11.9	1.0	8.9	5.1	18.3	16.9	18.3	17.9	9.3	0.0	凝灰岩	平滑
61	36	34.0	17.5	0.8	12.1	3.7	25.3	23.3	25.0	(13.6)	9.9	0.0	凝灰岩	研磨
62	49	(46.2)	(23.4)	0.7	14.9	7.1	32.0	23.1	(23.5)	22.2	12.8	0.0	凝灰岩	研磨

火輪

報告No.	実測No.	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	石材	調整
63	13	18.9	12.4	5.1	1.4	(4.2)	3.2	12.6	12.6	(29.8)	(28.8)	30.4	安山岩	平滑
64	37	20.4	15.3	4.1	1.2	—	3.7	—	—	—	32.5	33.5	安山岩	平滑
65	52	26.7	20.2	5.5	1.0	6.1	2.4	—	—	—	—	41.0	凝灰岩	研磨
66	50	24.8	16.6	7.0	1.1	8.4	5.0	12.9	12.9	(36.6)	38.3	(38.5)	凝灰岩	研磨
67	4	18.3	12.2	—	—	—	(2.8)	—	—	(29.2)	—	29.9	凝灰岩	平滑
68	18	12.9	11.9	—	—	(5.4)	2.7	12.5	14.9	—	(31.0)	(33.4)	凝灰岩	平滑
69	15	19.1	10.4	6.8	1.9	—	4.2	(11.8)	13.9	—	—	30.1	凝灰岩	研磨
70	12	(20.0)	10.3	7.1	(2.6)	(9.1)	(4.1)	(14.8)	14.8	(29.4)	—	31.2	凝灰岩	研磨
71	11	17.3	9.1	6.8	1.5	(8.1)	(3.1)	14.7	14.7	(29.9)	(28.9)	30.5	凝灰岩	研磨
72	46	18.9	9.3	8.5	0.8	(8.1)	3.1	14.8	15.0	(32.5)	—	33.7	凝灰岩	研磨
73	51	18.2	10.3	6.7	1.1	(8.2)	(2.5)	(14.3)	14.9	(29.5)	—	30.7	凝灰岩	研磨
74	35	16.6	9.5	6.9	0.3	(7.1)	3.0	11.7	11.7	—	—	26.6	凝灰岩	研磨
75	41	23.3	13.2	8.5	1.8	—	3.6	(19.5)	(19.5)	—	(32.9)	36.1	凝灰岩	研磨
76	53	20.0	9.6	10.4	0.0	—	—	—	—	—	—	33.0	凝灰岩	平滑
77	40	18.9	11.3	6.2	1.5	—	—	(19.0)	(19.4)	(29.6)	—	(31.2)	凝灰岩	研磨
78	47	19.3	12.7	6.2	0.5	—	—	—	—	—	—	34.6	凝灰岩	平滑
79	3	19.3	10.0	8.2	0.9	7.2	5.6	18.6	(18.6)	34.6	36.5	37.2	凝灰岩	不明
80	9	19.1	11.5	6.7	0.7	—	2.7	(16.7)	(16.7)	—	32.3	35.0	凝灰岩	平滑
81	16	15.4	7.9	(6.5)	0.9	(5.3)	(2.6)	17.6	17.6	(31.6)	(30.7)	33.0	凝灰岩	研磨

水輪

番号	実測No.	a	b	c	d	石材	調整
82	43	30.9	—	37.1	17.4	安山岩	研磨
83	6	20.1	19.4	28.0	14.2	安山岩	平滑
84	58	25.7	17.4	33.8	—	安山岩	研磨

番号	実測No.	a	b	c	d	石材	調整
85	59	27.5	(21.7)	37.4	—	凝灰岩	研磨
86	60	25.7	15.8	35.3	21.2	安山岩	平滑
87	55	24.2	20.8	31.1	19.2	凝灰岩	平滑
88	54	27.8	—	37.2	—	凝灰岩	研磨
89	42	23.5	23.6	33.6	(22.7)	凝灰岩	研磨
90	25	23.2	24.0	32.6	(23.5)	凝灰岩	研磨
91	8	—	19.1	37.3	—	凝灰岩	研磨
92	5	20.2	(26.5)	33.7	(21.5)	凝灰岩	研磨
93	14	18.6	20.3	29.7	(23.5)	凝灰岩	平滑
94	7	22.6	28.0	34.7	25.3	凝灰岩	平滑
95	17	16.3	24.4	29.5	—	凝灰岩	研磨
96	44	15.8	27.3	32.2	(27.6)	凝灰岩	研磨

地輪

番号	実測No.	a	b	c	d	e	石材	調整
97	39	29.7	1.8	(37.3)	39.7	—	凝灰岩	平滑
98	48	24.7	1.1	—	38.2	(31.5)	凝灰岩	平滑
99	45	23.4	2.0	—	29.0	—	凝灰岩	研磨
100	38	18.1	0.5	37.8	40.9	(40.0)	安山岩	平滑

IV. 資料紹介

熊本城跡出土の近代陶磁器一括資料 —新出資料の紹介—

美濃口 雅朗

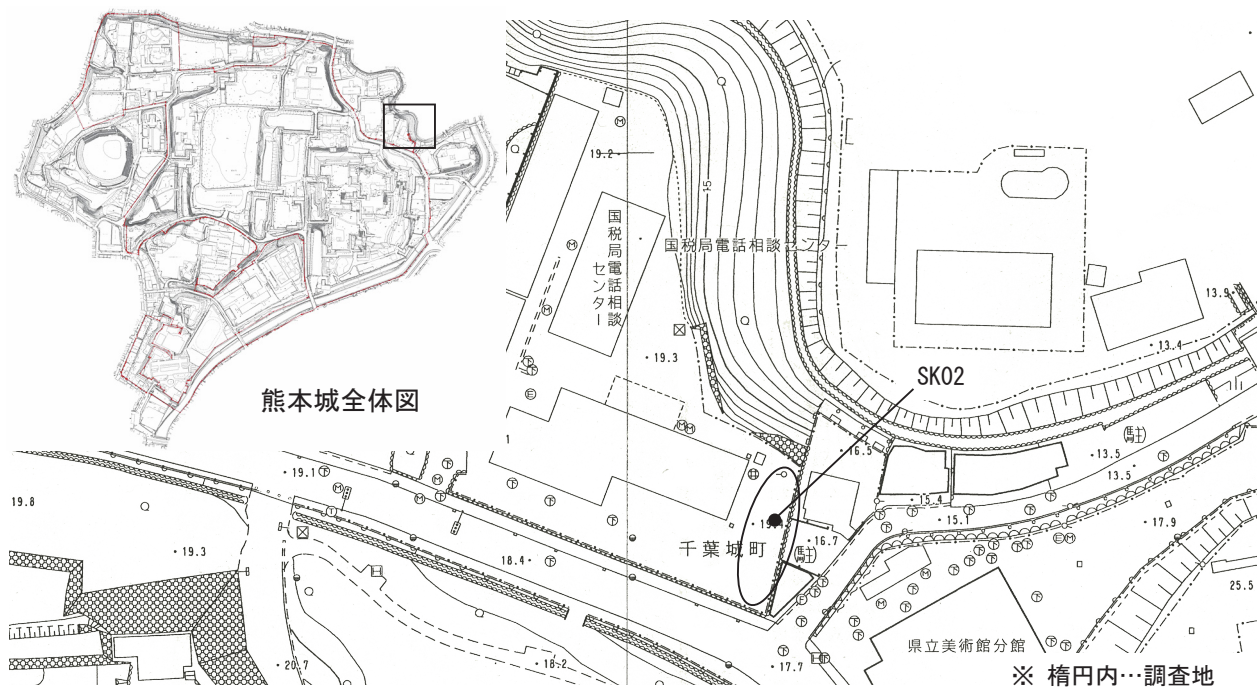
1. はじめに (第1図)

熊本城二の丸に所在する熊本国税局跡地¹⁾の東・北辺の石垣は、特別史跡熊本城跡の範囲に指定されているが、東辺の石垣については、平成28年4月の熊本地震により下1～3段を残して崩壊した。所有者である九州財務局は、同月、隣接する民有地に流出した石垣石材を回収し、崩壊した石垣背後の法面を整形して保護シートで覆うなどの応急措置を行なった。その後、九州財務局は現状の石垣背後の法面を緩やかな安定勾配(35度)に削平・整形する工事を計画し、現状変更の許可を採るとともに、計画範囲のうち特別史跡外(周知の埋蔵文化財包蔵地)に及ぶ工事については文化財保護法第94条に基づく埋蔵文化財発掘の通知を熊本市文化振興課に提出した。

これを受け、熊本市文化振興課・熊本城調査研究センターは事前の確認調査を実施した。調査期間は平成28年12月12日～平成29年1月20日である。調査は4箇所のトレンチを設け、結果、江戸時代の瓦片や江戸時代後期(18世紀末～19世紀中頃)の陶磁器片を含む造成土とこれを掘り込む遺構を検出した。この調査概要は、本書Ⅱ章に記載している。本稿は、確認調査においてSK02とした土坑から出土した近代初期に位置付けられる良好な一括資料のうち、主に陶磁器について報告・検討するものである。

2. 遺構・出土状況の概要 (第1・2図)

SK02は3トレンチと呼称したトレンチ壁断面において、重機により現代の表土を掘削する際、誤って全体の約1/4を掘り飛ばしてしまったことで検出した。18世紀末～19世紀中頃の陶磁器片を含む造成土を掘り込み、上部には現代の表土が被覆している。平面略楕円形を呈するとみられ、規模は長軸約90cm・短軸推定50cm、深さは約40cmである。



第1図 確認調査区位置図(縮尺任意)

掘り込み内からは、上位に金属製品が、下位に陶磁器がまとまって出土した。掘り込み上位においては2点の鉄製の桶形容器（以下鉄製桶）が横位で、ややずれながらも重なった状態で出土した。上側の鉄製桶は土圧により胴部が大きく割れており、その中には鉄製ペグ11点・銅製の工具柄1点が挿し込まれていた。下側の鉄製桶には鉄製轡・缶詰が納められていた。錆化により固着しているため数量は不明であるが、現状から轡は10点以上、缶詰は2点とみられる。他、桶外から鉄製の缶詰・留金具・締金具・不明品（弧状に曲げた細長い板など）が出土した。陶磁器は、概ね3～6点が重ねられ、これが1組となって掘り込み基底に正位・逆位・横位で密に重なり、並べられた状態で出土した。点数は碗14・皿64・合子蓋2・合子身2で、いずれも完形、あるいは部分的な欠良品である。以上の出土状況から、本資料はデポ（埋納形態）であり、一括性が評価されるものといえる。



第2図 3 トレンチ SK02 検出状況写真

なお、出土品の殆どは、調査終了時、トレンチ断面から引き抜いたものである。当初は、さほどの数量ではないと考えて引き抜き始めたが、結果として上記のような多量の出土となってしまった。

3. 出土品の報告

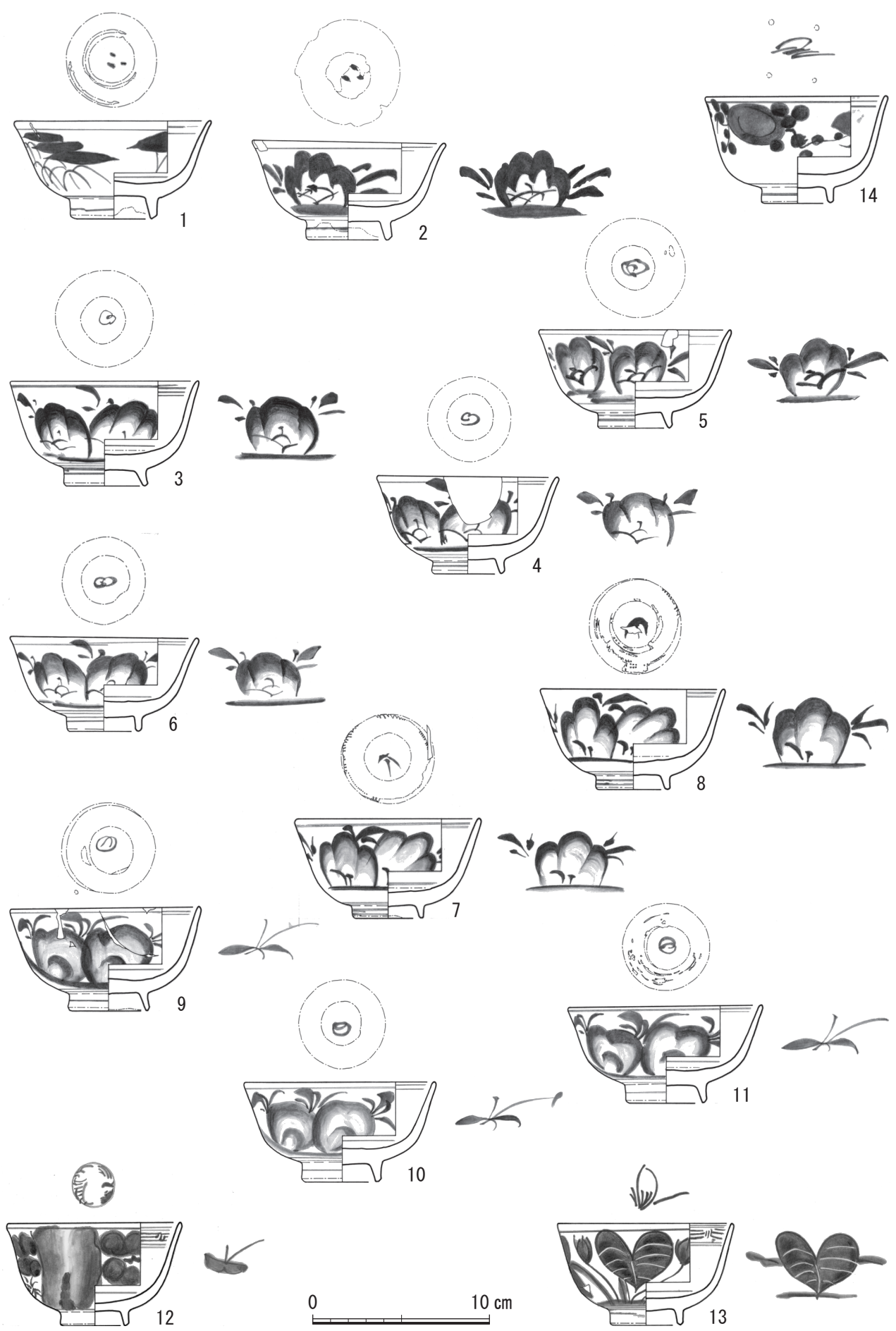
a. 陶磁器の報告（第3～10図、第1表）

焼成形態は全て磁器で、器種は碗（14点）・皿（64点）・合子蓋（2点）・合子身（2点）である。本稿では出土全点を報告する。器種構成の偏在性が顕著であるが、これは本資料を埋納するに際しての選択であったと理解される。合子身2点のみは白磁、他は全て染付で、染付顔料は19・20が呉須、他は全て化学コバルトを用いている。絵付け方法は、15～17が主文様型紙摺りで、他は全て手描きである。なお、本資料には器形・文様等が共通する同一形態品が多く認められ、以下、この点に着目しながら記すこととする。

1～14は端反碗で、3～8・9～11は、それぞれ外面文様が共通する。3～8は主文2輪・客文1輪の草花、9～11は主文2輪の草花、客文蝶を描いている。

15～78は皿で、全て口径12～14cm台に収まる所謂四寸皿である。15～18は蛇の目凹形高台を呈する輪花皿で、うち15～17の主文は型紙摺り絵付けである。15・16は、意匠は同じ藤・亀甲繫ぎであるが、単位数が異なっている。19～68は口縁部が玉縁状を呈しており、これはロクロ挽き時に上端を折り返して成形したものである。19・20は前述のように、この2点のみが呉須を用い（ともに発色はにぶい緑色）、内面格子文を描いている。21～23は内面全体に草花文が描かれ、内底にはハマ跡が認められる。一方、他の玉縁状口縁皿は全て内底蛇の目釉剥ぎを施す。24～41は内面に半花状の花弁と草文（？）を描くものである。24～39は3単位で、うち37～39の草文は他に比べて太く描かれており、本数も少ない。40・41は2単位である。44～50は内面に葡萄文が描かれており、うち44～49は2単位、50は3単位である。51～67の内面文様は、3単位の略化した松・遠山文である。69～78は素口縁皿で、内底の蛇の目釉剥ぎと文様は51～67と共通している。なお、24～78の蛇の目釉剥ぎ皿の内面中央の文様には、簡易な草花文、3つの点を三角に配して略化した花文を描いたとみられる文様、意匠不明の文様の3種が認められる。

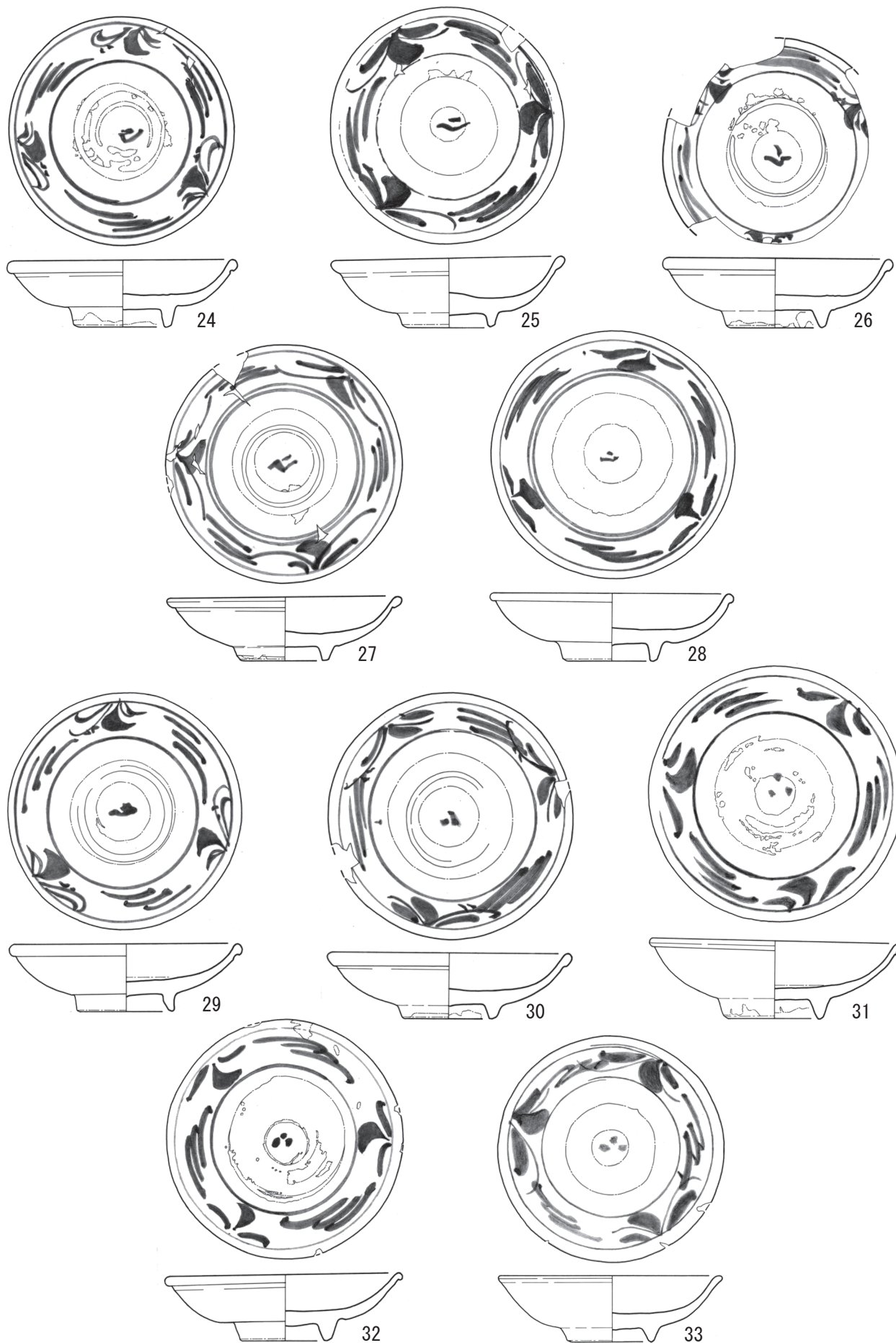
79～82は合子で、80～82の露胎部には赤色顔料の付着が認められる。79・80は蓋で、上面に東屋山水文を描いている。81・82は白磁の身であるが、外面に偶発的に付着した化学コバルト斑が認められる。



第3图 SK02 出土陶磁器实测图1 (1/3)

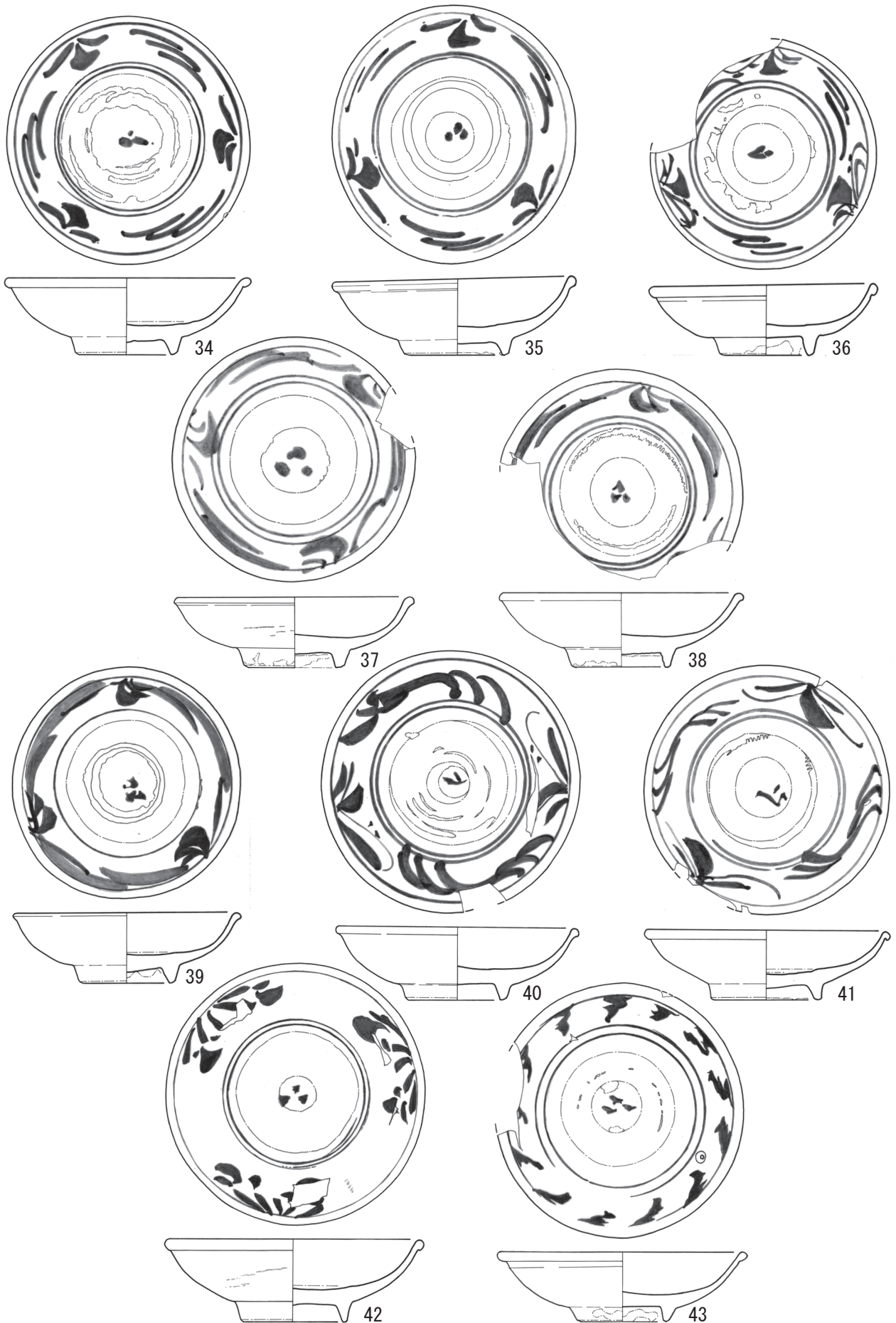


第4图 SK02 出土陶磁器实测图2 (1/3)



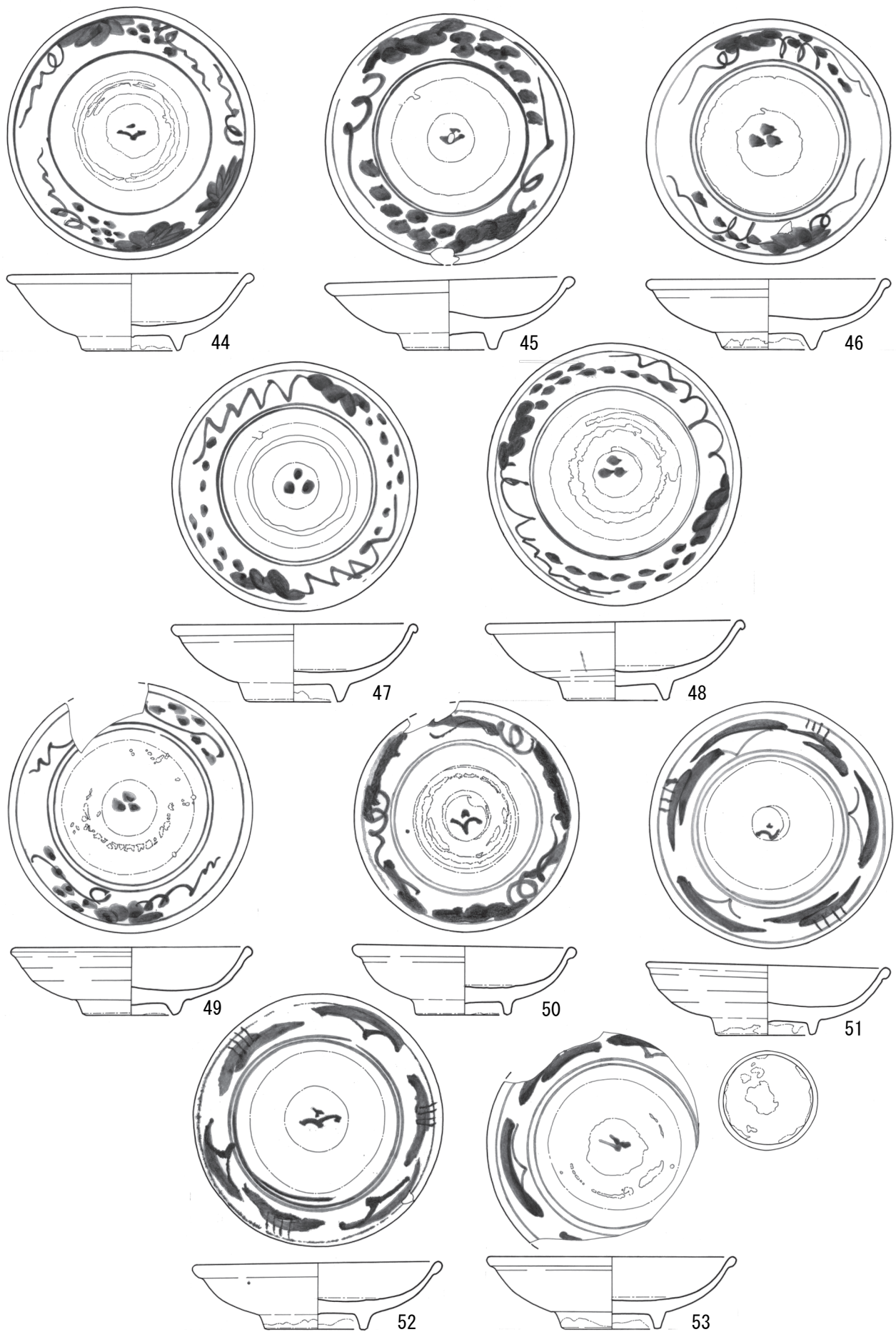
第5图 SK02 出土陶磁器実測图3 (1/3)

0 10 cm



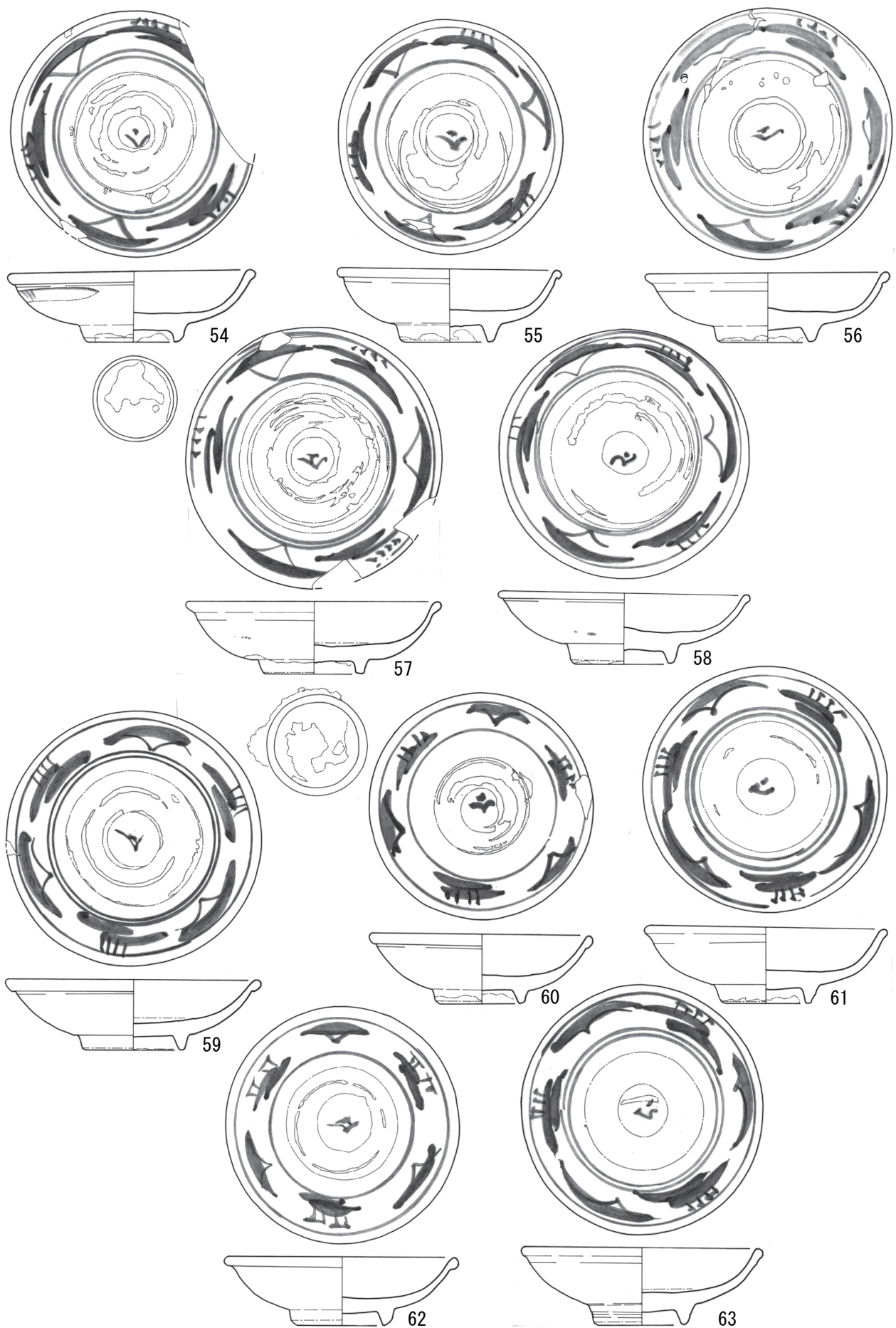
第6图 SK02 出土陶磁器实测图4 (1/3)

0 10 cm



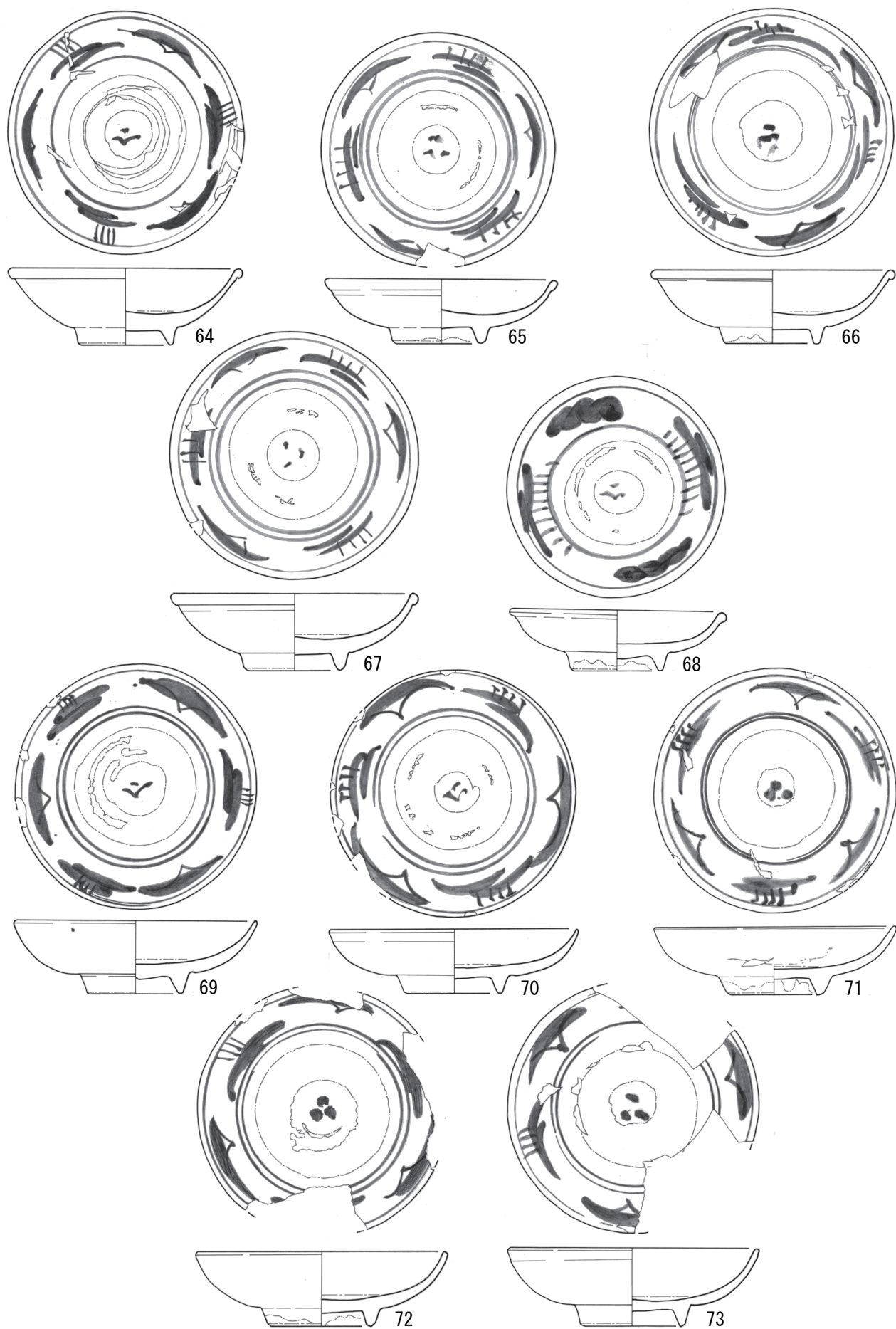
第7图 SK02 出土陶磁器实测图5 (1/3)

0 10 cm



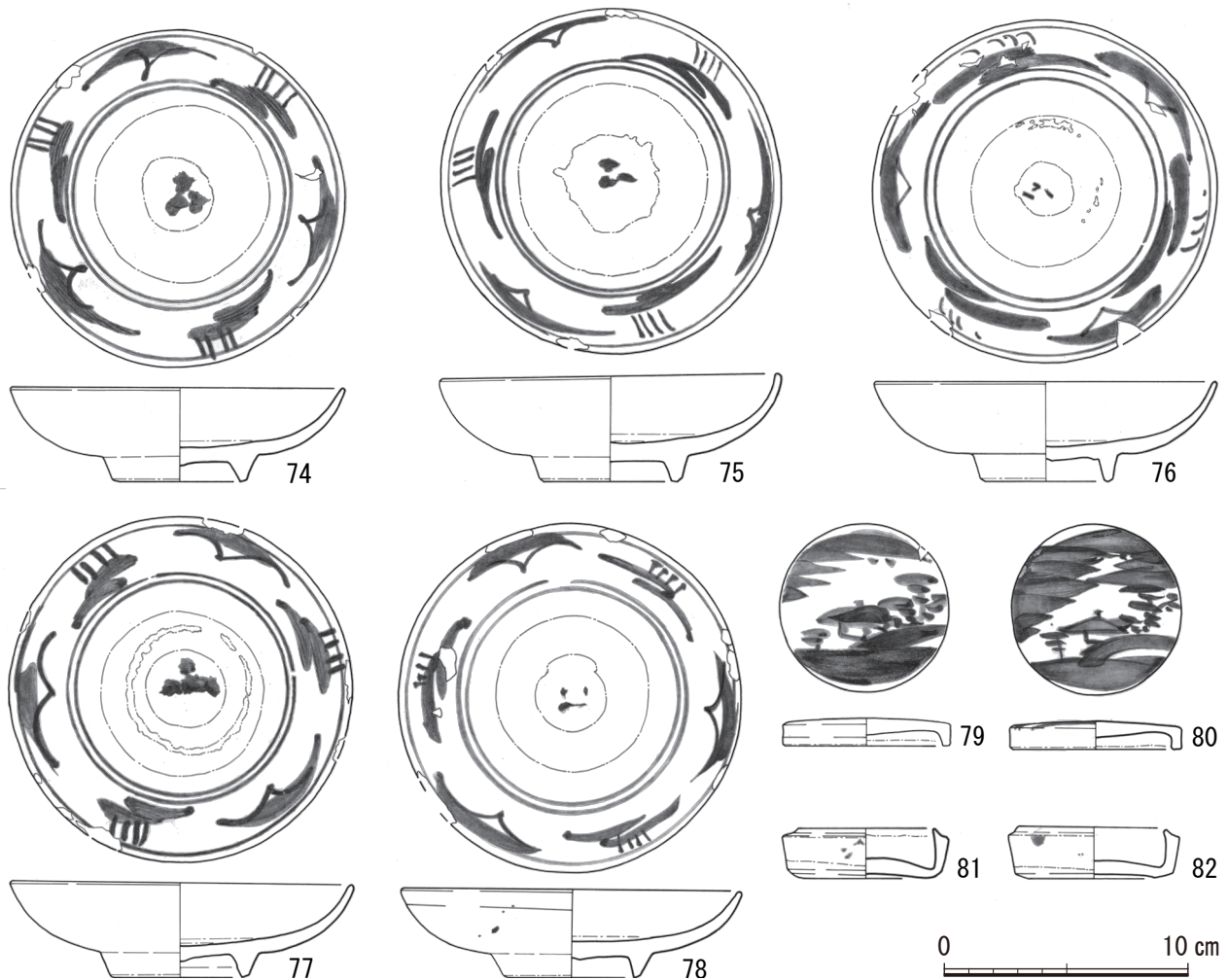
第8图 SK02 出土陶磁器実測図6 (1/3)

0 10 cm



第9図 SK02 出土陶磁器実測図7 (1/3)

0 10 cm



第10図 SK02 出土陶磁器実測図8 (1/3)

第1表 SK02 出土陶磁器観察表

報告No.	実測No.	器種	法量 (単位cm, 括弧内は復元値)	産地	備考
1	13	磁器染付端反碗	口径 11.0, 高台径 4.2, 器高 5.6	網田	高台内側面の釉爛れ, 化学コバルト, 外面笹・松文?, 内底粗い蛇の目釉剥ぎ・略化した花文
2	10	磁器染付端反碗	口径 10.8, 高台径 4.5, 器高 5.6	網田?	胎土灰色味, 高台側面 (内外とも)・内底中央に釉爛れ, 化学コバルト, 外面草花文, 内底粗い蛇の目釉剥ぎ・略化した花文
3	1	磁器染付端反碗	口径 10.5, 高台径 4.5, 器高 5.9	肥前系	化学コバルト, 外面草花文, 内底蛇の目釉剥ぎ・略化した花文
4	4	磁器染付端反碗	口径 10.1, 高台径 3.8, 器高 5.5	肥前系	化学コバルト, 外面草花文, 内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ・略化した花文
5	3	磁器染付端反碗	口径 10.6, 高台径 4.0, 器高 5.5	肥前系	化学コバルト, 外面草花文, 内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ・略化した花文
6	2	磁器染付端反碗	口径 10.5, 高台径 4.0, 器高 5.3	肥前系	化学コバルト, 外面草花文, 内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ・略化した花文
7	7	磁器染付端反碗	口径 10.2, 高台径 3.7, 器高 5.6	肥前系	化学コバルト, 外面草花文, 内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ, 内底文様不明
8	6	磁器染付端反碗	口径 10.3, 高台径 3.9, 器高 5.7	肥前系	化学コバルト, 外面草花文, 内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ, 内底文様不明
9	5	磁器染付端反碗	口径 10.5, 高台径 4.3, 器高 5.8	肥前系	化学コバルト, 外面草花・蝶文, 内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ・略化した花文
10	8	磁器染付端反碗	口径 10.6, 高台径 4.2, 器高 5.6	肥前系	化学コバルト, 外面草花・蝶文, 内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ・略化した花文
11	9	磁器染付端反碗	口径 10.8, 高台径 4.2, 器高 5.5	肥前系	化学コバルト, 外面草花・蝶文, 内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ・略化した花文
12	12	磁器染付端反碗	口径 9.4, 高台径 3.4, 器高 5.0	肥前系	化学コバルト, 外面松・笹・蝶文, 内面口縁部雷文・底部松竹梅円形文
13	14	磁器染付端反碗	口径 9.9, 高台径 3.9, 器高 5.7	肥前系	化学コバルト, 外面蓮文 (葉脈墨弾き), 内面口縁部雷文・底部草文
14	11	磁器染付端反碗	口径 10.1, 高台径 3.8, 器高 6.0	肥前系	化学コバルト, 外面花樹文, 内底四足ハマ跡・岩波文
15	20	磁器染付輪花皿	口径 13.6, 高台径 8.1, 器高 3.7	肥前系	蛇の目凹形高台, 高台見込み (露胎部) にチャツ跡, 化学コバルト, 外面略化した唐草文 (1条の圏線に文様付加)・化学コバルト斑目立つ, 内面型紙刷り・3単位の藤・亀甲繫ぎ文
16	19	磁器染付輪花皿	口径 14.1, 高台径 8.6, 器高 4.2	肥前系	蛇の目凹形高台, 高台内側面～見込み外周アルミナ塗布, 化学コバルト, 外面略化した唐草文 (1条の圏線に文様付加), 内面型紙刷り・2単位の藤・亀甲繫ぎ文

報告No.	実測No.	器種	法量 (単位cm, 括弧内は復元値)	産地	備考
17	21	磁器染付輪花皿	口径 13.0, 高台径 8.1, 器高 3.8	肥前系	蛇の目凹形高台, 高台内側面～見込み外周アルミナ塗布, 口紅, 内面白化粧+化学コバルト・型紙刷り・柘榴文
18	22	磁器染付輪花皿	口径 14.7, 高台径 8.6, 器高 4.0	肥前系	蛇の目凹形高台, 高台内側面～見込み外周アルミナ塗布・チャツ跡, 内面化学コバルト・蘭文
19	27	磁器染付玉縁皿	口径 12.6, 高台径 5.2, 器高 3.4	網田	高台側面 (内外とも) 釉爛れ, 内底蛇の目釉剥ぎ, 内側面・内底面とも格子文 (呉須・にぶい暗緑色の発色)
20	26	磁器染付玉縁皿	口径 13.4, 高台径 5.0, 器高 3.8	網田	高台側面 (内外とも) 釉爛れ, 内底蛇の目釉剥ぎ, 内側面・内底面とも格子文 (呉須・にぶい緑色の発色)
21	23	磁器染付玉縁皿	口径 12.2, 高台径 5.0, 器高 3.4	網田?	高台側面 (内外とも) 釉爛れ, 内底 4 足ハマ跡 (器面が挟れる), 内面化学コバルト・草花文
22	25	磁器染付玉縁皿	口径 13.1, 高台径 5.9, 器高 4.2	肥前系	内底 5 足ハマ跡, 内面化学コバルト・草花文
23	24	磁器染付玉縁皿	口径 13.3, 高台径 5.5, 器高 4.1	肥前系	内底 5 足ハマ跡, 外面化学コバルト斑目立つ, 内面化学コバルト・草花文
24	32	磁器染付玉縁皿	口径 12.2, 高台径 4.7, 器高 3.7	網田?	高台側面 (内外とも)・内底に釉爛れ, 内底粗い蛇の目釉剥ぎ, 化学コバルト, 内側面・内底とも草花文
25	30	磁器染付玉縁皿	口径 12.4, 高台径 4.6, 器高 3.8	網田?	内底釉爛れ・蛇の目釉剥ぎ, 化学コバルト, 内側面・内底とも草花文
26	31	磁器染付玉縁皿	口径 (12.1), 高台径 5.1, 器高 3.8	網田?	高台側面 (内外とも) 釉爛れ, 内底粗い蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の高台片が溶着, 化学コバルト, 内側面・内底とも草花文
27	33	磁器染付玉縁皿	口径 12.5, 高台径 4.6, 器高 3.5	網田?	高台側面 (内外とも)・内底に釉爛れ, 内底蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の高台圧痕明瞭, 化学コバルト, 内側面・内底とも草花文
28	29	磁器染付玉縁皿	口径 13.0, 高台径 4.8, 器高 3.7	肥前系	内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ, 化学コバルト, 内側面・内底とも草花文
29	35	磁器染付玉縁皿	口径 12.3, 高台径 5.0, 器高 3.7	肥前系	高台量付砂 (焼台の胎土か) 付着, 内底粗い蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の高台圧痕付近のみアルミナ付着, 化学コバルト, 内側面・内底とも草花文
30	38	磁器染付玉縁皿	口径 12.9, 高台径 4.8, 器高 3.6	網田?	高台側面 (内外とも) 釉爛れ, 内底蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の高台圧痕明瞭, 化学コバルト, 内側面草花文・内底略化した花文
31	43	磁器染付玉縁皿	口径 13.5, 高台径 5.1, 器高 4.2	網田?	高台側面 (内外とも) 釉爛れ, 内底粗い蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の量付が接した部分のみアルミナ付着, 化学コバルト, 内側面草花文・内底略化した花文
32	39	磁器染付玉縁皿	口径 12.6, 高台径 4.7, 器高 3.6	肥前系	内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ, 化学コバルト, 内側面草花文・内底略化した花文
33	42	磁器染付玉縁皿	口径 12.0, 高台径 4.3, 器高 3.6	肥前系	玉縁小さい, 内底蛇の目釉剥ぎ, 化学コバルト, 内側面草花文・内底略化した花文
34	44	磁器染付玉縁皿	口径 13.3, 高台径 5.3, 器高 4.3	肥前系	内底粗い蛇の目釉剥ぎ, 化学コバルト, 内側面草花文・内底略化した花文
35	37	磁器染付玉縁皿	口径 13.2 ~ 13.9, 高台径 5.3, 器高 4.2	肥前系	高台量付砂 (焼台の胎土か) 付着, 内底蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の高台圧痕明瞭, 化学コバルト, 内側面草花文・内底略化した花文
36	36	磁器染付玉縁皿	口径 12.2, 高台径 4.7, 器高 3.9	網田?	高台側面 (内外とも)・内底に釉爛れ, 内底蛇の目釉剥ぎ, 化学コバルト, 内側面草花文・内底文様不明
37	40	磁器染付玉縁皿	口径 12.9, 高台径 5.1, 器高 3.9	網田?	高台側面 (内外とも)・見込みに釉爛れ, 内底蛇の目釉剥ぎ, 化学コバルト, 内側面草花文・内底略化した花文, 外面体部に意図せずに付いた横～斜線あり
38	41	磁器染付玉縁皿	口径 13.2, 高台径 5.0, 器高 4.1	網田?	高台内側面・見込みに釉爛れ, 内底粗い蛇の目釉剥ぎ, 化学コバルト, 内側面草花文・内底略化した花文
39	45	磁器染付玉縁皿	口径 12.2, 高台径 4.9, 器高 4.9	網田?	高台内側面釉爛れ, 内底粗い蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の高台圧痕明瞭, 化学コバルト, 内側面草花文・内底文様不明
40	34	磁器染付玉縁皿	口径 13.2, 高台径 5.2, 器高 4.1	肥前系	内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ, 化学コバルト, 内側面・内底とも草花文
41	28	磁器染付玉縁皿	口径 13.2, 高台径 5.9, 器高 3.9	肥前系	高台量付砂 (焼台の胎土か) 付着, 内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ, 化学コバルト, 内側面・内底とも草花文
42	46	磁器染付玉縁皿	口径 14.0, 高台径 5.7, 器高 4.6	肥前系	内底蛇の目釉剥ぎ, 化学コバルト, 内側面草花文・内底略化した花文, 外面体部に意図せずに付いた横～斜線あり
43	54	磁器染付玉縁皿	口径 13.5, 高台径 4.8, 器高 3.9	網田?	高台側面 (内外とも)・内底中央に釉爛れ, 内底蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の量付が接した部分のみアルミナ付着, 化学コバルト, 内側面捻花文?・内底略化した花文, 体部に焼成前の穴
44	47	磁器染付玉縁皿	口径 13.4, 高台径 5.1, 器高 4.3	網田?	高台内側面釉爛れ, 内底粗い蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の高台圧痕付近のみアルミナ付着, 化学コバルト, 内側面葡萄文・内底草花文
45	48	磁器染付玉縁皿	口径 13.5, 高台径 4.9, 器高 3.9	肥前系	内底粗い蛇の目釉剥ぎ, 化学コバルト, 内側面葡萄文・内底草花文
46	50	磁器染付玉縁皿	口径 13.1, 高台径 4.9, 器高 3.9	網田?	高台側面 (内外とも) 釉爛れ, 内底蛇の目釉剥ぎ, 化学コバルト, 内側面葡萄文・内底略化した花文
47	51	磁器染付玉縁皿	口径 13.3, 高台径 5.0, 器高 4.3	網田?	高台内側面釉爛れ, 内底蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の高台圧痕明瞭, 化学コバルト, 内側面葡萄文・内底略化した花文
48	49	磁器染付玉縁皿	口径 14.0, 高台径 5.5, 器高 4.3	肥前系	内底粗い蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の高台圧痕明瞭, 化学コバルト, 内側面葡萄文・内底略化した花文, 外面体部に意図せずに付いた縦線あり
49	52	磁器染付玉縁皿	口径 12.9, 高台径 4.9, 器高 3.8	肥前系	高台量付砂 (焼台の胎土か) 付着, 内底蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の量付が接した部分のみアルミナ付着, 化学コバルト, 内側面葡萄文・内底略化した花文
50	53	磁器染付玉縁皿	口径 12.0, 高台径 5.0, 器高 3.8	肥前系	高台量付砂 (焼台の胎土か) 付着, 内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ (濃淡あり), 化学コバルト, 内側面葡萄文・内底草花文
51	59	磁器染付玉縁皿	口径 13.2, 高台径 5.0, 器高 3.9	網田	高台側面 (内外とも)・見込み釉爛れ, 内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底草花文

報告No.	実測No.	器種	法量 (単位cm, 括弧内は復元値)	産地	備考
52	63	磁器染付玉縁皿	口径 13.4, 高台径 5.3, 器高 3.8	網田	高台側面 (内外とも) 釉爛れ, 内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底草花文
53	69	磁器染付玉縁皿	口径 (13.5), 高台径 5.1, 器高 4.0	網田	高台側面 (内外とも) 釉爛れ, 内底粗い蛇の目釉剥ぎ+アルミナ (重ねた個体の畳付が接した部分はアルミナ剥げ), 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底草花文
54	60	磁器染付玉縁皿	口径 13.3, 高台径 5.1, 器高 3.9	網田	高台側面 (内外とも)・見込み釉爛れ, 内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底草花文, 外面体部に別個体の釉・化学コバルトが融着
55	61	磁器染付玉縁皿	口径 12.0, 高台径 4.2, 器高 4.1	網田	高台側面 (内外とも) 釉爛れ, 内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ・重ねた個体の高台片が溶着, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底草花文
56	62	磁器染付玉縁皿	口径 13.2, 高台径 5.2, 器高 3.9	網田	高台側面 (内外とも) 釉爛れ, 内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ・重ねた個体の高台 (高台径小) 圧痕明瞭, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底草花文
57	57	磁器染付玉縁皿	口径 13.8, 高台径 5.3, 器高 4.0	網田	高台側面 (内外とも)・見込み釉爛れ, 内底粗い蛇の目釉剥ぎ+アルミナ・重ねた個体の高台圧痕明瞭, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底草花文
58	58	磁器染付玉縁皿	口径 13.5, 高台径 5.3, 器高 3.9	網田	高台畳付砂 (焼台の胎土か) 付着, 内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ (重ねた個体の畳付が接した部分はアルミナ剥げ), 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底草花文
59	55	磁器染付玉縁皿	口径 13.8, 高台径 5.4, 器高 3.9	網田	高台畳付砂 (焼台の胎土か) 付着, 内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ・重ねた個体の高台片が溶着, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底草花文
60	66	磁器染付玉縁皿	口径 12.0, 高台径 4.5, 器高 3.9	網田?	高台側面 (内外とも) 釉爛れ, 内底粗い蛇の目釉剥ぎ, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底草花文
61	68	磁器染付玉縁皿	口径 13.2, 高台径 4.6, 器高 4.2	網田?	高台側面 (内外とも) 釉爛れ, 内底粗い蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の畳付が接した部分のみアルミナ付着, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底草花文
62	64	磁器染付玉縁皿	口径 12.6, 高台径 4.8, 器高 3.8	肥前系	内底蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の畳付が接した部分のみアルミナ付着, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底草花文
63	67	磁器染付玉縁皿	口径 12.9, 高台径 4.8, 器高 4.3	肥前系	内底蛇の目釉剥ぎ, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底草花文
64	65	磁器染付玉縁皿	口径 12.6, 高台径 4.9, 器高 4.3	肥前系	内底粗い蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の高台圧痕明瞭, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底草花文
65	72	磁器染付玉縁皿	口径 12.6, 高台径 4.8, 器高 3.6	網田?	高台側面 (内外とも) 釉爛れ, 内底蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の畳付が接した部分のみアルミナ付着, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底略化した花文
66	71	磁器染付玉縁皿	口径 13.1, 高台径 5.1, 器高 4.1	網田?	高台外側面釉爛れ, 内底蛇の目釉剥ぎ, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底略化した花文
67	70	磁器染付玉縁皿	口径 13.3, 高台径 5.2, 器高 4.3	肥前系	内底蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の畳付が接した部分のみアルミナ付着, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底略化した花文
68	56	磁器染付玉縁皿	口径 11.6, 高台径 4.9, 器高 3.4	網田?	高台側面 (内外とも) 釉爛れ, 内底粗い蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の畳付が接した部分のみアルミナ付着, 化学コバルト, 内側面東屋・遠山文, 内底草花文
69	73	磁器染付皿	口径 13.5, 高台径 5.2, 器高 4.1	肥前系	内底蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の畳付が接した部分のみアルミナ付着, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底草花文
70	74	磁器染付皿	口径 13.7, 高台径 5.3, 器高 3.6	肥前系	内底蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の畳付が接した部分のみアルミナ付着, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底草花文
71	76	磁器染付皿	口径 13.3, 高台径 4.7, 器高 3.9	網田?	高台側面 (内外とも)・見込み釉爛れ, 内底蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の畳付が接した部分のみアルミナ薄く付着, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底略化した花文, 外面体部に意図せずに付いた横線あり
72	79	磁器染付皿	口径 13.6, 高台径 5.6, 器高 4.1	網田?	高台側面 (内外とも) 釉爛れ, 内底粗い蛇の目釉剥ぎ, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底略化した花文
73	80	磁器染付皿	口径 13.8, 高台径 5.3, 器高 4.3	肥前系	内底粗い蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の畳付が接した部分のみアルミナ付着, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底略化した花文
74	77	磁器染付皿	口径 13.5, 高台径 4.9, 器高 3.8	肥前系	内底蛇の目釉剥ぎ, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底略化した花文
75	78	磁器染付皿	口径 13.6, 高台径 5.5, 器高 4.3	肥前系	内底粗い蛇の目釉剥ぎ, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底略化した花文
76	81	磁器染付皿	口径 13.8, 高台径 5.0, 器高 4.1	肥前系	内底粗い蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の畳付が接した部分のみアルミナ付着, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底文様不明
77	82	磁器染付皿	口径 13.8, 高台径 5.2, 器高 3.8	肥前系	内底粗い蛇の目釉剥ぎ・重ねた個体の畳付が接した部分のみアルミナ付着, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底文様不明
78	75	磁器染付皿	口径 13.3, 高台径 4.7, 器高 3.8	肥前系	内底蛇の目釉剥ぎ, 化学コバルト, 内側面松・遠山文, 内底文様不明, 外面化学コバルト斑明瞭
79	16	磁器染付合子蓋	口径 6.7, 器高 1.1	肥前系	化学コバルト, 上面東屋山水文, 内面平滑・化学コバルト飛沫斑目立つ
80	15	磁器染付合子蓋	口径 6.8, 器高 1.2	肥前系	化学コバルト, 上面東屋山水文, 内面平滑, 口縁部 (釉剥ぎ部) 赤色顔料付着
81	18	磁器白磁合子身	口径 5.4, 底径 5.1, 器高 2.0	肥前系	外面受部・腰部釉剥ぎ, 外底露胎, 内面釉掛けこぼし (施釉薄い), 外面化学コバルト斑あり, 内底平滑, 外面受部～内面赤色顔料付着
82	17	磁器白磁合子身	口径 5.8, 底径 5.1, 器高 2.1	肥前系	外面受部釉剥ぎ・腰部～底部露胎, 内面釉掛けこぼし, 外面化学コバルト斑あり, 内底平滑, 受部～口縁部 (露胎) 赤色顔料付着

b. 金属製品 (第 11 図)

以下、形態ごとに列記する。

鉄製桶×2点：2点とも同形態で、法量もほぼ同じである。筒形を呈し、口縁部は内側に折り曲げ、肥厚している。法量は、残存状態の良い下側から出土したものが口径 19.0 cm・底径 19.5 cm・高さ 21.5 cm である。なお、上側から出土した鉄製桶については、引き抜くことによってトレンチ壁面が大きく崩れる危険性があったため、口縁部～胴部片を現地に残している。

鉄製ペグ×11点：全て同形態である。横断面長方形で板状の棒鋼を裁断して成形したもので、頭部を穿孔してこれに断面円形の環を通してしている。規模はほぼ同じで、長さ 38.5～41.5 cm・厚さ 1.0～1.3 cm・頭部幅 2.1～2.4 cm・胴部幅 1.5～1.7 cm・環外径 5.0～5.6 cm である。

鉄製轡×10点以上：錆化により固着しているため個数は不明である。いずれも銜・銜環から構成される簡易な形態で、引手は無い。また、磨滅等（使用痕跡）は認められない。規模はやや区々で、銜の長さ 7.0～10.0 cm・楕円形を呈する銜環の長軸外径 4.8～6.2 cm である。

鉄製缶詰×3点？：残存状況が良い2点とも筒形の形態で、未開封である。轡とともに桶に納められていたものは外径 7.1 cm・高さ 4.0 cm、桶外から出土したものは外径 7.5 cm・高さ 2.1 cm である。後者は破損部から炭化した内容物が確認できる。

銅製工具柄×1点：工具の部品とみられる。木質の本体が良く残っており、これに薄い銅板を被せ、細い銅釘で留めたものである。規模は長さ 19.4 cm・外径 2.9 cm である。

鉄製留具×2点：2点とも同形態である。本体は横断面楕円形の筒状を呈しており、本体側面の穿孔に頭部環状のボルトを挿し込み、端部をかしめて留めている。ボルト頭部には断面円形の環を通してしている。規模は、本体径 5.5×3.4 cm・本体高 3.4 cm・環外径 5.4 cm、本体径 5.0×3.8 cm・本体高 3.2 cm・環外径 5.8 cm である。

鉄製絞具×2点：2点とも同形態である。横断面楕円形の筒状を呈する形態で、工具等の絞具とみられる。規模は、径 4.6×3.8 cm・高さ 2.3 cm、径 4.1×3.4 cm・高さ 2.3 cm である。

不明鉄製品 1×2点：弧状に曲げた細長い板で、2点とも両端が欠失している。籬であろうか。規模は、幅 2.0～2.2 cm・長さ 46.2 cm・弧の幅 25.0 cm、幅 1.9～2.2 cm・長さ 44.0 cm・弧の幅 26.1 cm である。

不明鉄製品 2×1点：隅丸方形の鉄板をコ字形に折り曲げて本体を成形し、その内側に、幅狭なコ字形に折り曲げた隅丸方形の鉄板 3 枚を、本体と平行、均等に並ぶように接合したものである。折り曲げた本体の側面と接合した板の側面の計 8 面が立ち並んでおり、8 面のうち 7 面は端辺を鋸歯形に削っている。本体の外側両端には、ナゲ関の有茎鏃のような形状の細い鉄板を接合している。接合は、いずれも頭部半球形のリベットでかしめて留めている。規模は平面幅 12.0 cm・高さ 1.5 cm である。

4. 考察

a. SK02 出土陶磁器の時期様相 (第 12～14 図, 第 2・3 表)

本資料は、染付顔料については呉須が 2 点、化学コバルトが 78 点、絵付け法については手描きが 77 点、型紙摺りが 3 点を数える。このことから、肥前において型紙摺りが導入された明治 4 年 (1871) 以降に埋納された一括資料であることが明らかである。器形は端反碗・玉縁口縁皿が主体で、染付顔料・絵付け法からみた時期様相に合致しており、概ね明治時代前半に位置付けることが可能である。

次に、SK02 出土陶磁器と熊本城本丸御殿跡出土陶磁器(復元事業に伴う発掘調査出土資料)²⁾とを比較し、時期様相を検討したい。以下、本丸御殿跡資料について概説する。

本丸御殿は、創建以降、江戸時代を通して式典などの儀礼空間であったが、慶応 3 年 (1867) 12 月～明治 3 年 (1870) 7 月においては藩庁として、明治 7 年 (1874) 6 月からは熊本鎮台本営として利用され、



鉄製桶（下側）



鉄製ペグ（上側の桶内）



鉄製轡・缶詰（下側の桶内）、正面



鉄製轡・缶詰（下側の桶内）、裏面



銅製工具柄



鉄製缶詰（桶外）



鉄製留具・締具



不明鉄製品 1



不明鉄製品 2（内側）



不明鉄製品 2（外側）

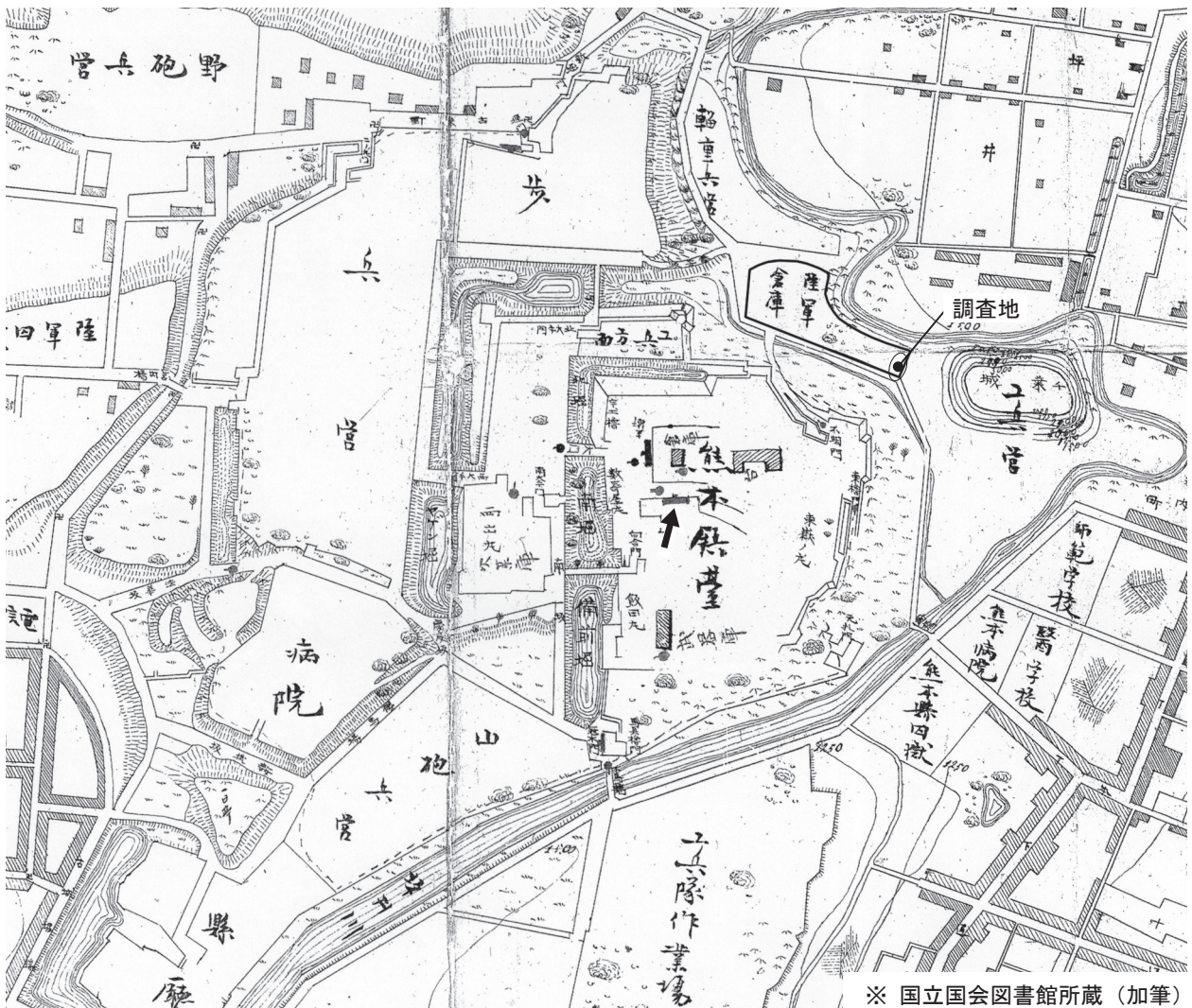
第 11 図 SK02 出土金属製品写真

明治10年(1877)2月19日、西南戦争籠城戦の直前に焼失している³⁾。出土陶磁器の多くは19世紀代の型式であり、また、一括購入されたと考えられる同形態の日常雑器が多くみられる。これらは主に、多くの人が常駐した慶応3年12月から明治10年2月19日までで使用されたものと考えられる。うち、調査報告書のなかでⅢ層とした土層の出土資料は埋没の実年代を評価できるものである。Ⅲ層は、焼土・炭化物を多量に含んでおり、焼失によって形成された、あるいはその後間もない時期の整地による土層と考えられる。整地の時期を示す具体資料としては以下が挙げられる。

「熊本鎮台戦闘日記」⁴⁾：明治10年3月9日の項に「此日天幕ヲ暗道ニ移シ以テ本営皆茲ニ転ズ」(※「暗道」は本丸御殿床下通路の闇り通路のこと)とある。薩軍からの砲撃目標となりづらいという理由からであろう、闇り通路を仮設の本営としたことが判る。

「熊本城郭及市街之圖」⁵⁾(推定明治11年6月～同12年5月作成)：本丸御殿大広間付近に長屋建物が描かれており、焼失後の新たな土地利用がなされていたことが判る(第12図矢印)。

これらから、早ければ、部分的にせよ明治10年3月9日までには、遅くとも明治12年前半時期までには焼失後の整地作業(Ⅲ層形成)は行なわれていたと考えられる。加えて、埋土・出土状態から焼失時に埋没したと判断される遺構からの出土資料、上部のⅠ・Ⅱ層出土ではあるが明らかに二次焼成を受けた資料もⅢ層出土資料と同じ実年代が評価される。後者は、二次焼成の原因が本丸御殿焼失による可能性が極めて高いことから、後の土地利用の過程等により原位置を保ってはいないものの、時間属性においてⅢ層出土資料と同等に扱うべき資料と位置付けられる。



※ 国立国会図書館所蔵(加筆)

第12図 熊本城郭及市街之圖(部分拡大)

以上から、上記の本丸御殿跡資料については、時期的な一括性が評価できる。その前提のもと、SK02資料・本丸御殿跡資料について属性ごとに分類・集計し、比較を試みたものが第2表・第13図である。ともに、主となる供膳具は端反碗・玉縁口縁皿で、文様は手描きが殆どを占めており、器形・絵付け法については共通性が高いといえる。これに対し、顔料については明らかな差異が認められる。本丸御殿跡資料は呉須が49%、化学コバルトが39%、両者が併用されるものが11%である。併用されるものとは、線描きは呉須で塗りは化学コバルト、外面は化学コバルトで内面は呉須といったように、呉須と化学コバルトとを併用して絵付けしている個体であり、それは、明治3年(1870)の化学コバルト実用化直後の過渡的な様相を示すものと評価される。一方、SK02資料は化学コバルトが殆どを占めており(98%)、本丸御殿跡資料よりも明らかに新相を示している。ただし、個々の資料をみると、両者において器形、施文具形態(絵付け法・顔料)、文様形態(主文様の絵柄)、窯詰め法(釉剥ぎ・アルミナ塗布)等が共通する同一形態品が認められる(第3表・第14図)。すなわち、顔料について時期様相は異なるものの、実年代について両者は遠からぬ時期の資料であることが想定される。

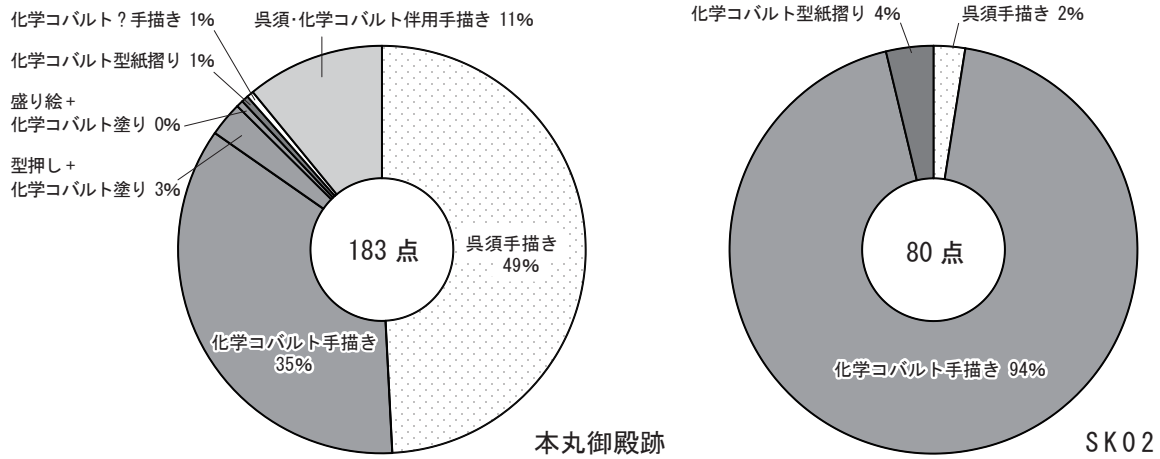
第2表 SK02資料・本丸御殿跡一括資料の属性ごとの比較・集計表

本丸御殿跡

焼成	器種		呉須	化学コバルト			化学コバルト?	呉須・化学コバルト併用	
			手描き	手描き	型成形+塗り	型紙摺り	盛り絵+塗り	手描き	手描き
磁器染付	碗	小広東碗	1						
		筒形碗	1						
		端反碗	28	15				1	20
		丸碗	1						
		平形碗		2					
	碗蓋	端反碗蓋	6	6					
		広東碗蓋	1						
		碗蓋	2						
	湯呑碗	小丸碗	17	1					
		湯呑碗	3	6					
	小坏	小坏	1						
	皿	小皿	1						
		玉縁皿	2	9					
		ソーサー皿	1						
		中皿	1						
	急須	急須					1		
	酒器	徳利	7						
	蓋物	蓋付鉢	1	4					
		段重	1	3					
		鉢・段重蓋		3		1			
	合子	合子蓋	5	3					
薬盒蓋		6	6						
瓶類	小瓶	1							
喫煙具	火入	1							
	煙管		1						
文房具	水滴			5					
多彩磁器(釉下彩)	蓋物	蓋付鉢		2					
		段重							
陶胎染付	碗	平形碗		1					
	土瓶	汽車土瓶		1					
合計			90	65	5	1	1	20	

本報告資料 (SK02)

焼成	器種		呉須	化学コバルト			化学コバルト?	呉須・化学コバルト併用
			手描き	手描き	型成形+塗り	型紙摺り	盛り絵+塗り	手描き
磁器染付	碗	端反碗		14				
		輪花皿		1		3		
		玉縁皿	2	48				
	素口縁皿		10					
合子	合子蓋		2					
合計			2	75		3		

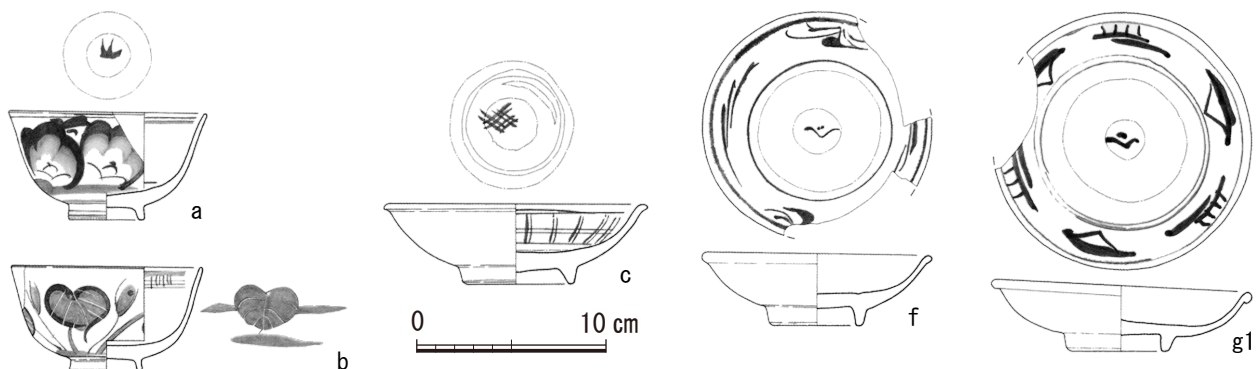


第 13 図 SK02 資料・本丸御殿跡一括資料の属性比較グラフ

第 3 表 熊本城内出土の同一形態品一覧表

※各調査区の数字は報告番号，飯田丸・馬具櫓・二の丸御門跡の出席は註文献 6

番号・器形	絵付け法（全て手描き）・顔料・主文様・釉剥ぎ法	SK02 一括資料	本丸御殿跡		飯田丸 五階櫓台	二の丸 御門跡	馬具櫓跡
			一括資料	その他			
a 端反碗	化学コバルト，外面草花文，内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ塗付	4～7	706				
b 端反碗	化学コバルト，外面蓮文（葉脈墨弾き），内面口縁部雷文・底部草文	13	462	260,377,557			
c 玉縁皿	呉須（にぶい暗緑色の発色），内面格子文，内底蛇の目釉剥ぎ，網田焼	19, 20	467, 709～711	65,850	12	27～33	
d 玉縁皿	化学コバルト，内面全体に草花文，内底5足ハマ跡草花文	22, 23		263			
e1 玉縁皿	化学コバルト，内側面草花文（3単位），内底蛇の目釉剥ぎ	24～27, 29～31, 33～36		395,396			
e2 玉縁皿	化学コバルト，内側面草花文（3単位），内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ塗付	28, 32		63, 64, 394			19
f 玉縁皿	化学コバルト，内側面草花文（2単位），内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ塗付	40, 41	152,153	61, 62		34	
g1 玉縁皿	化学コバルト，内側面松・遠山文（3単位），内底蛇の目釉剥ぎ+アルミナ塗付	51～59	148～151	53～60			
g2 玉縁皿	化学コバルト，内側面松・遠山文（3単位），内底蛇の目釉剥ぎ	60～67		390～393			
h 素口縁皿	化学コバルト，内側面松・遠山文（3単位），内底蛇の目釉剥ぎ	69～78		389			
i 合子蓋	化学コバルト，上面東屋山水文，内面見込み平滑	79, 80		684			



第 14 図 本丸御殿跡一括資料における同一形態品（1/4）

b. SK02 出土資料の背景（第 12・15・16 図，第 3 表）

SK02 が検出された本調査地について、その形成当時とみられる時期の土地利用状況を示す資料として、前記した推定明治 11 年（1878）6 月～同 12 年 5 月作成の「熊本城郭及市街之圖」、明治 13 年（1880）製の「熊本全図」⁷⁾ が挙げられる。これらによれば本調査地は、前者には「陸軍倉庫」、後者には「倉庫」と表記されており、当時、明治 4 年（1871）に設置された熊本鎮台（当初は鎮西鎮台、明治 6 年に熊本鎮台と改称）の倉庫として利用されていたことが判る（第 12 図）。SK02 出土資料は、このことに関連する可能性を指摘できる。ちなみに、明治 26 年（1893）製「熊本市街全図」では「熊本経営部」、明治 32 年（1899）製「熊本市街全図」では「総督部」となっており、倉庫としての土地利用の下限を知ることができる⁸⁾。

金属製品では、まず鉄製ペグ（11 点）・鉄製轡（10 点以上）・鉄製缶詰（3 点？）に着目する。鎮台という軍隊に関連するとみられる資料である。鉄製ペグは、板状の棒鋼を裁断成形していることから幕末以降の所産であることが明らかで、テント用具の可能性が高いと考えられる。テントに関する記述として明治 10 年（1877）の西南戦争熊本城籠城戦における 2 例を挙げる。

「熊本鎮台戦闘日記」：3月9日の項「此日天幕ヲ暗道ニ移シ以テ本営皆茲ニ転ズ」（前述）。

「熊本籠城談」⁹⁾（明治33年における回顧録）：2月19日以降、「婦人連中は、十九日の火事に焼出されたからして、城の空濠に天幕を張つてそこに避難をして居た」。

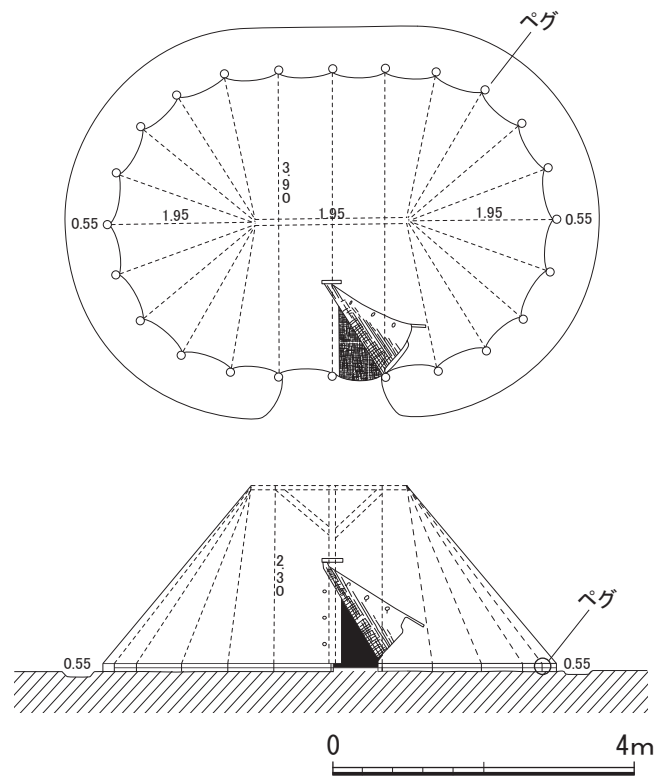
これらのなかで「天幕」とあるのが軍用の野営テントであろう。その構造は下記資料に示されている。

「紀元二千五百三十五年 工兵操典 卷之八 野堡之部」¹⁰⁾（明治 8 年刊の教本）：軍隊の野営築法として「當式の布幕は長サ五米八五其幅三米九〇ありて歩兵十六員或は騎兵八員を容る」という記述とともにテントの図がある（第 15 図）。

出土した鉄製ペグは、規模（長さ 40 cm 前後）からも、この野営テントに使用する用具である可能性を指摘できる。鉄製轡は、いずれも装飾の無い単純な形態である。軍馬に使用するものであろう。鉄製缶詰については第一旅団会計部長が記した「從征日記」¹¹⁾ に下記の記述がある。

4 月 3 日：「神武天皇祭典日ナルヲ以テ息へ酒穀ヲ賜ハリタリ…長崎ヨリ需ムル所ノ牛糞（ローストビーフ）ヲ一罐ヲ以テ十名ニ充ツ一罐ノ價金九十錢 各兵隊ニ與フ、兵隊ノ喜ヒ望外ニ出ツ…其ノ罐ヲ開カスシテ直チニ之ヲ火中ニ投シタルヲ以テ、其ノ温度ノ騰ルニ從ヒ空氣膨張シテ忽然炸裂シ、傍ニ在ル二三ノ兵卒面部或ハ手足ニ傷クモノアリト聞ケリ」

この他には、籠城戦後の 4 月 16 日の項に、「城中ニ送輸」した食糧リストのなかに「牛糞六十箱」という記載がある。上記「牛糞」が缶詰であることは明らかであり、それは当時、高価な輸入品であったと考えられる。4 月 3 日の記述からみて、この時点で鎮台兵たちは缶詰の開封方法を知らず、初めて食したのであり、このことから SK02 出土缶詰が「牛糞」そのものを示すか否かは別にして、缶詰という



第 15 図 明治 8 年（1875）刊教本の野営テント図
※註 文献 10 よりトレース・加筆

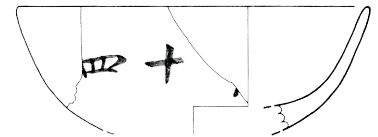
食糧品が明治10年4月3日頃以降に初めて納入されたものである可能性を指摘することができる。

銅製の柄（1点）・鉄製絞具（2点）は、軍隊との関連を直接的に示すものではないが、工具等の部品であることが注目される。

陶磁器は全てが日常雑器であり、組成において器形・文様等が共通する同一形態品の比率が高い傾向を示す点が注目される。この傾向は、他の熊本城内調査区、特に本丸御殿跡資料においても認められるが、SK02資料においてより顕著である。また、SK02資料にみられた同一形態品が、他の熊本城内調査区でも出土している点も注目される（第3表）。これらは、同一形態品が鎮台兵の日用食器として大量・一括購入されたこと、SK02資料において、それが明確に反映されていることを示している。

以上、SK02出土資料の様相は、調査地が鎮台の倉庫として利用されていたことを前提とすると説明しやすいものである。すなわち、支給・購入された様々な物品、必要に応じて取り替えるためにストックされた部品等が大量にあって、これを入手しやすい環境が本資料埋納の背景となったと考えられるのである。

ちなみに、前記のような日用食器における大量・一括の購入形態は、後には規格化された食器生産の需要を高め、軍用食器の成立に繋がっていくと考えられる。熊本城内における軍用食器の最古例は、管見によれば松井山城預櫓台出土の磁器染付碗である（第16図）¹²⁾。化学コバルトによる手描きで「…十四…」とあり、これは歩兵第14連隊を意味すると考えられる。歩兵第14連隊は明治8年（1875）に小倉において創設され、熊本鎮台（後に第6師団）を上級単位として付属していたが、明治31年（1898）に小倉において第12師団が創設されるとこれに編入されている。本資料は熊本城内からの出土であることから、また、型式に矛盾がないことからみて、第12師団創設以前の産品である可能性が高い。SK02資料の下限期を考えるうえで参考となる事例として提示しておく。



第16図 山城預櫓台出土
軍用食器（1/3）

c. 網田焼の同定（第17図、第4表）

最後に、SK02出土陶磁器の購入先について具体例を示しておく。本資料は全て肥前系磁器であるが、なかには網田焼、あるいはその可能性が指摘できるものがある。

以下、網田焼の概要とともに、その同定根拠を記すこととする。網田焼は、熊本県宇土市において生産された県内最大の肥前系磁器窯である。寛政5年（1793）に創業され、昭和初期まで存続した。創業初期においては藩の保護・育成政策により藩窯として大いに繁栄し、優品も生産されたが、文化3年（1806）以降、段階的に藩の保護・育成政策が打ち切られ、文政10年（1829）には藩窯から完全に脱して民間経営の窯となっている¹³⁾。宇土市教育委員会が所蔵する19世紀第2・3四半期に位置付けられる網田焼資料を実見したところ、これらは量産品を焼成した窯跡出土資料で、様相からみて、民窯となった文政10年以降の産品と考えられるものであった¹⁴⁾。網田焼と他の肥前系磁器製品とを分かち最大の特徴、すなわち網田焼特有とみられる属性は、主に皿の高台部や内底部に認められる釉の爛れであり、爛れた部分には透明な短い針状の付着物が認められることが多いことである（第17図）。また、内底の蛇の目釉剥ぎが雑で、釉が薄く剥ぎ残っていたり、施釉部分と剥いだ部分との境が不明瞭であったりするものが多いことも特徴である。釉の爛れは、重ね焼きをする際の剥離材が融着し、これに接する部分の釉が変質したものと考えられる。蛇の目釉剥ぎが雑な理由も、この溶着防止のための措置を講じていたためと考えられる。この剥離材の材質は不明であるが、焼成時に溶解して釉を変質させること、透明な短い針状の付着物が認められることは参考となる¹⁵⁾。本稿では上記の点を重視し、これに加えて窯跡出土資料と器形・法量・文様等が共通するものを網田焼とし、これに準じるものを段階的に「網田？」・「肥前系」とした（第4表）。結果、全82点中12点を網田焼、23点をその可能性が高い網田焼？と同定している。



報告No. 36 内底面の爛れ



報告No. 52 高台外面の爛れ



報告No. 54 高台見込みの爛れ



報告No. 57 高台見込み～側面・外面腰部の爛れ

第 17 図 網田焼の特徴— SK02 資料における釉の爛れの写真—

第 4 表 SK02 資料と網田焼窯跡資料との属性比較表

※○は共通，×は不一致，△は近似，—はSK02 資料・窯跡資料ともに認められない項目

形態	同定	本報告No.	釉爛れ	器形 法量	絵付け 顔料	主文様	釉剥 ぎ	アルミナ 塗布	備考
笹・松文? 端反碗	網田焼	1	有○	○	○	○	有○	無○	内面中央の文様は異なる。
草花文端反碗	網田焼?	2	×	○	○	△	有○	無○	主文様は近似性高い。窯跡資料には釉爛れみられず。
格子文玉縁皿	網田焼	19・20	有○	○	○	○	○	—	窯跡資料に多く、呉須の色調も共通する。
草花文玉縁皿 (内面足付ハマ跡)	網田焼?	21	—	×	○	△	—	—	窯跡資料に主文様が近似し、足付ハマ跡が認められる鉢あり。釉の爛れから網田焼?。
草花文玉縁皿 (文様3単位)	網田焼?	24～27	×	○	○	△	○	×	主文様は花卉の表現・配置・単位が共通。内底中心文様は共通。窯跡資料は釉爛れみられず内底アルミナ塗布。
草花文玉縁皿 (文様3単位)	網田焼?	30・31・36 ～39	×	○	○	△	○	×	主文様は花卉の表現・配置・単位が共通。内底中心文様は不一致。窯跡資料は釉爛れみられず内底アルミナ塗布。
捻花文? 玉縁皿	網田焼?	43	有○	○	○	×	○	—	窯跡資料に共通する文様は無し。釉爛れから網田焼?。
葡萄文玉縁皿	網田焼?	44・46・47	有○	○	○	×	○	—	窯跡資料に共通する文様は無し。釉爛れから網田焼?。
松・遠山文玉縁皿	網田焼	51～57	×	○	○	○	○	有○	窯跡資料には釉爛れみられず。
松・遠山文玉縁皿	網田焼	58・59	無○	○	○	○	○	有○	窯跡資料と全ての項目共通。
松・遠山文玉縁皿	網田焼?	60・61	×	○	○	○	○	×	窯跡資料には釉爛れみられず。SK02 資料は内底アルミナ塗布みられず。
松・遠山文玉縁皿	網田焼?	65・66	×	○	○	○	○	×	窯跡資料には釉爛れ無し。SK 02資料は内底アルミナ塗布みられず。内底中央文様は異なる。
東屋・遠山文玉縁皿	網田焼?	68	有○	○	○	×	○	—	窯跡資料に共通する文様は無し。釉爛れから網田焼?。
松・遠山文素口縁皿	網田焼?	71・72	有○	×	○	○	○	×	窯跡資料は玉縁口縁皿。釉爛れから網田焼?。

以上は、前項において述べた一括購入のあり方の具体例を示すものといえる。SK02 出土陶磁器は、全てが日常雑器であることから鎮台兵の日用食器と捉えられ、その主要購入先の1つが網田焼、すなわち熊本鎮台から最も近い県内の磁器生産地だったのである。この網田焼の一括購入に至る取引先選定は、熊本鎮台が流通コスト・地域への配慮（経済振興）を考慮した結果と考えることができよう。

本稿執筆際には、宇土市教育委員会のご協力をいただいた。末筆ながら記して深甚の謝意を表します。

註

- 1) 平成 28 年の熊本地震後、熊本城調査研究センター他の仮事務所として使用している。
- 2) 美濃口雅朗「第 5 章 2. 陶磁器」・「第 6 章 2. a. 陶磁器類」『熊本城調査研究センター報告書第 2 集 熊本城跡発掘調査報告書 2－本丸御殿の調査－第 2 分冊』熊本市熊本城調査研究センター 2016
- 3) 木下泰葉「第 1 章 3. 文献資料にみる本丸御殿」『熊本城調査研究センター報告書第 2 集 熊本城跡発掘調査報告書 2－本丸御殿の調査－第 1 分冊』熊本市熊本城調査研究センター 2016
- 4) 『熊本鎮台戦闘日記』東京大学出版会 1977
- 5) 国立国会図書館所蔵。鶴嶋俊彦「新史料『熊本城郭及市街之圖』」『熊本城調査研究センター年報 1 平成 25・26 年度』熊本市熊本城調査研究センター 2015
- 6) 美濃口雅朗「第 5 章 2. (1) 陶磁器・土器類」『熊本城調査研究センター報告書第 1 集 熊本城跡発掘調査報告書 1－飯田丸の調査－』熊本市熊本城調査研究センター 2014
美濃口雅朗「第 3 章 7. 遺物」『熊本城調査研究センター報告書第 3 集 熊本城跡発掘調査報告書 3－石垣修理工事と工事に伴う調査－第 2 分冊』熊本市熊本城調査研究センター 2016
美濃口雅朗「第 3 章第 2 節第 2 項 出土遺物」『特別史跡熊本城跡 馬具櫓復元整備事業報告書』熊本市 2016
- 7) 熊本県立図書館所蔵。「熊本全図（明治 13 年）」『新熊本市史 別編第一巻 絵図・地図下 近代現代』熊本市 1993
- 8) 「熊本市街全図」（明治 26 年）・「熊本市街全図」（明治 32 年）とも熊本県立図書館所蔵。
- 9) 児玉臺灣總督口述 盧山生筆記『熊本籠城談』近代デジタルライブラリー 2014
- 10) 『紀元二千五百三十五年 工兵操典 卷之八 野堡之部』陸軍省 1875
- 11) 川口武定『從征日記 上巻』新潮社 1988
- 12) 美濃口雅朗「第 3 章 4. 遺物」『熊本城調査研究センター報告書第 3 集 熊本城跡発掘調査報告書 3－石垣修理工事と工事に伴う調査－第 2 分冊』熊本市熊本城調査研究センター 2016
- 13) 福原 透「肥後磁器史概説」『平成 18 年度秋季特別展覧会 八代の野歴史と文化 16 肥後の磁器－その歴史と系譜－』八代市立博物館未来の森ミュージアム 2006
- 14) 宇土市教育委員会のご厚意により実見の機会を得た。
- 15) 網田焼における釉の爛れの観察、成因については主に註文献 2 を参照されたい。

熊本城調査研究センター年報 3

平成 28 年度

2017 年 7 月

発行 熊本市熊本城調査研究センター

〒860-0001

熊本市中央区千葉城町 3-36

TEL (096) 355 - 2327

熊本城調査研究センター年報3

平成二十八年年度

二〇一七

熊本市熊本城調査研究センター